

令和3年度文部科学省委託調査
「体験活動等を通じた青少年自立支援プロジェクト」
青少年の体験活動の推進に関する調査研究報告書

自然体験活動における感染症対策に関する調査研究
～新型コロナウイルス感染症対策のノウハウと取組事例を探る～

令和4年3月

株式会社浜銀総合研究所

目 次

第1章 調査概要	1
1 調査研究の趣旨・目的.....	1
2 調査方法.....	1
3 調査結果のまとめ.....	3
第2章 アンケート調査結果	8
1 実施概要、調査結果の見方・留意点.....	8
(1) 実施概要.....	8
(2) 集計結果の表示方法・留意事項.....	9
2 アンケート調査結果.....	10
(1) 回答者の基本情報.....	10
(2) コロナ禍における自然体験活動の実施状況.....	13
(3) 自然体験活動に関する新型コロナウイルス感染対策の状況.....	18
(4) ICTの活用や新たな自然体験活動の取組.....	21
3 アンケート調査結果のまとめ.....	38
(1) 回答者の基本情報.....	38
(2) コロナ禍における自然体験活動の実施状況.....	38
(3) 自然体験活動に関する新型コロナウイルス感染対策の状況.....	39
(4) ICTの活用や新たな自然体験活動の取組.....	41
第3章 ヒアリング調査結果	42
1 実施概要、調査結果の見方・留意点.....	42
(1) 実施概要.....	42
(2) 調査結果の見方・留意点.....	43
2 ヒアリング調査結果.....	44
(1) 新型コロナウイルス感染対策に関する工夫について.....	44
(2) 新型コロナウイルス感染症の流行を機に新たに始めた活動・取組.....	70
(3) コロナ禍の制約下で自然体験活動を開催した成果と課題.....	79

3	ヒアリング対象者別の活動・プログラム概要.....	83
(1)	周南市大田原自然の家.....	83
(2)	国立中央青少年交流の家.....	86
(3)	熊本県立豊野少年自然の家.....	89
(4)	熊本県立天草青年の家.....	91
(5)	公益財団法人日本 YMCA 同盟 国際青少年センターYMCA 東山荘.....	94
(6)	ガールスカウト香川県連盟.....	97
(7)	三の倉市民の里 地球村.....	101
(8)	国立那須甲子青少年自然の家.....	104
(9)	尼崎市立美方高原自然の家.....	107
(10)	黒松内ぶなの森自然学校.....	111
(11)	公益財団法人日本レクリエーション協会.....	113
(12)	特定非営利活動法人千葉自然学校.....	115
4	ヒアリング調査結果のまとめ.....	118
(1)	新型コロナウイルス感染対策に関する工夫について.....	118
(2)	新型コロナウイルス感染症の流行を機に新たに始めた活動・取組.....	121
(3)	コロナ禍の制約下で自然体験活動を開催した成果と課題.....	123
	参 考 資 料.....	125
1	アンケート調査項目.....	127
2	アンケート調査 単純集計表.....	138
3	アンケート調査 予算規模別クロス集計表.....	146
4	アンケート調査 施設設備保有状況別クロス集計表.....	153

第 1 章 調査概要

1 調査研究の趣旨・目的

平成 30 年 6 月に閣議決定された「第 3 期教育振興基本計画」においては、「子供の健やかな成長のためには、豊かな心を育むことが不可欠である。このため、豊かな情操や規範意識、自他の生命の尊重、自己肯定感・自己有用感、他者への思いやり、対面でのコミュニケーションを通じて人間関係を築く力、困難を乗り越え、物事を成し遂げる力、公共の精神等の育成を図る」などとし、社会体験活動や自然体験活動等も含め、児童生徒の多様な体験活動の機会を充実することの必要性を求めている。

他方、独立行政法人国立青少年教育振興機構が公表した「青少年の体験活動等に関する意識調査」（令和元年度調査）によれば、1 年間の公的機関や民間団体等が行う自然体験活動に関する行事への参加率が 5 割程度であるなどの課題が浮かび上がっている。また、新型コロナウイルス感染症の感染拡大により、青少年の日常生活において、遊びや体験の場、本物に触れるなどの体験活動の機会の減少や格差が課題となっており、感染症対策を踏まえながら、安全・安心に体験活動を実施できるよう対策を講じることが急務となっている。

そのため、感染対策をとりながら、安全・安心に充実した体験活動を行うための方策について調査研究を行うとともに、その成果を広く一般において活用するため、感染症対策をとりながら実施した自然体験活動の事例を事例集として取りまとめることを目的とする。

2 調査方法

本調査研究では、国内の自然体験活動の活動団体や受入施設等を対象にアンケート及びヒアリング調査を実施した。

アンケート調査は、調査への協力に承諾いただいた令和 2 年度・令和 3 年度文部科学省「子供たちの心身の健全な発達のための（子供の）自然体験活動推進事業」受託団体、国立青少年教育施設、公立青少年教育施設、自然体験活動に関する民間のネットワーク団体に加盟する団体を対象とした。令和 3 年 11 月に電子メールやメーリングリスト等により調査依頼を行い、インターネット上に設置した専用フォームにアクセスして回答する方法で実施した。

ヒアリング調査は、アンケート調査の回答状況や調査検討委員の推薦により、12 のヒアリング

対象者を選定した。オンライン会議、電話、現地訪問の実施方法により、令和3年12月から令和4年1月に実施した。

また、青少年の自然体験活動の専門的知識を有する有識者から構成された調査検討委員会を設置し、専門的知見からの助言や意見交換等を行い、ポストコロナ期を見据えた新たな体験活動のノウハウや在り方を整理した。

調査研究の成果物として、調査研究報告書（本報告書）を作成するとともに、調査で得られた成果を広く一般において活用されるよう、感染症対策をとりながら実施した自然体験活動の事例集として取りまとめた。

図表 1-1 青少年の体験活動の推進に関する調査研究 調査検討委員会委員

氏名	所属
伊野 亘	独立行政法人国立青少年教育振興機構 理事
大城 和恵	山岳医療救助機構代表 社会医療法人孝仁会 北海道大野記念病院 医師
佐藤 初雄	特定非営利活動法人国際自然大学校 理事長 特定非営利活動法人自然体験活動推進協議会 代表理事
中村 正雄	大東文化大学スポーツ・健康科学部 教授
吉村 敏	公益財団法人ボーイスカウト日本連盟 事務局次長

(50音順 敬称略)

図表 1-2 調査研究の全体の流れ

調査工程	各調査工程の概要
文献調査	<ul style="list-style-type: none"> 国内における新型コロナウイルス感染症による自然体験活動への影響に関する既存調査結果、自然体験活動実施団体等の新型コロナウイルス感染症対策ガイドラインを収集 令和2年度における既存調査や、関連するガイドラインから、国内の自然体験活動における感染症対策や、新たな取組例を抽出・整理
アンケート調査	<ul style="list-style-type: none"> 令和2年度・3年度上半期における自然体験活動の実施状況、新型コロナウイルス感染症対策や新たな取組の実践状況の把握を目的として実施 感染対策や新たな取組の実践状況をもとに、事例ヒアリングの対象候補を抽出
事例ヒアリング調査	<ul style="list-style-type: none"> 事例ヒアリング対象者から、自然体験活動の各場面における新型コロナウイルス感染症対策の工夫やノウハウ、事業運営面での工夫、ICT活用を含めた新たな取組の好事例を具体的に把握することを目的として実施 事例ヒアリングの中から、事例集に掲載する具体的な活動を選定
報告書・事例集	<ul style="list-style-type: none"> 調査研究の成果物として、アンケート調査とヒアリング調査をまとめた調査研究報告書と、自然体験活動を推進するための普及啓発を目的とした事例集を作成

3 調査結果のまとめ

本報告書は、第2章でアンケート調査結果、第3章でヒアリング調査結果について報告する。なお、報告書の末尾に参考資料として、アンケート調査票と、単純集計表、クロス集計表（令和3年度予算規模別、施設等保有の有無別）を掲載した。必要に応じて、本稿とあわせて適宜参照されたい。

(1) アンケート調査

第2章のアンケート調査では、令和2年度から令和3年度上半期のコロナ禍における自然体験活動の実施状況、自然体験活動に関する新型コロナウイルス感染対策の状況、ICTの活用や新たな自然体験活動の取組等について調査し、結果として以下のことが把握された。

○ コロナ禍における自然体験活動の実施状況

令和2年6月以降で、所在する自治体に緊急事態宣言の適用があった回答者は8割であり、回答者の9割が自然体験活動に関する事業計画を中止または延期して事業実施に影響を受けた。なお、令和2年度から令和3年度上半期の期間に、自然体験活動を実施しなかった団体の7割が緊急事態宣言またはまん延防止等重点措置の発令を、実施しなかった理由と回答した。また、3割が、感染対策の指導・食事や宿泊の場面での感染リスクへの対処への不安を理由に挙げた。

令和2年度から令和3年度上半期に、自然体験活動を実施した回答者の7割は野外活動を実施した。野外活動はコロナ禍においても比較的实施しやすい活動であったことがうかがえた。一方で、コロナ禍の前後で比較すると、施設での宿泊の実施割合は34ポイント減少、屋内での食事提供は27ポイント減少した。

コロナ禍においても安心安全に自然体験活動を継続するという観点からは、運営面での不安を軽減するためにも、子供への感染対策の指導を含む野外活動の場面での感染対策、宿泊、野外炊事、食事提供の場面の感染対策について、具体的な工夫やノウハウを伝えていくことが重要であると考えられる。

○ 自然体験活動に関する新型コロナウイルス感染対策の状況

新型コロナウイルス感染対策に関する組織的な対応として、感染対策に関するガイドライン、マニュアル、ルール等は、自然体験活動の実施状況に関わらず9割以上が運用している。

自然体験活動を実施した回答者の8割は、事前の感染対策として感染者発生時の対処方法を定めているが、保護者・スタッフ・保健所等の関係者と共有する取組を行っている割合は約3割にとどまっていた。関係者に感染対策や感染者発生時の対処方法を共有し、理解を促進するための一層の取組が必要であると考えられる。

自然体験活動実施時の感染対策として、8割以上が基本的な新型コロナウイルス感染対策を実施しているが、一方で感染対策と関係づくりを両立する工夫は約6割が実施と回答した。感染対策と体験の質を高める取組を両立するような工夫やノウハウの提供が必要であると考えられる。

野外炊事や食事提供に関する感染対策として、約8割が関連する職員の感染対策や、食堂等で社会的距離を確保する対策を実施している。一方、食事の配膳時に参加者が接触感染を回避する対策を実施した割合は3割となっている。

宿泊に関する感染対策として、約8割が参加者の体調等の定期報告、定期的な換気を含む基本的な感染対策を実施している。一方で、寝具に関する感染対策を実施した割合は約4割となっている。

「マスクの正しい着用」、「こまめな手洗い・手指消毒」、「3密（密接・密集・密閉）の回避」などの基本的な感染対策に関連する実施割合は比較的高いことが把握された。感染対策に関する回答状況を踏まえると、自然体験活動に特有の具体的な場面における工夫やノウハウを共有することや、感染対策に関して関係者と共通理解を図るためのノウハウ、感染対策と体験の質を両立する具体的な取組を促進することが必要であると考えられる。

○ ICTの活用や新たな自然体験活動の取組

コロナ禍以前は取り組んでいなかったが、新型コロナウイルス感染症の拡大を機に、オンラインイベントの開催に取り組んだ割合は約3割、動画の配信に取り組んだ割合は1割強であった。

新たに始めたオンラインを活用した活動・取組として、回答者の約2～3割が、感染対策等のガイドラインの公開、オンラインの講習会・研修会開催、オンラインの施設見学や事前打ち合わせ、動画配信等に取り組んだ。一方で、新たに始めたオンラインの取組はないと回答した割合は3割強となっており、コロナ禍を機にICTの活用状況に格差が広がったことが推察される。自然体験活動におけるICTの活用事例や新たな取組の実践の中で、体験の質の側面や、安全・安心な活動という側面を踏まえて、効果が認められる実践を共有していくことが重要であると考えられる。

(2) ヒアリング調査結果

第3章のヒアリング調査では、アンケート調査の感染対策の取組や新たな実践の回答状況等に基づき選出した12の団体・施設を対象に、具体的な新型コロナウイルス感染対策、新型コロナウイルス感染症の流行を機に新たに始めた活動・取組、コロナ禍の制約下で自然体験活動を開催した成果と課題を調査した。

○ 場面別の新型コロナウイルス感染対策・ICT活用や新たな取組

「2 ヒアリング調査結果」では、ヒアリング実施団体の新型コロナウイルス感染対策に関する具体的な工夫やノウハウを、事前段階、体験活動実施時、食事・野外炊事、宿泊、移動という自然体験活動の場面に分けて整理して掲載した。また、新型コロナウイルス感染症の流行を機に新たに始めた活動・取組の内容については、ICTの活用の具体的な取組の内容や工夫を中心に紹介している。

○ ヒアリング対象者別の新たな取組事例

「3 ヒアリング対象者別の活動・プログラム概要」では、ヒアリングを実施した12の団体が、コロナ禍において感染対策を講じながら創意工夫をして実践した取組事例を紹介している。

○ コロナ禍の制約下で自然体験活動を開催した成果と課題

ヒアリング対象団体に、コロナ禍の制約下で自然体験活動開催をした成果を伺ったところ、多面的な成果を伺うことができた。具体的には、子供たちが野外活動を通してコロナ禍のストレスを発散し満足をした様子を見て、自然体験活動を提供する意義を再確認したという意見があった。また、様々な制約の下で、創意工夫しながら体験活動を実施したことで、提供する体験活動の幅や参加者の幅が広がったという意見、職員のスキルアップにつながったという意見があった。ポストコロナを見通して、コロナ禍の制約の中で試行錯誤をしながら、体験活動を提供し続けた経験を積極的に意味づけして、今後の活動に活かしていることが伺えた。

コロナ禍の影響を踏まえて今後の課題を伺ったところ、多くのヒアリング対象団体が子供へのマイナス面の影響を指摘した。具体的には、集団活動や生活体験の経験が減少するなど新型コロナウイルス感染症の流行の影響により、他者との肯定的な関わりが弱くなっていると感じられること、公共マナーの低下が見られること、また、子供たちの体力の低下や生活リズムの乱れを感じることなどが挙げられた。コロナ禍により生じた運営面の課題として、新型コロナウイルス感

染対策により開催側やスタッフの負担が大きいこと、新たな感染対策への対応やガイドライン等の更新が必要であること、コロナ禍にあったプログラムやオンラインの特性を生かしたプログラムの開発、学校や保護者に感染対策を理解いただくこと等が挙げられた。

(3) 調査結果のまとめと今後の展望

本調査研究は、令和2年度から令和3年度上半期における国内の自然体験活動の実施状況、感染対策の実施状況、感染症対策を講じながら実践した自然体験活動の事例を、アンケート調査とヒアリング調査から把握した。

アンケート調査とヒアリング調査の結果から考察される課題と今後の展望は次のとおりである。新型コロナウイルス感染拡大により、集団活動や生活体験の経験が減少したこと、また子供の体力や生活リズム、他者とのかかわり方等でマイナス面での影響がうかがえたことが調査の中で指摘された。一方で、ヒアリング調査の対象団体から、コロナ禍に自然体験活動や集団宿泊活動の機会を提供したことで、子供への様々なプラスの効果があることを実感し、自然体験活動の意義を再確認したと指摘されていた。豊かな体験活動による子供の心身の健やかな成長を促進する観点からも、コロナ禍にあっても自然体験活動を継続する方法を模索し、自然体験活動への参加を促していくことが重要であると考えられる。

また、自然体験活動の提供者が抱える課題として、コロナ禍に自然体験活動の提供を継続したか否か、感染対策の方策として ICT 活用を推進したか否かに関して、団体や施設間に格差が生じていることが推察される。そのような格差を埋めるという視点からも、本調査で把握した感染対策を踏まえながら自然体験活動を実施する具体的な工夫やノウハウを効果的に普及啓発することが求められる。なお、ヒアリング調査を実施した団体は、所在する自治体からの要請や新型コロナウイルスの流行状況に応じて、感染対策を検討し必要に応じてガイドラインの改定を行っていた。新型コロナウイルス感染対策は、所在自治体のルールや新たな変異ウイルスの出現により、対応を柔軟に変化させる必要があり、一律のルールや基準がすべてに当てはまるわけではない。そのため、具体的な工夫やノウハウを参考にしながらも、それぞれの場所での適用されるルールや実情に応じて、感染対策を考え講じていく必要がある。

次に、自然体験活動における ICT の活用については、先行する実践者が試行錯誤をしながら、その活用場面や活用方法を、発展し進化させる途上の段階にあるといえる。ヒアリング実施団体の ICT 活用の取組では、安全管理の側面から事前の現地確認は必要としながらも、感染のリスクを低減し運営の負担を軽減するためにオンライン打ち合わせを活用した事例や、参加者の自宅で

の稲栽培の体験に ICT を活用することで、地理的制約を超えて稲の生育状況を比較観察する機会を生み出した事例が把握された。コロナ禍においては、感染対策の側面や、安全・安心に充実した自然体験活動を提供するという観点から、ICT の活用を含む新たな実践や効果を継続的に把握・検証することが可能となるような取組が必要であると思われる。加えて、超スマート社会（Society5.0¹）の実現を目指すなか、学校教育では GIGA スクール構想のもと ICT 教育の推進が求められており、それは自然体験活動においても例外ではない。令和4年2月の、第4期教育振興基本計画の策定についての中央教育審議会への諮問²では、「新型コロナウイルス感染症を契機としたオンライン教育を活用する観点など「デジタル」と「リアル」の最適な組合せ」について検討することが必要と述べている。ポストコロナ期における体験活動の在り方の一つとして、「リアル」である体験活動の質や教育効果を高めるための手段として、「デジタル」を効果的に活用する方法を様々な実践事例を踏まえながら検討していく必要があると考える。

コロナ禍に自然体験活動の提供を継続した団体からは、事業の中止や変更、感染対策等により運営面での負担が増加したことが課題として指摘された。一方、令和2年度、令和3年度に文部科学省が実施した日帰りから1泊程度の短期の体験活動の実証事業を受託した団体からは、事業により地域での対象者の拡大、広報の効果、その後の新たな活動の展開につながったという成果が指摘され、事業の一定の効果が得られたと考えられる。今後は、コロナ禍からポストコロナ期に移行していくことを踏まえて、自然体験活動を継続し推進するための方策が求められている。

¹ 科学技術・イノベーション基本計画（令和3年3月閣議決定）では、Society 5.0 について、「第5期基本計画等において「サイバー空間とフィジカル空間を高度に融合させたシステムにより、経済発展と社会的課題の解決を両立する人間中心の社会」として提唱されたもの」とされている。

² 令和4年2月7日「次期教育振興基本計画の策定について」（3文科教第1078号）

第2章 アンケート調査結果

1 実施概要、調査結果の見方・留意点

(1) 実施概要

ア 調査の目的

自然体験活動の実施団体・施設等を対象に、新型コロナウイルス感染症影響下における自然体験活動のノウハウや、新たな取組の事例を取りまとめ、公表することを目的としてアンケート調査を実施した。

イ 調査名称

新型コロナウイルス感染症影響下における自然体験活動に関するアンケート調査

ウ 調査対象

アンケート調査は、令和2年度・令和3年度文部科学省「子供たちの心身の健全な発達のための（子供の）自然体験活動推進事業」受託団体、国立青少年教育施設、公立青少年教育施設、自然体験活動に関する民間のネットワーク団体に加盟する団体を対象とした。加盟団体へのアンケート調査の周知にご協力いただいた民間のネットワーク団体は、特定非営利活動法人自然体験活動推進協議会、公益社団法人日本環境教育フォーラム、一般社団法人日本アウトドアネットワーク、公益財団法人ボーイスカウト日本連盟、公益財団法人日本YMCA同盟、公益財団法人日本YWCA、公益社団法人日本キャンプ協会の7団体である。

エ 調査実施期間

令和3年11月8日（月）から11月26日（金）

オ 実施方法

電子メールやメーリングリスト等により調査依頼を行い、インターネット上に設置した専用フォームにアクセスしてアンケート調査に回答（オンライン回答）

カ 有効回答数

有効回答数：680件

キ 調査項目

調査項目は、回答者の基本情報、コロナ禍における自然体験活動の実施状況、自然体験活動に関する新型コロナウイルス感染対策の状況、ICT の活用や新たな自然体験活動の取組について、次の質問項目を設定した。なお、実際の調査設問項目は参考資料に掲載する。

図表 2-1 アンケート調査の調査項目

調査内容	質問項目
(1)回答者の基本情報	団体・施設名称、所在都道府県、団体・施設の法人格、常勤職員数、非常勤職員数、令和3年度の予算額、保有する施設や設備 等
(2)コロナ禍における自然体験活動の実施状況	緊急事態宣言・まん延防止等重点措置の実施状況、自然体験活動の実施状況、開催日数、対象者の年齢層、直近で実施した自然体験活動の開催年月、自然体験活動を実施しなかった理由 等
(3)自然体験活動に関する新型コロナウイルス感染対策の状況	ガイドライン、マニュアル、ルール等の運用状況、事前の感染対策、自然体験活動実施時の感染対策、野外炊事や食事提供等に関する感染対策、宿泊を伴う活動に関連する感染対策 等
(4)ICT の活用や新たな自然体験活動の取組	SNS を活用した情報発信、活動に関する動画配信、オンラインイベントの開催、新たに始めたオンラインを活用した活動・取組、新たに始めた活動・取組の具体的な内容、自然体験活動を推進する上での課題や必要な支援 等

(2) 集計結果の表示方法・留意事項

- 図表中の「n=〇〇」はその設問についての有効回答数（集計対象件数）を示している。
- 単一回答（1つだけ選択する回答形式）の設問について、回答の比率（%）は、小数点以下第2位を四捨五入しているため、各選択肢の回答に関する数値の合計が100.0%にならない場合がある。
- 複数回答（あてはまるものすべてを選択する回答形式）の設問について、回答の比率（%）は、その質問の回答者数を分母として算出しているため、すべての比率を合計すると、100.0%を超える場合がある。
- 本アンケート調査は、コロナ禍で実施された自然体験活動の具体事例を抽出することを目的に実施した。全国の自然体験活動団体・施設全体を対象に、無作為抽出の方法で対象者の抽出をすることが困難であったため、代替策として、国立・公立施設に加えて、全国規模の民間のネットワーク団体に調査の周知にご協力いただいた。そのため、国内の自然体験活動に関する団体・施設に関する全体の傾向を表す代表性が保証されない点に留意が必要である。

2 アンケート調査結果

(1) 回答者の基本情報

ア 団体・施設が所在する都道府県

団体・施設が所在する都道府県の回答状況は次の通りであった。

【設問4】 貴団体・施設が所在する都道府県を選択してください。※複数の都道府県に拠点がある場合は、主たる拠点・施設についてお答えください。(一つだけ選択)

図表 2-2 団体・施設が所在する都道府県

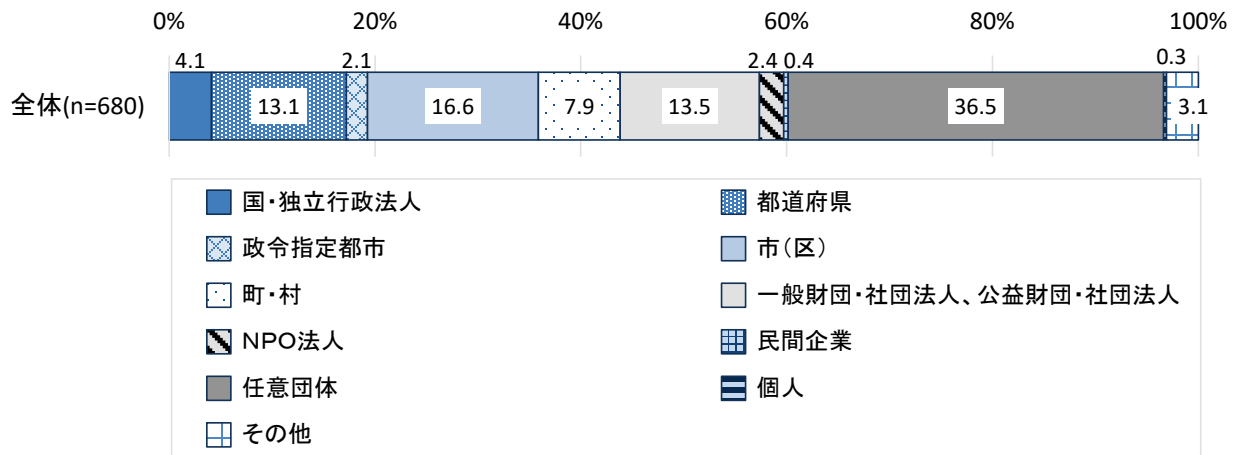
都道府県名	件数	割合(%)	都道府県名	件数	割合(%)	都道府県名	件数	割合(%)
北海道	59	8.7	石川県	4	0.6	岡山県	9	1.3
青森県	4	0.6	福井県	11	1.6	広島県	4	0.6
岩手県	6	0.9	山梨県	6	0.9	山口県	13	1.9
宮城県	5	0.7	長野県	21	3.1	徳島県	3	0.4
秋田県	1	0.1	岐阜県	16	2.4	香川県	7	1.0
山形県	5	0.7	静岡県	37	5.4	愛媛県	4	0.6
福島県	10	1.5	愛知県	115	16.9	高知県	1	0.1
茨城県	15	2.2	三重県	6	0.9	福岡県	15	2.2
栃木県	6	0.9	滋賀県	12	1.8	佐賀県	0	0.0
群馬県	16	2.4	京都府	18	2.6	長崎県	17	2.5
埼玉県	25	3.7	大阪府	25	3.7	熊本県	9	1.3
千葉県	45	6.6	兵庫県	31	4.6	大分県	4	0.6
東京都	27	4.0	奈良県	3	0.4	宮崎県	4	0.6
神奈川県	20	2.9	和歌山県	3	0.4	鹿児島県	8	1.2
新潟県	4	0.6	鳥取県	5	0.7	沖縄県	7	1.0
富山県	8	1.2	島根県	6	0.9	その他(国外)	0	0.0
全体 n=680								

イ 団体・施設の法人格

団体・施設の法人格をみると、「任意団体」が最も多く全体の36.5%、次いで「市（区）」が16.6%、「一般財団・社団法人、公益財団・社団法人」が13.5%、「都道府県」が13.1%となっている。

- 【設問5】 貴団体・施設の法人格として、次のうちあてはまるものを1つ選択してください。
 ※国公立施設の場合等で、指定管理制度を導入している場合は、施設を設置している主体についてお答えください。（一つだけ選択）

図表 2-3 団体・施設の法人格

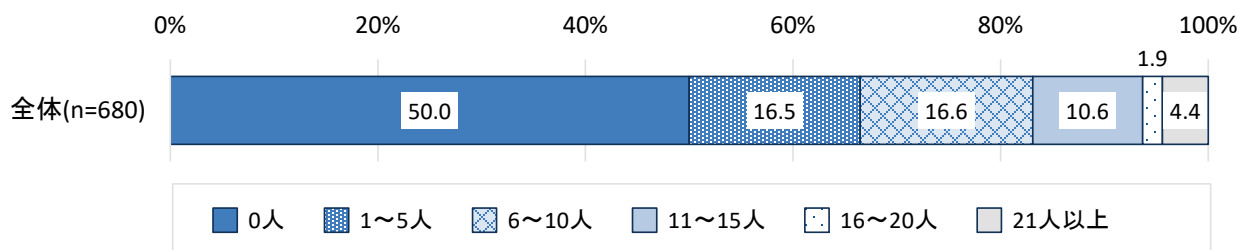


ウ 団体・施設の常勤職員数

団体・施設の常勤職員数は「0人」が最も多く全体の50.0%、次いで「6～10人」が16.6%、「1～5人」が16.5%となっている。

- 【設問 6-1】 令和3年10月1日現在の貴団体・施設の常勤職員数をお答えください。
 ※常勤職員がいない場合は0とご回答ください。（数字を記入）

図表 2-4 団体・施設の常勤職員数

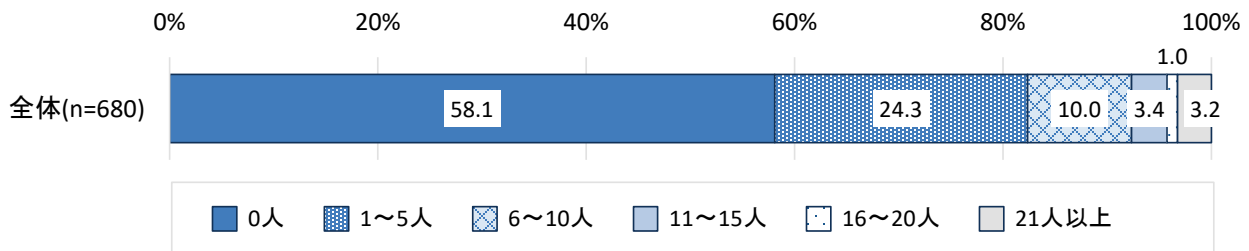


エ 団体・施設の非常勤職員数

団体・施設の非常勤職員数は「0人」が最も多く全体の58.1%、次いで「1～5人」が24.3%、「6～10人」が10.0%となっている。

- 【設問 6-2】 令和3年10月1日現在の貴団体・施設の非常勤職員数をお答えください。
 ※アルバイトや業務委託業者(清掃や給食等)が雇用する職員は含みません。
 ※非常勤職員がいない場合は0とご回答ください。(数字を記入)

図表 2-5 団体・施設の非常勤職員数

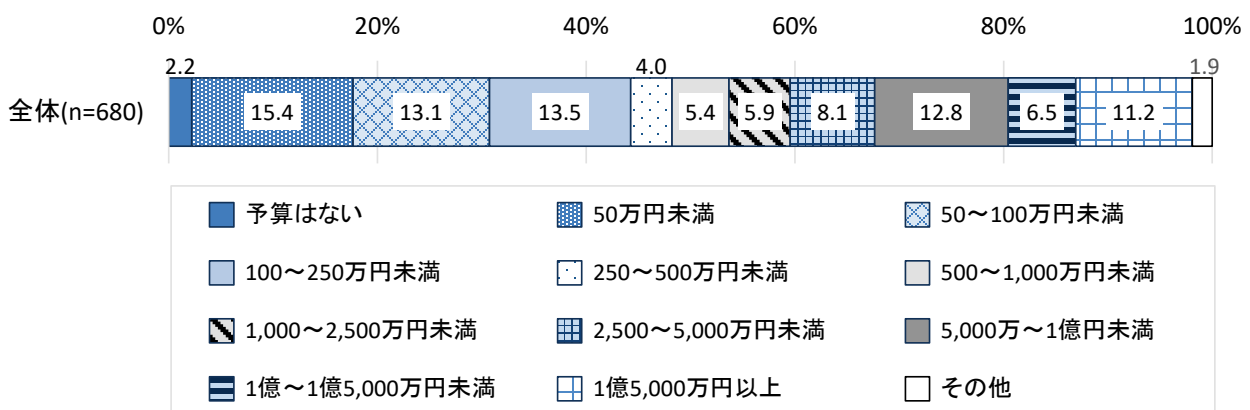


オ 団体・施設の令和3年度の予算額

団体・施設の令和3年度の予算額を尋ねたところ、「50万円未満」が最も多く全体の15.4%、次いで「100～250万円未満」が13.5%、「50～100万円未満」が13.1%となっている。一方で、5,000万円以上と回答した割合は約3割となっている。

- 【設問7】 貴団体・施設の令和3年度の予算を次の選択肢の中から一つ選んでください。
 ※人件費、一般管理費、事業経費等のすべてを含みます。(一つだけ選択)

図表 2-6 団体・施設の予算

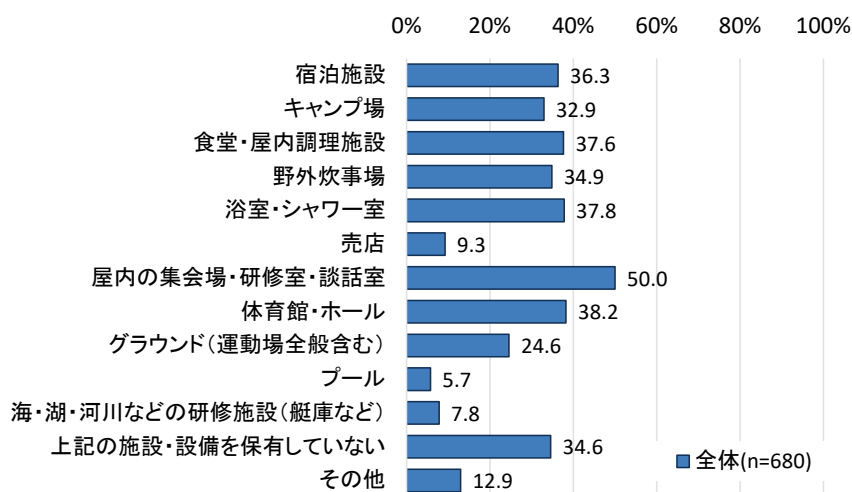


カ 団体・施設が保有する施設や設備

団体・施設が保有する施設や設備を尋ねたところ、「屋内の集会場・研修室・談話室」を保有していると回答した割合が最も多く 50.0%となっている。次いで「体育館・ホール」が 38.2%、「浴室・シャワー室」が 37.8%、「食堂・屋内調理施設」が 37.6%となっている。選択肢に挙げられた施設や設備を保有していないと回答した割合は 34.6%となっている。

【設問8】 貴団体・施設が保有する施設や設備の有無についてうかがいます。次のうち、保有する施設・設備にあてはまるものを選択してください。※国立施設の場合等で、指定管理者が回答する場合は、指定管理の対象施設についてお答えください。(あてはまるすべてを選択)

図表 2-7 団体・施設が保有する施設や設備



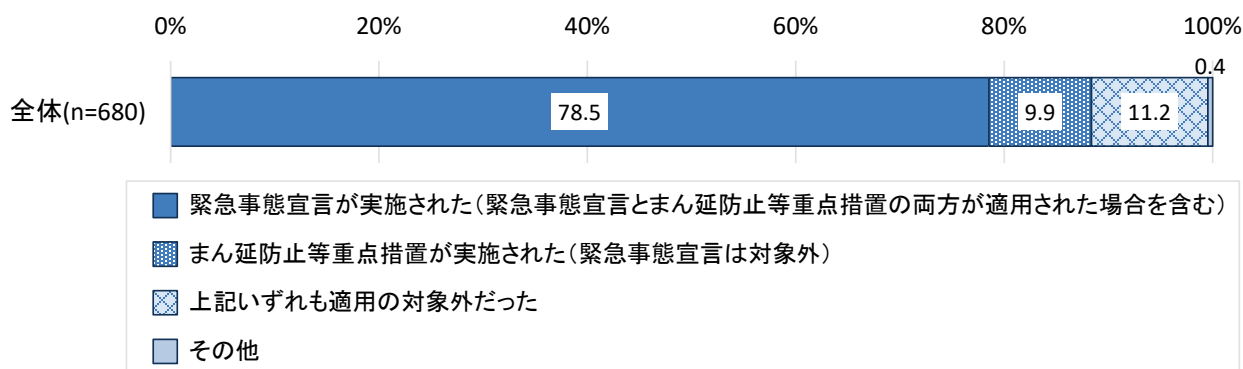
(2) コロナ禍における自然体験活動の実施状況

ア 所在自治体における緊急事態宣言・まん延防止等重点措置の実施状況

団体・施設が所在する自治体において、令和2年6月1日から現在までの期間に新型コロナウイルス感染症に関して「緊急事態宣言が実施された(緊急事態宣言とまん延防止等重点措置の両方が適用された場合を含む)」と回答した割合は 78.5%、「まん延防止等重点措置が実施された(緊急事態宣言は対象外)」と回答した割合は 9.9%、「上記いずれも適用の対象外だった」と回答した割合は 11.2%となっている。

【設問9】 貴団体・施設が所在する自治体において、令和2年6月1日から現在までの期間、新型コロナウイルス感染症に関する緊急事態宣言またはまん延防止等重点措置が実施されましたか。
 ※全国一斉の緊急事態宣言が解除された令和2年5月25日以降の所在自治体の状況をご回答ください。
 ※複数の都道府県に拠点がある場合は、主たる拠点・施設についてお答えください。(一つだけ選択)

図表 2-8 所在自治体における緊急事態宣言・まん延防止等重点措置の実施状況

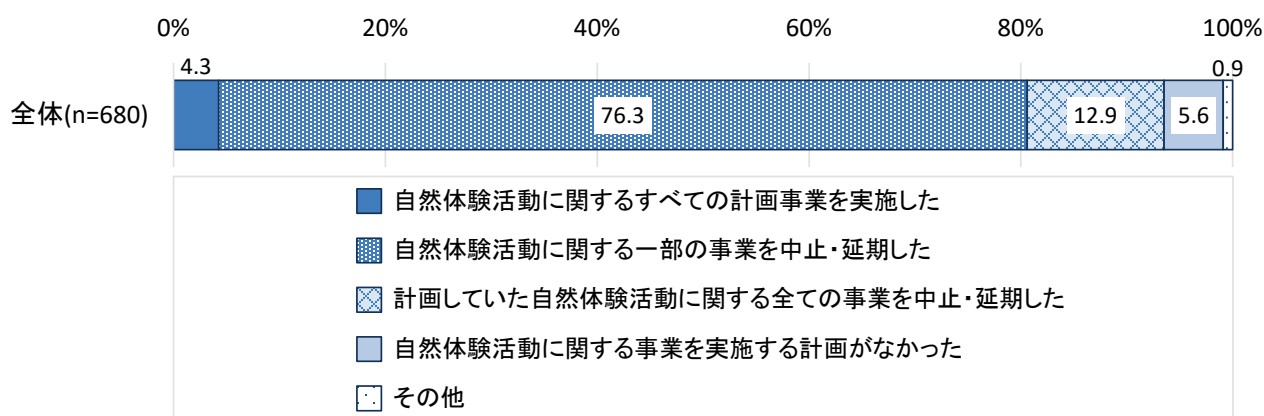


イ 令和2年度から令和3年度上半期の自然体験活動に関する事業計画の実施状況

令和2年度から令和3年度上半期(4~9月)の自然体験活動に関する事業計画の実施状況を尋ねたところ、「自然体験活動に関する一部の事業を中止・延期した」が最も多く全体の76.3%、次いで「計画していた自然体験活動に関する全ての事業を中止・延期した」が12.9%、「自然体験活動に関する事業を実施する計画がなかった」が5.6%となっている。

【設問 11】 令和2年度から令和3年度上半期(4~9月)の自然体験活動に関する事業計画の実施状況についてうかがいます。(一つだけ選択)

図表 2-9 令和2年度から令和3年度上半期(4~9月)の自然体験活動に関する事業計画の実施状況



ウ 新型コロナウイルス感染症流行前後の自然体験・生活体験活動の実施状況

新型コロナウイルス感染症流行前（令和2年1月以前）と、感染症流行時期（令和2年度から令和3年度上半期（4～9月））に分けて自然体験・生活体験活動の実施状況を尋ねた。流行前後で減少割合が高かった選択肢に着目すると、「施設での宿泊」の減少割合が最も高く34.3ポイント、次いで「テントでのキャンプ宿泊」が32.1ポイント、「屋内炊事・食堂での食事提供」が27.1ポイント、「野外炊事」が24.6ポイントとなっている。一方、感染症流行時期においても「登山、ハイキング、自然観察等の野外活動」については、71.0%の団体・施設が実施したと回答した。

【設問 12-1】 **新型コロナウイルス感染症流行前(令和2年1月以前)に、次の自然体験・生活体験活動を実施していましたか。(あてはまるすべてを選択)**

【設問 12-2】 **令和2年度から令和3年度上半期(4～9月)に、次の自然体験・生活体験活動を実施しましたか。(あてはまるすべてを選択)**

図表 2-10 新型コロナウイルス感染症流行前後における自然体験・生活体験活動の実施状況（比較）

	新型コロナ流行前 (令和2年1月以前)		令和2年4月～ 令和3年9月の期間		割合の 差分 (ポイント)
	件数	割合(%)	件数	割合(%)	
登山、ハイキング、自然観察等の野外活動	576	84.7	483	71.0	13.7
川遊び、沢登り、カヌー、カッター等の水辺活動	392	57.6	237	34.9	22.8
レクリエーション・屋内スポーツ・講座等の屋内活動	508	74.7	380	55.9	18.8
クラフト等の創作活動	521	76.6	431	63.4	13.2
野外炊事	545	80.1	378	55.6	24.6
屋内炊事・食堂での食事提供	410	60.3	226	33.2	27.1
施設での宿泊	503	74.0	270	39.7	34.3
テントでのキャンプ宿泊	456	67.1	238	35.0	32.1
山小屋での宿泊	58	8.5	16	2.4	6.2
上記の自然体験・生活体験活動を実施していない	35	5.1	95	14.0	-8.8
全体 n=680					

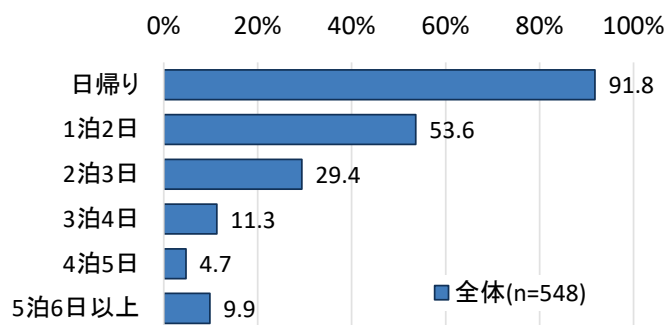
エ 自然体験活動の開催日数

令和2年度から令和3年度上半期に実施した自然体験活動の開催日数をみると、「日帰り」が最も多く全体の91.8%、次いで「1泊2日」が53.6%、「2泊3日」が29.4%となっている。

【設問 13】 **【令和2年度から令和3年度上半期(4～9月)に、自然体験活動に関する事業を実施した方にうかがいます。】**

実施した自然体験活動の開催日数について、あてはまるものを選択してください。複数の体験活動を実施している場合は、該当するすべてを選択してください。(あてはまるすべてを選択)

図表 2-11 自然体験活動の開催日数



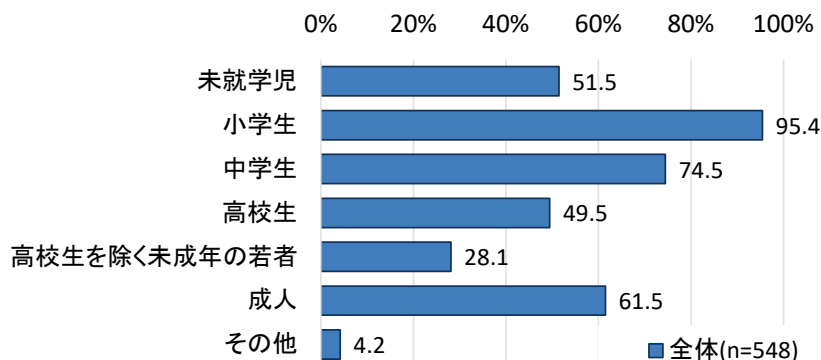
オ 自然体験活動の対象者の年齢層

令和2年度から令和3年度上半期に実施した自然体験活動について、対象者の年齢層を尋ねたところ、「小学生」が最も多く全体の95.4%、次いで「中学生」が74.5%、「成人」が61.5%となっている。

【設問 14】 【令和2年度から令和3年度上半期(4~9月)に、自然体験活動に関する事業を実施した方にうかがいます。】

実施した自然体験活動の対象者の年齢層について、あてはまるものを選択してください。複数の体験活動を実施している場合は、該当するすべてを選択してください。(あてはまるすべてを選択)

図表 2-12 自然体験活動の対象者の年齢層

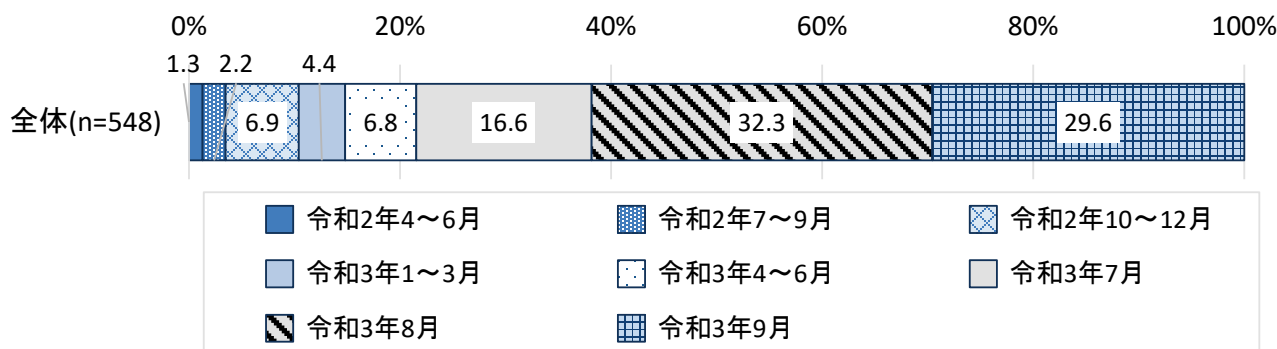


カ 直近で実施した自然体験活動の開催年月

令和2年度から令和3年度上半期に実施した自然体験活動のうち、直近で実施(受入れ)した開催年月をみると、「令和3年8月」が最も多く全体の32.3%、次いで「令和3年9月」が29.6%、「令和3年7月」が16.6%となっている。

【設問 15】 【令和2年度から令和3年度上半期(4~9月)に、自然体験活動に関する事業を実施した方にうかがいます。】貴団体・施設が直近で実施(受入れ)した自然体験活動の開催年月をご回答ください。※令和2年4月~令和3年9月の範囲で回答してください。(数字を記入)

図表 2-13 直近で実施（受入れ）した自然体験活動の開催年月



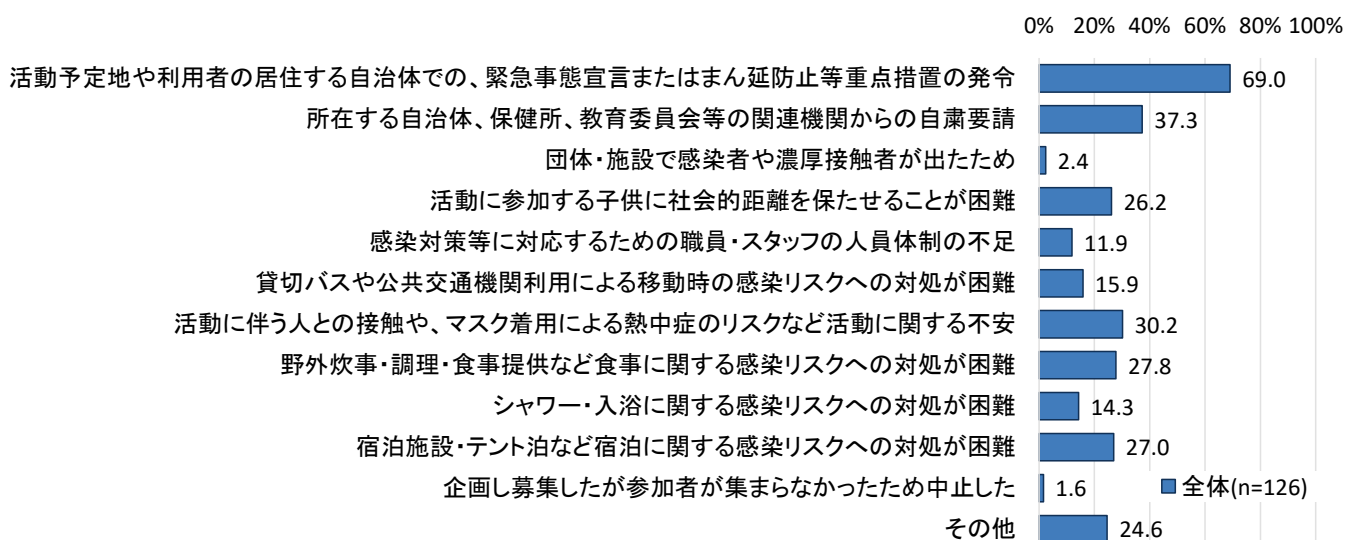
キ 令和2年度から令和3年度上半期に自然体験活動を実施しなかった理由

令和2年度から令和3年度上半期（4～9月）に自然体験活動を実施しなかった団体・施設に、実施しなかった理由を尋ねたところ、「活動予定地や利用者の居住する自治体での、緊急事態宣言またはまん延防止等重点措置の発令」と回答した割合が最も高く69.0%、次いで「所在する自治体、保健所、教育委員会等の関連機関からの自粛要請」が37.3%となっている。また、「活動に伴う人との接触や、マスク着用による熱中症のリスクなど活動に関する不安」「野外炊事・調理・食事提供など食事に関する感染リスクへの対処が困難」「宿泊施設・テント泊など宿泊に関する感染リスクへの対処が困難」「活動に参加する子供に社会的距離を保たせることが困難」と回答した割合も3割程度となっている。

【設問 17】 【令和2年度から令和3年度上半期（4～9月）に、自然体験活動に関する事業を実施しなかった方にうかがいます。】

自然体験活動を実施しなかった理由について、あてはまる選択肢をお答えください。該当する選択肢がない場合は、その他に具体的な理由をご回答ください。（あてはまるすべてを選択）

図表 2-14 令和2年度から令和3年度上半期（4～9月）に自然体験活動を実施しなかった理由



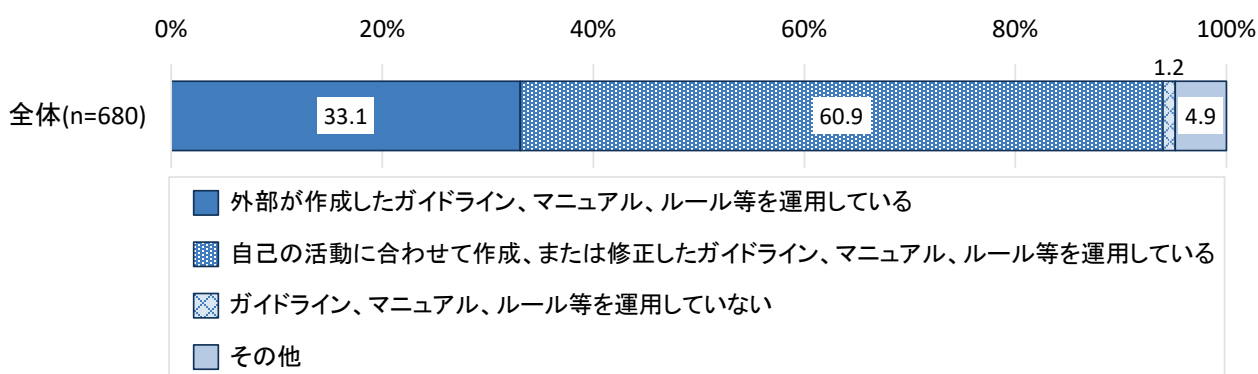
(3) 自然体験活動に関する新型コロナウイルス感染対策の状況

ア 新型コロナウイルス感染対策に関する利用者や職員向けのガイドライン、マニュアル、ルール等の運用状況

新型コロナウイルス感染対策に関する利用者や職員向けのガイドライン、マニュアル、ルール等の運用状況を尋ねたところ、「自己の活動に合わせて作成、または修正したガイドライン、マニュアル、ルール等を運用している」と回答した割合が最も高く 60.9%、次いで「外部が作成したガイドライン、マニュアル、ルール等を運用している」が 33.1%となっている。「ガイドライン、マニュアル、ルール等を運用していない」と回答した割合は 1.2%となっている。

【設問 10】 新型コロナウイルス感染対策に関する利用者や職員向けのガイドライン、マニュアル、ルール等の運用状況について、貴団体・施設の状況に最も近い選択肢を 1 つ選択してください。
(一つだけ選択)

図表 2-15 新型コロナウイルス感染対策に関する利用者や職員向けの
ガイドライン、マニュアル、ルール等の運用状況



イ 自然体験活動に関する事前の感染対策

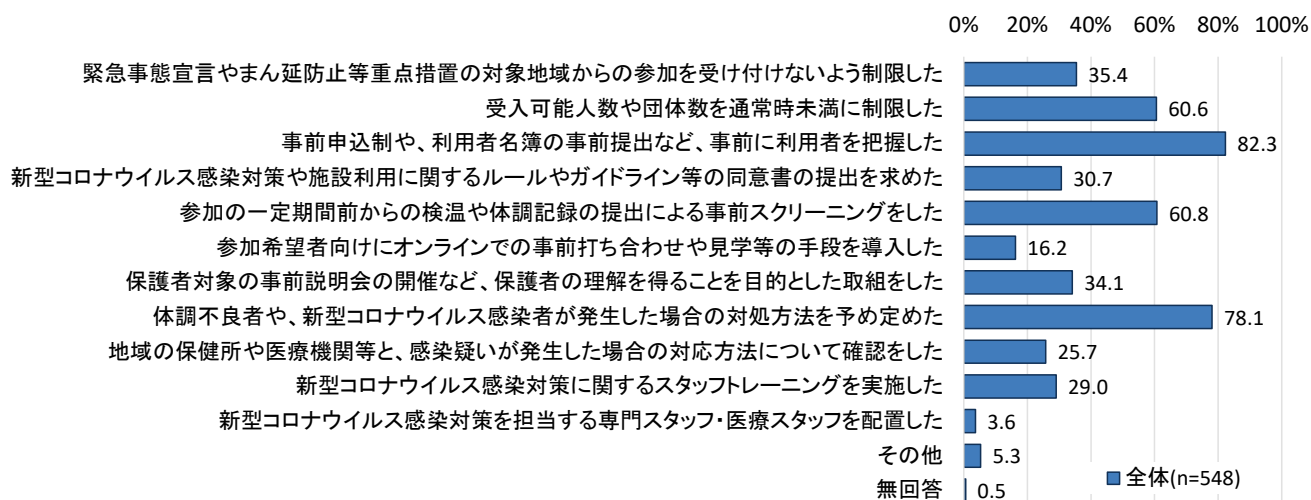
自然体験活動の事前実施した新型コロナウイルス感染対策を尋ねたところ、「事前申込制や、利用者名簿の事前提出など、事前に利用者を把握した」「体調不良者や、新型コロナウイルス感染者が発生した場合の対処方法を予め定めた」の回答割合が約 8 割となっている。さらに、「受入可能人数や団体数を通常時未満に制限した」「参加の一定期間前からの検温や体調記録の提出による事前スクリーニングをした」と回答した割合が約 6 割となっている。

【設問 16-1】 【令和 2 年度から令和 3 年度上半期(4~9 月)に、自然体験活動に関する事業を実施した方にかがいます。】

自然体験活動の事前、次に挙げるような感染対策を実施していましたか。

※令和 3 年 9 月までの期間で最も近い時期に実施・受け入れた自然体験活動での状況についてお答えください。(あてはまるすべてを選択)

図表 2-16 自然体験活動に関する事前の感染対策



ウ 自然体験活動実施時の新型コロナウイルス感染対策

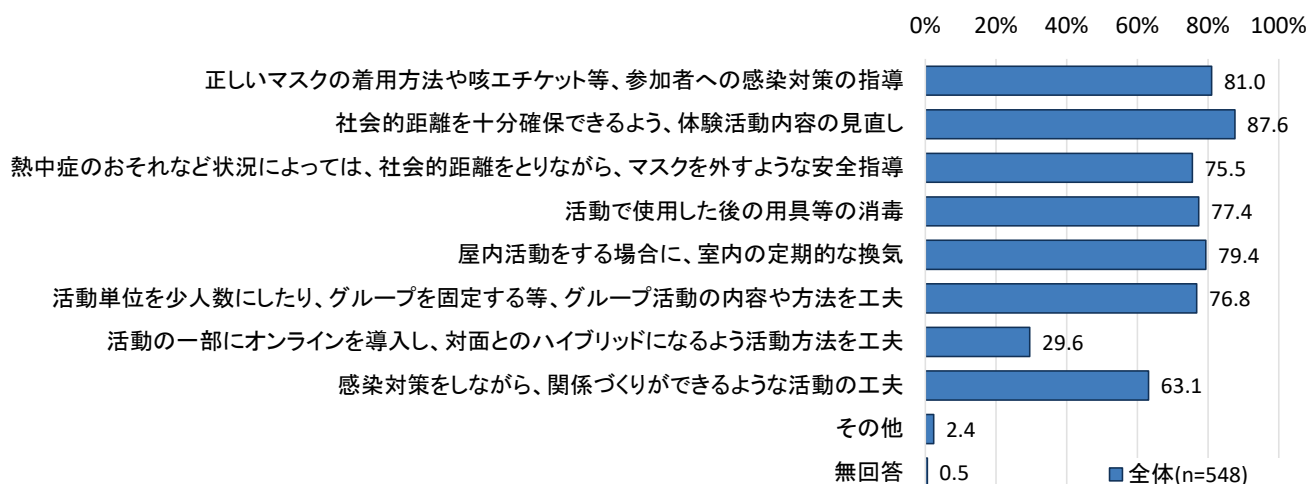
自然体験活動の実施に関する新型コロナウイルス感染対策や工夫を尋ねたところ、「社会的距離を十分確保できるよう、体験活動内容の見直し」が最も高く 87.6%となっている。また、「感染対策をしながら、関係づくりができるような活動の工夫」と回答した割合が 63.1%となっている。なお、「活動の一部にオンラインを導入し、対面とのハイブリッドになるよう活動方法を工夫」と回答した割合は 29.6%となっており、自然体験活動に ICT を取り入れる工夫も一定数みられた。

【設問 16-2】【令和 2 年度から令和 3 年度上半期(4~9 月)に、自然体験活動に関する事業を実施した方にかがいます。】

自然体験活動の実施に関し、新型コロナウイルス感染対策として、次のうち貴団体・施設が実施した対策や工夫があれば選択してください。

※令和 3 年 9 月までの期間で最も近い時期に実施・受け入れた自然体験活動での状況についてお答えください。(あてはまるすべてを選択)

図表 2-17 自然体験活動実施時の新型コロナウイルス感染対策



エ 野外炊事や食事提供を伴う活動の実施時の新型コロナウイルス感染対策

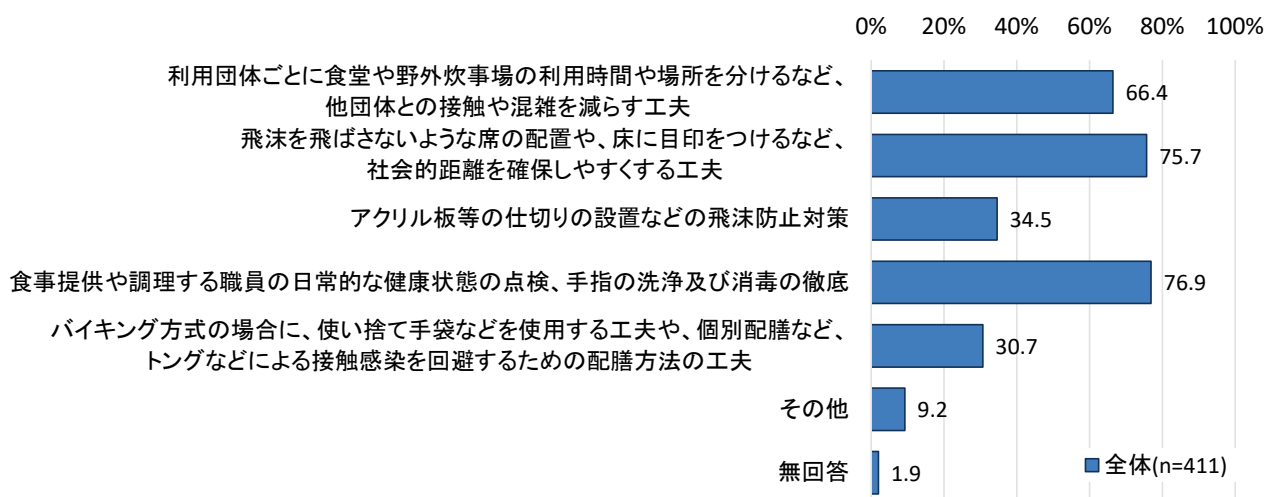
野外炊事や食事提供を伴う活動の実施時の新型コロナウイルス感染対策や工夫を尋ねたところ、「食事提供や調理する職員の日常的な健康状態の点検、手指の洗浄及び消毒の徹底」が76.9%、「飛沫を飛ばさないような席の配置や、床に目印をつけるなど、社会的距離を確保しやすくする工夫」が75.7%、「利用団体ごとに食堂や野外炊事場の利用時間や場所を分けるなど、他団体との接触や混雑を減らす工夫」が66.4%となっている。

【設問 16-3】【令和2年度から令和3年度上半期(4~9月)に、野外炊事や食事提供を実施した方にうかがいます。】

野外炊事や食事提供を伴う活動の実施時に、新型コロナウイルス感染対策として、次のうち貴団体・施設が実施した対策や工夫があれば選択してください。

※令和3年9月までの期間で最も近い時期に実施・受け入れた自然体験活動での状況についてお答えください。(あてはまるすべてを選択)

図表 2-18 野外炊事や食事提供を伴う活動の実施時の新型コロナウイルス感染対策



オ 宿泊を伴う活動の実施時の新型コロナウイルス感染対策

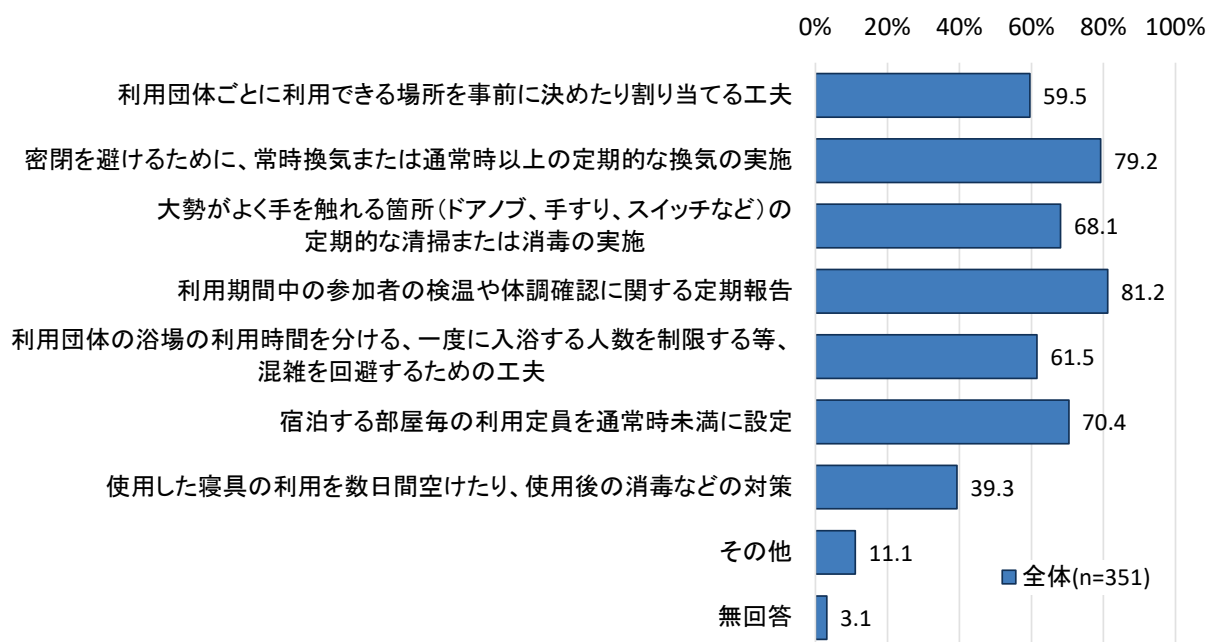
宿泊を伴う活動の実施時の新型コロナウイルス感染対策や工夫を尋ねたところ、「利用期間中の参加者の検温や体調確認に関する定期報告」が最も高く81.2%となっている。次いで、「密閉を避けるために、常時換気または通常時以上の定期的な換気の実施」が79.2%、「宿泊する部屋毎の利用定員を通常時未満に設定」が70.4%となっている。

【設問 16-4】【令和2年度から令和3年度上半期(4~9月)に、施設・テント・山小屋等の宿泊を伴う活動を実施した方にうかがいます。】

宿泊を伴う活動の実施時に、新型コロナウイルス感染対策として、次のうち貴団体・施設が実施した対策があれば選択してください。

※令和3年9月までの期間で最も近い時期に実施・受け入れた自然体験活動での状況についてお答えください。(あてはまるすべてを選択)

図表 2-19 宿泊を伴う活動の実施時の新型コロナウイルス感染対策



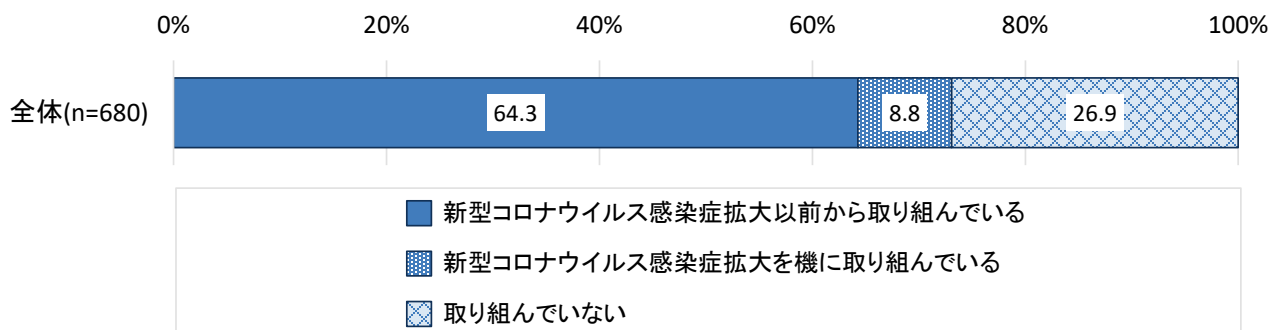
(4) ICT の活用や新たな自然体験活動の取組

ア SNS を活用した情報発信

SNS を活用した情報提供や、活動への参加募集、活動報告の発信の取組の回答状況をみると、「新型コロナウイルス感染症拡大以前から取り組んでいる」が最も多く全体の 64.3%、次いで「取り組んでいない」が 26.9%、「新型コロナウイルス感染症拡大を機に取り組んでいる」が 8.8%となっている。

【設問 18-1】 貴団体・施設では、SNS を活用した情報提供や、活動への参加募集、活動報告の発信をしていますか。(一つだけ選択)

図表 2-20 SNS を活用した情報提供や、活動への参加募集、活動報告の発信

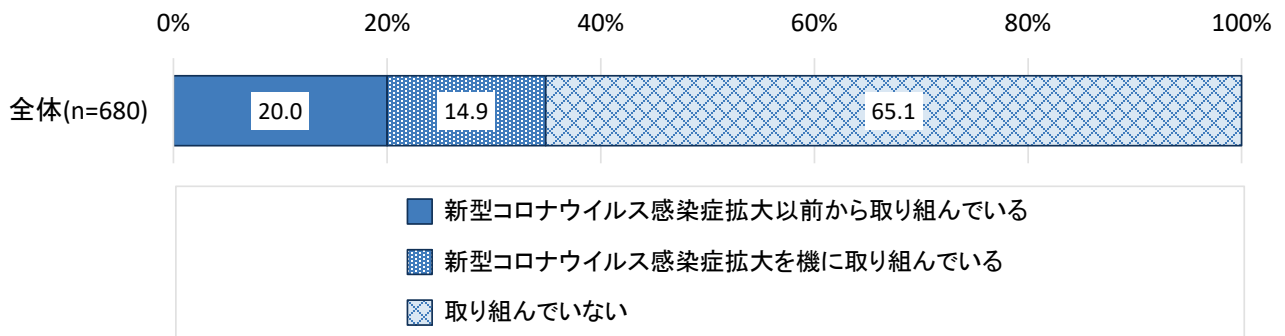


イ 活動に関する動画配信

活動に関する動画配信の取組状況を尋ねたところ、「取り組んでいない」が最も多く全体の65.1%、次いで「新型コロナウイルス感染症拡大以前から取り組んでいる」が20.0%、「新型コロナウイルス感染症拡大を機に取り組んでいる」が14.9%となっている。

【設問 18-2】 貴団体・施設では、活動に関する動画配信に取り組んでいますか。(一つだけ選択)

図表 2-2 1 活動に関する動画配信

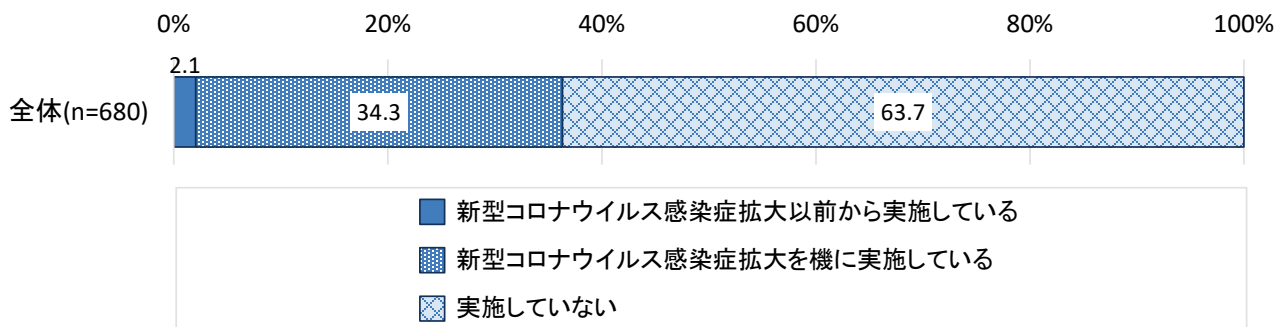


ウ オンラインイベントの開催

オンラインイベントの開催の取組状況を尋ねたところ、「実施していない」が最も多く全体の63.7%、次いで「新型コロナウイルス感染症拡大を機に実施している」が34.3%、「新型コロナウイルス感染症拡大以前から実施している」が2.1%となっている。

【設問 18-3】 貴団体・施設では、オンラインイベントの開催に取り組んでいますか。(一つだけ選択)

図表 2-2 2 オンラインイベントの開催



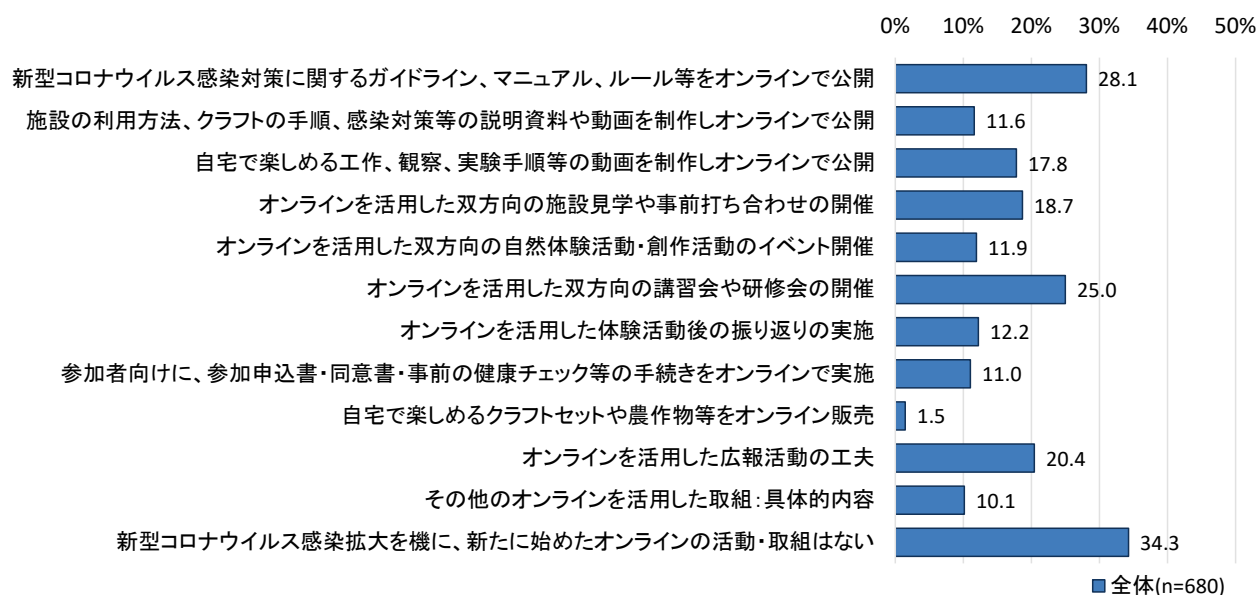
エ 新型コロナウイルス感染症の拡大を機に新たに始めたオンラインを活用した活動・取組

新型コロナウイルス感染症の拡大を機に新たに始めたオンラインを活用した活動・取組について尋ねたところ、「新型コロナウイルス感染拡大を機に、新たに始めたオンラインの活動・取組はない」と回答した割合が最も高く 34.3%となっている。次いで、「新型コロナウイルス感染対策に関するガイドライン、マニュアル、ルール等をオンラインで公開」と回答した割合が 28.1%、「オンラインを活用した双方向の講習会や研修会の開催」 25.0%、「オンラインを活用した広報活動の工夫」が 20.4%となっている。

【設問 19】 【すべての方にうかがいます】

新型コロナウイルス感染症の拡大を機に、新たに始めた活動・取組の内容についてうかがいます。次のような、オンラインを活用した活動・取組を実施していますか。(あてはまるすべてを選択)

図表 2-23 新型コロナウイルス感染症の拡大を機に新たに始めたオンラインを活用した活動・取組



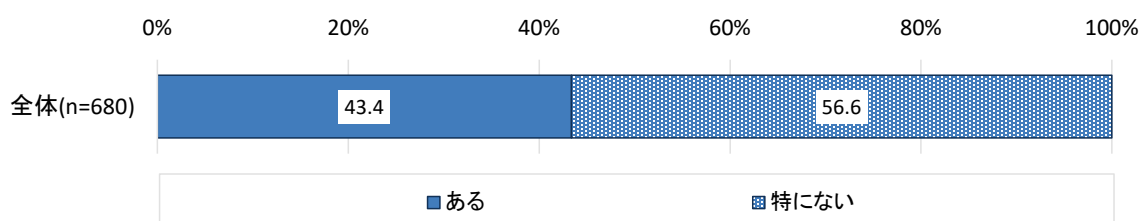
オ 新型コロナウイルス感染症拡大を機に新たに始めた活動・取組の有無

新型コロナウイルス感染症拡大を機に新たに始めた活動・取組の有無を尋ねたところ、「ある」と回答した割合は 43.4%、「特にない」と回答した割合は 56.6%となっている。

【設問 20】 新型コロナウイルス感染症流行前(令和 2 年 1 月以前)に、次の自然体験・生活体験活動を実施していましたか。

※ICT の活用の有無にかかわらず、新たに始めた活動・取組みについてご回答ください。
(あてはまるすべてを選択)

図表 2-24 新型コロナウイルス感染症拡大を機に新たに始めた活動・取組の有無



カ 新型コロナウイルス感染症の拡大を機に新たに始めた活動・取組の具体的な内容

新たに始めた活動・取組があると回答した方に、活動・取組の具体的な内容を伺ったところ、291の団体・施設から意見が寄せられた。自由記述を内容別に分類し、整理したところ、「体験活動・研修・交流におけるICTの活用」、「自然体験活動・プログラムの工夫・開発」、「広報・募集・施設紹介等に関するICT活用」等に関して、新型コロナウイルス感染症の拡大を機に新たに始めた活動・取組の具体的な内容を把握した。グループ分けした項目別に、代表的な自由記述を抜粋して掲載した。

【設問 20-1】【新たに始めた活動・取組があると回答した方にうかがいます】

新たに始めた活動・取組の内容や、工夫した点について具体的にご記入ください。

※新たな取組が多数ある場合は、試行的・実験的な取組、力を入れている取組、他団体が参考になるような取組について優先してご記入ください。

図表 2-25 新たに始めた活動・取組の具体的な内容

	自由記述の分類	件数 (n=291)	割合 (除く無回答) (%)
1	体験活動・研修・交流におけるICTの活用	157	54.0%
2	自然体験活動・プログラムの工夫・開発	71	24.4%
3	広報・募集・施設紹介等に関するICT活用	50	17.2%
4	施設利用・宿泊・食事等に関連する感染対策の工夫	33	11.3%
5	地域活動・連携・出前事業	14	4.8%
—	その他	7	2.4%
	意見の合計数	332	—

代表的な自由記述の紹介

<自然体験活動・プログラムの工夫・開発>

- キャンプ等宿泊を伴う活動がしづらくなったことにより、新たに『ソログルキャンプ』を取り入れた。具体的には、料理・宿泊はソロスタイルとし、プログラム中にも「おひとりさまタイム」を設けた。(星を見る・読書・散歩など) 個別の活動をしながらも、全体的にはグループ活動であって、周りには仲間がおり、時には糸電話で会話もした。料理に関しては、1人ずつのクッキングセットを作った。お揃いの布バッグに、簡易コンロ・焼き網・ミニフライパン・固形燃料・軍手・マッチ・布巾を入れ、各自が持参している。コロナ禍で活動費に余裕がある分、それらの購入費に充て、体験で参加する子供にも提供している。昨今のキャンプブームを受け、100円ショップで買えるものも増えてきている。クッキングセットは持ち帰って、家庭でも楽しんでもらっている。特に今年度は年間10回以上の野外活動を予定していて、野外料理セットを使ったプログラムも、最初はマッチを擦ることから始まり、だんだんとスキルアップできるようにしている。
- 1日1組限定のキャンプ場の運営、1家族限定の自然体験活動の実施、1日1組限定のゲストハウスの運営、マイクロツーリズムの企画運営、アドベンチャーツーリズムのプログラム実施
- 以前から、テント泊や野外炊飯時の火おこしなどプログラムの一部として実施していたが、テント泊や

野外炊飯を実施しない団体に向けても、キャンプ活動として、新たにテント設営・火おこし・ロープワークの活動を導入。各種レクリエーションで、できるだけ密を避けられる内容を厳選して、SD(ソーシャルディスタンス)レクリエーションを開発。

- 「いつ来てもいつ帰っても良いキャンプ」子供(小学生)の長期休業中に実施。1日当たりの参加費は定額とし、事前に参加期間と往復の交通機関を決めて申込むようにした。午前中のプログラムは前日夜に、午後のプログラムはその日に、参加者で話し合い決定していた。
- 主に宿泊研修に利用される当施設ではコロナ禍を受け、利用中止や利用日程変更の相談が相次いだ。そこで、利用日程の延期や、宿泊を伴わない日帰りでの利用への変更の提案など、各利用団体の利用態様や希望に応じた柔軟な対応を講じた。
- デイキャンプを頻回に開催した。・拠点から全行程徒歩でのハイキング:車両を使用しない安心感に繋がった。・地域のこども、家庭向けのネイチャープログラムを多数実施。人の集まる場、拠り所としての場の提供⇔施設にとっての賑わいの創出、活性化に繋がった。・健康増進のため企画・提供していたピラティスプログラムを自然体験活動と共同開催、ハイキングプログラムと組み合わせた。・デイワークキャンプを開催。薪割りや清掃作業、ペンキ塗り等、野外で年齢制限のないプログラムを実施した。・感染リスクの低い野外での活動は開放感もあるため好評だった。・近在のこども向けのプログラムを提供したので、100名以上の新規参加者があった。
- コミュニケーショントレーニングの際に、身体接触を避けるため、ロープを活用したプログラムを提供した。
- コロナ禍で、多くの利用者が宿泊を躊躇したため、利用のターゲットを日帰り利用にシフトした。日帰りでも楽しめる工作や遊具を新たに設置し、集客を図った。また、コロナの感染拡大防止の観点から、室内での活動をなるべく屋外へ促すよう、魅力的な遊具やテントを設置したり、新しいオリエンテーリングコースやクイズラリーを施設内の里山へ作ったりした。併せて、工作も持ち帰って作れるように「キット」化し、売り上げ数を伸ばした。
- 家族での自然体験活動を促進するため屋外でのスタンプラリーイベントを実施した。・参加者が密になることを防ぐため、敷地面積262,975㎡に50個のスタンプを設置した。
- 日帰り事業「そに遊びの森」の開催(令和2年5,6月)(計8回)コロナ禍だからこそ、体験の機会を提供することを目的とし、可能な範囲で、屋外で親子が参加できる事業を実施した。事前予約制にして少人数を複数回で開催した。キャンプ場を中心とした活動場所で、ハイキングやたき火遊び、フィールドアスレチックなどのプログラムを行った。

<施設利用・宿泊・食事等に関連する感染対策の工夫>

- 【新型コロナウイルス感染防止対策を踏まえた施設利用者説明会】 当施設の新型コロナウイルス感染症防止対策を説明するとともに、利用団体に留意していただく内容を周知するために、利用予定団体の引率責任者を対象に説明会を実施した。説明会后に個別相談を行うことで、利用団体の不安解消につなげました。
- 教育事業において募集定員を通常の半数とし、ソーシャルディスタンスの確保と安全安心な事業運営に

配慮した。新型コロナウイルス感染症防止対策による施設利用ハンドブックを作成・随時改訂し、校長会や保護者説明会等で利用促進の際や施設の利用説明のために活用している。各室の利用定員についても、食堂、脱衣場、浴室、宿泊棟などは通常定員の約半数として人数制限を施した。なお、宿泊棟においては利用後3日間のインターバルを設けるためベッドを色分けし、指定した色のベッドを使用するようにしている。(ベッドの色は脱衣場のロッカーともリンクしている。) 頭部と接することで最も感染の恐れがあるため、枕についてはビニール袋で覆い、頭部付近にバスタオルをかけることで感染を防ぐ措置を施した。さらに、各室前に消毒用アルコールを設置し、手指消毒を励行している。事務室や食堂など、会話する場所ではパーテーションを設置し、飛沫感染を防いでいる。参加者に対して、・参加前から自宅等にて検温など事前に健康調査を行い、通常時の状態を把握させる。・所バス乗車時に手指消毒を行わせる。・所内では手指消毒し、マスクを着用させる。・食堂では手洗い、手指消毒の上、黙食を徹底させる。・密にならないよう、お互いに間隔を空けて活動するよう促す。・大声で話さない、清潔にする、譲り合って行動するなど、お互いが気持ちよく過ごせるよう注意喚起するなどの協力を要請している。

- 施設内に56か所の消毒スポットを設置した。食堂のバイキングから盛付け食へ変更した。食堂や事務室前に常設の検温器を設置した。食堂のテーブルに「消毒状態カード」を設置し、未消毒か消毒済みか一目で分かるようにした。
- 学校等を訪問し、活動等の事前説明会を実施(事前に説明することで当日の十分な活動時間を確保)。利用団体を訪問する形での事前打合せ(利用団体担当者の負担を軽減)

<体験活動におけるITの活用>

- 「おうちで60秒チャレンジ」という、自宅で、ご家族などのできるレクリエーション活動(からだを動かすあそび)を動画で紹介。現在11種目あり、チャレンジした様子を動画撮影しTwitterに投稿すると全国ランキングに参加可能。
- IT機器(タブレット)を活用した野外活動(ARネイチャーラリー、ARアドベンチャーラリー)の提供。
- オンラインでの打ち合わせ・オンラインでの活動(講演会、クッキング講習会、創作など)特に創作では、グーグルのジャムボードを活用し、リモートでも一緒に一つのものを共有しながら創り上げる活動を取り入れた。グーグルフォームを使って、参加申込を受け付けた。
- 大学、農家グループ、市による食のイベントとして、毎年、テーマの野菜を決め、収穫体験等の農場体験と調理体験・ワークショップを行ってきたが、対面での実施が困難となったため、大学の調理室と参加者の台所をZoomによりオンラインでつなぎ実施した。農場体験の代わりに事前に畑や野菜の生育、収穫方法等を動画撮影・編集して、視聴してもらうことや、大学生による野菜クイズを行い、テーマ野菜への理解を深めた。調理体験で使う食材を事前に配布することで、当日、全ての参加者と講師が同じ食材を使用して実施でき、離れていても同じように調理することができた。
- 緊急事態宣言等で休館となったため、浮いた時間を使って、自宅など身の回りの環境でできる自然体験活動や施設周辺の自然情報を動画で作成し、YouTubeで公開した。
- 全国各地からの参集による「交流要素」を重視してきた事業や、地域での開催事業に講師を派遣してき

たものなど移動を前提としていた事業について、オンラインで開催できる内容・仕組みに構築し直して実施した・集合研修が必須な講座については、集合研修1日+オンライン研修1日で再構成し、体験第一の基本スタイルを維持しながら実施。オンラインにおいても体験できるアクティビティを盛り込み、時代に合わせた体験機会を得られるよう工夫した（集合でできる地域では集合で実施）。

- 動画配信・入所オリエンテーション動画…事前学習で活用してもらい、入所式の時間短縮を図る。・登山コース動画…事前に打ち合わせや下見に来ることができない団体用として配信。・クラフト動画…ステイホーム期間中に活用できるように、簡単にできるものを配信。
- 学校団体の調理実習がなくなった現状を考慮し、野外で調理を行っていた「野外炊事」プログラムを、調理工程を割愛し、より防災体験に近づけた「防災炊事」プログラムで代替した。各種プログラムについて、動画配信を行うことで、インターネット上でも確認しやすい環境を作った。また、GoogleMapを活用して施設HP上で施設周辺フィールドを活用できるようにした。
- ハウス食品グループ本社株式会社からの受託事業ハウス「食と農と環境の体験教室」知って、作って、食べて、つながって！コロナ禍の中、初めてのオンラインでの開催となりました。様々な地域から参加頂いた全11家族の皆さんと、自宅で稲を育てる体験、「食品ロスをなくす」をテーマで考えたオリジナルカレー調理の体験を通じて、オンラインならではの「食と農と環境」のつながりを学んでいただきました。実施内容第1回 「バケツ稲」田植えの方法・「食品ロスの現状」と私たちができることを学習。「冷蔵庫にあまりがちな食材を使ったカレー」の調理デモ見学。特別講座 「バケツ稲」の栽培中のお困りごとやお悩み解決と個別アドバイス。第2回 「バケツ稲」稲刈り～脱穀の方法・「温暖化の現状」と私たちができることを学習。工夫した点1. 参加者限定の日々の成長記録（画像付き）を投稿できるサイトを開設。2. 単発参加にならぬよう宿題を出す。3. 質問、相談サイトの開設。成長過程で疑問点、問題点などを画像添付してもらい、農業者が答える。
- 毎月開催される団の会議をオンラインでも実施した。・子供たちが複数人集まる形での通常のスカウト活動ができなかった為、保護者連絡用のLINEグループを使って、自宅での取り組みをLINE上で発表してリアルタイムで共有した。・小学6年生から中学生が在籍するボーイ隊では、進級の課目を各自宅で行いレポート提出。実技は動画にしてリーダーのLINEアカウントへ送信して確認をもらった。
- オンライン活用で、団会議、各隊リーダー会議等、実施。ビーバー隊、カブ隊、ボーイ隊において、各隊長からの励ましの手紙を郵送。例えば、カブ隊長からの手紙郵送で、自宅で木材を使って工作物づくりを指示し、オンラインでの隊集会で、シトリゲームを取り入れ、その後、各自が作った工作物の発表を実施。また、カブ隊デンリーダーからの手紙郵送で、自宅学習の指示、①夏季キャンプの思い出作り②チャレンジ章“ピカッと探検家”の細目学習、その後オンラインでの隊集会で、キャンプの思い出での発表、チャレンジ章の取り組み状況の発表等、オンライン組集会で自宅周辺の交通標識を調べた事を発表、危険な箇所を調べた事を発表、オンライン隊集会では、珍しい標識の写真を撮ってきて発表、自分の家の避難場所を知る。ボーイ隊はオンライン班長次長会議で今後やりたいこと等スカウトの意見を聞く。
- スカウト（子供）の保護者とスマホのグループラインをつくった。対面の集会のかわりに指導者が撮った花の写真をラインに送り花の名前クイズをした。また、野鳥の鳴き声を送り名前を当てるクイズもし

た。ある保護者の庭に来る野鳥（ヒガラ）の声の返信があり共有した。自然観察を意識したクイズを考えた。郵送で課題を送り（ありがとうの絵 お花ものがたり 母の日のカーネーションのお手紙 パラリンピックの感想……など）フェイスブックで友達の作品を共有した。STAY HOME ならではの過ごし方をスカウトに提案することを意識した。オリンピック開催の時期と重なりパラリンピックのTV 観戦の感想を親子で話す機会を作り、返信ハガキを指導者宛てに書いて送った。

- オンラインでの会員向けの事業やオンラインでの非会員向けの事業などを企画、実施しました。会員向けには、これまで修得してきたロープむすびや手話、コミュニケーション方法や測定法などの技術を使い、ITC の知識と体験を得ながら技術の維持や向上につとめました。非会員向けには、SDGs と絡めた事業の実施を企画し、着古した T シャツを使ったエコバッグの作成や、ハタキを手作りして、地球に優しい掃除など、ガールスカウトが普段から行っている内容を、オンラインでお届けしました。

＜広報（募集・施設紹介等）に関する IT 活用＞

- 施設の利用促進を図るために、SNS での広報や YouTube に動画を投稿している。
- 公式 YouTube チャンネル「ササビーチャンネル」を開設し、施設利用の仕方、活動プログラムの進め方等を配信している。新たな広報手段として、公式Instagramを開設した。
- 360度カメラビューによる施設及び館内の紹介、SNSによる情報発信回数を倍増させた。
- Instagramによるライブ配信を用いて、全国の青少年教育施設で活躍している青少年教育ボランティアを紹介した。
- 施設のボランティア向け説明会をオンラインで実施し始めた。加えて、ボランティアを対象にしたオンライン研修を年複数回企画し、実施している。施設が市街地から離れており、交通アクセスも良くないため、ボランティアと施設の両方にメリットがある形にできている。

＜地域活動・連携・出前事業＞

- 野外学習が新型コロナの影響で実施できなくなった市内の学校を対象に、職員が学校へ出張し、クラフト活動やキャンドルサービスを提供する「出張講座」をおこなった。
- 利用団体が来所するのではなく、所員が利用団体のもとに赴き、当所の活動を提供する出前講座を積極的に展開した。このことは、体験活動の機会が減少しがちな青少年への活動の機会提供につながったほか、所の活動のバリエーションの拡充にも資することとなった。
- 【出張！諫早自然の家!!】 新型コロナウイルス感染症の全国的流行により、体験活動の機会が喪失した青少年に対して、体験活動の機会を提供するため、自然の家の利用をキャンセルした各学校・団体等を対象に、職員が赴き自然の家の活動プログラム（イニシアティブ、遊びリンピック、クラフト活動等）を実施した。
- 市内幼稚園保育園を対象とした紙芝居キャラバン
- 西郷村と災害発生時等における宿泊施設の提供等に関する協定を締結した。

キ 自然体験活動の取組を推進する上で、課題だと感じることや必要な支援

自然体験活動の取組を推進する上での課題や必要な支援について、自由記述により意見を伺った。473の団体・施設から意見が寄せられた。自由記述の内容を分類したところ、活動の広報の面で行政や教育委員会の後援や学校の協力が必要という意見、感染対策と質の高い体験活動を実施していくための工夫やノウハウが必要という意見、活動の中にオンラインを取り入れる場合の難しさや課題に関する意見、コロナ禍の影響を受け資金面・運営面での支援を求める意見等が多く挙げられた。自由記述内容を分類した項目ごとに代表的な意見を掲載した。

【設問 21】 【すべての方にうかがいます】

新型コロナウイルス感染対策を踏まえた運営の工夫やウィズコロナ期における新たな自然体験活動の取組を推進する上で、課題だと感じることや、必要な支援について、ご意見がありましたらお聞かせください。

図表 2-26 キ 自然体験活動の取組を推進する上で、課題だと感じることや必要な支援

	自由記述の分類	件数 (n=473)	割合 (除く無回答) (%)
1	行政・教育委員会等の後援・学校の協力	89	18.8%
2	コロナ禍に適したプログラム開発・体験の質との両立	77	16.3%
3	ITを活用した活動の課題・IT推進や整備の必要	73	15.4%
4	感染対策に関する経費、事業資金や運営資金の支援	65	13.7%
5	スタッフ・ボランティアの負担増加・人員確保	30	6.3%
6	感染対策等への周囲の理解、保護者の理解	27	5.7%
7	利用の制限・利用者の減少に伴う運営(委託含む)の課題	24	5.1%
8	子供など参加者への感染対策の理解・徹底・体調管理	24	5.1%
9	感染状況の変化等による事業や活動の変更等の対応	23	4.9%
10	子供への体験機会の減少、子供への影響	21	4.4%
11	コロナ禍における活動場所・宿泊施設の制約	21	4.4%
12	コロナ禍の活動ルール、感染対策ガイドラインの課題	18	3.8%
13	食事に関する課題・感染対策	18	3.8%
14	感染対策等の工夫・事例の情報共有	17	3.6%
15	宿泊に関する課題・感染対策	16	3.4%
16	新型コロナに関するワクチン接種・検査体制等	12	2.5%
17	スタッフ・ボランティア等への情報共有、研修、スキル向上	11	2.3%
18	参加者募集、自然体験活動の広報	11	2.3%
19	移動に関する課題・感染対策	10	2.1%
20	利用者の費用負担の増加、利用者への参加費助成等	8	1.7%
21	参加者・関係者が感染した時の対応、事後の対応	5	1.1%
—	その他	26	5.5%
—	特に課題はない	32	6.8%
	意見の合計数	658	—

代表的な自由記述の紹介

<行政・教育委員会等の後援・学校の協力>

- 体験参加を含めた新入団員の募集活動がほとんどできずに、SNSやチラシのみでは効果が見られなかった。そのなかで、文部科学省委託事業であった「ワクワク自然体験あそび」は大変貴重な機会となった。

た。今年度は委託事業とはなっていないが、次年度以降の再開、一定期間の継続を切望する。

- 文科省より各都道府県や各自治体に青少年活動の支援・援助を積極的に行うように要請をお願いします。実施する各種イベントや行事への文科省や自治体の後援名義の取得支援、またこれらのチラシ・案内等を各学校に配布できるように自治体教育委員会を通じた支援をお願いします。
- 一般の子供たちを対象とした自然体験活動を行う際の文部科学省の後援名義・各教育委員会の後援名義等を要望します。

＜コロナ禍に適したプログラム開発・体験の質との両立＞

- 身体的距離を広げ、接触機会を減らす、今まで取り組んできたグループダイナミズムによるプログラムの展開が難しくなった今、意図的により少人数化したグルーピングとテントも1人ずつといった割り振りが必要になってくるのだろう。小さなグループが寄り集まりキャンプという共同の場を構成する、といった発想が求められているように思う。
- キャンプなどの宿泊を伴う場合は、密を避けるためソロテントの活用は新たな可能性を生み出しているように感じます。コロナ対策とともに、ソロで泊まる体験の効果（小学校4年生位から）もかけがえない機会となる可能性があります。ただし、ソロテントを参加人数分揃えることは費用の面で簡単ではなく、備品購入の支援をいただければ多くの団体や施設の方々がソロテント泊を利用した自然体験活動に取り組んで行けることと思います。（子どもたちにとっても、ソロテント泊はとても有意義な体験になると感じます。）
- 活動の目的が、仲間が協力し合うことを目指しているので、一人で活動するような事では、本来の大切な目的が、実施しづらい。本来は、バディー制度、5～6人の班での活動で、密に仲間と共同作業を行うことを、大切にしてきたが、接触することなく、お互い、相手のことを思いやり、協力し合う、助け合うことを、養成するような、活動内容、方法を知りたい。
- レクリエーション（チームビルディング）は人との接触が多く、野外炊飯は多数の人が食材に触れるため、利用制限をおこなっている。また、レクリエーションでの人との接触を団体が敬遠されることもある。アフターコロナになっても人との接触は避けていかなければならないかと考えている。しかし、人や物に直接触れて感じ取れることも多い自然体験活動は、今後どのように活動内容を進めていくか苦慮しているところである。
- ソーシャルディスタンス確保のための各種活動における人数制限や活動内容の制限を課題として感じた時期もありましたが、小規模だからこそ広がる体験の幅もあるとも感じています。これまで向き合ってきた様々なリスクと同じように、新型コロナウイルス感染症に対する策を講じながら、オンラインの活用等と併せて体験活動の推進を行っていきたいです。

＜ICTを活用した自然体験活動の課題・ICT推進や整備の必要＞

- 感染症対策としてオンラインなどの活用が進むことは必要なことと思います。しかしながら、さまざまな感覚を使って感性を豊かにするためにはオンラインでは不十分です。視覚以外の感覚がオンラインで

は使われにくいです。視覚以外の感覚をオンラインでどのように活用するか…という模索も必要でしょうし、何より直接的体験や体験したことをわかちあう空間が子どもの健やかな心身発達には不可欠です。感染症に怯えて、人として生きていくために必要な体験・経験を損なわないようにしなくてはならないと強く思います。今回のコロナ禍の経験を活かして、何はオンラインで代替できるか、何はオンラインでは不十分かをしっかりと分析・検討し、子どもたち・社会のために必要な基礎情報として公開・発信されることを望みます。

- 集団体験には、対面で接触を伴う活動が常であったが、新型コロナウイルス感染拡大のような非常事態では、オンラインでの学習形態が必要となった。しかし、オンラインでの活動における効果的な教材の開発は不十分であり、喫緊の課題である。また、オンラインでは一度に大勢の方の学習支援を行うこと又成果を見届けることが困難であり、少人数による活動や一方的な講義等に偏ってしまうのも課題である。そこで、オンラインにおける効果的な指導方法を研修する機会を御支援いただきたい。また、オンラインでの自然体験学習の好事例を閲覧できる環境があると望ましい。
- 会議は、リモートとリアルの、組み合わせさせた体験もできる。自然体験活動も組み合わせ次第では十分に可能と思います。また、自然体験活動は、こういった時だからこそ力を発揮できる分野でもあると思います。様々な知恵と力とお金を集約し、子どもたちや指導者の学びや出会いの場を失わないようにしなければと常々思います。
- 自然体験を行う際のコロナ対策について、子ども向けに各世代に合う動画が欲しいです。自然体験を全て網羅するものではなく、活動内容をパーツ分けして、視聴する（させる）側が必要なパーツを組み合わせると視聴できるようになると尚助かる。1つのパーツは2-3分程度が望ましい。これをスマホやタブレットを用いて、活動前や活動中に適宜視聴して、対策の徹底を図りたい。
- 密集を避けるため、創作プログラム等において、手元の様子が離れていてもわかるような手立てを工夫していく必要がある。すでに実施している説明動画作成のほか、タブレット端末を使ってスクリーンに投影する取り組みなど、まだまだ工夫できる余地はあるものと考えます。
- オンラインで行う際に通信障害が発生しやすいので、通信機器（ルーター等）の貸出設備に対する助成金等があればありがたいです。テキストのパワーポイント化・視聴覚教材の充実。
- ネットの環境が整わない家庭や、苦手な会員がいるため、オンラインと対面と両方活用しながら状況に応じて使い分けることが重要と思います

<感染対策に関する経費、事業資金や運営資金の支援>

- 学校単位でのプログラム提供のため、緊急事態宣言が発出された時点で、全ての予約がキャンセルとなるがキャンセル料が発生しないため、資金繰りでの支援が必要と感じている。
- 新型コロナウイルス感染対策を考えると参加人数を減らさざるを得ないため収入は減る。しかし、消毒をはじめとした必要備品は増え、移動や宿泊もコスト大幅増は否定できない。収支が合わないようだと事業は実施できない。経済的な支援がいただくと対策を行いつつ実施が可能ではないかと考える。
- 感染症対策用品（消毒液など）の購入費用やオンライン環境整備（WiFi 接続環境改善など）費用の補助や支援があればよい。

- 現在、当所においては利用者数を制限しているところだが、施設利用料の恒常的な減収を招いており、今後も同様の措置をとることとなった場合、施設の存続に関わる問題となり得る。現在と同様の措置を今後数年にわたって行う必要があるならば、なんらかの財政的な支援も必要となると思料する。
- 昨年度、文科省の後押しで行った「ボーイスカウトと遊ぼう」の事業のようなものを、補助金とともに継続して欲しい。参加者の声で、「コロナ禍において、子ども達が外に出るきっかけになってよかった」という意見が多かった。

<スタッフ・ボランティアの負担増加・人員確保>

- 多人数を対象とした事業を行う場合、複数回に分けるか人数を縮小する必要があるため、人員不足やニーズ対応力の低下が見られる。
- 感染対策として、宿泊室の消毒を職員が行っているが、かなりの負担となっている。消毒は、利用団体にも協力いただいているが、最終的には職員や食堂・清掃スタッフがアルコールによる拭き上げを行っている。当面続けていくことが必要ではあると思いますが、光除菌などによる効率の良い方法があれば取り入れていきたい。
- 課題としては、消毒等感染対策のために想定より時間が長くなり次回の活動に影響が出る点がある点である。時間的に余裕を持った計画をするように助言していく必要性を感じる。
- コロナ禍により大学生ボランティアの確保が困難である。

<感染対策等への周囲の理解、保護者の理解>

- 社会的なコロナウイルス感染に関する心無い差別によって、リーダー（指導者）が委縮することになり、積極的に活動に取り組めないことがあった。
- 活動に対して、保護者の同意を得るのは難しい、と感じることもあり、参加の判断は家庭の判断に任せている。しかし、野外活動なら理解してもらいやすく、野外活動への期待は大きく、一緒に参加している保護者もいる。
- 自然体験活動を継続するためには保護者が納得できるガイダンスの提示が重要。

<利用の制限・利用者の減少に伴う運営（委託含む）の課題>

- 新型コロナウイルスにより、施設休館が余儀なくされ、収支状況も悪化したところが多いと思う。コロナを理由とするキャンセルの在り方についても検討が必要。やはりこれまで通りの施設運営は難しいのだと感じる。ここ2年林間学校等の繁忙期を休館で過ごし、来年度の客離れも出てきてしまっている。持続可能な施設運営を目指すにあたり、来年度ウィズコロナの施設運営がこれまでの施設運営にどこまで近づけるかが課題だと感じる。
- 宿泊人数を制限して受け入れをしているので、申し込みが一定の時期に集中し、その調整が難しい。
- 活動場所や移動動線で重複しないよう配慮、定員数半減措置などにより利用者数が激減しているが、事業評価で考慮されるのか不安が残る。

- 新型コロナウイルス感染症拡大防止の観点から、多くの中学校が宿泊を取りやめ、日帰りによる体験活動を実施している。しかし、日帰りでは外部委託している給食業者の収入が激減し採算が取れないことから、次年度以降の給食業者の確保が極めて難しい状況となっている。

<子供など参加者への感染対策の理解・徹底・体調管理>

- スタッフが感染対策を案内しても、対象者が理解できず、また楽しい気分になってうまく抑制ができず感染対策が不十分になってしまうこと（多くはこどもだが大人にもある）。
- 受付の際に施設でのコロナ感染対策を一般利用者に伝えても、小学校の自然活動中にも関わらずマスク着用を拒否することや登山道の狭い道にも関わらずノーマスクで小学生の列を追い越すなど対策に協力しない利用者が多数いる。
- マスクの着用のおかげで、飛沫は防げるものの、着脱などの活動に支障が出たり、子ども自身の管理が難しく、野外では衛生的に問題がある場面が多々ありました。また、コミュニケーションの最たる部分である「声の特徴や表情、表現」がつかみにくく、制限が加わり、成長期の子供たちの互いの関係性に大きな影響が出ていると考える。

<感染状況の変化等による事業や活動の変更等の対応>

- 対面でのプログラムが実施不能となった時に、すぐオンラインでの活動ができるように案内をするが、宣言の出るタイミングが不明確なので、直前の案内になり参加者募集に苦勞をする。
- 宿泊を伴う事業を中止にせざるを得ない状況にあったため、日帰りでの計画をするも緊急事態宣言等の状況により、各実行委員会とも判断に苦慮していた。広く事業を周知するにあたり市の広報を活用するが、発布の2か月前に記事を提出しなければならずコロナ状況とのずれが生じていた。
- 予防ばかりでは活動が縮小して、面白みが薄くなってしまったため、多人数の体験活動の実施できる時期や感染対策の範囲をいつ狭めることができるか、また段階的に緩和できるのかが難しい。例えばマスクを外して活動再開できる時期を決めるのが難しいと思います。
- 現在は人数制限を行っているが、この制限を外すタイミングと、外し方（1年前からの利用予約を受けているため、制限が外れた利用日の利用人数をどうするか・・・など）が課題。また、消毒などの感染症対策をいつまで続けるのか…いつ辞めるのかそういった制限の解除は、施設単体で決定することは困難なため、政府や地方自治体などからの指示や決定が必要となると考える。
- 現在行っている利用人数制限等の対策をいつ緩和したら良いかなど、タイミングがわからない。

<子供への体験機会の減少、子供への影響>

- コロナ禍を過ごしてきた子どもたちの経験不足、体験不足が心配です。金銭的にも、コロナへの心配からも保護者が体験機会を作ったり、送り出したりすることができない状況があるのではないかと、自分自身の状況も踏まえて感じます。すべての子どもが分け隔てなく自然体験の機会を得られるよう、たとえば公教育の場での自然体験活動の推進、講師派遣の支援をバックアップしていただけたらと感じます。

- 経済格差が自然体験活動の参加機会の多寡に大きく影響している。一方で、自然体験活動は身近な体験を通して多様な価値観に気付く機会でもあるので、経済的に恵まれない環境にあるこども達にも積極的に機会を提供したい。コロナ禍にあるからこそ、こども達が自然体験から得られる開放感や充足感には代えられない尊い機会と感じた。願わくは教育予算を多くしていただき、すべてのこども達に自然体験の機会を与えていただきたい。自分の育つ環境を好きになることは、自己肯定感に繋がり、より良く関わっていくことに繋がると考える。
- コロナ禍とは言えども最大限の感染対策をとり、我々の活動は止めるべきではなかった。(状況により活動が無い月もあった) 子供たちを守ることはコロナから守るだけでなく元気な子供たちでいることを守ることも必要と思えた。
- 自宅で過ごす時間が増える中、子どもたちの自然体験活動の欠乏が不安視されている。子どもたちの活動が制限され、過度な心配、恐れ、不安が生じ、また野外活動が制限され、活動をする機会が減っている。また、この現状の長期化も予想され、子どもたちを取り巻く自然体験は大幅に縮小している傾向にあることが課題。

<コロナ禍における活動場所・宿泊施設の制約>

- 自治体による施設の使用制限や閉鎖。コロナ対策を万全に行い準備を進め、屋内を使用しないイベントを計画しても、事実上開催を延期、または中止せざるを得ない。
- 感染拡大時期の体験活動中止や延期はやむを得ないが、感染収束時期においても、受け入れ施設の人数制限により、体験参加者数を制限せざるを得ない。野外活動施設を使い易い様、施設の増設、拡充をお願いしたい。
- 野外活動において野外炊事は大切なプログラムであるが、公営の施設においてクローズしている施設が多くて困った。施設を閉じるのではなく利用者に事前にプログラム内容を提出させたり、施設からガイドラインを提示するなどの工夫で施設を継続することを希望します。
- 先日 300 人近い人数のイベントを行いました。コロナ禍を前提に公園の広い(1000 人ほど収容できる)場所で開催しましたが、これを屋内で行うとき、600 人収容の場所は見当たりません。このイベントに関しては雨天中止で企画いたしましたでしたが、これからも会場の問題は付いてまわります。

<コロナ禍の活動ルール、感染対策ガイドラインの課題>

- 国公立の野外教育施設のコロナ対策や対応などをもっとアピールしていただき、状況に即応した適切な対応についてベースとなる情報が必要。
- 団体によって判断が違うので、子供たちからわかりにくかった。学校を通してルールを統一できると迷わずにすむ。例) ボーイスカウトでは集会を自粛したが、同じ校区の少年野球は通常どおり練習をしていて、子供たちは???という感覚だった。
- 政府や県などの行政側からフェーズによる明確な指針を示してほしい。(フェーズ 4 なら対面で室内の集会は自粛しましょう など)緊急事態宣言やまん延防止等重点措置などのたびにこの程度なら我が団

ではどう判断しどう行動するかを都度長い時間をかけて話し合い文書にし発信するなどの手間が非常に大変だった。わかりやすい共通認識の指針があれば with コロナでの活動もしやすくなるし計画も立てやすくなる。

- 判りやすく有効で実施可能な感染防止策の手法・基準を明示し、根拠不明な過剰な規制を取り払う事と、活動の実施や参加を必要以上に自粛・畏縮させない工夫と周知が必要。

<食事に関する課題・感染対策>

- 利用者から、コロナ以前のようにバイキングに戻して欲しい、と言う声があり、盛付け食に対してアンケートで低評価をいただいている。
- 食事を伴う自然体験活動は、感染リスクを考えて、現時点では実施できていません。実施する場合のガイドラインを示して欲しい。
- 野外調理では、調理セットを見直し、少人数グループで使用できるようにしたり、食器やさじ等は持参してもらおうようにしたりした。少人数単位の利用に適したハード面の整備（野外炊飯場の新設等）が課題。

<感染対策等の工夫・事例の情報共有>

- オンラインを活用した自然体験活動、教育活動の事例の共有が必要と感じています。ウィズコロナ期をどう生き抜いていくか、体験活動を次の段階、まだ手が届かなかった層へ広げるチャンスでもあると思いますので、そのアイディア、ノウハウの共有を組織の垣根を越えて共有できればと思います。
- 人と人が合うことをよしとした体験が主なため、人との距離を空けたり、会えないという根本が課題となる。その中で、できるだけ安全な体験の機会と新たな方法を常に取り入れていかなければならない。そのためにも自分の団体だけいいという考えではなく、新たな試みを業界で共有し、よりいい方法を模索し人々に体験を届ける必要がある。新たな試みなどを共有できるフォームが業界内にあるといいと感じています。
- コミュニケーションをとるために、人と密接することが当たり前であった自然体験活動において、コロナ対策をして密接、接触を回避するために特定の活動の提供中止や、改善の工夫を行ってきた。しかしながら、教育効果を踏まえて、より最適な活動（方法）等の情報を共有する場・機会がほしい。
- コロナ禍で我々が行った自然体験プログラムで誰一人感染者や体調不良という参加者はいませんでした。このような結果を踏まえて、他団体等からも状況を聞いていただき「低感染リスク地域における屋外での自然体験活動は安全である」というような実績データを元にさらに推奨してほしいです。ウィズコロナ期にどうすれば感染を防いで経済活動を継続していけるのか、こういった実績のアピールをしていただければと思います。

<宿泊に関する課題・感染対策>

- 新型コロナ流行以前は、小学生を対象とした宿泊事業を行っていたが、子どもたちの見守り・食事指導・

宿直対応等、多くの職員やボランティアを必要とした。現在は宿泊の受け入れを中止しているが、今後再開となった場合は感染対策を徹底する必要がある、これまで以上に人員不足となることが予想され、感染リスクへの対処や受け入れ体制に不安が残る。

- 複数によるテントでの宿泊の安全性の確保。一緒に寝ることによる協力関係やコミュニケーション力の増進ができていない。リスクを考えると宿泊を伴う事業に踏み切れない。

<新型コロナに関するワクチン接種・検査体制等>

- 全国から小中学生が集まるため、受入地域や学校の理解が不可欠だが、健康観察や検査キットを活用して、未だクラスター等の発生もなく活動している。今後の支援としては、国が承認した検査キットの配布や検査体制の拡充（拠点の確保、費用の軽減）等が必要と思う。
- 参加される方の情報、たとえばワクチン接種の有無などの登録などが、簡単に行えるようなアプリやSNSの活用を期待します。日本は安全な国ですが、ITが他の先進国よりも遅れているので、もっとそれらを活用してほしいです。
- 運営スタッフの新型コロナ簡易検査ができれば、子供たちをプログラムに送り出す保護者の安心感を生み出す。
- 課題として、弊センターが集団宿泊生活を通じて青少年の社会性を育むことを目的としているが、コロナを理由に宿泊研修をする団体が激減した。物理的な対策には限界があるので小中高生へのコロナワクチン接種をすすめてほしい。また、新薬の早期開発が望まれる。

<スタッフ・ボランティア等への情報共有、研修、スキル向上>

- 3密回避の観点から自然体験活動はコロナ期でも実施しやすい事業と考えている。他事業の中止が続くならば自然体験活動の需要は高まっていくものと推察する。近隣に自然体験活動を行うNPO等がない自治体では、経験や知識のある指導者の養成が間に合わないために、需要増への対応が難しいように思われる。安全に質の高い自然体験活動を実施するためにも、NEALやRAC等の系統的な実地研修に参加する機会があればいいと思う。
- 以前のように複数の団体や家族を同時にガイドしたり、体験活動に参加いただくことは難しいように感じます。しかし、野外活動を希望するお客様は多く、少人数での対応を行うためには、新たにスタッフを増やして個別の対応を行っていく必要があると感じます。スタッフ育成のため、資格取得や研修に対する支援があると助かります。
- 職員の指導機会も減少しており、職員の指導力の確保や主催事業の企画・運営のノウハウの継承が難しい。

<参加者募集、自然体験活動の広報>

- “募集”という言葉自体が活動の妨げとなっていた。周囲が集まる事への安全性や機運を高めない事には始まらないように思う。

- コロナ禍で施設を利用しない学校等も増えてきたが、再び利用するようになるための当施設の魅力や体験活動の効果を発信していく必要がある。どのように発信するか課題である。
- ウイズコロナ期における自然体験活動の安全性を広報していただきたいです。

<移動に関する課題・感染対策>

- 施設側が感染対策にどれだけ務めていても、移動手段によっては利用を控えていることが散見されている。三密回避のために貸し切りバスの定員の半分にしてもバス利用費は倍かかることもあり費用的に活動を控えていることがある。
- 費用面での問題は大きいと考えています。例えば大型バスを使用した活動を実施する場合、コロナ前は58人乗りに対して40名弱の参加者を募り、残りの空いた席に合わせて引率が同伴をしますが、感染拡大防止の観点から参加者の人数を減らす対策を実施している為、参加者負担又は団体負担が大きくなっている現状があります。ここは非常に大きい問題です。参加者負担を抑えつつ、人数を限定的にするにはどうしても団体負担が大きくなるので、バス代金などの支援は今後重要になると考えています。

<利用者の費用負担の増加、利用者への参加費助成等>

- 参加費を上げざるを得ない状況が続いている。受入できる人数を減らし、感染対策で人を増やして対応している。結果、参加者負担が大きくなっている。経済状況で自然に触れる機会が減ってしまうのは、避けたい。コロナに限った話ではないが、一人親や経済的な理由で参加できない子たちにこそ、自然体験を届けられるような施策を求めたい。

<参加者・関係者が感染した時の対応、事後の対応>

- 小規模な任意団体は、構成員が仕事の休みの日に活動しているため、実施したイベントに参加した人中に陽性者が出たときその後の対応を十分にすることが難しい。行政への報告方法や団体がとらなければならない対応のガイドラインを行政から案内してもらえると助かります。
- 感染確認・あるいは疑いを離島であるために判断できない。またそれに伴う急病者の搬送も困難。

3 アンケート調査結果のまとめ

(1) 回答者の基本情報

- 回答者のうち、国公立の施設の割合³は4割強で、民間の団体・施設の割合⁴は5割強であった。法人種別では、任意団体が36.5%と最も多い。
- 回答者の常勤職員数が0人の割合は50.0%であった。
- 回答者の令和3年度の予算額を尋ねたところ、「50万円未満」が最も多く全体の15.4%であった。予算額が100万円未満と回答した割合を合計すると約3割となっている。一方で、5,000万円以上と回答した割合は約3割であった。
- 回答者のうち、「宿泊施設」を保有している割合は36.3%、「食堂・屋内調理施設」は37.6%、「野外炊事場」は34.9%であった。一方、選択肢に挙げられた施設や設備を保有していないと回答した割合は34.6%であった。

(2) コロナ禍における自然体験活動の実施状況

ア 令和2年6月以降で、所在する自治体に緊急事態宣言の適用があった回答者は8割。回答者の9割が事業計画を中止または延期。

- 回答者の所在する自治体で、令和2年6月から令和3年11月の回答時点までの期間に、新型コロナウイルス感染症の緊急事態宣言が実施された、あるいは緊急事態宣言とまん延防止等重点措置の両方が適用された割合は78.5%であった。
- 令和2年度から令和3年度上半期に、自然体験活動に関する一部の事業を中止・延期した割合は76.3%、全ての自然体験活動に関する事業を中止・延期した割合は12.9%であった。回答者の約9割が事業計画の中止・延期などの変更を行った。

イ 令和2年度から令和3年度上半期に自然体験活動を実施した回答者の7割は野外活動を実施。コロナ禍の前後で比較すると、施設での宿泊の実施割合は34ポイントの減少、屋内での食事提供は27ポイントの減少。

- 新型コロナウイルス感染症流行時期（令和2年度から令和3年度上半期（4～9月））における、自然体験・生活体験活動の実施状況を尋ねた。感染症流行時期においても「登山、ハイキング、自然観察等の野外活動」については71.0%、「クラフト等の創作活動」は63.4%が実施

³ 国公立の施設の割合は、法人格の設定に「国・独立行政法人」、「都道府県」、「政令指定都市」、「市（区）」、「町・村」のいずれかの選択肢を回答した割合を合計している。

⁴ 民間の団体・施設の割合は、法人格の設定に「一般財団・社団法人、公益財団・社団法人」、「NPO法人」、「民間企業」、「任意団体」、「個人」のいずれかの選択肢を回答した割合を合計している。

していた。野外活動やクラフト等の創作活動は、新型コロナウイルス感染症の流行前後の実施状況を比較しても約 13 ポイントの低下にとどまった。

- 一方、新型コロナウイルス感染症の流行前後の実施状況を比較して割合の差分（低下）が大きい活動は、「施設での宿泊」が 34.3 ポイント、「テントでのキャンプ宿泊」が 32.1 ポイント、「屋内炊事・食堂での食事提供」が 27.1 ポイント、「野外炊事」が 24.6 ポイントであった。
- 新型コロナウイルス感染症流行時期における自然体験活動の開催日数は、日帰りは 91.8%、1泊 2 日が 53.6%であった。開催した自然体験活動の対象者は、小学生が 95.4%、中学生が 74.5%であった。

ウ 自然体験活動を実施しなかった理由として、7割が緊急事態宣言またはまん延防止等重点措置の発令を挙げた。感染対策の指導・食事や宿泊の場面での感染リスクへの対処への不安を理由に挙げた割合は約3割。

- 新型コロナウイルス感染症流行時期（令和 2 年度から令和 3 年度上半期（4～9月）に、自然体験活動を実施しなかった回答者にその理由を尋ねた。緊急事態宣言またはまん延防止等重点措置の発令を理由として挙げた割合が最も高く、約 7 割に上った。それ以外の理由としては、「活動に伴う人との接触や、マスク着用による熱中症のリスクなど活動に関する不安」や、「活動に参加する子供に社会的距離を保たせることが困難」などが約 3 割で、体験活動に関する感染対策の面で不安や困難を感じていたことがわかった。また、「野外炊事・調理・食事提供など食事に関する感染リスクへの対処が困難」、「宿泊施設・テント泊など宿泊に関する感染リスクへの対処が困難」についても、約 3 割が感染対策の対処が困難と回答した。

(3) 自然体験活動に関する新型コロナウイルス感染対策の状況

ア 自然体験活動の実施状況に関わらず、感染対策に関するガイドライン、マニュアル、ルールは9割以上が運用

- 調査回答者全体に、新型コロナウイルス感染対策に関するガイドライン、マニュアル、ルール等の運用状況について確認した。運用していないと回答した割合は約 1%で、9割以上が新型コロナに関するガイドライン、マニュアル、ルールを運用していることが確認された。

イ 事前の感染対策として、8割が感染者発生時の対処方法を定めているが、保護者・スタッフ・保健所等の関係者と共有する取組を行っている割合は約3割。

- 新型コロナウイルス感染症流行時期（令和 2 年度から令和 3 年度上半期（4～9月））に自然体験活動を実施した回答者を対象に、体験活動の事前の感染対策を尋ねた。「事前申込制や、利用

者名簿の事前提出など、事前に利用者を把握した」、「体調不良者や、新型コロナウイルス感染者が発生した場合の対処方法を予め定めた」という対策は約8割が回答した。「受入可能人数や団体数を通常時未満に制限した」、「参加の一定期間前からの検温や体調記録の提出による事前スクリーニングをした」という対策は約6割が実施していた。

- 一方で、感染対策を関係者に周知する取組である、参加者に感染対策のルールやガイドライン等への同意書の提出を求める取組、保護者の理解を得ることを目的とした取組、地域の保健所や医療機関等と感染疑いが発生した場合の対応方法の確認、感染対策に関するスタッフトレーニングの実施の選択肢を回答した割合は3割程度となっている。

ウ 自然体験活動実施時の感染対策として、8割以上が基本的な新型コロナウイルス感染対策を実施。感染対策と関係づくりを両立する工夫は約6割が実施。

- 新型コロナウイルス感染症流行時期（令和2年度から令和3年度上半期（4～9月））に自然体験活動を実施した回答者を対象に、自然体験活動実施時の感染対策や工夫を尋ねた。新型コロナウイルス感染対策を踏まえて、社会的距離を十分確保できるよう、体験活動内容を見直した割合は約9割だった。さらに、マスクの正しい着用を促すなどの指導を実施した割合、屋内活動で定期的な換気を実施した割合、グループ活動の内容や方法を工夫した割合、用具等の消毒をした割合は約8割であった。国が基本的な新型コロナウイルス感染対策としている、正しいマスクの着用や3密（密接・密集・密閉）を回避できるような対策を多くの回答者が実施したことがうかがえた。
- 一方、「感染対策をしながら、関係づくりができるような活動の工夫」に取り組んだ割合は63.1%であった。さらに、「活動の一部にオンラインを導入し、対面とのハイブリッドになるよう活動方法を工夫した割合は29.6%となっており、自然体験活動にICTを取り入れる工夫も一定数把握された。

エ 野外炊事や食事提供に関する感染対策として、約8割が、関連する職員の感染対策、食堂で社会的距離を確保する対策を実施。一方、食事の配膳時に接触感染を回避する対策を実施した割合は3割

- 新型コロナウイルス感染症流行時期（令和2年度から令和3年度上半期（4～9月））に野外炊事や食事提供を実施した回答者を対象に、野外炊事や食事提供に関する感染対策や工夫を尋ねた。約8割が、「食事提供や調理する職員の日常的な健康状態の点検、手指の洗浄及び消毒の徹底」と、「飛沫を飛ばさないような席の配置や、床に目印をつけるなど、社会的距離を確保しやすくする工夫」を実施した。一方で、食事の配膳時に接触感染を回避する対策や工夫は3割の実施であった。

オ 宿泊に関する感染対策として、約8割が参加者の体調等の定期報告、定期的な換気を含む基本的な感染対策を実施。寝具に関する感染対策を実施した割合は約4割。

- 新型コロナウイルス感染症流行時期（令和2年度から令和3年度上半期（4～9月））に宿泊を伴う活動を実施した回答者を対象に、宿泊に関する感染対策や工夫を尋ねた。回答者の約8割が、「利用期間中の参加者の検温や体調確認に関する定期報告」を回答した。また、3密を回避するための対策を含む基本的な感染対策である、「密閉を避けるために、常時換気または通常時以上の定期的な換気の実施」は約8割、「宿泊する部屋毎の利用定員を通常時未満に設定」や「大勢がよく手を触れる箇所（ドアノブ、手すり、スイッチなど）の定期的な清掃または消毒の実施」は7割が回答した。一方で、寝具に関する対策は約4割の実施であった。

（4） ICT の活用や新たな自然体験活動の取組

ア 新型コロナウイルス感染症の拡大を機に、オンラインイベントの開催に取り組んだ割合は34.3%、動画の配信に取り組んだ割合は14.9%。

- SNS を活用した情報発信は、新型コロナウイルス感染症拡大以前から取り組んでいる割合が全体の64.3%、新型コロナウイルス感染症拡大を機に取り組んだ割合が8.8%であった。
- 活動に関する動画配信の取組は、新型コロナウイルス感染症拡大以前から取り組んでいる割合が全体の20.0%、新型コロナウイルス感染症拡大を機に取り組んだ割合が14.9%であった。
- オンラインイベントの開催は、新型コロナウイルス感染症拡大以前から取り組んでいる割合が全体の2.1%、新型コロナウイルス感染症拡大を機に取り組んだ割合が34.3%であった。

イ 新たに始めたオンラインを活用した活動・取組として、感染対策等のガイドラインの公開や、オンラインの講習会・研修会開催、オンラインの施設見学や事前打ち合わせ、動画配信等に取り組んだ割合は約2～3割。一方、新たに始めたオンラインの取組はないと回答した割合は34.3%。

- 新型コロナウイルス感染症の拡大を機に、新たに始めたオンラインを活用した活動・取組として、感染対策に関するガイドライン等をオンラインで公開した割合、オンラインを活用した講習会・研修会を開催した割合が約3割だった。オンラインを活用した広報活動の工夫や、オンラインを活用した施設見学・事前打ち合わせ、自宅で楽しめる工作等の動画をオンラインで公開した割合は約2割だった。
- 一方、新型コロナウイルス感染症の拡大を機に、新たに始めたオンラインを活用した活動・取組はないと回答した割合は34.3%だった。

第3章 ヒアリング調査結果

1 実施概要、調査結果の見方・留意点

(1) 実施概要

ア 調査対象

アンケート調査の回答状況や調査検討委員の推薦により事例ヒアリング候補を抽出し、調査検討委員会の検討を経て対象者を決定した。次表に掲載の12団体・施設にヒアリングを実施した。

図表 3-1 ヒアリング対象者・実施方法・実施日の一覧

	団体・施設名	実施方法	実施日
1	周南市大田原自然の家	電話	2021年12月15日(水)
2	国立中央青少年交流の家	オンライン会議	2021年12月20日(月)
3	熊本県立豊野少年自然の家	電話	2022年1月7日(金)
4	熊本県立天草青年の家	オンライン会議	2022年1月11日(火)
5	公益財団法人日本YMCA同盟 国際青少年センターYMCA 東山荘	オンライン会議	2022年1月11日(火)
6	ガールスカウト香川県連盟	オンライン会議	2022年1月12日(水)
7	三の倉市民の里 地球村	電話	2022年1月12日(水)
8	国立那須甲子青少年自然の家	現地訪問	2022年1月13日(木)
9	尼崎市立美方高原自然の家	オンライン会議	2022年1月14日(金)
10	黒松内ぶなの森自然学校	オンライン会議	2022年1月17日(月)
11	公益財団法人日本レクリエーション協会	オンライン会議	2022年1月18日(火)
12	特定非営利活動法人 千葉自然学校	オンライン会議	2022年1月19日(水)

イ 実施期間

令和3年12月15日から令和4年1月19日

ウ 実施方法

オンライン会議(8件)、電話(3件)、現地訪問(1件)の実施方法によりヒアリング調査を実施した。事務局より、ヒアリング対象者に事例ヒアリング調査シートへの回答協力を依頼し、事例ヒアリング調査シートの回答状況に基づき、1～2時間程度のヒアリング調査を実施した。

エ 調査項目

事例ヒアリングでは、対象団体の基本情報、コロナ禍に実施した自然体験活動の概要、新型コロナウイルス感染対策に関する工夫、コロナ禍に新たに始めた活動・取組について、下記の質問項目を中心に聴取した。

図表 3-2 ヒアリング調査項目

調査内容	質問項目
(1) ヒアリング対象団体の基本情報	施設名称・運営法人名、所在地、公開 URL 等
(2) コロナ禍に実施した自然体験活動の概要	活動・事業の名称、開催場所、開催時期、対象者、申込方法、活動・事業の目的・ねらい、活動の内容、工夫、活動の成果、参考 URL 等
(3) 新型コロナウイルス感染対策に関する工夫	新型コロナウイルス感染対策に関するガイドラインやマニュアル、組織体制・事前の感染対策、自然体験活動の実施に関する感染対策、食事提供等に関する感染対策、宿泊に関連する感染対策、活動の成果や課題 等
(4) コロナ禍に新たに始めた活動・取組	ICT を活用した取組・工夫、新たな活動・取組 等

(2) 調査結果の見方・留意点

- 本章の「2 ヒアリング調査結果」では、図表 3-2 に掲載のヒアリング調査項目のうち、(3) 新型コロナウイルス感染対策に関する工夫、(4) コロナ禍に新たに始めた活動・取組の質問項目別に、ヒアリング調査結果を整理して掲載した。
- 「3 ヒアリング対象者別の活動・プログラム概要」では、ヒアリング対象団体別に、(1) ヒアリング対象団体の基本情報、(2) コロナ禍に実施した自然体験活動の概要を掲載した。
- 調査結果は、調査対象者から聴取した内容をもとに、情報を整理してその要約を掲載しており、全ての発言内容を掲載しているわけではない。
- また掲載された情報は、調査を実施した令和 3 年 12 月から令和 4 年 1 月の時点で、調査対象者から聴取した感染対策を掲載している。各事例の自然体験活動の開催地や実施時期により、新型コロナウイルス感染症の流行状況や、立地する地方自治体や教育委員会、所属する組織や機関の感染対策に関するガイドラインが異なっていることに留意が必要である。新型コロナウイルス感染対策は、国内における流行状況、新たな医学的エビデンスの蓄積、新たな変異株の出現、ワクチンの接種状況等により変化するため、感染対策を検討する際は、新型コロナウイルス感染対策の最新情報や、関連する最新のガイドラインを確認する必要がある点に特に留意が必要である。

2 ヒアリング調査結果

(1) 新型コロナウイルス感染対策に関する工夫について

ア 新型コロナウイルス感染対策に関するガイドライン、マニュアル、ルール等

ヒアリングを実施した団体の多くが、活動内容に合わせて、新型コロナウイルス感染対策に関するガイドラインやマニュアル等を作成し、ホームページ上で公開している。次表に各団体・施設のガイドライン、利用者案内等の作成・運用状況をまとめた。

図表 3-3 ガイドライン、マニュアル、ルール等の作成・運用状況

	団体・施設名	ガイドライン、利用者案内等の作成・運用状況 参考 URL
1	周南市大田原自然の家	利用者向けに「新型コロナウイルス感染症に関するお願い」を公開している。 URL: http://gokan-furusato.org/ootabara/img/covid.pdf
2	国立中央青少年交流の家	国立青少年教育振興機構本部のガイドラインに沿って、宿泊と日帰り利用におけるガイドラインを作成している。「新型コロナウイルス感染症(COVID-19)に対する対応」を公開している。 URL: https://fujinosato.niye.go.jp/covid-19/
3	熊本県立豊野少年自然の家	新型コロナウイルス感染対策及び利用・活動制限に関する資料、新型コロナウイルス感染防止対策チェックリストを運用している。 URL: http://www.k-seishonen.com/toyono/covid-19.html
4	熊本県立天草青年の家	熊本県立4施設共有でマニュアルを活用している。熊本県の基本的なマニュアルを参考に、施設に下ろして現場のマニュアルを作成している。 URL: http://www.k-seishonen.com/amakusa/system/covid-19.html
5	公益財団法人日本 YMCA 同盟 国際青少年センターYMCA 東山荘	YMCA 全体で出しているガイドラインを参考に、自団体に合致しない部分もあるため、自団体にあわせて修正を行っている。 URL: https://www.ymcajapan.org/tozanso/wp-content/uploads/sites/2/2020/07/20200713.pdf
6	ガールスカウト香川県連盟	香川県のガイドラインを参考にしている。青少年教育団体を管轄している香川県生涯学習課が感染状況に応じて、随時情報を発信してくれるので、各プログラムが香川県のガイドラインに抵触しないか都度確認した。
7	三の倉市民の里 地球村	岐阜県新型コロナウイルス感染症対策本部が出しているマニュアルをベースとして使用している。岐阜県のマニュアルは、文部科学省など国が出した感染症対策を、岐阜県がまとめて各市に下ろし、県内の公共施設に送っている。
8	国立那須甲子青少年自然の家	国立青少年教育振興機構本部のガイドラインを受けて、施設のガイドラインとして作成している。施設のガイドラインの内容を対外的にわかりやすく表記した資料が、「新型コロナウイルス感染拡大防止対策ハンドブック」である。 URL: https://nasukashi.niye.go.jp/?page_id=3366
9	尼崎市立美方高原自然の家	国立青少年教育振興機構のガイドラインをベースに、当施設に必要なことを追記している。国立施設の情報公開が非常に役に立った。 URL: https://www.obs-mikata.org/blog/wp-content/uploads/2021/10/7d6c39e768740161b7e7a4c527100a7a-1.pdf
10	黒松内ぶなの森自然学校	日本アウトドアネットワークが自然学校団体向けにまとめたガイドラインを参考にし、当団体に沿って修正した独自の職員向けマニュアルと、国や道の指針やガイドラインを参考にした利用者向けガイドラインを運用している。
11	公益財団法人 日本レクリエーション協会	新型コロナウイルス感染拡大予防対策ガイドライン、全国レクリエーション大会開催における新型コロナウイルス感染拡大防止に関する基本方針などを活用している。 URL: https://recreation.or.jp/WP_ORJP/wp-content/uploads/2021/11/covid1_kaitei.pdf
12	特定非営利活動法人 千葉自然学校	当団体のガイドラインはホームページ上で公開している。全国的に事業をしている団体にも加盟しているため、団体との整合性も取っている。 URL: https://www.chiba-ns.net/mp/infectious_disease_countermeasures

イ 組織体制等の事前の新型コロナウイルス感染対策の内容について

① 受入可能人数や団体数の制限

所在地域や指定管理施設の設置自治体のからの要請や指示に応じて、定員を少なく設定するケースや、各団体が定めたガイドラインの内容に沿って、受入可能人数を通常時より少なく設定しているケースが多く把握された。1回の参加人数を半分にして、開催回数を2倍にすることで、経験できる子供を増やす工夫が見られた。

ヒアリングで把握した対策・工夫

- 企画事業「あませい無人島キャンプ」を通常は7泊8日のところ、コロナ禍では2泊3日で実施した。7泊8日の場合は年1回の実施だったが、密を回避するために参加人数を半分にしたところ、募集が多く集まり、経験できる子供を増やすために2回にした。
- 緊急事態宣言とまん延防止等重点措置では、中身が違っていた。指定管理では行政の指示を受けるため、定員数についても指示があった。自主事業では緊急事態宣言かまん延防止等重点措置なのかで判断し、まん延防止等重点措置では8割、緊急事態宣言では5割の定員にした。
- 参加人数を、コロナ禍前の30名から10名に変更した。少人数で開催したため、スタッフ全員で見守る体制で、グループを分けずに活動した。なお、コロナ前は1回30名ほどが参加することもあり、ボランティアの数も多かった。

② 事前申込制や利用者名簿の提出など参加者を特定する工夫

自主事業のイベントでは、申込方法を事前申込制に変更して、参加者を事前に特定する工夫が多く把握された。「国立中央青少年交流の家」では、事前の申し込みを不要として、当日の参加者受付で、番号入りのパスポートシールと体験ブース別の受付名簿を活用することで、来場者の行動を記録する工夫が把握された。

ヒアリングで把握した対策・工夫

- 事前申し込み不要で不特定多数が参加する「オープンハウス 2020 ～SDGs フェスタ～」を令和2年12月に開催した。当日は、来場者1,950名、体験活動提供者200名がイベントに参加した。当日は、パスポートシールや名簿を活用して、来場者の行動を記録した。来場者には総合受付の時に名簿を記載してもらい、1～2000までの番号を振った。その番号に対応したパスポートシールを胸につけてもらった。それぞれの体験ブースで、来場者記録表に、パスポートシールの番号と来場時間を控えていただいた。これにより、来場者の行動を記録することができた。
(詳細は、3ヒアリング対象者別の活動・プログラム概要「国立中央青少年交流の家」参照)
- コロナ禍前は、年に2回大規模なイベントを行ってきた。事前申込制ではなく誰でも参加できるイベントで、参加人数や団体数が多かったため、コロナ禍では見直しをした。参加人数の把握が困難な大規模イベントを取りやめ、事前予約制の小規模イベントへ変更した。自然体験の提供団体を1つのボランテ

ィア団体に絞って活動を企画した。事前予約制で受付組数を少なくすることで、参加者と人数を把握し、また参加対象を「家族」とすることで、感染対策を代表に徹底して行ってもらうことが可能となった。

③ 新型コロナウイルス感染対策に関するルールやガイドライン等の同意書の提出

ヒアリングを実施した団体の多くが、「参加にあたってのお願い」や「施設利用に関するガイドライン」等の利用者向けの案内文書を作成し、承諾書や同意書の提出を依頼する取組を行っていた。同意書と参加申込書を一体化したり、申込書類と同時に提出を依頼したりするなど、参加者が事前にガイドラインを確認するよう促す工夫がみられた。

ヒアリングで把握した対策・工夫

- 新型コロナウイルス感染対策や施設利用に関するガイドラインの文末に同意署名欄をもうけ、利用関係書類と一緒に提出してもらっている。
- 事業実施前に「参加にあたってのお願い」を確認してもらい、承諾書の提出をお願いした。
- 施設利用者に対しては、施設で作成した「コロナ感染拡大防止対策チェックシート」を入所時に提出してもらった。家族、友人、団体等様々な形態の利用者がいる中、代表者がグループメンバーの体調を把握し申告するよう促した。質問のうち一つでもチェックできない項目がある場合は、利用を控えてもらっている。
- 新型コロナウイルス感染対策に関する同意書の提出については、当施設は簡易宿泊営業許可を取っているので、北海道の政策である「どうみん割」などを利用し、宿泊者には同意書の提出をもらうようにした。
- 主催事業の参加申込書には参加同意書の記載がある。当団体のガイドラインをホームページで提示し、利用前に理解してもらっている。

④ 参加の一定期間前からの検温や体調記録の提出による事前スクリーニング

参加や利用の一定期間前からの検温や体調確認による事前スクリーニングについては、「体調記録表」や「問診表」の様式への事前記入を求める対策を、複数のヒアリング対象団体が実施していた。なお、ヒアリング対象団体によって、参加の3～4日前、1週間前、2週間前と、体調記録の期間は異なっていた。体調記録の日数については、地域の自治体からの要請や指示、国や関連する団体のガイドラインに応じて各団体が定めている。

ヒアリングで把握した対策・工夫

- 活動参加の2週間前くらいから検温・体調記録をしてもらった。
- 自主事業のイベントに関する事前の体調管理として、当日までの14日間の間に、新型コロナウイルス感染症の諸症状（強いだるさ、咳、痰、のどの痛み、発熱、息苦しさ、下痢、嘔吐、味覚・嗅覚障害）が出た方は参加を控えるよう来場者の方にはHPでの案内等を行った。

- 主催事業の事前スクリーニングでは、開催日の1週間前より検温を実施し問診票に記録してもらい、当日受付時に提出をしてもらった。参加者以外に施設の来訪者がいる場合は、当日に氏名・住所・連絡先を記録した。
- 利用日の14日前からの検温や、新型コロナウイルスに感染した方及び感染の疑いのある方との濃厚接触者ではないことを確認のうえ来所をお願いしている。発熱、息苦しさ、強いだるさ、咳や咽頭痛、2週間以内の渡航歴の項目に1つでも該当する場合は利用を見合わせてもらっている。
- 事前の健康状態確認は、自主事業、受託事業のいずれも、開催の3～4日前に各家庭に電話連絡し、その時点で体調を確認している。出発までの3日間の中で体調不良になった場合は申し出てほしいと伝えている。
- 大学生スタッフの参加について、児童の保護者の了承を得るために、学生に抗原検査を受けてもらい、大学と細かな連携を取っていることを説明した。大学生スタッフの受け入れで実習の機会を提供することができ、また私達も活動の幅を広げることができた。

⑤ 参加希望者向けにオンラインでの事前打ち合わせや見学等の手段を導入

感染リスクを回避するために、オンラインの形式で参加する子供や保護者に対して、オンライン会議を活用した事前の打合せや、施設内のカメラツアー等を開催した事例が見られた。画像を通して、持ち物の確認やその場での質疑応答ができるというメリットがあり、コロナ禍収束後もオンラインと対面を併用する旨の考えを伺った。オンラインでの事前打ち合わせとともに、学校に出向いて、事前説明や、事前学習を実施したという事例も把握された。

ヒアリングで把握した対策・工夫

- 小学校低学年のキャンプへの参加希望者にオンラインの事前打ち合わせを開催した。保護者向けに持ち物や服装などの質問に答えるオンライン説明を行い、360°カメラツアーで施設内の様子がインターネットで見ることができるように対応した。事前のオンライン説明会は、初めてキャンプに参加する子供もいるので、キャンプに集う子供たちが顔を合わせることによる安心感を考えて実施していた。コロナ禍において、感染リスクを回避するためにオンラインで事前説明会を開催したのは、比較的自然な流れだった。オンライン会議の操作に慣れている家庭が多かったため、スムーズなやり取りができた。衣服がどのようなものかいいのかを画像で見えていただきながら確認したり、口頭でその場で補足ができたりするというのが有意義だったと思う。施設を360°カメラで見て、「面白かった」という子供たちの声もあり、提供できてよかった。コロナ禍収束後は、オンラインと対面のハイブリッドになると思う。コロナ禍だからこそ、オンラインを積極的に使ったが、人を育てていくにあたっては対面の方が良いと考える。参加の都合がつかない場合には、オンラインも活用できるようにという考え方を持っている。
- 学校団体は事前に打合せや下見を行わなければならない、オンラインでの実施も求められている。事前説明のために学校に出張したこともあり、プログラムを持参して指導したこともある。事前学習の時は、富士山でアウトティングのプログラムがあるが、ガイドランスのコマをスタッフが学校で行うこともあった。

動画視聴やコースの確認を通じた、動機づけの機会を学校で作った。小学校で指導したのは、学校をフィールドにしたウォークラリーである。学校のロケーションを使ってウォークラリーをしながら、各ポイントでクイズに答え知識を増やすという効果を狙っている。学校でいくつかのポイントを作らせてもらって、問題に挑戦してもらった。学校でやってもらった後に、富士山に行ったこともあった。

⑥ 保護者対象の事前説明会の開催など、保護者の理解を得ることを目的とした取組

新型コロナウイルス感染対策や利用のガイドラインなど、保護者の理解を得るための取組として、オンラインで保護者説明会を開催した例、SNS のグループで情報提供や保護者アンケートを実施した例、保護者説明会の動画視聴を案内した例、メール等のやり取りで不安に寄り添った例などを伺った。新型コロナウイルス感染症に関する不安や対策に関する要望に丁寧に寄り添い、安心して参加してもらうために、様々な方法による情報提供や柔軟な対応を実施していた。

ヒアリングで把握した対策・工夫

- 各学校の保護者説明会に施設職員が出向いて、事業のねらいとともに感染防止対策を説明し理解を得た。保護者説明会をオンラインで実施した学校もあった。保護者説明会用のスライドを作成して、感染対策の説明を行った。この2年間は、特にコロナ対策に関する説明を丁寧に行っている。それぞれの家庭からそれぞれの要望がある。それに対応する形で、校長会で先生方と方針の打ち合わせを行い、想定問答を準備した。
- 宿泊キャンプを実施するにあたり、保護者の理解を得ることを目的に、事前の情報提供やアンケートを実施した。コロナ禍前から保護者の間で保護者 LINE グループを作り、情報交換をしていた。保護者の LINE グループに、キャンプの開催要項を載せたうえで、事前に参加に関するアンケートをとった。アンケートは、①同意して参加する、②同意するが、参加は見合わせる、③同意できないので参加しない、の3択で回答してもらった。結果、ほとんどが①だったので安心して開催できた。コロナ禍における1泊のキャンプは、実施できるのかという保護者からの懸念もあった。スケジュールを公開し、心配なら部分参加でもいいと参加の敷居を低くした。これまでは活動予定に対し出欠確認を行うだけであったが、保護者とのやり取りを丁寧に行った。
- コロナ禍前は保護者説明会を対面で実施していたが、コロナ禍では YouTube に動画を掲載しオンラインで開催した。YouTube の動画では、ディレクターの紹介とあいさつ、活動の目的説明等を行っており、参加者に動画を確認するようお願いしている。動画のいいところは、いつでもどこでも見られる点である。ライブ配信をしたこともあったが、時間的な制約なく見られるよう動画にして YouTube 配信することとした。
- 保護者の理解を得るための取り組みとして、主にメールのやり取りで保護者の疑問や不安を取り除くよう努めた。保護者から問い合わせを受けた内容については、緊急事態宣言が出ていた地域からの参加に関する問い合わせがあった。その場合は、その時点での東山荘におけるルールに応じて受入れの可否を判断していた。問い合わせの中には、感染者数が多いから不安という声があった。感染リスクを0にす

ることはできない点を伝え、不安・懸念があれば、安心してお子さんを送り出せるタイミングを待ってもいいのではと伝えている。対話によって不安が和らぐことがあると思う。

⑦ 体調不良者や新型コロナウイルス感染者が発生した場合の対処方法を予め定めた

新型コロナウイルス感染者や感染疑いが発生した時の対処方法を、フローチャートにまとめて、職員の間で共通理解を図っている例、ガイドラインに定めて利用者・職員・学校等に周知した取組の例等を伺った。具体的な対応として、宿泊する部屋以外に隔離のための別室を設けている例、感染疑いとなった場合は保護者が迎えにくることや検査結果や経過を施設に報告する必要があることを予め保護者に伝える例等が挙げられた。

ヒアリングで把握した対策・工夫

- 感染者が出た場合のフローチャートを作成している。感染の疑いがある場合は、まずは別室での隔離を優先する。その後、帰宅・検査をしていただいて報告いただく。各団体で、宿泊以外のために1ユニット個室3部屋（入口が同じ宿泊室単位）を用意し、発熱等の来場者の隔離に用いた。
- 発生時のフローチャートを作成し、職員間で共通理解を図った。
- 感染疑いが発生した場合の対応方法については、施設内の別室に隔離する等、ガイドラインに即して対処するよう確認した。
- 体調不良者や、新型コロナウイルス感染者が発生した場合のために、定員7名の予備部屋を用意しており、施設利用中に体調不良者となった人に無料で提供する体制を整えた。
- 感染者が発生した時の対応は国立施設や類似の施設の対応方法を参考にした。教育委員会からもなるべく詳しく書いて学校に知らせてほしいと伝えられていた。類似施設に倣ってガイドラインに加え、利用者や職員に周知した。体調不良者が発生した場合、県の健康福祉事務所へ連絡し、しかるべき検査等について相談することになっている。同時に自然の家事務所へ報告し、帰宅にむけての対応やその後の対応について相談する。また、検査や経過について施設へ報告してもらう旨をガイドラインで定めた。
- 体調不良者や、新型コロナウイルス感染者が発生した場合は活動を中止、個別に送迎できるように保護者と連携をとった。事前に、発熱や風邪ぎみの様子があったらご遠慮してほしいと何度も伝えていた。活動中に、一人でも37.5°以上、または平熱より1°以上高い方がでたら日程の途中でも解散ということにしていた。

【体調不良者、発熱者が発生した時の対処状況】

- 小学校体験学習受入れにおいて発熱の事例が生じた。急な発熱があり、学校のガイドラインをふまえ、他の小学生とは別の宿舎で休養しながら保護者が来るまで待機した。発熱者は、翌朝には熱が下がり、後日学校から新型コロナウイルスに陰性の連絡を受けた。小学生の行動や体調は全て教員が管理しており、濃厚接触者の有無も確認した。発熱者の利用した部屋は、スタッフが消毒に入るのも控えた。

⑧ 地域の保健所や医療機関等と、感染疑いが発生した場合の対応方法について確認をした

ヒアリングを実施した多くの団体が、地域の保健所等と連絡をして、感染者が発生した場合の対処方法を確認していた。また、保健所と確認した対処方法を、施設を利用する学校や教育委員会と共有する例も把握された。

ヒアリングで把握した対策・工夫

- 保健所と連携し、新型コロナウイルス感染症の疑いがある利用者がいた場合はすべて報告し、判断を仰いだ。
- 感染疑いが発生した場合の対応方法については、地域の保健所や医療機関等、県の健康福祉事務所に発生時の対応を確認した。また、保健所に電話連絡がつかない場合のFAXでの相談等についても教示を受けた。確認した対応方法は、学校の先生や教育委員会に伝えた。
- 地域の保健所や町内の診療所に連絡し、事前に新型コロナウイルス感染者が発生した場合の対応方法を確認した。

⑨ 新型コロナウイルス感染対策に関するスタッフトレーニングを実施した

ヒアリングを実施した団体の多くが、新型コロナウイルス感染対策に関するスタッフトレーニングを実施していた。実施方法として、医師や保健所職員など専門家による職員研修を実施した例、通常のトレーニングメニューに感染対策を加えた例、ボランティアへの感染対策の共有の取組等を把握した。

ヒアリングで把握した対策・工夫

- 職員研修の中で、保健所職員を講師として招き、知識を深めた。職員研修の頻度は、緊急事態宣言の発出時等、必要な時に随時行った。月に1回は所内会議を開き共通理解を図った。保健所の職員等の外部講師を招く研修は、2か月に1回程度というところ。新型コロナウイルスだけでなく、ノロウイルスなどの感染症に関する研修もしてもらった。最初のうちは保健所から資料を提供してもらい、資料を基に職員に情報共有をしていた。コロナの状況が落ち着いてから、保健所の方に実際に来ていただいて研修を実施した。
- 専門家による新型コロナウイルス感染対策に関するオンライン研修を受講した。研修を受講後、スタッフに周知、共有した。研修講師であった医師に、自主事業のプログラムについて、感染リスクに関する相談をして、感染対策について個別にご指導いただいた。スタッフトレーニングは、文書をブリーフィングして共有するのが基本である。媒介物感染に関する研修動画等を共有し、スタッフで勉強した。令和2年度に感染症対策についての研修を3回実施した。YMCAの事例報告、都市部の罹患の実例もあり共有された。
- 外部の講師に呼び、安全対策や年齢に合わせた指導についての研修指導員フォローアップ研修を行っている。

- 感染対策のスタッフへの研修や情報共有について、平時の清掃や消毒における保護防具の使用や廃棄について研修を行っている。陽性者発生時の流れについて、ガイドラインと感染者発生時の対応を、研修においてスタッフに共有した。
- スタッフトレーニングは通常のトレーニングメニューに、感染予防及び事業開催中の手洗いうがい、朝夕の検温の実施と記録、体調不良者の早期発見と体調不良者が出た場合の対応を追加している。コロナ対策においては、濃厚接触者の判断が難しかった。保健所から濃厚接触者という連絡があればはっきりするが、濃厚接触者の接触者などは判断が難しいので、正しい判断をするためにメニューを追加した。
- 教育支援スタッフ（大学生ボランティア等）の研修、前日準備・打合せによる安全管理の徹底を行った。教育支援スタッフに対するトレーニングは、事前に担当教授、ボランティアコーディネーターによる連絡調整を行い、大学のねらいと私たちのねらいをすり合わせた。

ウ 自然体験活動の実施に関する新型コロナウイルス感染対策の工夫について

① 参加者への感染対策の指導・注意喚起

子供に新型コロナウイルス感染対策の指導や注意喚起に関する工夫として、子供に分かる伝え方に意識的に取り組む例、子供に感染対策の声掛けや消毒などの役割を与えて活動した例、施設内の壁や床などに人との距離を取りやすくする掲示物を設置した例を伺った。

なお、学校の受入事業について、新型コロナウイルス感染対策の具体的な内容を基本的には学校での指導内容や考え方に合わせるという例が多くなっていた。

ヒアリングで把握した対策・工夫

【子供に感染対策を伝える工夫】

- 参加者への感染対策の伝え方については、全員が集まるはじめの会があり、子供たちにマスクをする理由、手を綺麗にする理由を話している。プログラムの感染リスクについて相談をした医師から、小さい子供に分かるように伝えることが大人の役目だと言われた。誰かが何とかしてくれるのを待っても仕方がない。子供自身が自分で感染対策を身につけることが大事であり、子供に分かるように伝える役目が大人にはあると思い取り組んでいる。
- 子供たちへの感染対策指導は、入所式で行っている。施設でのルールや、気を付けてほしいことに加えて、距離を置いて活動してほしいこと、外での活動の場合は熱中症の危険もあるので必要に応じてマスクを外しても構わないことなどを伝えている。
- キャンドルサービスなどのレクリエーションをするときは大きな声を出さないよう気を付けさせている。コロナ禍だから声の量に気を付けようか、と伝えている。大声を上げるプログラムではなく、小声で話し合うようなプログラムに変えている。

【感染対策の声掛けをする役割を設定】

- 主催プログラムでは、リーダーに参加者への感染対策の働きかけを一部担ってもらった。リーダーに消毒液を持ってもらい、飲食するたびに声掛けをし、消毒を徹底するのを手伝ってもらった。子供たちには繰り返し言うことが重要なので、声掛けを頻繁にした。

【学校での指導内容に合わせた感染対策】

- 感染対策などについて、基本的には学校での指導内容や考え方に合わせている。ただし、自然体験のプログラムとして施設の責任で実施すべきと判断される指導は適宜行っている。

【施設内の壁や床の掲示物や、消毒の設置等による注意喚起】

- 施設内の壁や床に、新型コロナ感染対策に関する掲示物を貼り注意喚起をしている。施設内に56か所の消毒スポットを設置した。



② 場面に応じてマスクを外すような安全指導

マスクを外すような安全指導を行っている場面として、熱中症対策が必要な夏季の屋外活動、水辺での活動、標高が高い場所での活動や体を動かさず活動で息苦しさを感ずる場面が挙げられた。また、子供がマスクを外すタイミングがわからないことがあるのでマスクを外すよう働きかけているという例や、スタッフも子供と同様にマスクを着脱して着脱の声掛けを行った例もあった。

ヒアリングで把握した対策・工夫

- マスクは、屋外での活動の際は熱中症対策もふまえて基本的には外していた。野外炊事や魚釣りなど、それほど体を動かさない活動時にはマスクを着けてもらっていた。スタッフも子供と同様にマスクを着脱していた。付き添いのスタッフが、マスクの着脱の声掛けを行った。
- マスクは、屋外の活動では外してよいというようにしている。水辺ではマスクが濡れて息ができなくなる可能性もあるため外している。走ったり息が上がるような活動をする場合はマスクを外してもらったりしていた。
- 学校団体の受入事業では、例えば、体育の際にマスク着用を促しているか否かなど、学校で普段どのような指導をしているかを確認して対応を合わせた。標高が高い地域での活動になるため、呼吸が苦しくなる場合は、マスクの着脱に抵抗がなければ外すように伝えている。
- 夏のトレッキングでは、子供がマスクを外すタイミングがわからないかと思われたので、ガイドにマスクを外すアナウンスをお願いしている。
- 感染症対策に関しては、屋外での活動を心がけている。野外だから感染リスクは低いが、地域の感染レベル・状況に合わせて対応していく。極力マスクはするようにしているが、息苦しい時はインストラク

ターが距離をとらせる形でマスクを外すよう指導している。

- 学校の中、家庭の中でいろいろと制限されている子供をいかに開放するか、というのが我々の役割。ソーシャルディスタンスが取れている場合はマスクを外していいよと声をかけている。言わないと子供たちはマスクを外さない。見晴らしの良いところではマスクを外して大きな声でヤッホーと言わせてあげるようにしている。

③ 感染対策を踏まえた体験活動内容の見直し

感染対策を踏まえて体験活動内容を見直した内容として、プログラム構成やスケジュールにゆとりを持たせて子供の体力の低下に配慮した例、グループ活動で共有していた資料等を個人配布に切り替えた例、活動の内容を非接触型の活動に見直した例、人との距離を取りやすくするためにポータブル拡声器等の機器を導入した例などを伺った。コロナ禍でも実践しやすい具体的な野外活動として、ヒアリング対象団体からは、SD（ソーシャルディスタンス）レクリエーション、ストレートハイク、スコアオリエンテーリング、謎解きフィールドゲーム等が挙げられた。

ヒアリングで把握した対策・工夫

【プログラム構成・スケジュールのゆとり】

- コロナ前と比較すると、スケジュールに余裕を持たせたことが大きな変更点。朝夕のつどいは原則実施しなかった。理由としては、子供たちの体力の低下が挙げられる。疲れている状態だと感染しやすくなる。就寝時刻を早くし、起床時刻も余裕をもったスケジュールに変更した。朝夕の体温測定の時間を確保して、プログラムが1つ終わるごとに体調を確認した。睡眠の時間をしっかりとることを意識した。
- コロナ禍以降は夜を全て自由時間にした。自由時間はそれぞれの部屋で活動をするようにして、密度を下げられる。自由時間が増えたから満足度が下がったことはなく、子供も自由時間が好きなため楽しんでいた様子であった。

【活動に使う資料をグループ配布から個人配布に切り替え】

- 学校の受入事業で、ウォークラリーなどのプログラムでは、1枚の地図を複数人で見るものがあった。密になってしまうため、学校で地図を人数分用意してもらうようなことをしている。
- オリエンテーリングコース図を個人のしおりに載せてもらう工夫をした。通常時のオリエンテーリングでは、班に1つの地図を渡していたが、どうしても密になるので、各自のしおりに地図を印刷するように変更した。班活動はするが、近寄らなくてもよいようにした。コロナ禍が収束した後は、利用団体との調整になる。教える能力を育てるためにも、1人1人地図を持っている方が良いかもしれないし、チームの和を重んじる点では、共有の地図を用いたほうがいいかもしれない。
- 野外活動において、従来は施設で概ね1グループ8名に対して1枚の資料を用意して渡していたが、他者と共用せず距離を確保できるよう、各学校や団体にダウンロード・印刷してもらって、1人1枚を持参してもらうようお願いした。

【非接触型の活動に見直し】

- 宿泊、日帰りの受入事業のレクリエーションとして、SD レクリエーションを実施している。新型コロナウイルス流行後に、既存のレクリエーション活動の中から、密集したり、1つの道具を皆で共有したりする活動を避けるよう、1つずつ活動をチェックして、SD レクリエーションとして組み合わせて提供している。

(詳細は、3ヒアリング対象者別の活動・プログラム概要「熊本県立豊野少年自然の家」参照)

- 密接になるのが特徴となっているような協力ゲームはコロナ禍では提供していない。受入事業で学校側でどうしてもそのようなゲームをやりたい場合は、先生が主導する形でやってもらっている。
- 従来のキャンプ活動はテント泊、火起こし、野外炊飯が多かった。現状はコロナ禍で県が定めた制限があり、テント泊が難しく、調理もできない。キャンプに繋がるような活動ができない状況だが、野外体験活動をしてほしいと考えていた。コロナ禍でもできるキャンプ活動として、ロープワーク、火起こし体験、テント設営(設営のみで宿泊はなし)を行っている。ロープワークは、屋内活動で基本的な4種の結び方を学ぶ。ちょうちょう結び(靴ひも用、最近は自分で結べない子が多い)、本結び、もやい結び、自在結び(テント用、長さ調節ができる)。
- 非接触型のレクリエーションゲームを推奨した。非接触型のレクリエーションについては、接触の程度、実施可能かどうかを検討している。団体毎に、コミュニケーションを取りながら、状況や希望に応じて、実施するレクリエーション内容を考えている。今回のコロナ禍では、非接触型のゲームを勉強するよい機会となった。自分たちが持っていた知見に工夫を加えて、非接触型にしたものが多かった。「命令ゲーム」やじゃんけんを軸にしたゲーム等であれば非接触も可能となる。
- ミニ運動会の競技は、大勢で固まって行う団体戦はやめてソロ競技を入れるなど、競技候補を出しながら時間内にできる種目、接触を避けられる種目を選んだ。リーダーの中に幼稚園教諭などいるため、競技アイデアを出してもらった。
- 対面の場合は、できるだけ身体接触を避けるようなゲーム構成に変更した。感染に関係なく、コミュニケーションとして男女が手を繋ぐことを中学生は嫌がることのあるため、手と手の間にバンダナを握らせるようにしたことで、直接接触を避けながらも目的を達成できるようにした。

【ポータブル拡声器や音声ガイドの活用】

- 川の近くで流れる水のはたらきについてガイドする際、携帯スピーカーを使用していたが、遠くの児童に聞こえずらいため、音声ガイドを購入した。これにより、ガイドから離れている児童もガイドの説明が聞きやすくなり、密集を防ぐことができた。1台約2万円と高価なため、10台程度しか用意できていない。充電や消毒の負担感はある。
- 野外の場合は拡声器を利用している。
- 野外活動で講師の方が、20数名を相手に説明が聞こえるように、マイクを使っていたのは、密を避ける意味で有効だった。実際にスタッフが使った時も、聞こえやすかった。

【ストレートハイク】

- 協力を育むプログラムにおいて、お互いが距離をとりながらも活動できるストレートハイクなどの活動に振り替えた。
- ストレートハイクでは全長 450m くらいをまっすぐに進み、制限時間内にゴール地点まで行かないといけないので、見通しの利く程度の距離をおいて分かれて歩く。コンパスを見ながら 20~30m 離れた子供に指示して歩くため、十分な距離は取れている。全体が見えるような位置に監視員を付けて、子供たちが近寄った時は離れるような声掛けをした。長い時間密集するような状況はなかった。
- ストレートハイクは以前からあったが、コロナ禍でできることを悩んだ中で実施している。感染対策の面ではストレートハイクがベストだった。

【スコアオリエンテーリング】

- スコアオリエンテーリングとは、地球村が有している里山を会場に、アルファベットを描いた缶を設置しておき、子供たちが缶を見つけて解答用紙に記入していく活動である。
- 地球村の地図と各アルファベットのポイント数が載っている解答用紙を事前に学校に送付する。地図と解答用紙を見ながら、制限時間内により多くの得点を獲得できるよう、どのルートで巡るかを事前にグループで作戦会議をしてもらっている。
- 「協力・協調」をねらいとするスコアオリエンテーリングのような活動は、先生方からも喜ばれた。反響が想像以上に良かったので、コロナ禍が落ち着いた後も、スコアオリエンテーリングは先生たちに薦めていける活動の 1 つであると考えている。

(詳細は、3 ヒアリング対象者別の活動・プログラム概要「三の倉市民の里 地球村」参照)

【謎解きフィールドゲーム】

- 謎解きフィールドゲームは、コロナ禍に適した体験である。森の中を散策しながら、施設内の自然を感じ、クイズを解くことで達成感を得ることができる人気のイベントであり、期間中 542 人が参加した。
- 開催期間中は、開館時間内であればいつでも何度でも参加できる。フィールドゲームの謎解き等の設計は、当施設の職員が担当している。
- 冬の閑散期に地域や近隣の方が来訪して施設内を散策してもらうため

に、4, 5 年前からフィールドゲームを始めた。毎年、本格的な謎解きゲームで楽しかったという声をいただきリピーターも多い。年々参加人数は増えている。



【クイズラリー形式のオリエンテーリング】

- コロナ禍の感染拡大防止の観点から、室内での活動をなるべく屋外へ促すよう、新しいオリエンテーリングコースやクイズラリーを施設内の里山へ作った。
- コロナ禍前、オリエンテーリングに参加する場合は、①窓口で受付、②地図・鉛筆セット受け取り、③職員による答え合わせの必要があったが、オリエンテーリングを、問題の回答を次のポイントに記載していくクイズラリー形式にしたことで、前述の3ステップを踏むことなく参加できるようになった。
- 受付窓口のそばにラミネートした地図、受付名簿をセットしている。受付名簿に自分たちで記名し、行きたいコースの地図を取って出発、最後にセットを返して終わり、という形式に変更したことで接触機会を無くした。結果的に、来館者が参加しやすくなり、職員との接触も最小限に抑えることができ感染対策にもなった。参加者数はコロナ禍前より増加した。



④ 少人数の活動単位やグループの固定等、グループ活動の内容や方法を工夫

感染リスクを減らすための取組として、活動するグループの人数を制限する工夫、グループを分割して活動する工夫、接触する担当者を限定する工夫を伺った。グループを分割して活動する工夫では、グループを分けて時間差でスタートする工夫や、参加できる体験活動を複数用意して、分散して活動する工夫を把握した。接触する担当者を限定する対策として、接触する人員を絞るという観点からボランティアではなくスタッフに限定して対応した例があった。また、感染対策からグループの担当者を固定化したことで、子供たちが担当リーダーに相談しやすい環境になったことをメリットとして挙げていた。

ヒアリングで把握した対策・工夫

【活動するグループの人数を制限した】

- 社会的距離の確保や活動単位を少人数にする工夫として、ペーロン船（長崎県伝統の手漕ぎの龍船）の乗船人数を18人から11人に制限した。
- 参加人数を、コロナ禍前の30名から10名に変更した。3分の1にした上で、なるべく全員一緒に活動する時間を少なくし、自由時間やプログラム内でもフリーの時間を増やした。コロナ禍以降は夜を全て

自由時間にした。自由時間はそれぞれの部屋で活動をするようにして、密度を下げられる。自由時間が増えたから満足度が下がったことはなく、子供も自由時間が好きなため楽しんでいた様子である。

【グループを分割して活動した】

- 大人数での登山の場合は、時間差でスタートするよう変更をした。オリエンテーリングも時間差でスタートする。30人を超える場合は、1クラスの単位で出発する。
- 参加できる体験活動を複数用意することで、参加者が一か所に集中することなく分散して体験活動ができた。

【接触する担当者を限定した】

- 通常は、スタッフ1人とボランティア1人の2人体制だが、現在はスタッフ2人体制としている。接触する人員を絞るといふ感染対策の観点から、ボランティアではなくスタッフで対応している。
- グループ活動に関する工夫として、グループ活動の際は担当リーダーを固定化した。安全指導の点からも担当する人数が少ない方が、リスクが小さいと判断した。グループを担当するリーダーは、大学生やスタッフが担っている。コロナ禍前から、担当を固定するスタイルにしていたが、コロナ禍では、手を消毒する機会を逃さない、子供の体調の変化をなるべく細かくチェックしてもらっている。担当リーダーを固定化することにより、子供たちが何かあった時に、担当リーダーに相談しやすい環境になっていたと考える。コロナ禍のプログラムでは体調不良や怪我はなかったが、イレギュラーなことが起きた時に言いやすい環境になったのではないかと。

⑤ 感染対策をしながら関係づくりができるような活動の工夫

感染対策をしながらも関係づくりができるような活動の工夫として、グループにおける「ふりかえり」の活動を丁寧に支援する、チームミーティングの手法を取り入れた活動を採用する、離れていても小さな声でコミュニケーションが取れる糸電話を工作した等の具体的な工夫を把握した。

ヒアリングで把握した対策・工夫

- ソーシャルディスタンスは保持しつつ、グループにおける「ふりかえり」の時間をしっかり取り、多様な意見の理解、自分の意見をはっきり伝える力の育成、グループにおける行動の合意形成などに注視しながら支援した。主体的、対話的な場面を作り出せる活動の設定に留意し、「ふりかえり」は、なるべく屋外で行い、気付いたことを日常との関連や明日への目標に繋げるように支援した。「ふりかえり」は、低学年と高学年でアプローチの仕方は違うが、夜の時間にプログラムとして設定することが多い。低学年は簡単な工作をしてから1時間ほど。高学年は夜のプログラムとしてふりかえりをする。最終日はとくにしっかりとする。日々のふりかえりは1時間程度、その日をどう感じたか、どの活動の時どう感じたか、考えたかを言葉として出してもらい、みんなに伝える。高学年では1日のめあてを定めているた

め、感じたことを共有しながら、1日終わってどうだったか、そして明日はどうするか、という話し合いをして次の日を迎える。朝もう一回、今日のめあては何だったか聞くようになっている。屋根付き広場のオープンスペースや、大きめの研修室、体育館を使って広く円になって話をする。

- 感染対策をしながら、関係づくりができるような活動の工夫として、チームビルディングの手法を取り入れた簡単な道具と動きを使う仲間づくりができるような時間を設けた。チームビルディングの活動の一例として、30~40センチに切った雨どいのような物を、グループでつなげてボールを運ぶプログラムを行った。参加者同士は直接接触せず、ボールを上手く運ぶにはどうしたらいいか、うまくいくことばかりが成功ではない、ということを考えてもらう時間を作った。コロナ禍に限らず、人は人の中にいることで、人として成長していく。人との間合いの取り方、お互いを尊重する、そういう部分をチームビルディングの手法を使って学び、面白がってもらうことをねらいとした。
- 関係づくりができるような工夫として糸電話を使った。キャンプ中は子供たちのテンションが上がり、つい、はしゃいでしまうので、子供同士でくっついて会話をしないために糸電話を使ったことがある。仲間と話をしたかったら、あえて糸電話で話してみようと、紙コップとタコ糸で作った。ハサミやテープなどの文房具は各自が持参しており、紙コップとタコ糸を用意した。各自の寝る場所はソロテントで固定されており、早くにテントが仕上がった子供が暇そうにしていた時に、これだったら離れていても会話ができる、と糸電話を作った。

エ 食事提供等に関する新型コロナウイルス感染対策の内容

① 利用団体ごとに利用時間や場所を分けるなど他団体との接触や混雑を減らす工夫

食事の場面で、他団体との接触や混雑を減らすための対策として、複数団体が一緒にならないように事前に利用時間を調整する対策や、団体ごとに利用場所の距離が取れるよう指定する対策、社会的距離が自然にとれるようにテーブルの数を減らす取組などを伺った。

ヒアリングで把握した対策・工夫

- 炊事場所では、複数団体が一緒にならないように時間による制限を行った。どうしても複数団体が利用する場合は、他の団体との距離をなるべく離れた。
- 団体間の食堂の利用時間を調整し、テーブルを固定化して他団体との接触を回避している。
- 家族や一般の利用において、団体ごとに利用できる厨房の机・テーブル・バーベキュー場を指定した。テーブルの数を減らし、社会的距離が自然にとれるように工夫し、また場所を指定する場合も、距離が十分に取れるような配置にした。
- 他団体との接触や混雑を減らす工夫として、炊事場の利用は団体が混在しないよう配置し、食堂については、団体同士は時間をずらした。

② 席の配置や床に目印をつけるなど社会的距離を確保しやすくする工夫

社会的距離を確保しやすくする工夫として、収容人数の制限や、食事の受け取りレーンや座席に目印をつけるなどの取組を伺った。

ヒアリングで把握した対策・工夫

- 食堂の収容人数を半分に制限し、座席を前半と後半で別の席に座るように工夫した。食堂は、前半に入る方は赤、後半に入る方は緑で椅子の目印を色分けしている。正面ではなく、互い違いに座れる工夫をした。



- 食堂で、社会的距離を確保しやすくする工夫として、手洗い・消毒の箇所、料理を受け取るレーン、食堂の椅子に隣の人のために一つ空けましょうというシールを貼って、距離を視認しやすくした。
- 食事の時の対策としては、全席一方向を向いての配列と、前後・左右の十分な間隔を確保した。食事の受けとりや返却については、距離を保てるように目印を床に配置。CO2濃度計による換気状況の確認をし、空気の入替えに留意した。

③ 食堂の消毒に関する工夫

食堂の消毒に関する工夫として、食堂の各テーブル上に消毒状態を示すカードを置く工夫が把握された。消毒カードを使って、子供たちに食堂のテーブルや座席を消毒してもらう仕組みを作っている。

ヒアリングで把握した対策・工夫

- 食堂に布巾と消毒液を置いており、子供たちが利用後にテーブルや椅子の消毒等を行っている。
- 食堂の各テーブル上に、表面に「消毒済み」、裏面に「使用中」と書かれたカードを置いている。食事が始まる前に、「消毒済み」の面を表にして置いておき、「いただきます」の前にカードを「使用中」に裏返してもらう。「ごちそうさま」の後、テーブルを消毒したら「消毒済み」に再度裏返してもらうことで、子供たちに食堂のテーブルや座席を消毒してもらう仕組みを作っている。また、極力消毒時間をとれるように食事の時間を長めに調整している。



④ 食事の提供方法や配膳方法の工夫

ヒアリングを実施した団体の多くが、バイキング方式から、限られたスタッフが配膳する個別配膳方式に変更していた。また、お代わり等で、利用者がセルフサービスの方法を実施している事例では、使い捨てのビニール手袋をつけてもらう対策をしていた。学校の受入事業の中で、お盆、箸、スプーン、ドレッシング、水の配膳について引率の先生に協力をお願いする工夫が把握された。

ヒアリングで把握した対策・工夫

- お代わりをする場合は、マスクの着用と使い捨てのビニール手袋をつけてもらうようにした。トングは、レストランで適宜交換を行った。
- 基本的に食堂スタッフが個別配膳する方式としている。ご飯やみそ汁などは、セルフサービスとしている。個人で盛り付けるものは、使い捨てエンボス手袋使用を促し、用具による接触感染回避に努めた。ご飯の近くに、エンボスの手袋を置いて誰でも使えるようにしている。手袋をつけた状態でトングやしゃもじを使うようにしていた。
- コロナ禍前はバイキング形式で提供していた。コロナ禍に入ってから、限られたスタッフが配膳するようになっている。基本残食のないように、適度な食事量を個別配膳し、白米、みそ汁、お代わりをよそう場合は、担当スタッフを配置した。食堂内には飛沫感染シートを設置した。

- 配膳はすべて施設側で対応した。コロナ禍前から食中毒対策として行っている。食事の配膳は、事前に席に配膳しておくこともあれば、主催事業では子供たちに前に来てもらって配膳をする、ということもあった。
- バイキングから個別配膳方式に変更し、引率の先生に協力をお願いし、接触感染のリスクを下げる工夫をした。お盆、箸、スプーン、ドレッシング、水の配膳については、引率の先生に協力をお願いした（赤枠の写真②、④、⑤）。こういうご時世なので、先生方にも協力してもらいやすかった。バイキングをやりたいという要望はあったがご了承をいただいている。また、個別に配膳することで、調理スタッフの手間が必要ではあった。今後については検討中である。



①入口で手指消毒



②おぼん・箸・スプーン



③おかず・ご飯・汁もの



④ドレッシング類



⑤水

⑤ 野外炊事の感染対策、工夫

野外炊事のメニューに関して、防災プログラムと位置付けてレトルト食品を活用する、薪割りと火おこし体験を中心とする等、調理工程を簡素化する工夫がみられた。また、炊事で密を回避するために、自分のものを自分で作る調理方法を導入した例も見られた。乾パンの空き缶を利用したり、一人一人の調理セットを準備したりして、調理器具を共有しないような工夫を伺った。

ヒアリングで把握した対策・工夫

- 野外炊事については、防災プログラムという形で野外炊飯を行っている。レトルトなどの温めるものみにしている。家族であれば野外炊事を可能にするなど、参加形態に合わせて柔軟に対応している。
- 調理はしないがレトルト食品を使って野外炊事を行う学校があった。薪を割ったり、火を付けたりする体験は行うことができていた。また、紙皿やスプーンを持ってきて、人が多く接触しないような様式がとられることもあった。食堂に協力してもらい、カレーの具材を事前にカットしてもらおうなどして、感染対策を行いつつ体験を継続する取り組みを行った。
- 自主事業の無人島キャンプでは、密にならないように工夫をし、例えば調理する際は、自分のものは自分で作り、他人の食事には触れないようにした。通常は飯盒で4～5人分炊くが、今回は、乾パンの空

き缶を利用して一人前を炊飯した。釣った魚も自分で焼いた。一人ずつの火の管理ではなく、釜戸は班単位で、スペースを空けて利用した。レトルト食品や個包装の食品も活用した。

- 野外炊事に関する感染対策の工夫として、ソロクッキングスタイルを徹底した。ソロクッキングでは、野外セットを一人ずつ用意し、他人のものとは共有しない、接触しないスタイルにした。ソロクッキングに使う野外セットは、1度揃えたのち、袋一つにまとめて繰り返しキャンプに持ってきてもらっている。野外セットには、フライパン、フライ返し、おたま、網、折り畳み簡易コンロ、固形燃料、軍手、マッチ、自分の食器が入っている。野外セットは、野外活動の時に持参してもらう。

(詳細は、3ヒアリング対象者別の活動・プログラム概要「ガールスカウト香川県連盟」参照)

- 野外炊事のメニューは、ピザやうどんなど素手を使うメニューは実施を見送った。また、かまどの割り当て数を増やしたが、運用してみると、火元が増えて火の管理が難しかった。1つのかまどで大丈夫という団体も多い。火のそばでは、引火防止のため手袋やマスクを外してもらうこともある。火元の当番を決めて、マスクを外す人は外すということを行っている。
- 自主事業では野外炊事をしている。メニューの中身は変えておらず、豚汁、カレー、飯盒での炊飯などを作っている。コロナ禍では団体数の制限を行っていたため、参加者数も通常より2割ほど減少していた。それにより、1グループあたり6～8人と少人数のグループ分け、テーブル割が可能となり、コロナ禍前よりスペースに余裕のある形で実施している。

オ 宿泊に関連する新型コロナウイルス感染対策の内容

① 利用団体ごとに利用できる場所を事前に決めたり割り当てる工夫

ヒアリングを実施した団体のほとんどが、利用する団体ごとに利用できる場所を事前に調整していた。具体的には、入退所や活動場所について団体間の導線が重ならないように事前調整する、団体間でのトイレの共用をできるだけ避けるよう事前に宿泊するブロックを割り当てる、混雑を避けるために利用団体の来館時間や出発時間を調整する等の工夫を把握した。また、民間団体のケースで、宿泊施設を1日1組限定として宿泊予約サイトに登録したところ、毎週末の予約につながったという例もあった。

ヒアリングで把握した対策・工夫

- 宿泊場所は、1つの棟に複数の団体が入ったり、他の団体が連続して宿泊場所を利用したりしないようにした。
- 入退所や活動場所に関しては、基本的には入所から退所まで団体毎に同じ場所を利用するよう、事前に調整している。また、動線も重ならないよう配慮している。
- 混雑を避けるために、利用団体の来館時間や出発時間を調整している。事前調整により利用団体の使用場所（宿泊室・会議室・会場）を割り当てており、他団体との接触機会は少ない。また、敷地が広く十分な面積があるので、使用箇所が重複して混雑することも少ない。
- 6部屋程度の近接した宿泊室を1つブロックとし、ブロック内の1部屋でも利用される場合は、そのブロックにはほかの団体は宿泊しないようにした。ブロック分けは、団体間でのトイレの共用をできるだけ避けるべく事前に割り当てている。
- 1か月前のスケジュール提出により、各団体が同じ場所の利用にならないように活動場所の配置をおこなった。共有スペースの使用を禁止した。
- 他団体との接触や混雑を減らす工夫として、施設を1日1組限定の貸切利用にした。2組以上の利用がある場合は、他団体と共有するスペースがないように使用場所の限定をした。コロナ禍では他者がいることを気にする人や、世間のキャンプブームもあり、1組限定を謳って予約サイトに登録してみたところ、毎週末使っていただくような形で継続している。複数家族で使ったり、他で自然体験をしている団体が、宿泊場所としてのみ使ったりすることもあり、新しいつながりが増えた。また、一般の宿泊施設を利用していた団体がコロナ禍のため貸切ならと利用するケースもあった。

② 大勢がよく手を触れる箇所（ドアノブ、手すり、スイッチなど）の消毒

ヒアリングを実施した団体のほとんどが、大勢がよく手を触れる箇所（ドアノブ、手すり、スイッチなど）の消毒を実施していた。大勢がよく触れる箇所の消毒については、共用部分の電気のスイッチの上にON/OFFを施設職員が行うことを案内するお知らせを貼る工夫を伺った。また、感染対策を簡略化する工夫として、3日以上利用しない場合は消毒を省略することもあるとの対

応を伺った。

ヒアリングで把握した対策・工夫

- 大勢がよく手を触れる箇所（ドアノブ、手すり、スイッチなど）は、施設職員による朝・昼・夕の定期消毒、清掃業者による消毒作業（入所時は常時）をしている。また、廊下やトイレなど大勢が触れる可能性があるスイッチに関しては施設職員が ON/OFF を行うよう、スイッチ部分にお知らせを貼っている。スイッチは、廊下とトイレについては朝一の循環の際にスタッフが点灯する。団体がいないときは点灯しない。
- 生活の動線、手すり、スイッチなどの箇所は、部屋点検終了のタイミングで職員が事務室に戻りながら消毒を行っている。感染対策は、簡素化できるところはしたいと思っている。部屋についても、3日以上利用しない場合は、消毒を省略することもある。
- ドアノブ等の消毒も、利用団体をお願いして取り組んでもらった。



③ 利用期間中の参加者の検温や体調確認に関する工夫

宿泊を伴う活動を実施したヒアリング対象団体のほとんどが利用期間中の参加者の検温や体調確認を実施していた。具体的な体調確認の方法として、参加者の検温や体調管理については、係を決めて子供同士で体調管理や消毒の声掛けをした、就寝時と起床時に子供にチェック表を記入してもらいスタッフがダブルチェックをした、しおりの検温の欄に記入してもらい保護者も確認することができるようにした等の工夫を行っていた。

ヒアリングで把握した対策・工夫

- 体調管理に関する工夫として、グループ毎に保健係を決めて、子供同士で体調管理や消毒の声掛けをした。保健係は子供が担う。リーダーは保健係がきちんと務めているかを確認する。タイムスケジュールの中の移動時には、グループごとに集合の報告をさせるが、その時に保健係が発熱や気分が悪いといった問題があれば報告を行うことにしている。そのタイミングで大人も子供の体調管理・把握につなげている。グループのリーダーから、今日1日見て体調が心配な子はいたかという報告の機会も設けている。子供に係をしてもらうことで、やらされているのではなく自分でやる、という気持ちも持たせるようにしている。学校でも感染対策を教えているため、子供たちはずいぶん受け入れていた。
- 児童の体調の確認は、基本的には体温のチェック、体温の他にだるさ、頭痛、腹痛など10項目程を確認している。宿泊をする場合は、就寝時と起床時に子供にチェック表を記入してもらっている。基本的には、チェック表は大学生のスタッフと職員でダブルチェックを行う。学校の先生がいらっしゃる場合は独自に確認されていた。
- 利用期間中の参加者の検温や体調確認については、グループリーダーが朝晩の検温、体調管理をし、裏方スタッフが集約している。検温する時は、体温計は施設が準備し、1人1人検温する前に消毒液のつ

いた布で消毒している。参加者にしおりを配り、日記を書く欄があるため、検温の記録も書いてもらっている。家に持ち帰るため、保護者も確認することができ、学校に提出する時も役に立つのではと考えている。以前はしおりに検温の欄はなかった。

④ 入浴に関する感染対策・工夫

入浴の場面での感染対策として、利用団体の入浴時間を通常より長く設定して脱衣所や浴場の混雑を回避する、他の団体と入浴時間が重ならないよう事前に調整する、接触感染のリスクを減らすために脱衣所のカゴをなくす等の工夫を伺った。また、1泊2日の冬季のキャンプで、体が冷えて体調を崩すこともあるため風呂の時間を設定していないという例もあった。

ヒアリングで把握した対策・工夫

- 入浴時間を制限し、消毒・清掃を行った。脱衣所の密を防ぐため、入浴可能な時間を通常よりも長めに取り、入浴に長く時間を充てられるようにした。そのために、団体によっては夕食、ナイトプログラム、入浴の順番の入れ替えをお願いすることもあった。
- 浴場の混雑を回避するための工夫として、利用団体の入浴時間を通常より長く設定している。また、団体入れ替わり時には、時間を空け、職員による消毒等を実施している。
- 入浴時の混雑を回避するための工夫についても、事前調整の段階で各団体の浴室利用希望時間が分かるので、利用時間を調整して、混雑を回避している。また、脱衣所での感染リスクについては事前指導するとともに、スタッフやリーダーと一緒に入浴して監視と指導を行っている。
- 他の団体と入浴時間が重ならないよう、事前にプログラムを調整している。脱衣所のカゴをなくした。
- 浴場の利用については、団体ごとで利用時間を定め、脱衣室、浴室の換気と利用人数にあわせた時間配分をし、浴室が密にならない配慮をした。お風呂も宿舎同様定員の半分に、一度に入れる人数を限定している。入浴時間を増やして、密にならないようにしている。
- 「ソログルキャンプ」では風呂の時間を設定していない。風呂は、一緒に入ると水浸しになることもあり、10分で上がることも難しい。冬場のキャンプをメインにしているため、体が冷えて体調を崩すこともあるため、1日くらい入らなくてもよいと考えている。風呂をやめたら時間に余裕ができ、それによってお一人様タイムを作った。

⑤ 宿泊する部屋毎の利用定員を通常時未満に設定

宿泊を伴う活動を実施したヒアリング対象団体のほとんどが、宿泊する部屋毎の利用定員を通常時未満に設定していた。

ヒアリングで把握した対策・工夫

- 大人・子供合わせて 27 名の宿泊に対し、1 教室に 4 名ずつを 3 教室、残りはホールに分散した。いずれも定員の半分以下とし、ソロテント同士の距離を離し、テントの出入口の向きも変えた。
- 就寝する 1 部屋の人数を 5 名以下にするなど、活動単位を少人数にしている。

⑥ 寝具の使用に関する感染対策・工夫

寝具に関連する具体的な感染対策として、以前はシーツを 2 枚用いていたが、コロナ禍では下 1 枚、上 2 枚の計 3 枚用い、枕にビニールシートとタオルを被せることで、他人が触れたところの接触を減らす取組を伺った。また、山小屋泊では不織布の配布があり口元が寝具に直接触れる機会を減らせるよう配慮されていた。また、ベッドの見えやすい位置に色の異なるテープやシールを貼り、利用者に分かりやすく案内し、寝具を連続して使用しない工夫を行う例が複数あった。

ヒアリングで把握した対策・工夫

【寝具・シーツの利用方法】

- シーツは通常 2 枚用いるところ、下 1 枚、上 2 枚の計 3 枚用いるような取組みを行った。また、枕にビニールシートとタオル被せることで、他人が触れたところの接触を減らすようにした。
- 枕カバーと、シーツ 2 枚は交換をしてもらっている。滞在期間が短い場合は、利用者に消毒をお願いしている。
- 宿泊する山小屋から個別に不織布の配布があり、口元が寝具に直接触れる機会を減らせるように配慮されていた。
- 感染対策と利用者の安心感の観点から、コロナ前まで使用していた「敷、掛け、枕カバー一体型」のシーツから、「シーツ 4 点セット（敷きシーツ、掛シーツ、毛布カバー、枕カバー）」に変更した。利用のたびにシーツを 4 枚脱着する煩わしさはあるが、利用者から清潔感と安心感があるとの感想をもらっている。学校の利用においても同様に変更した。
- 宿泊を伴うキャンプではシュラフ（寝袋）を使用するが、キャンプの宿泊事業は 1 か月以上の間隔が空いているので、天日干しをしたり日を空けて使っている。（シュラフは、スプレータイプの消毒液を利用して使用後に消毒している。）

【利用する寝具の色分け】

- 各ベッドのテーブルや入口に赤と緑のテープを張って利用者に案内している。テープによりベッドを色分けし、連続で使用しない宿舍配当を実施している。



- 寝具を赤と青のシールを用いてに色分けし、前の団体が利用した寝具は、連続で使わないようにしている。



⑦ テント泊に関する工夫

テント泊で実施した工夫として、一人用テントの活用や、屋内に一人用テントを自作する実践を伺った。一人用テントで宿泊するが、活動全体としてはグループ活動を行うよう工夫されていた。

ヒアリングで把握した対策・工夫

- 「あませい無人島キャンプ」では他の参加者と密にならないよう、一人用テントを活用した。一人用テントは、コロナ禍で新たに購入した。密を避けることができ、保護者の方にも安心してもらえると考えた。参加費の中で賄う形で購入した。1張 2,000 円程度の値段で購入可能。使用して壊れてしまったテントもあったが、1週間程度であれば問題なく、難なくできた。テントを立てるのは、班の子供たちで協力して行った。宿泊は一人だが、基本的な活動は班単位で実施した。

(詳細は、3 ヒアリング対象者別の活動・プログラム概要「熊本県立天草青年の家」参照)

- 「ソログルキャンプ」の宿泊場所は、廃校になった小学校をキャンプ場にした会場で、小学校教室内に分散してソロテントを設営した。広々とした空間利用を心がけ、一般的な小学校の教室の広さにテント4張を4隅に設置した。大人・子供合わせて 27 名の宿泊に対し、1 教室に 4 名ずつを 3 教室、残りはホールに分散した。いずれも定員の半分以下とし、ソロテント同士の距離を離し、テントの出入口の向きも変えた。ソログルキャンプで実施したテントを自作する方法は、雨には耐えることができないので屋外での実施は難しい。屋内のホールや教室を広く使っている。

(詳細は、3 ヒアリング対象者別の活動・プログラム概要「ガールスカウト香川県連盟」参照)

カ 移動に関する新型コロナウイルス感染対策の内容

移動に関する感染対策として、現地で集合・解散するに変更しプログラムの中での移動をなくすか少なくする工夫や、貸切バスに乗車する定員を少なく設定する対策を複数把握した。貸切バスに乗車する定員を少なく設定した団体の中には、費用を工面するために助成金等を活用したり、自治体や社会福祉協議会等が保有するバスを活用したりした例があった。また、バスに乗車する前に、当日の受付で抗原検査キットを配って検査し、陰性の参加者はバスに乗って出発するという取組をした例もあった。

ヒアリングで把握した対策・工夫

- 青年の家から港までのマイクロバスでの移動をなくした。参加者は宮田港に直接集合し解散するようにプログラムを変更した。港に直接集合・解散にすることにより、保護者からの安心を得ようとした。
- 狭い車内で距離が近くなる時間を長時間にしないために、活動場所を施設から 20 分程度で行ける場所に見直して、移動時間を減らした。コロナ禍前は 1 時間離れた場所に行っていた。移動時の感染対策については、車両に乗る際はマスク、常に窓は開けて換気、乗る前に消毒を実施した。
- 自主事業の場合は、現地集合・解散のパターンと、駅で集合・解散のパターンがある。できるだけ公共交通機関を使わないようにし、公共交通機関を使う場合は現地集合・解散とした。貸し切りバスを借りた時は、当日の受付で抗原検査キットを配って検査し、陽性反応が出た場合は諦めていただくと事前に告知している。陰性の場合そのままバスに乗って出発という流れを作った。抗原検査キットは 10～15 分で結果が出る。手数料は参加者負担だが、キャンセルの場合は全額返金するという対応を取っていた。貸し切りの大型バスで移動する時は、満員の定員とするのか、空間を空けて座るのか否かで保護者の安心感も変わることも考慮して、定員減として対応した。
- コロナ前は、所バスを出していたが、密を回避するために村バスや、社会福祉協議会が保有するバスを用意してもらい、1 台につき定員の 50% 以下の人数で送迎を行った。費用面については、令和 2 年度は子どもゆめ基金を活用できたため、その予算を用いてバスの運行を行った。隣の棚倉町の学校を受け入れた際は町バスを移動手段として使われたが、日常的に運行している町バスなので、時間帯によっては用意できないことあった。一般のバス会社も、定員 50% 以下ではなく、空調設備を整えて通常営業しているところもある。観光業界やホテル業界のホームページや、文部科学省のサイトなど、関係各所から情報を得て、対策をアップデートしていく。
- 移動での感染対策として、バスの定員に対して半分の乗車人数にしている。家族連れの場合は横を詰めていただいている。定員いっぱいに乗せる団体もあるが、コストが高くなってもそこまで踏み切れていない。バスの中では、DVD を流して会話をしないようにしている。バスレクリエーションは楽しみだができていない。
- マイクロバスを所有しており、3 分の 2 程度の人数で使うというガイドラインを作ったが、バスの利用はほとんどなかった。

(2) 新型コロナウイルス感染症の流行を機に新たに始めた活動・取組

ア ICT の活用に関する取組について

① 施設の利用方法や体験活動等の動画を制作し公開

ヒアリングを実施した団体の約半数が、動画を制作し公開する取組を実施していた。

施設や利用方法の案内を動画で公開した例として、360°カメラを利用して各研修室をホームページ上に公開し下見に来ることが厳しい利用者へ施設のことが分かるよう工夫した例や、YouTubeチャンネルを作成し施設の案内動画を公開している例を把握した。施設の利用方法の動画の取組の中で、退所点検の動画によりコロナ禍前よりも部屋が片付くようになったという効果や、シーツの畳み方の動画により畳み直しや指導の時間が減ったという効果が挙げられた。

体験活動に関する動画を公開した取組では、登山コース動画を作成し、引率者の誘導ポイントや危険箇所を動画を使って説明したり、下見に来た先生が下見に来ていない他の先生に動画を活用して説明したりするなどの取組を把握した。動画は便利なものとして併用しつつも、危険箇所などの安全面の確認は、引率者が現場を下見して確認することが望ましいと強調されていた。

ヒアリングで把握した取組

【施設や利用方法の案内を動画で公開した】

- 各研修室を 360°カメラを利用し、ホームページ上に公開し、下見に来ることが厳しい利用者へ施設のことが分かるような取組をしている。360°カメラによって、研修室の大まかな広さを見たり、設置されているものを確認したりできるという声を聞いている。一方で、現場を見ないと分からないこともある。
- YouTubeチャンネルを作成し、創作や施設の案内の動画を公開している。イベントに参加した子供で、事前に動画を見てくれた方もいた。施設にまた来てほしい、というメッセージを伝える狙いもある。
- 「退所点検 やって見た！」という動画を作成し、子供たちに見せたところ、次の方のための清掃意識が高まり、コロナ前よりも部屋を片付けて退所するようになった。退所点検に関する取組みは、今後も継続していく。
- シーツの畳み方をはじめとしたオリエンテーション動画は、特に学校団体から好評である。事前学習として見ることで指導の時間が減った、畳み直しの時間が減った、という声を聞く。結果として、活動の時間が増えたり、先生方の負担が減ったりした。
- 施設の利用方法を動画で作成し、回覧できるように工夫した。主にスポーツ団体等が利用していた。コロナ後もオンライン用の動画を無くす必要はないが、オンライン動画は主に民間団体が活用している。一方、公共の施設や学校等はあまり見ておらず、結局来た時にオリエンテーションをして、実際にお話しすることになる。

【体験活動に関する動画を公開した】

- 登山コース動画では、引率者の誘導ポイントや危険個所を、動画を見ながら説明している。登山動画の活用の例として、下見の代わりとして見てもらう、下見に来た先生が下見に来ていない他の先生に動画を活用して説明する、事前打ち合わせでの利用等があげられる。動画のクオリティを上げられればいいが、どのくらいの傾斜があり、どのような危険があるのか等の地理的な安全面に関して、現場に来て実際に見たほうがいい。実際に来ることができる場合は現場を見ていただきたいと思う。誰も下見をしたことがない場所に子供を連れていくことは不安であると思う。現場を見に来ていただきたい。オンラインは便利なものとして残して、日程調整が難しい場合は活用してもらう等を考えている。
- 自宅で楽しめるように、Facebook や Instagram、ホームページで火おこしなどの活動の様子を動画やライブ中継で公開した。火おこしのライブ配信については、コロナ禍で何ができるかを考えて、こういう活動があることを伝えるほか、スタッフが苦勞している姿を見てもらうのも面白いと思い公開した。火おこしは感染が厳しくなければ、台を支えるなど協力して取り組むことができ、動画は子供たちが理解する資料にもなる。

② オンラインを活用した事前打ち合わせの開催

ヒアリングを実施した団体の約半数が、オンラインを活用した事前打ち合わせを開催していた。コロナ禍では事前に現地に来ることが難しい状況があり、オンライン会議を活用して事前打ち合わせや事前相談を実施した例を多く伺った。オンライン会議では一度に大勢との情報共有が可能で、画面の中で見せながら確認ができることをメリットとして挙げられていた。コロナ禍後については、対面とのバランスを考えながら、場面に応じて活用を続けていくというという声が多かった。

ヒアリングで把握した取組

【オンライン会議を用いた事前打ち合わせの実施】

- コロナ禍において、事前の打ち合わせが難しい中、360°カメラや動画を活用した。コロナ禍が落ち着いた後も、コロナ禍前のような対面のみに戻すのではなく活用を続けていく。遠方の人にとっては下見に来ることが難しいので、Zoom 等を用いた事前相談などを充実させていきたい。一方、オンラインで話すのと、実際に会って話すのでは先生の熱量も異なる。オンラインでは必要なことしか話さなくなってしまうため、時代の状況を見つつ活用のバランスを考えていく。
- 学校においては、GIGA スクール構想の促進でインターネット環境が整備された。オンライン会議の画面共有機能でホームページや資料を提示しながら、チャットを活用して解説と質疑応答を行った。学校の事前打ち合わせではオンラインも活用するが、必ず1回は現地に来ていただく約束となっている。何かあった時に先生が下見をしていなかったら大きな問題である。GIGA スクール構想で先生とメールでやり取りができるようになり、資料の添付もスムーズになった。電話だと1対1だったが、オンライン会議では大勢を相手に情報共有が可能となり、学年の先生が揃って説明が可能になった点は非常に負担

軽減になった。今後もケースバイケースで、ハイブリッドの形でやっていくつもりである。

- コロナ禍前は、事前に準備集会を行い、自分の荷物を準備して集会の会場に持ってきてもらって荷物確認を行っていた。今後はオンラインでの荷物確認に変更しようと思う。画面に向かって「これ出してください」と皆で確認した方が楽だと思った。コロナ禍でオンラインが進んだことで気付いた点である。

③ オンライン講習会や研修会の開催

オンライン講習会や研修会の開催の事例として、対面での開催が難しい状況があり学生ボランティアの研修や打ち合わせにオンラインを活用した例や、研修の事前学習をオンラインで実施しコミュニケーションが大事な部分は対面にするなど織り交ぜて研修を実施した例などを伺った。研修などでオンラインを活用するメリットとして、時間が限られているため整理して伝えるようになる、移動時間が省略できる、旅費がかからないことが挙げられた。一方、言葉やデータのやり取りが一方通行になったり、意図が伝わらなかつたりする難しさがあるという指摘があった。

ヒアリングで把握した取組

- ボランティア養成研修を年に2回行っている。先輩ボランティアが研修に参加しているが、都内に在住していて対面での実施は厳しい状況だった。夜にオンラインで参加してもらって、質問に答える、相談役になる、という立場で参加していただいた。学生との打ち合わせにも、オンラインは使っている。オンラインの活用はこれからも継続できればと思う。オンラインなので時間が限られているため、整理して伝えるようになる。そのため、短時間で打合せが済む。また、移動時間の省略という面でも簡略化できる。一方で、言葉やデータのやり取りが一方通行になったり、意図が伝わらなかつたりする。また、第三者の表情を視野の外側で確認することができない。オンラインによる打合せは、旅費がかからないというメリットが大きい。東京の大学生であれば旅費の負担が浮くのは大きい。
- 日本レクリエーション協会や都道府県レクリエーション協会が対面で行ってきた研修については、事前学習等をオンラインでできることが分かった。オンラインを活用しながら、コミュニケーションが大事な部分は対面にするなど織り交ぜている。2020年、2021年のコロナ禍にあった全国会議や教員免許状更新講習はオンライン（オンデマンド）で実施した。

④ オンラインを活用した広報活動の工夫

オンラインを活用した広報の工夫として、紙媒体で報告書を送付するのをやめてデータで配信するように変更して印刷費や郵送費用を削減した例や、SNS やインターネット検索の有料広告を試行的に活用した取組を伺った。

ヒアリングで把握した取組

- オンラインを活用した広報活動の工夫として、紙媒体の印刷費や郵送費用の削減のために紙媒体で報告書を送付するのをやめて、参加した方たちにデータで配信するように変更した。メール、SNS を活用して広報を実施した。
- フェイスブック上での有料 PR や Google 検索における有料の PR などを使用した。有料広告は、コロナ禍前より試行的に利用していた。実施要項や地図を見てもらえるようにしていた。これまで、一般層・青年層に対して集客力が弱い点が課題であったため、SNS の活用に挑戦した。まだ様子見の段階で、効果の有無は分からないが、情報収集しながら改善を加えていく。

⑤ オンラインを活用した自然体験活動・創作活動のイベント開催

オンラインを活用した自然体験活動の開催事例として、オンラインで講座を開催し各家庭でバケツ苗を栽培する活動、木製のロボットを設計・制作する活動や、遠隔地とつないでキャンプをするリモートキャンプなどの活動を実施していた。また、リアルとオンラインを組み合わせた活動として、富士登山の後日にオンラインで集まり、感染症対策の反省や感想の共有する振り返りの活動がよかったという意見を伺った。

ヒアリングで把握した取組

【オンラインイベントの開催】

- ハウス食品グループ本社株式会社からの受託事業であるハウス「食と農と環境の体験教室」知って、作って、食べて、つながって！は、コロナ禍の中、初めてのオンラインでの開催となった。様々な地域からご参加いただいた全 11 家族の皆さんと、自宅で稲を育てる体験、「食品ロスをなくす」をテーマで考えたオリジナルカレー調理の体験を通じて、オンラインならではの“食”と“農”と“環境”のつながりを学んだ。

(詳細は、3 ヒアリング対象者別の活動・プログラム概要「特定非営利活動法人千葉自然学校」参照)

- オンラインツールの Zoom を使って、木のロボット「木 bot」を設計し、後日自宅に届いた部品を、それぞれの家でみんなと話しなが組み立て完成させるハイブリットな体験活動を開催した。対象者は小 5 年生から中学生で、計 2 時間×2 日間のプログラム。山口県の体験学習法である AFPY⁵の手法の流れに沿ったプログラムを設計した。

(詳細は、3 ヒアリング対象者別の活動・プログラム概要「周南市大田原自然の家」参照)

- 自然体験活動でのオンライン活動の取り組みとして、コロナ禍前に参加していた遠方在住の子供たちへのケアを兼ねて、オンラインプログラムを開催した。緊急事態宣言が全国に発令したときは閉館せざるを得ず、その時に子供たちから「リーダーたちは元気かな。」という声掛けがあった。オンラインで何かやってほしいという声を受け、ちょっとした遊びではあるが、「ヘンテコラジオ体操」を実施した。遠方

⁵ AFPY : アフピー (Adventure Friendship Program in Yamaguchi) は、他者とかかわり合う活動を通して、個人の成長を図り、豊かな人間関係を築くための考え方と行動の在り方を学び合う、山口県独自の体験学習法

在住者はオンラインで、近在者は現地で一緒に参加する形でのハイブリッドとなった。「ヘンテコラジオ体操」をオンラインで開催した際に、オンラインガイドウォークをあわせて実施した。ガイドウォークでは、カエルが卵を産んだ様子を配信した。

- 保育園の年長組が毎年参加するサマーキャンプがすべて中止となったため、スタッフと「リモートキャンプ」を行ったことがある。あらかじめ送った動画が止まる等のトラブルもあったが、失敗した時間を共有したこともよかったと思う。今後もオンラインの取り組みはやりたいし、ニーズがあることも分かった。
- 親子を対象とした企業のイベントで、毎年植樹を行うプログラムがあり、講師として参加していた。コロナ禍になり、オンラインの木育のクラフトワークショップを開催することとなり、講師として参加した。イベントには全国からご参加いただいた。令和2年は木の板を組み合わせたオブジェで、令和3年は中に小豆が入っているウッドシェイカーを作った。参加者に事前にキットを送って、オンラインで注意点などを伝えながら、子供と一緒に作っていった。作業に入る段階では、1つのグループが1つの画面に入るように小グループに分かれて、各グループにスタッフを配置してキットの作成手順を説明した。全員でできる部分は全体で集合して説明し、実際に作る時はグループに分かれて行った。木に関するクイズを出したり、木育に関する話をしたりした。遠方の他団体ともネットワークを生かしてイベントが開催できることはメリット。また、オンラインの木育のイベントは、普段自然体験活動に参加されている層とは別の層から参加していただいたため、イベントを通じて自然学校の広報活動につながった。

【リアルの活動とオンラインの活動を組み合わせた体験活動】

- オンラインを活用した体験活動後の振り返りは、主にグループを担当した中学生以上のジュニアリーダー、リーダーと実施した。富士登山の後にオンラインで振り返りを行い、感染症対策の反省や感想の共有を行った。事後の振り返りは、コロナ禍前はあまり機会がなかった。オンラインで活動することに不慣れであったこともあり、オンラインの活用はコロナ禍での工夫の産物ともいえる。コロナ禍前における事後の振り返りは、キャンプ終了直後にシートに記入してもらい、スタッフで集計した後に共有していた。実際に肉声や表情に触れながら共有することはあまりなかったためオンラインの振り返りは良かった。
- オンラインを活用した自然体験活動として、主催事業で海の生き物観察を実施した。指定管理先の南房総の施設で実施したもので、スタッフが磯場に行って、そこにいる生き物を手に取り、Facebook のライブ配信を通じて参加者に見せた企画である。定員を締め切るほど集まり、参加者全員から好評だった。オンライン配信の実施後、緊急事態宣言が明けてから、当初から予定していた対面のプログラムを実施した。普段子供は図鑑を見て生き物の名前や特徴を捉えるが、オンラインの生き物観察に参加した結果、その後の対面の主催事業に参加して、実際に生き物のいる場所に行って触れる、といった経験ができた。

【SNSを使った参加型イベントの開催】

- 「おうちで 60 秒チャレンジ」は、誰でも参加可能なオンラインのレクリエーション。自宅で家族など

と一緒に体を動かすレクリエーションの種目にチャレンジし、その様子を動画撮影して Twitter のハッシュタグを使って投稿するというもの。現在 11 種目あり、動画を Twitter に投稿すると全国ランキングに参加が可能。一人でも多くの方にチャレンジしていただけるよう、期間限定ランキングを競うキャンペーンも開催した。

(詳細は、3 ヒアリング対象者別の活動・プログラム概要「公益財団法人日本レクリエーション協会」参照)

イ 新たな活動・取組について

新型コロナウイルス感染症の流行を機に、新たに始めた活動や取組について伺った。具体的な事例として、タブレット端末を活用した野外活動、近隣地域でのツリーイング体験、全国規模のウォークラリー大会の開催、工作キットの販売、地域との連携によるマイクロツーリズムの企画・運営など多様な取組を把握した。

各団体が各様に、コロナ禍の制約の中で新しい試行を行い、活動の幅や可能性を広げていることが伺えた。

タブレット端末を活用した野外活動「AR ネイチャーラリー」、「AR アドベンチャーラリー」では、大学と連携し、IT 機器を活用した体験活動の提供による影響調査の実証研究を実施している。

文部科学省の委託事業を活用した事例として、ツリーイング体験では、令和 2 年に実施した委託事業の実績により、令和 3 年度以降の行政との連携や協力をスムーズに得ることができたと伺った。文部科学省の委託事業を活用してコロナ禍に全国規模のウォークラリー大会を開催した事例では、地域の中での活動であったウォークラリーが全国規模での事業になったことで、多くの方に参加いただくことができたという成果を伺った。

コロナ禍前は予約して現地で体験を提供していたクラフト体験活動を、コロナ禍でも参加しやすいよう説明書を付けてキットにして販売したところ、お土産や家庭用として想定以上の需要となった事例もあった。

地域との連携や助成金を活用して、マイクロツーリズムを企画・運営した事例では、参加者の幅が広がって団体の広報となったり、自主事業に関するプログラム開発にもつながったりした成果を伺うことができた。

**【タブレット端末を活用した野外活動 AR ネイチャーラリー・AR アドベンチャーラリー
(尼崎市立美方高原自然の家)】**

- 「AR ネイチャーラリー」と「AR アドベンチャーラリー」は、コロナ禍に長期宿泊事業に変わる事業として、小学校向けの日帰りの体験活動として新たに開発したプログラムである。
- 現実の公園など、活動エリア内に設置された生き物のイラストをタブレット機器で読み込むと、イラストがマーカーとして起動するAR（拡張現実）を採り入れている。
- 起動画面では当施設のキャラクター「トチ坊」とともに文字情報と音声で課題を提示し、ポイントでの課題実施を促すものとした。各ポイントでは、視覚、触覚、嗅覚、聴覚を利用した体験（ネイチャーラリー）や、グループでの課題解決をねらいとした課題（アドベンチャーラリー）を提供した。
(詳細は、3ヒアリング対象者別の活動・プログラム概要「尼崎市立美方高原自然の家」参照)

【尼崎市内ツリーイング体験（公益財団法人 日本アウトワード・バウンド協会）】

- 令和2年度に文部科学省の委託事業で、尼崎市内でツリーイング体験を8回、1泊2日のキャンプを3回、食事代・保険料のみをもらって実施した。
- 尼崎市内で、夏休み以降の土日に、日帰りのツリーイング体験を行った。ツリーイングは、美方高原の職員が尼崎市内の公園に出向く形で提供した。少し難しいことでもできた時の喜び、一人ではできないけど他の人に助けてもらったからできた、という経験を子供たちに提供することがねらいである。感染リスクの低い屋外の活動で、参加していただきやすく、自然と触れ合いながら楽しむことができ、美方高原での提供実績や外部の協力者が揃っていることから、ツリーイング体験を選定した。
- 1回1時間30分ほどで、土日各4回の計8日間実施した。1日は台風でキャンセルになったが、それ以外はほぼ満員であった。美方高原でも、通常1人2000円かかる活動が、委託事業のおかげで、1人500円の参加費で実施できた。参加費0円も考えたが、飲食は経費の対象に入らないため、暑い日だったこともありおやつや飲み物などの行動食を含めて500円に設定した。委託事業を実施したことで、お金がかからない形でも十分提供できたと思っている。
- 文部科学省の委託事業で尼崎市に協力を依頼したが、尼崎市、教育委員会、公園の管理団体もスムーズに協力していただくことができた。当協会の主催事業であると、なかなかすぐに手続きが進まないが、運営がしやすかった点は文部科学省の委託事業であることの利点だと感じた。
- 令和2年度に、尼崎の活動エリアを開発し市内でツリーイング体験を提供した実績があったことで、令和3年度にコロナ禍でも学校の近くの尼崎市の公園でツリーイング体験をさせてほしいとの要望も行政にスムーズに受け入れられたと思う。
- 令和3年1月、2月に1泊2日キャンプを実施した。1月は雪遊び、2月はスキーを実施した。通常、2万円前後くらいの参加費をいただくところ、補助金の活用で4000~6000円で参加いただけた。

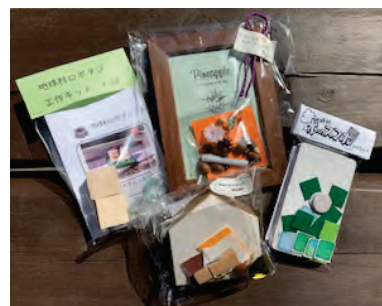


【ウォークラリー大会の開催（日本レクリエーション協会）】

- 文部科学省の委託事業で、コロナ禍に全国規模のウォークラリー大会を実施した。
- 基本的に家族単位、少人数単位での活動であり、スタートとゴールの時間が全員違うため、密になりにくくコロナ禍でも比較的開催しやすかった。
- コロナ禍に委託事業を実施できたことは協会にとって非常にありがたかった。今後も継続してくれるとありがたい。また、ウォークラリー大会はこれまで地域の中での活動だったが、全国規模での事業になったことで、多くの方に参加いただくことができた。

【工作キットの販売（三の倉市民の里 地球村）】

- 「小枝の工作」や「木の実の工作」は当施設人気の活動の1つである。コロナ禍以前は、申し込みをした参加者に小枝、木の実、紐、リボン等選んでもらい職員が指導をしていた。
- コロナ禍でも参加しやすいように、説明書を付けてキットにしたところ、お土産として、また家でする工作として購入する人も多く、需要の高さに驚いた。地球村で工作の体験をする場合も、必要な道具を貸出し、セットさえすれば、最小限の説明で工作を楽しめ、他グループと一緒にすることなく好きな時間に体験できるようになり、キットの売り上げにもつながっている。
- 工作キットは300円～500円で、いろんなキットから選ぶことができ、ふらっと来られた方が体験されることが多い。キット販売はコロナ後も続ける。

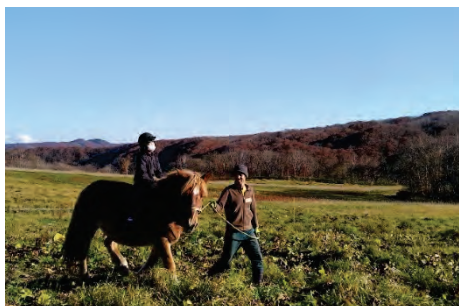


【地域との連携でマイクロツーリズムの企画・運営（黒松内ぶなの森自然学校）】

- マイクロツーリズムは、車で2～3時間圏内の市町村在住の親子を対象に、黒松内町の自然や施設を生かしたプログラムを提供する活動。当団体は黒松内町の添別ミニビジターセンターやその周辺のブナ林を生かしたプログラムを実施した。町や助成金からの運営資金面のバックアップがあり、参加費が低く抑えられたこともあるが、各回とも10～20名程度の参加があった。
- マイクロツーリズムは自然学校独自の企画ではなく、地域との連携で関わらせてもらっているもの。これまで当団体のプログラムに参加したことがない方の参加もあり団体の広報につながった。講師の方にプログラム提供をお願いしたので、当団体のプログラム開発にもつながった。
- マイクロツーリズムは1回目がサウナ、2回目がキノコ、3回目が馬をテーマとして、全3回で開催した。内容ごとに定員は異なるが、どれも定員を超える応募があった。1回目の「サウナ」は、人工物が目に入らないような丘の上で、テントに入ってネイチャーサウナを体験してもらった。サウナで使うヴィヒタ（白樺の枝葉を束ねたもの）に黒松内町の素材を使おうと、森林の中を歩きながら収集した。蒸留した水を使って、景色を見ながらサウナを楽しんだ。2回目の「キノコ」は町の共有林で自由にキノコ採取ができた。講師の方にキノコが森で果たす役割を話してもらったうえで、森の中に入って行く。キノコを見る、採取したキノコでうどんを食べるといった体験をした。3回目の「馬」は、まず触れ合いとしてブラッシング、次に裸馬に乗せてもらって自然を楽しんでもらう体験となっている。馬のプロ

グラムは、主催事業として検討していくきっかけになった。

- 写真にあるマイクは講師の方が持参したもので、20 数名を相手に説明が聞こえるように、かつ密を避ける意味で有効だった。実際にスタッフが使った時も、聞こえやすかった。
- 行政からの助成、観光協会との協力、企業との繋がりなど、コロナ禍前からの関係性が、コロナ禍での実際の活動につながり、具体的な事業で一緒にできるようになりつながりを実感できた。コロナ禍で主催事業が減った時も、委託事業があったことで何とかスタッフ数も変わらずに継続することができた。



裸馬にのり自然を楽しむ

【近隣地域の家族向け事業の提供】

- 団体でのテント利用がほぼキャンセルとなってしまったため、書類を簡略化して家族単位でのテント利用ができるパッケージで募集を行った。冬季は、読み聞かせと創作のイベントなど、家族向けのイベントを増やした。新型コロナが収まってくると団体での利用も増加するため、まったく同じように提供することはできないが、家族向けの体験の提供も継続していきたい。
- コロナ禍前から主催事業で「とよドン家パーク」という事前申し込みが不要な開放日を1シーズンにつき1回開催している。令和2年度から、公園感覚で遊びに来て、バーベキューもできるという取組みをしている。コロナ禍の制限で、野外炊事が難しいので、バーベキューセットのレンタルのみを行っている。主にご家族での利用を想定しており、団体でのバーベキューは制限がある。デイキャンプもハードルが高いという家族もある。自分でバーベキューの機材を持ってくるのは難しいので、食材と機材の貸し出しをして、自分たちで楽しんでもらいたい。自然の中で遊べるし、バーベキューをしてゆっくりして帰る、というニーズはあると思う。コロナ禍になって始めて、今後も続けたいと考えている。

【災害発生時等における宿泊施設の提供等に関する協定締結】

- 西郷村と災害発生時等における宿泊施設の提供等に関する協定を締結した。西郷村で災害やその他類する状況が発生した場合に、一時的な避難場所として活用するための協定を締結した。村は、避難所での密集を防ぐため、通常より多くの避難所を確保することがねらい。また、新型コロナ感染が疑われ、隔離を必要とする人の滞在先としても利用する。隔離を必要とする人の滞在用および施設利用者から感染の疑いがある者が出た場合の一時隔離場所として交流談話棟を利用する想定とし、現在は通常の利用を休止している。

(3) コロナ禍の制約下で自然体験活動を開催した成果と課題

ア コロナ禍の制約下で自然体験活動を開催した成果

コロナ禍に開催した自然体験活動を振り返って、活動のねらいは達成されたか、参加者の声や、制約下で開催してよかったこと、ポストコロナ期においても継続できる成果について伺った。

コロナ禍に開催をした成果として、子供たちが野外活動を通してストレスを発散し満足をした様子を見て自然体験活動を提供する意義を再確認したという意見や、制約下で工夫しながら体験活動を実施したことで提供する体験活動の幅や参加者の幅が広がったという意見、コロナ禍の制約下で新たに考えて工夫する中で職員のスキルアップにつながったという意見等、多面的な成果を伺うことができた。コロナ禍の制約の中で、試行錯誤をして体験活動を提供した経験を積極的に意味づけし、今後の活動に活かしていることが伺えた。

ヒアリングで伺った意見

【利用者からの満足の声】

- 厳しい状況の中で、職員も頑張って手間が2倍3倍かかることが多くなった。そういう中でも受け入れを続けていて、利用者の方が満足された等の声を聞けるのは職員として励みになる。
- 子供の振り返りで「コロナウイルスの影響による外出自しゅくで、なかなか外で遊ぶことができなかつたので、久々に自然の中で思い切り遊べてうれしかった。」「コロナの影響でなかなか来れず、自分にとって運動がしっかりできる唯一の場がなくなっていたので、久々に来てみんなに会えてうれしかった。」という声があった。野外活動で閉塞感から解放されることは、年齢を問わず大切な機会の提供になったのではないかと考えている。
- コロナ禍で「3密」前提での活動を余儀なくされ、「少人数」、「家族単位」、「指導者との最小限の接触」へとシフトしたことで、活動内容の濃度が増したと感じる。職員がコロナ禍前のイベントと比べて指導に時間を割くことができようになり、参加者の満足度も上がった。参加者からは、「学校の行事が次々と中止になり残念な思いをしていたが、収穫体験など代わりになる体験に参加させることができ親も子供も満足しました。」といった声が届いている。
- 開催して良かった点は、子供たちがコロナ禍で外遊びできないストレスを発散して、日常生活の活力につながったことである。アンケートからも、「友達と久しぶりに外で遊ぶことができ、楽しかった」「どの遊びも新鮮で、活動中ずっと楽しかった」などの参加者からの声が挙がっていた。また、保護者との信頼関係の構築につながり、活動に継続的に参加してくれている。

【体験活動の可能性や幅が広がった】

- オンラインでの体験活動を開催したことで、可能性が広がってきたと感じる。今後、同じような緊急事態となっても、体験活動が出来るという手ごたえがある。また、大学生ボランティアとZoomの会合を継続していた中で、もう一つ別のオンラインイベントの開催に広がった。

- （ソロテントでの）キャンプの時に、小学4年生の子供から1人で寝るのはさみしい、という声があった。しかし1人で寝るチャレンジとすることで、自己肯定感を上げることができるのではないか。一人用テントを利用し、自分と向き合うようなプログラムや、人とのつながりのありがたさを感じるプログラムなどを新たに開発できるのではと感じている。
- 試行錯誤しながら実施した様々な体験活動が参加者に喜んでもらえて、不安を抱えながらも開催してよかったと実感した1年だった。大規模イベントにはない良さが小規模な活動体験にはあり、ポストコロナ期においても、両立が可能ならば、継続して実施すべき事業だと思った。

【参加者の幅が広がった】

- 普段自然の家の日帰りの行事は、日中の活動が中心。オンラインのイベントは、子供たちが家庭から参加できるので、夜の落ち着いた時間帯に実施できた。対象者を広げることにもつながり、短時間の活動のために時間をかけて集まらなくていいというメリットは大きいと気づいた。
- 制約下での開催は、それまでニーズがあっても提供できなかった近在の子供たちへのプログラム提供の機会となり、新たな出会いやつながりにも発展した。
- ファミリー事業は、家族の絆が深まる機会となった。家族向けの事業は応募が多く、社会的なニーズの高さが感じられる。家族ごとの事業は宿泊室の配室や入浴時間帯など、セグメント分けしやすい。

【職員のスキルアップにつながった】

- 職員のスキルアップの面では、職員が考えることを習慣化することができた。今までであれば既存のプログラムをこなすだけでよかったが、考えて新たに工夫を見出すようになった。今までであれば既存のプログラムをこなすだけでよかったが、考えて新たに工夫を見出すようになった。

【オンラインの活動で時間の効率化】

- キャンプの企画会議をオンラインで実施した。オンラインは場所や、移動の時間が必要ないので、1時間の会議をこまめ開いても嫌がられない。学生は対面での会議や研修を好むが、オンラインは効率が良いというメリットがある。

イ コロナ禍に開催した自然体験活動に関する課題

コロナ禍に開催した自然体験活動を振り返って、今後の課題だと思ふことを伺った。ヒアリングを実施した団体からは、子供へのマイナス面の影響が最も多く指摘された。具体的には、集団生活活動や体験活動の経験の減少に伴い、他者との肯定的な関わりが弱くなっていると感じられること、公共マナーの低下が見られること、また、子供たちの体力の低下や生活リズムの乱れを感じるなどが挙げられた。その他の課題として、新型コロナウイルス感染対策により開催側

やスタッフの負担が大きいこと、新たな感染対策への対応やガイドライン等の更新が必要であること、コロナ禍にあったプログラムやオンラインの特性を生かしたプログラムの開発、学校や保護者に感染対策を理解いただくこと等が挙げられた。

ヒアリングで伺った意見

【子供への影響】

- 2年間のコロナの影響は児童に大きく表れていると感じている。他者との肯定的な関わりが弱く、否定もしくは無視する関り方が今まで以上にみられていると感じる。子供たちには、体験を通じて、苦楽を共にし、お互いを尊重し合う経験が今後もより一層必要と感じる。しかし、児童が楽しければよしとする教員もおり、児童の気づきや学びを育む体験として、何のために体験学習を行うのかを理解し、児童に寄り添い、見守り、時には背中を押すような指導者の環境の整備も必要と感じる。
- コロナ禍で社会が痛み、その影響を保護者も受けている家庭が増えたことで、体験活動の機会が必要な児童からさらに遠ざかってしまう傾向がある。キャンプにお金を出せない家庭の子供もいる。以前、市役所から低所得者層も参加できる体験活動の企画を作るように依頼があったが、財政面で厳しく事業化できなかった。低所得家庭の児童へどうアプローチして体験の機会を継続的に提供できるのか不安を感じている。10年、20年後には、社会を担う人材の育成（人間力）の仕組みを学校教育や青少年健全育成の分野で注力して取り組まなければ、このコロナの影響がさらに将来の社会問題を引き起こすと危惧する。
- 集団生活（宿泊）経験の減少に伴う、小学生をはじめとした子供の入浴などの公共マナーの低下が懸念される。コロナ禍で、集団生活の経験が少ないのか、5年位前とのギャップが大きいと感じる。
- コロナ禍前と同じ活動をしていても、子供たちが疲れやすい。活動の制約によるストレスだけでなく、体を動かす機会が極端に減っている。体力だけでなく、生活リズムが崩れている印象を受けた。コロナ禍前から年齢や体力に違いのある集団で活動しており、必要な子供は個々人で適宜休憩をとるようにしていた。コロナ禍だから、体力低下に合わせて活動内容を変えた、ということはない。
- 自然体験活動自体が、3密の回避やソーシャルディスタンスを確保しやすい活動である。メディアや報道で新型コロナウイルスに恐怖を抱きすぎてしまい、子供を家から出さない家庭もあり、この時期に体験しないといけぬ機会を奪っていることが多々あると思う。公立の小学校でもコロナ陽性者が1人も出ると、全ての子供の体験が奪われる。修学旅行も延期・中止となり、今の時期にしか体験できないことが奪われていると感じる。子供たちの体験活動の観点に立って、政府の方でしっかりと科学的に考えてもらいたい。体験を止めないために行政や学校がどう判断すべきなのか、コロナ禍が終わった後も考えていかないといけない。経済だけでなく子供の体験・成長を社会全体で考えていかなければいけない。

【開催側・スタッフの負担が大きい】

- 様々な制限があることで、大人数での活動ができないため、全体を2グループに分けて、交代で活動せざるを得ないため職員の負担が大きい。指導系の職員に限らず、食堂や清掃等のコロナ対策によりすべ

ての職員の負担が増している。

- 自然体験活動の指導に当たるスタッフの人材面、体制面を補強することが最大の課題だと考えている。経済状況もあり人件費を増やすことができない中、人手不足で体制が全く整わない。ニーズはあるが供給できない状況である。
- あちこちに消毒を設置して感染対策をしてきたが、まだまだ不十分なところがあると思う。たまたま体調を崩すこともなく、無事に開催できているが、開催する側は常にストレスを感じている。

【新たな感染対策への対応・ガイドライン等の更新・見直し】

- 新型コロナウイルスに関する新しい知見や、ニュースで取り上げられた事例を確認して共有することは大事だと考えるが、その新しい知見がガイドラインに更新されていない。1人が新しい情報を持つだけでなく、皆で共有していくための努力をしていかないといけない。
- ボランティアの受け入れ基準は、感染状況によるが、厳しい基準を設けるのか、基準を緩めるのかの判断が難しい。ワクチン接種歴の確認、当日抗原検査の実施の基準だと、ボランティア担当の負荷が大きい。

【コロナ禍にあったプログラム、オンラインのプログラムの工夫】

- 集団での活動・生活を軸にした既存プログラムが多いこともあり、子供たちに対する教育効果は弱まっているように感じる。仲間意識を持つことで困難も乗り越えられるが、コロナ禍では実施しにくい。集団活動（生活）を軸にプログラム構成されているものが多いので、それを人数制限だけでなくコロナ禍にあったプログラムに変えていく必要がある。
- ハイブリッドで体験活動を実施して、オンラインでもコミュニケーションは取れるが、周りの雰囲気や空気を読み取るようなコミュニケーションは難しいと感じた。対面での開催と違って、オンラインでは対話について独特のタイミングが必要。対面では、子供たちが一斉に話しはじめるという場面があるが、オンラインでは同時に話し始めると聞き取りにくくなるので、その点の配慮が必要。

【学校や保護者への説明・理解】

- コロナ禍で制約がある中での受入事業に関して、先生方からは感染症対策がしっかりされていて安心、という声はいただいたが、先生方にはその点を保護者の方に伝えるのが難しいと言われた。分かりやすくホームページに公開しているが、それぞれの立場での感じ方があり難しい。
- 学校や保護者といった参加者の新型コロナ対策（安全・安心）への理解。

3 ヒアリング対象者別の活動・プログラム概要

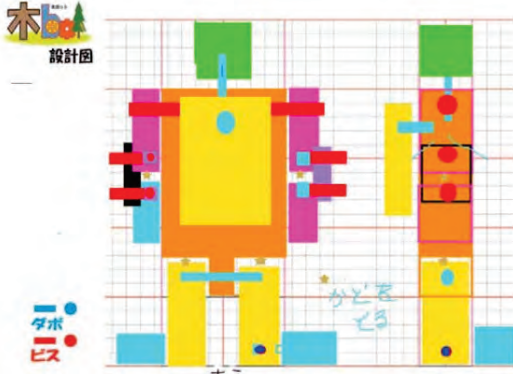


(1) 周南市大田原自然の家

法人種別	市立
所在地	山口県周南市
運営法人名・施設名称	周南市大田原自然の家
ヒアリング実施日	2021年12月15日(水)11:00~11:30
ヒアリング形式	電話
ホームページURL	http://gokan-furusato.org/ootabara/
活動の名称	木 Bot Lab -お家からオンラインで参加するハイブリット体験活動-
開催場所	オンライン
開催時期	令和2年10月18日(日)15時~17時、10月31日(土)15時~17時(2日間)
対象者	小学校5年生から中学生(参加人数4名)
申込方法	一般公募
企画・開催	周南市大田原自然の家、山口大学野外活動サークル「トムソーヤズ」含む大学生ボランティア(11回の会合に延べ125人が参加)
活動・事業の目的・ねらい	<p>【開催の経緯】</p> <ul style="list-style-type: none"> ○ 全国で緊急事態宣言が発令された令和2年春から夏休みにかけて、大田原自然の家においても主催事業の開催が難しい状況にあった。また、主催事業に関わる学生ボランティアについても、大学のサークル活動を自粛しており、キャンプに関わるボランティアを育成できない状況があった。 ○ ボランティアの育成活動を継続する必要があるものの、活動の見通しが立たない中、大学生ボランティアと一緒に Zoom を活用した体験活動を企画研究することとなった。令和2年5月から話し合いを始めて、計11回の会合とトライアル実施による見直しを重ねて、10月に開催した。 <p>【目的・ねらい】</p> <ul style="list-style-type: none"> ① コロナ禍で発達したオンラインツールと実体験とのハイブリット体験活動の可能性の研究 ② コロナ禍で子供たちが自由に外遊びすることができない中での、木 BotLab を一つのツールとした体験活動プログラムの実施
活動・プログラムの内容	<p>【概要】</p> <ul style="list-style-type: none"> ○ オンラインツールの Zoom を使って、木のロボット「木 bot」を設計し、後日自宅に届いた部品を、それぞれの家でみんなと話しながら組み立て完成させるハイブリットな体験活動。対象者は小5年生から中学生で、参加費用は1人1,000円(材料代、部品送料)。計2時間×2日間のプログラム(山口県の体験学習法である AFPY の手法の流れに沿ったプログラムを設計) <p>※AFPY: アフピー (Adventure Friendship Program in Yamaguchi) は、他者と</p>

	<p>かかわり合う活動を通して、個人の成長を図り、豊かな人間関係を築くための考え方と行動の在り方を学び合う、山口県独自の体験学習法</p> <p>https://www.pref.yamaguchi.lg.jp/cms/a50400/afpy/tebiki.html</p> <p>【プログラムの流れ】</p> <p>(1) 10月18日(日) 15時～17時(2時間) オンラインツール Zoom の使い方・アイスブレイク・木 bot の設計</p> <ul style="list-style-type: none"> ○ キャンプ・カウンセラーが主導しながら、参加した子供たちが2人1組のチームに分かれて、Zoom で話し合いながら、木のロボットを設計した。 ○ 子供たちがチームになって話し合う合意形成の過程が大事なので、チームで同じ一つの木 bot を設計。1チームには、進行役とサポートの2名がついた。 <p>(2) 木 bot の部品を参加者に発送</p> <ul style="list-style-type: none"> ○ コロナ禍なので、主催者側が、子供たちの設計した木 bot の設計図に基づき、1週間かけて木で部品を作り、参加者に部品を郵送。 <p>(3) 10月31日(土) 15時～17時(2時間) 木 bot の組み立てと仕上げ・振り返り</p> <ul style="list-style-type: none"> ○ 参加者がそれぞれの自宅からオンラインであつまり、設計図を確認しながら木 bot を組み立てた。参加者一人一人の個性を出すために、組み立てた木 bot にペイントデコレーションをして仕上げをした。 ○ その後、各自の工夫やこだわりをみんなに発表をした。自分たちが設計したものを組み立てて感じたこと、工夫したところ、みんなからの意見を受けて、振り返る活動をした。
工夫した点	<ul style="list-style-type: none"> ○ 11回のミーティングや運営側でトライアルをした振り返りの中から、木 bot のグループは少人数のほうが良いことや、進行役の他にサポート役がいる方がよいこと等がわかり、試行を繰り返しながらバージョンアップした。 ○ 説明の仕方、進行の仕方、木 bot の設計方法、グループの人数等について工夫を重ねた。
活動や取組の成果	<p>【大学生ボランティアの声】</p> <ul style="list-style-type: none"> ○ 大学生からは、心の距離感を把握するのが難しいが、Zoom ではマスクをしないので顔が見えるのは有効だったというフィードバックがあった。また、対面での開催と違って、オンラインでは対話について独特のタイミングが必要。対面では、子供たちが一斉に話しはじめるという場面があるが、Zoom は同時に話し始めると聞き取りにくくなるので、その点の配慮が必要。 <p>【参加者の声】</p> <ul style="list-style-type: none"> ○ 子供たちの振り返りでは、楽しかった、未知との遭遇、ワクワクしたという声があった。 <p>【成果・よかったこと】</p> <ul style="list-style-type: none"> ○ 木 bot を開催したことで、可能性が広がってきたと感じる。今後、同じような緊急事態となっても、体験活動が出来るという手ごたえがある。 ○ また、大学生ボランティアと Zoom の会合を継続していた中で、もう一つ別のオンラインイベントの開催に広がった。例年、七夕の行事を企画していたが、コロナ禍であったため、オンライン上で紙芝居を作り、子供たちに向けてオンラインの紙

	<p>芝居イベントを開催した。</p> <ul style="list-style-type: none"> ○ 普段自然の家の日帰りの行事は、日中の活動が中心。オンラインの七夕の紙芝居上演イベントは、子供たちが家庭から参加できるので、夜の落ち着いた時間帯に実施できた。対象者を広げることにもつながり、短時間の活動のために時間をかけて集まらなくていいというメリットは大きいと気づいた。 ○ 今年の冬は、各大学の交流目的とした、わくわくキャンプ超会議を実施。キャンプの企画会議をオンラインで実施し、その成果として大田原自然の家で日帰りの活動、わくわくキャンプ超会議Ⅱを実施した。オンラインは場所や、移動の時間が必要ないので、1時間の会議をこまめ開いても嫌がられない。学生は対面での会議や研修を好むが、オンラインは効率がよいというメリットがある。 ○ コロナ禍以前は月1回、全体会議を開いていたが、コロナをきっかけに、スタッフの情報交換をLINEで行うようになった。
--	--

活動内容に関する URL	公開していない
--------------	---------

 <p>木 bot 設計図</p>	 <p>木 bot 作品</p>	
---	--	--

(2) 国立中央青少年交流の家

法人種別	独立行政法人
所在地	静岡県御殿場市
運営法人名・施設名称	独立行政法人国立青少年教育振興機構 国立中央青少年交流の家
ヒアリング実施日	2021年12月20日 14:00～15:30
ヒアリング形式	オンライン会議
ホームページ URL	https://fujinosato.niye.go.jp/

活動の名称	オープンハウス 2020 ～SDGs フェスタ～
開催場所	国立中央青少年交流の家
開催時期	令和2年10月25日
対象者	家族はじめ不特定多数が対象 参加者数：2150人（来場者1950人、体験活動提供者200人）
申込方法	チラシ、ネット等で周知し、事前申し込み不要
活動・事業の目的・ねらい	<ul style="list-style-type: none"> ○ 当交流の家の活動プログラムをはじめとした様々な体験活動を通して、体験活動の楽しさを体感し、体験活動の重要性の普及と当交流の家の周知を図る。 ○ また、「SDGs」をキーワードに据え、SDGsに取り組む団体の取組情報の発信と交流の機会とすることによりSDGsの啓発に寄与するとともに、関係団体とのパートナーシップを一層推進し、地域から広く必要とされる施設づくりの一環とする。
活動・プログラムの内容	<ul style="list-style-type: none"> ○ 多様な体験活動（ミッションオリエンテーリング、ピザづくり、木工体験、ジオパークすごろく、ハーバリウム制作体験 など） ○ フードドライブ&衣料品回収 ○ SDGs マルシェの開催 ○ シトラスリボンプロジェクトへの賛同および啓発 ○ 御殿場市とのコラボレーション企画（バスフェス、文化協会、国際交流協会 など）
工夫した点	<p>【イベントの事前対策】</p> <ul style="list-style-type: none"> ○ 来場者の方にはHPでの案内等を行い、体験提供者には事前に感染対策の内容をお送りし、事前の体調管理をお願いした。具体的には、当日までの14日間の間に、新型コロナウイルス感染症の諸症状（強いだるさ、咳、痰、のどの痛み、発熱、息苦しさ、下痢、嘔吐、味覚・嗅覚障害）が出た方は参加を控えるよう案内をした。 ○ HP上には、チラシと一緒に感染対策について掲載した。 ○ 体験の提供者には、メールでデータを送るだけでなく、当日の朝9時に集合してもらい、消毒液等をお渡ししながら感染対策に関して説明を行った。 ○ 来場者はほとんどが車で来るため、駐車場で来場者数を概ね管理した。 <p>【来場者の行動記録に関する工夫】</p> <ul style="list-style-type: none"> ○ 当日は、パスポートシールや名簿を活用して、来場者の行動を記録した。来場者には総合受付の時に名簿を記載してもらい、1～2000までの番号を振った。その番号に対応したパスポートシールを胸につけてもらった。それぞれの体験ブースで、

	<p>来場者記録表に、パスポートシールの番号と来場時間を控えていただいた。これにより、来場者の行動を記録することができた。</p> <p>【体験ブースにおける感染対策の工夫】</p> <ul style="list-style-type: none"> ○ 団体毎に人数制限・換気・消毒の状況を「案内シート」に書いてもらった。 ○ 食事関係のブースは、来場者が調理を行うものは用意したが、外部の方が食事を提供するという事はなかった。 ○ 各ブースの人数制限は、団体毎にルールを作ってもらい、ボードに混雑状況等の状況を記入していただいた。 ○ 各体験ブースでの感染対策は、団体の要望に応じてパーテーション等の提供は行ったが、基本的には団体の取組に任せる形とした。
<p>活動や 取組の成果</p>	<ul style="list-style-type: none"> ○ 新型コロナウイルス感染症の影響で、多くの体験活動の機会が失われた社会情勢の中で、可能な限りの感染防止対策（名簿の提出、パスポートシールを用いて各体験ブースで来場者を記録、換気・消毒タイムの設定 など）を講じ、多くの方々のご理解・ご協力を得て、これまでとは違う新しい生活様式を踏まえた体験活動の機会を提供できたことは、施設開放事業を実施する際のモデルケースとなると考えている。 ○ 「SDGs フェスタ」と題して、体験活動とSDGsの繋がりを示したことで、その認知度を高め、地域と共に考える機会とすることができた。 ○ イベントがあるだけでも、子供たちはうれしいと思う。 ○ コロナ禍だからなんでも中止にするのではなく、体験活動をしたいと思っている指導者方たちと相談しながら、こういった形であれば体験を提供できるか考えていきたい。
<p>活動内容に 関する URL</p>	<p>オープンハウス 2020 報告書 https://fujinosato.niye.go.jp/app/wp-content/uploads/2020/11/848ba2addfb42ec5831d9e0c75f63bab.pdf</p>

オープンハウス2020 来場者記録表

体験ブース		施設名: NO.9		施設名: NO.1	
NO.	来場時間	番号	NO.	来場時間	番号
1	10:00	01	26		31
2		02	27		32
3		03	28		33
4		04	29		34
5		05	30		35
6		06	31		36
7		07	32		37
8		08	33		38
9		09	34		39
10		10	35		40
11	11:00	1	36		41
12		2	37		42
13		3	38		43
14		4	39		44
15		5	40		45
16		6	41		46
17		7	42		47
18		8	43		48
19		9	44		49
20		10	45		50
21		11	46		51
22		12	47		52
23		13	48		53
24		14	49		54
25		15	50		55

※来場時間の記入は、15～20分までお願いいたします。

ブース用來場者記録表

体験・見学ができます
 の購入ができます

ただいまブース、オープン中です
げんざい よていじかん
現在のオープン予定時間
 ~~~~~

**ただいまブース、クローズ中です**  
にんすうせいげんちゆう かんき しょうどくさきようちゆう  
**人数制限中 または 換気・消毒作業中**  
じかい よていじかん  
**次回のオープン予定時間におこしください**  
 ~~~~~

ブース用案内シート



参加者用パスポートシール



体験ブースでの受付の様子

(3) 熊本県立豊野少年自然の家

法人種別	NPO 法人
所在地	熊本県宇城市
運営法人名・施設名称	熊本県立豊野少年自然の家
ヒアリング実施日	2022 年 1 月 7 日(水)11:00~11:30
ヒアリング形式	電話
ホームページ URL	http://www.k-seishonen.com/toyono/
活動の名称	SD(ソーシャルディスタンス)レクリエーション
開催場所	主に屋内
開催時期	宿泊、日帰りで利用する団体が通年活用可能
対象者	どなたでも(小学生が主)
申込方法	宿泊、日帰りの受入事業の中でレクリエーションとして提供
活動・事業の目的・ねらい	コロナ禍で活動が制限される中、少しでも仲間と一緒に楽しく活動できるよう極力、密を避け、道具の共有が少ない活動を提供する。
活動・プログラムの内容	<ul style="list-style-type: none"> ○ 宿泊、日帰りの受入事業のレクリエーションとして、SD レクリエーションを実施している。 ○ SD レクリエーションは、①スリッパとばし、②目つぶり片足立ち、③足し算的当て、④おはじきギリギリはじき、⑤新聞ウォーク、⑥しりとリレー、⑦KAN タワー、⑧とよドン神経衰弱の 8 種目で、班ごとに得点を競い合うゲーム。 ○ 新型コロナウイルス流行前は、とよリンピック(チャレンジランキングというようなミニゲームのレクリエーション)、昔遊びリンピック、レクリンピックの 3 種のレクリエーションを提供していた。 ○ 新型コロナウイルス流行後に、既存のレクリエーション活動の中から、密集したり、1つの道具を皆で共有したりする活動を避けるよう、1つずつ活動をチェックして、SD レクリエーションとして組み合わせて提供している。
工夫した点	○ コロナ禍で制限がある中、一から活動を考えて作り上げるのは時間、費用の面でも難しいため、既存のレクリエーションゲームのプログラムから、極力密を避け、道具の共有が少ない活動を選別して、一つのプログラムを作り上げた。県が設けた制限をふまえ既存活動ベースで実施できることをやっている。
活動や取組の成果	<ul style="list-style-type: none"> ○ コロナ禍でも安心して活動することができた。特別、SD レクリエーションに対してという声はあまりないが、他の活動も含めて、心配されている学校や団体も多いため、ここまで対策してあることで安心できる、体験ができて良かったという声はよく頂く。 ○ 学校等の団体が来られる中で、施設での対策は徹底している。制限されながらも SD レクリエーションに限らず、他の活動も含めてできているということで満足いただけていると思う。
活動内容に関する URL	公開していない

SD レクリエーション ルール

- | | |
|--|--|
| <p>1 スリッパとばし (スリッパ2つ、メジャー)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・スリッパをどこまで飛ばせるか。良い方の距離を測定 | <p>【時間制限】なし
【一度に行う人数】1
【チャレンジ回数】1人2回</p> |
| <p>2 目つぶり片足立ち (輪っか、ストップウォッチ)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・目をつぶって片足でどのくらい立っているか。 | <p>【時間制限】最長1分間
【一度に行う人数】5人まで
【チャレンジ回数】1人1回</p> |
| <p>3 足し算的当て (ドッジビー5つ、RD 枠、ライン)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・1人5投。ドッジビーが当たって抜けたボードの数字の合計が点数。 | <p>【時間制限】なし
【一度に行う人数】1人
【チャレンジ回数】1人5投</p> |
| <p>4 おはじきギリギリはじき (おはじき10個、点数表示メジャー)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・おはじきをはじき、できるだけ高い点数の所で止められるか。 ・トクロゾーンを超えると0点。 ・2回チャレンジし、点数をたす。 | <p>【制限時間】なし
【一度に行う人数】1人
【チャレンジ回数】1人2回</p> |
| <p>5 新聞ウォーク (新聞紙、マーカー、ストップウォッチ)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・体に新聞紙を貼り付け、コースを何周できるか ・新聞紙が体から落ちたらスタートからやり直し | <p>【制限時間】30秒
【一度に行う人数】1人
【チャレンジ回数】1人1回</p> |
| <p>6 しりとリレー (しりとリレー用紙、鉛筆、バインダー、ストップウォッチ)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・1人目の人にお題を伝える。(全員声に出してはいけない。) ・2人目以降は前の人の書いた言葉にしりとりを続けていく。(2周) ・アンカーは最後に「ん」がつく言葉を書いて終わらせる。 ・アンカーが終わらせられなかったら、しりとりを続けてもよい。その後は誰かが「ん」で終わらせる。 ・しりとりが終わった時間が点数。 | <p>【時間制限】なし
【一度に行う人数】5人
【チャレンジ回数】全員で1回</p> |
| <p>7 KAN タワー (空き缶、ストップウォッチ)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・円になって座り、中心に空き缶を置いておく。 ・スタートの合図で順番に缶を積み上げていく。 ・終了した時点で手を離し、積み上げた缶の数が点数。 | <p>【時間制限】3分
【一度に行う人数】5人
【チャレンジ回数】全員で1回</p> |
| <p>8 とよドン神経衰弱 (とよドントランプ、ストップウォッチ)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・チームで順番を決め、一人ずつ交代でチャレンジ。 ・制限時間内に何ペアができるか。 | <p>【制限時間】3分間
【一度に行う人数】5人
【チャレンジ回数】全員で1回</p> |

(4) 熊本県立天草青年の家

法人種別	都道府県立
所在地	熊本県上天草市
運営法人名・施設名称	熊本県立天草青年の家 (指定管理者：ひとづくり JAPAN ネットワーク・三勢共同体)
ヒアリング実施日	2022年1月11日 10:00～11:30
ヒアリング形式	オンライン会議
ホームページ URL	http://www.k-seishonen.com/amakusa/

活動の名称	企画事業「あませい無人島キャンプ」
開催場所	黒島（天草市御所浦町）
開催時期	第1回目 令和3年7月25日～27日 2泊3日 第2回目 令和3年8月22日～24日 2泊3日
対象者	各回 小学4年生～中学生 12名
申込方法	メール 申込み多数の場合は抽選
活動・事業の目的・ねらい	天草の海や山に囲まれた大自然の中での共同生活をとおして、仲間と協働するための「思いやりの心」や「工夫する力」を身につけるとともに人間としての強さやたくましさを育むことを目的とする。
活動・プログラムの内容	<ul style="list-style-type: none"> ○ 通常は7泊8日のところ、コロナ禍では2泊3日で実施した。7泊8日から2泊3日に変更したが、2泊3日では子供たちが慣れてきたタイミングで終了してしまい、短かったように思う。せめて3泊4日は欲しい。当面、2泊3日が続けていくが、新型コロナウイルスの流行状況を見ながら、少し日数を延ばす可能性がある。 ○ 通常の7泊8日の場合は年1回の実施だった。密を回避するために参加人数を半分にしたところ、募集が多く集まり、経験できる子供を増やすために2回にした。応募者が多く、抽選となった。 ○ 短期にしたことで利用者側のニーズがどう変わったかは分からない。コロナ禍であったため、子供の外出を避けるという考えから申し込まない保護者もいたと思う。 ○ 青年の家から港までのマイクロバスでの移動をなくした。参加者は宮田港に直接集合し解散するようにプログラムを変更した。スタッフが必要な道具を青年の家で積み込み、参加者の荷物を港で積み込んで、無人島に出発している。準備段階でのスタッフの手間がより必要となった。港に直接集合・解散にすることにより、保護者からの安心を得ようとした。 ○ 7泊8日の場合、無人島泊の準備段階として、青年の家で2泊してテント設営や野外炊飯、魚釣り、危険予知トレーニングなどの研修や実習を行うが、青年の家での準備期間が無くなったことで、子供たちのスキルアップをする時間が十分になかった。 ○ プログラムは野外活動なので、コロナ禍前とほとんど変えてはいない。密になら

ないように工夫をし、例えば調理する際は、自分のものは自分で作り、他人の食事には触れないようにした。通常は飯盒で4～5人分炊くが、今回は、乾パンの空き缶を利用して一人前を炊飯した。釣った魚も自分で焼いた。一人ずつの火の管理ではなく、釜戸は班単位で、スペースを空けて利用した。レトルト食品や個包装の食品も活用した。

- 一人用テントは、コロナ禍で新たに購入した。密を避けることができ、保護者の方にも安心してもらえると考えた。参加費の中で賄う形で購入した。1張2,000円程度の値段で購入可能。使用して壊れてしまったテントもあったが、1週間程度であれば問題なく、難なくできた。
- テントを立てるのは、班の子供たちで協力して行った。2日目の活動は、前日の夜に班ごとに話し合う。食料調達やスケジュールを組む話し合いを通じて他人との関わりを持つ。宿泊は一人だが、基本的な活動は班単位で実施した。

日付	活動場所	主な活動内容
1日目	黒島キャンプ場 (無人島)	受付(9:30～) 開会行事(10:00) アイスブレイク、黒島へ移動(海上タクシー)、 ドームテント設営、生活環境づくり 海遊び講座Ⅰ『海水浴』 海遊び講座Ⅱ『釣り・魚さばき体験』 ミーティング、井戸水シャワー
2日目	集合・解散 宮田港	島探検・海遊び・食材調達(魚釣り・シュノーケリング) 自給自足の生活にチャレンジ ナイトハイク、夜光虫観察、ミーティング、 井戸水シャワー
3日目		海遊び・食材調達(魚釣り) キャンプ道具片付け、撤収・島清掃活動 黒島から移動(海上タクシー)、活動のふりかえり、 閉会行事(14:30) 解散(15:00)

工夫した点

- 例年の半分の人数で実施した。
- 以前までは本施設に集合し、マイクロバスで港まで約1時間の移動があったが、港に直接集合・解散し、密にならない工夫をした。
- 他の参加者と密にならないよう、一人用テントを活用。また、野外炊飯を個人でおこなえるように、飯盒ではなく、各自に缶入りの乾パンを支給し、その缶を利用した炊飯等を実施。

活動や
取組の成果

- 職員のスキルアップや、新たな試みができることはよかった。職員のスキルアップの面では、職員が考えることを習慣化することができた。今までであれば既存のプログラムをこなすだけでよかったが、考えて新たに工夫を見出すようになった。
- キャンプの時に、小学4年生の子供から1人で寝るのはさみしい、という声があった。しかし1人で寝るチャレンジとすることで、自己肯定感を上げることができるのではないかと。一人用テントを利用し、自分と向き合うようなプログラムや、人とのつながりのありがたさを感じるプログラムなどを新たに開発できるのでは

	と感じている。
活動内容に関する URL	公開なし
	
一人用テントでの無人島キャンプ	

(5) 公益財団法人日本 YMCA 同盟 国際青少年センターYMCA 東山荘

法人種別	公益財団法人
所在地	静岡県御殿場市
運営法人名・施設名称	公益財団法人日本 YMCA 同盟国際青少年センターYMCA 東山荘
ヒアリング実施日	2022年1月11日 13:00-15:00
ヒアリング形式	オンライン会議
ホームページ URL	https://www.ymcajapan.org/tozanso/

活動の名称	こども自然デイキャンプ、ファミリーデイキャンプ、こども自然キャンプ
開催場所	YMCA 東山荘
開催時期	日帰り：23回 宿泊：1泊2日8件、2泊3日2件、3泊4日4件、4泊5日1件（合計15回） 令和2年度は8月～3月に開催。令和3年度は6月以外で開催。
対象者	こどもキャンプは小学生～高校生対象（中高生はジュニアリーダーとして参加） ファミリーデイキャンプは年齢等の制限なし
申込方法	電話で確認後、申込書類提出。（メール、FAXも可）
活動・事業の目的・ねらい	○ 長期休校や緊急事態宣言下で不安や閉塞感の中にあった子供たちに、ストレスケアの機会を提供すること。併せて、宿泊利用の激減で閑散としてしまった施設に賑わいをもたらす活性化することをねらいとした。
活動・プログラムの内容	○ 文部科学省の委託事業で、デイキャンプを3回、宿泊を伴うキャンプを1回開催した。 ○ デイキャンプでは、沢歩き、山登りの他、清掃作業や薪割り等のワークも実施した。宿泊を伴うキャンプでは、YMCA 東山荘から徒歩でのハイキング、自転車で長距離移動するもの、野外泊、富士箱根トレイル完遂等を実施。令和3年度は山小屋宿泊を伴う富士登山プログラムも実施した。 ○ コロナ禍以前から実施していた活動内容を、感染症対策をした上で提供した。 【感染症対策の実施状況】 ○ YMCA 東山荘に集合後バス移動してハイキング等を実施した。移動には東山荘で所有しているマイクロバスを使用した。マスク着用、乗降時に消毒、窓を開けて換気といった対策を講じた。 ○ 熱中症のリスク等もふまえ、野外ではマスクをしなくてよいとしていた。 ○ 食事の時はアクリル板での仕切りのほか、子供たちも日々の感染対策が身につけていたので、プログラム内でも感染対策を実践していくことを話した。 ○ 脱衣所での感染リスクを下げる努力を行った。脱衣所では話をしないで着替えるように事前に伝えた。タオルの共有をしないよう声掛けをした。
工夫した点	○ 感染症対策について安心感を持って参加してもらえるよう「参加要件」をあらかじめ提示した。参加要件は、キャンプから遡って2週間前からの行動履歴、同居者に濃厚接触者がいないかの確認、1週間前からの検温記録等の参加要件を全員が

	<p>満たした状態で参加されている。</p> <ul style="list-style-type: none"> ○ 令和2年度に、野外プログラムや宿泊体験が次々と中止になる中で、子供が体を動かすことや、心と体の健康を伝えることは大事ではないかと内部で議論していた折に、医師による研修があった。東山荘のプログラムにおける対策にアドバイスを頂けないか相談したところ、快く受け入れていただくことができた。 ○ プログラムを提供するにあたって、医師に感染対策の観点からどこにどのようなリスクがあるのかをチェックしていただいた。感染リスクが相対的に低い野外での活動を中心とした。 ○ 医師から「リスクを0にしたいのであれば事業は実施しない方がいい。リスクは0にならないが、それぞれがリスクを下げる取組について子供に伝えることが重要だ」とアドバイスを受けた。保護者や子供に伝えることを意識してプログラムを構成した。感染リスクを0にすることはできないという前提を共通認識とした。参加する方にも、リスクに関する説明をして、感染予防の努力をしてもらうようお願いした。 ○ 実施にあたっては、プログラム参加者やリーダー、保護者の中にいる医師や看護師の方からも意見をもらい、マイクロバスの台数を増やしたり、プログラムの内容を変えたりと感染症対策をはじめ様々に検討を重ねた。
<p>活動や取組の成果</p>	<ul style="list-style-type: none"> ○ コロナ禍だからこそできることを洗い出し、近在の方向けのプログラムを提案し、文部科学省の委託を受けてデイキャンプやこども自然キャンプを開催することができた。地域の子供や家庭の向けのキャンプはその後も継続的に、頻回に開催している。 ○ 文部科学省の委託事業では、広範囲にチラシ配布ができたので、それまで主催プログラムの情報に触れていなかった方々にも認知される機会を得た。近隣の小学校の遠足で自然体験プログラムを提供していたが、地元の人にはあまり知られておらず、自然体験が身近なところで楽しめることを知ってもらう機会になった。近隣からの新規参加が多く、その後も継続して参加されている方が非常に多い。 ○ 文部科学省の委託事業により自然体験の参加費を抑えることができた。自然体験は恵まれた家庭の方だけが受けられる特別なものではない。ピアノを習うなどの習い事の費用は出しても、自然体験のために費用負担することを選ばない家庭もあると思う。受託事業のデイキャンプは参加費 1,000 円だった、この参加費であれば行ってもいいという方は多かったのではないかと。デイキャンプに一回参加した方が、その後も継続参加してくれたことや、デイキャンプに初めて参加し、その後宿泊に来てくれた方もいる。 ○ 子供の振り返りで「コロナウイルスの影響による外出自粛で、なかなか外で遊ぶことができなかったため、徐々に自然の中で思い切り遊べてうれしかった。」「コロナの影響でなかなか来れず、自分にとって運動がしっかりできる唯一の場がなくなっていたので、徐々に来てみんなに会えてうれしかった。」という声があった。野外活動で閉塞感から解放されることは、年齢を問わず大切な機会の提供になったのではないかと考えている。富士登山などの、のんびりゆっくり楽しい、みんなと一緒に楽しめる、負荷が小さいけど外で楽しめる、といった運動が次に

	つながるプログラムだと考えている。外で自分の足で歩くことは、自分の体を自分で使えるようになることであり、そういう機会をなるべく提供したい。
活動内容に関する URL	https://www.facebook.com/natureprogram/
	
富士登山の様子	

(6) ガールスカウト香川県連盟

法人種別	任意団体
所在地	香川県丸亀市
運営法人名・施設名称	ガールスカウト香川県連盟
ヒアリング実施日	2022年1月12日 10:00-11:30
ヒアリング形式	オンライン会議
ホームページURL	—

活動の名称	ソログルキャンプ ※「ソロ」と「グループ」をつなげてソログルキャンプ。
開催場所	南川自然の家
開催時期	令和2年11月 1泊2日
対象者	ガールスカウトに所属する会員とその知人が対象。 小学生中心で、中学生・高校生 約20人の子供が参加。
申込方法	ガールスカウト香川県連盟に所属する会員からの事前申し込み
活動・事業の目的・ねらい	<ul style="list-style-type: none"> ○ 自然の中で仲間と協力し、楽しくキャンプをする ○ ソログルキャンプの前に、文部科学省の予算を使った野外活動を実施した。その時に久しぶりに野外でデイキャンプを行い、子供は走り回りとても喜んでいました。外で、牛乳パックを使った焼きそばを作るだけでも大喜びであった。他にも、ホットサンドメーカーで肉まんとおまんを焼き、外で食べたらとても美味しかった。この時の経験が、コロナ禍に野外活動を広げるきっかけになった。
活動・プログラムの内容	<ul style="list-style-type: none"> ○ 1泊2日の宿泊キャンプで、ソロテントの設営、ミニ運動会、野外炊飯(一人鍋)、お一人様タイム等の活動を行った。 ○ 普段のガールスカウト活動は幼稚園で行っており、活動の備品も置かせてもらっている。幼稚園に集合して荷物を積み込み、参加者の健康観察をして、車で40分ほどの開催地へ移動した。コロナ禍での送迎は、基本的には参加者の保護者をお願いしている。どうしても無理な場合は、車の窓を開け、会話をしない形で例外に対応している。 ○ コロナ禍前は、事前に準備集会を行い、自分の荷物を準備して集会の会場に持ってきてもらって荷物確認を行っていた。この時はプリントを配り、各家庭にて点検してもらう形をとった。 【ソロテントの設営】 ○ コロナ禍前の活動の中で、段ボールハウスを手作りした経験があった。コロナ禍でイベントが中止になり活動予算が浮いたので、100円均一ショップで売っている支柱などを柱に使いながら、段ボールハウスで培ったノウハウを生かし、ソロテントを作るという発想になった。子供たちもソロテントを自分で作ることに抵抗なく取り組んだ。 ○ 宿泊場所は、廃校になった小学校をキャンプ場にした会場で、小学校教室内に分散してソロテントを設営した。広々とした空間利用を心がけ、一般的な小学校の教室の広さにテント4張を4隅に設置した。大人・子供合わせて27名の宿泊に対

し、1 教室に4名ずつを3教室、残りはホールに分散した。いずれも定員の半分以下とし、ソロテント同士の距離を離し、テントの出入口の向きも変えた。

- ポップアップテントを持参した子供は、入口だけカーテンや布でふさいだ。スカウトは一人一人ロープを持ち歩き、テント間の距離を測り、テントの間隔を調整した。ビニール傘を何個かつないで、寝床を作った例もあった。各自テントが出来上がると、それぞれどんなテントを作ったかを見に行き楽しそうだった。屋根や壁部分にあまりにも隙間の多いテントについては、ホームセンターなどで安価で手に入る、業務用の緩衝材などを数メートル事前に準備して、隙間をふさぐために使用した。
- ソログルキャンプで実施したテントを自作する方法は、雨には耐えることができないので屋外での実施は難しい。屋内のホールや教室を広く使っている。グループ内で換気係を決めて、1時間に1回は換気をするようにしていたが、実際には、出入りが常にあり常時換気のような状況だった。

【ミニ運動会】

- ミニ運動会の競技は、大勢で固まって行う団体戦はやめてソロ競技を入れるなど、競技候補を出しながら時間内にできる種目、接触を避けられる種目を選んだ。リーダーの中に幼稚園教諭などもいるため、競技アイデアを出してもらった。パン食い競争は人気なため、コロナ禍での実施においては、最初に狙ったパン（袋入り）を最後まで取るように徹底した。




【ソロクッキング】

- ソロクッキングでは、折り畳みの簡易コンロと焼き網、固形燃料を揃えた。夕食は、使い捨てのアルミ鍋で温かいものを煮る『一人鍋』、という形でソロクッキングを行った。感染状況によってはキャンプが中止になる可能性があったため、参加費は取らない代わりに食材を各自で用意する形にした。それぞれが家であらかた材料を切ってきたり、一人分の材料を持ってきたりした。鍋の食材は各自が家から持ってきたが、ご飯も必要だと思い、おにぎりは買って用意したものを配った。全員が並んで取りに来ると混雑するため、配給係を決めてグループごとに配った。お互いに味見をしないと約束をした。
- キャンプの準備集会では、参加者同士でメニューの相談をしたり、発表したりしていた。
- 朝食は、食パンや野菜、ウインナーを各自が簡易コンロと網を使って焼いた。
- 炊事場のテーブルのパーテーションは、現地に行ってから作った。下見をした時に、横の間隔は十分に確保できることが分かったが、向かい合わせの子供が会話したら飛沫が飛ぶと思い、パーテーションを作成した。園芸の支柱に、緩衝材やラップを張って作成した。

【お一人様タイム】

- ソログルキャンプでは風呂の時間を設定していない。風呂は、一緒に入ると水浸しになることもあり、10分で上がることも難しい。冬場のキャンプをメインにしているため、体が冷えて体調を崩すこともあるため、1日くらい入らなくてもよいと考えている。風呂をやめたら時間に余裕ができ、それによってお一人様タイ

	<p>ムを作った。</p> <ul style="list-style-type: none"> ○ 夜のお一人様タイムでは、当初は子供たちのテンションが上がり、他の人のテントに入ってしまうこともあったので、「一人になって」と声掛けをしななければいけないくらいだった。お一人様タイムの時間に小腹がすいてパン食い競争で獲得したパンを食べていた子供もいた。お一人様タイムの後は、マシュマロを入れたココアを飲むことが習慣となっている。
工夫した点	<ul style="list-style-type: none"> ○ ソロテントの工夫：100円均一ショップで売っている支柱などを柱に使いながら、段ボールハウスで培ったノウハウを生かし、参加者各自がソロテントを自作した。 ○ ソロクッキングの工夫：お揃いの布バッグに、簡易コンロ・焼き網・ミニフライパン・固形燃料・軍手・マッチ・布巾を入れ、各自が持参している。コロナ禍で活動費に余裕がある分、それらの購入費に充て、体験で参加する子供にも提供している。 ○ ソロクッキングで、当初はマッチを擦るのを怖がる子供もいた。最初はマッチが怖くて、火がついた段階で固形燃料に持っていけずにその場で捨ててしまっていたが、今は大丈夫になっている。 ○ 野外セットは、自宅に持ち帰れるようにしている。家でもう一度ホットケーキを焼いてみよう、保護者の方とやってみよう、というように家でも使える。庭で作っていたら近所の子が見に来た、という報告もあった。 ○ 声掛けの工夫：一斉に行動する、というこれまでのガールスカウトの活動スタイルではなくなったので、まとまりに欠けるということがないように、声掛けをした。各自が活動しているけれど、みんなの気配を感じられることが普通になるようにしていく。 ○ 感染対策をしながら関係づくりができるような工夫として糸電話を使った。キャンプ中は子供たちのテンションが上がり、つい、はしゃいでしまうので、子供同士でくっついて会話をしないために糸電話を使ったことがある。仲間と話をしたかったら、あえて糸電話で話してみようと、紙コップとタコ糸で作った。ハサミやテープなどの文房具は各自が持参しており、紙コップとタコ糸を用意した。各自の寝る場所はソロテントで固定されており、早くにテントが仕上がった子供が暇そうにしていた時に、これだったら離れていても会話ができる、と糸電話を作った。 ○ 野外活動は香川県連盟全体で取り組んでいる。『合同キャンプ』にしているので、友達でも他の団の子供でも参加できる。香川県連盟として今年度10回くらいやっていく。それをどうやってモチベーションを保ちながら継続できるかと考え、企画を担当した団に県連盟から1回5000円のプログラム料を支払うことにしている。食材費や会場費などで出費がかさむ場合は、参加費を徴収しても良い、と担当団の裁量に任すようにしている。県連盟からプログラム料の補助があれば、担当する団の負担も小さくなる。
活動や取組の成果	<ul style="list-style-type: none"> ○ 新型コロナによる制約下でデイキャンプを開催し、野外での体験が子供の心を開放する、ということを実感した。 ○ 今までは、5人1グループで料理をすると、活発な子供だけが料理し、また年少の子は見るだけ、というようなこともあった。ソロクッキングでは小学2年生でも

	<p>自分の晩御飯は自分で作ろうと責任を持って取り組む。</p> <p>【翌年度の活動の展開】</p> <ul style="list-style-type: none"> ○ 令和3年度は、宿泊は1回のみ、あとはデイキャンプという形で年間10回ほど企画した。令和3年12月に1泊2日で幼稚園を会場にクリスマスキャンプを実施した。その時も、ソロスタイルで行った。令和3年度は、自分の部屋（ソロテント）をいい環境にすることに重点を置き、ぬいぐるみの持ち込みも許可したので、自分の部屋が安心していられる場所になっていた。 ○ 最初の『お一人様タイム』では、なかなか一人になれず、いかに自分から一人の時間を過ごすかに意識を向ける必要があった。1年経ったら子供も一人で過ごせるようになった。本を持ってきた子供や、毛糸で遊んでいた子供もいた。 ○ ソロクッキングでは、子供から次のメニューのリクエストを募り、共に相談しながら決めている。パンケーキだったらハロウィンと絡めたデコレーションを施すなど、レクリエーション要素も追加している。食材を混ぜる時はジップロックを使ったり、ごみは基本持ち帰ったりするなど、できる限り準備や片付けの負担を減らしている。 ○ クッキングセットは持ち帰って、家庭でも楽しんでもらえている。特に今年度は年間10回以上の野外活動を予定していて、野外料理セットを使ったプログラムも、最初はマッチを擦ることから始まり、だんだんとスキルアップできるようにしている。 	
<p>活動内容に関する URL</p>	<p>公開していない</p>	
		
<p>ソロテントの設営</p>	<p>ソロクッキング</p>	<p>ソロクッキングの野外セット</p>

(7) 三の倉市民の里 地球村

法人種別	市
所在地	岐阜県多治見市
運営法人名・施設名称	三の倉市民の里 地球村
ヒアリング実施日	2022年1月12日 15:00-16:30
ヒアリング形式	電話
ホームページ URL	https://www.tajimi-bunka.or.jp/chikyu/

活動の名称	(小学校学校合宿) 野外活動体験支援事業
開催場所	三の倉市民の里「地球村」
開催時期	令和2年10月～12月 日帰り
対象者	小学校5年生
申込方法	小学校からのファックスによる優先的事前受付および電話受付(随時)
活動・事業の目的・ねらい	施設で受け入れている小学校5年生の野外活動体験支援事業は、例年2日かけて行われている。コロナ禍で活動内容を再検討し、日帰りでも合宿の目的である「協力」「協調」「達成感」「絆」を経験できるプログラムを作った。体験の質は維持しつつ、日帰りにする事で利用者の不安を少なくする取り組みをした。
活動・プログラムの内容	<p>○ デイキャンプは、令和2年度ではキャンセルも多く、最終的に4件、令和3年度では、9件受けた。数は変わらずに推移しているが、宿泊から日帰りに変更した学校もいる一方、2日間かけて合宿をしたい学校もいた。2日間とも日帰りで利用した学校、宿泊を行った学校を合わせると、コロナ禍前と同じくらいの学校数を受け入れた。</p> <p>○ コロナ禍前だと、宿泊を体験することで協力して集団で成し遂げる経験を積むという学校の目標があった。修学旅行の前の準備段階として位置付けていたが、コロナ禍にあり、学校が宿泊を見直して日帰りに変更した。</p> <p>○ 基本のデイキャンププログラムは次のとおり。工作やアクティビティはいくつかの選択肢があり、その中で組み立てが可能。</p> <p>① 入所式 ② 「スコアオリエンテーリング」または「アイテム探し」 ③ 野外炊事またはカートンドック ④ 工作等のアクティビティ ⑤ キャンプファイヤー他 ⑥ 退所式</p> <p>② 「スコアオリエンテーリング」または「アイテム探し」</p> <p>○ オリエンテーリングでは、少人数のグループに分け、みんなで協力しながら競うことで達成感を味わってもらうというねらいから、スコアオリエンテーリングに力を入れた。</p> <p>○ スコアオリエンテーリングとは、地球村が有している里山を会場に、アルファベ</p>

	<p>ットを描いた缶を設置しておき、子供たちが缶を見つけて解答用紙に記入していく活動である。地球村の地図と各アルファベットのポイント数が載っている解答用紙を事前に学校に送付する。地図と解答用紙を見ながら、制限時間内により多くの得点を獲得できるよう、どのルートで巡るかを事前にグループで作戦会議をしてもらっている。</p> <ul style="list-style-type: none"> ○ スコアオリエンテーリングは、通常時より制限時間を長くするよう変更した。子供たちが森に迷わないようにチェックポイントを何か所か設け、スタッフや先生が立って子供の安全を確認した。チェックポイントを通過すると点数が加算されるようにしたことで、子供が点数欲しさにチェックポイントに立ち寄り、安全確認ができるような流れを作った。 ○ チェックポイントが密になることはなく、人は分散されていた。グループ内では一緒に行動するが、森の中で密になることはなかったと思う。 <p>③野外炊事またはカートンドック</p> <ul style="list-style-type: none"> ○ コロナ禍の感染対策で調理道具を共有できないため、火起こし体験をメインにしたレトルトカレー作りか、調理道具を使わず牛乳パックとライターで調理できるカートンドック作り体験を提供した。 ○ 学校受入時の食事は、カートンドッグとレトルトカレーがほとんどであった。学校によっては飯盒による炊飯だけは経験するところもあったが、基本はレトルトのご飯とカレーを、火起こしをしてつけた火で湯を沸かし、温めて食べていた。カートンドッグは、牛乳パックにホットドッグを入れて、子供がチャッカマンを使い牛乳パックに火をつけ温めて、各自食べる、という共同作業がない炊事になる。 ○ 食器類は使い捨てのものを使用した。お湯を沸かす鍋や飯盒は共有のものだが、紙皿などを用いてできるだけ共有するものを少なくした。 <p>④工作等のアクティビティ</p> <ul style="list-style-type: none"> ○ アクティビティでは、木の実のフォトフレームの工作、ロープワーク、秘密基地作りを行った。 ○ 秘密基地作りは、グループ単位で自然の素材を使って行う。みんなで協力する活動をさせたいという学校の希望があったこと、感染対策の観点から屋内より野外活動が望ましいこと、ロープワークと秘密基地づくりができる指導員がいたことがあり、今年度初めて実施した。
工夫した点	<ul style="list-style-type: none"> ○ スコアオリエンテーリングは、通常時より制限時間を長くするよう変更した。 ○ 子供たちが森に迷わないようにチェックポイントを何か所か設け、スタッフや先生が立って子供の安全を確認した。チェックポイントを通過すると点数が加算されるようにしたことで、子供が点数欲しさにチェックポイントに立ち寄り、安全確認ができるような流れを作った。
活動や取組の成果	<ul style="list-style-type: none"> ○ これまでは、野外炊事の中で「協力・協調」の経験を提供してきたが、コロナ禍では調理器具を共有できないといった制限があり、野外炊事では火おこしをメインの体験に変更した。そのため、「協力・協調」をねらいとするスコアオリエンテー

リングのような活動は、先生方からも喜ばれた。反響が想像以上に良かったので、コロナ禍が落ち着いた後も、スコアオリエンテーリングは先生たちに薦めていける活動の1つであると考えている。

活動内容に関する URL 公開なし



秘密基地作り



災害用の炊飯グッズを利用したレトルトカレー作り



感染予防対策を兼ねた、カートンドック作り体験



(8) 国立那須甲子青少年自然の家

法人種別	独立行政法人
所在地	福島県西白河郡西郷村
運営法人名・施設名称	国立那須甲子青少年自然の家
ヒアリング実施日	2022年1月13日 15:00～17:00
ヒアリング形式	国立那須甲子青少年自然の家での対面実施
ホームページ URL	https://nasukashi.niye.go.jp/

活動の名称	なすかしの森セカンドスクール
開催場所	国立那須甲子青少年自然の家
開催時期	2020年10月～11月 4泊5日
対象者	福島県西郷村と棚倉町の小学校8校の5年生（児童243名が参加）
申込方法	小学校・自然の家の連携により実施しており、小学校ごとの申し込み制
活動・事業の目的・ねらい	<p>○ 参加児童のみならず、教師・保護者・教育支援スタッフ・施設職員が学びあう場として、「五者の育ちの場」となるよう、5つの視点の目標を掲げて実施。</p> <p>① 自然の家では、新学習指導要領の方向性を踏まえ、教科等に関連付けた活動プログラムを提案・実施することにより、「主体的・対話的で深い学び」につなげ、集団宿泊活動の教育効果を高める。</p> <p>② 児童にとっては、自然の家が有する教育環境や自然を生かした自然体験や生活体験をすることにより、「基本的な生活習慣」を体得するとともに、自己肯定感・コミュニケーション力や実践的な態度・行動力を養う。</p> <p>③ 教職員にとっては、自然の家の教育環境・教育資源を活用した教育活動を1週間程度実施することにより、カリキュラムマネジメントの視点を学び、資質、能力の向上を図る。</p> <p>④ 大学生にとっては、支援スタッフとして関わることにより、学校教育・社会教育の理解につながり、社会人としてのキャリア形成の一助とする。</p> <p>⑤ 保護者にとっては、長期間子供と離れて過ごすことにより、子供への愛着や子育てのふりかえりの機会とする。</p>
活動・プログラムの内容	<p>○ 小学5年生が、なすかしの森に1週間滞在し、教科等に関連付けた自然体験活動を通して様々な学習をする。</p> <p>○ スクールタイム（8時半から15時半）の主体は学校側となり、標準時程に沿って教科学習を中心に実施する。教科等に関連付けたプログラムを実施する時間となる。</p> <p>活動プログラム例：「沢歩きハイキング」（理科：流れる水のはたらき）、エコアカシステムアカデミーによる「森のめぐみの体験学習」（社会：私たちの森林と生活）、焼き板（図工）、野外炊事（家庭科：ごはんのみそ汁を作ろう）</p> <p>○ なすかしの森タイム（15時半ごろから翌朝8時半）では、学校の教員は帰宅し、主体は施設側となり、教育支援スタッフが中心となって児童とともに過ごす。長期集団宿泊体験にあたる時間となる。</p>

	<p>活動プログラム例：「計画立案」、「ナイトハイク」、「キャンプファイヤー又はキャンドルファイヤー」等</p> <ul style="list-style-type: none"> ○ コロナ前と比較すると、スケジュールに余裕を持たせたことが大きな変更点。 ○ 朝夕のつどいは原則実施しなかった。理由としては、子供たちの体力の低下が挙げられる。疲れている状態だと感染しやすくなる。就寝時刻を早くし、起床時刻も余裕をもったスケジュールに変更した。朝夕の体温測定の時間を確保して、プログラムが1つ終わるごとに体調を確認した。睡眠の時間をしっかりとることを意識した。 ○ コロナ禍で、大学生が実習をできていないということを大学から聞いている。大学生スタッフの参加について、児童の保護者の了承を得るために、学生に抗原検査を受けてもらい、大学と細かな連携を取っていることを説明した。大学生スタッフの受け入れで実習の機会を提供することができ、また私達も活動の幅を広げることができた。 ○ 児童の体調の確認は、基本的には体温のチェック、体温の他にだるさ、頭痛、腹痛など10項目程を確認している。宿泊をする場合は、就寝時と起床時に子供にチェック表を記入してもらっている。基本的には、チェック表は大学生のスタッフと職員でダブルチェックを行う。学校の先生がいらっしゃる場合は独自に確認される。 ○ コロナ禍で、家庭科の授業で調理実習ができていなかった学校もあった。安全に気を付けながら、野外で距離を取った上での調理を行った。 ○ 最終日の夜に行うキャンプファイヤーでは、なるべく接触を避け、大声を出さないようなプログラムを組んだ。 ○
工夫した点	<ul style="list-style-type: none"> ○ 校長会・合同連絡会・各学校との丁寧な打合せによる相互理解、協働体制の確立を図った。 ○ 研修指導員研修会の実施により、自然体験活動で感染防止対策を実施しながら、教科等に関連付けた体験活動プログラムとして学習指導案を作成し、質の高い体験活動を可能にした。 ○ 教育支援スタッフ（大学生ボランティア等）の研修、前日準備・打合せによる安全管理の徹底を行った。教育支援スタッフに対するトレーニングは、事前に担当教授、ボランティアコーディネーターによる連絡調整を行い、大学のねらいと私たちのねらいをすり合わせた。そこで、当日までにこんな研修・準備をしてほしいという調整をした。 ○ 各学校の保護者説明会に施設職員が出向いて、事業のねらいとともに感染防止対策を説明し理解を得た。保護者説明会をオンラインで実施した学校もあった。保護者説明会用のスライドを作成して、感染対策の説明を行った。学生スタッフからの感染が心配という声もあり、学生スタッフの参加条件として、2回の予防接種と来た時の抗原検査を行うという説明をし、納得していただいた。

活動や 取組の成果	<ul style="list-style-type: none"> ○ なすかしセカンドスクールの参加児童が回答したアンケート調査結果では、「基本的な生活習慣」「自己肯定感」「コミュニケーション」の各項目について、セカンドスクール実施の事前と事後の結果を比較した時、上昇がみられた。また、1か月後の追跡調査においても効果が確認された。参加した児童からは「キャンドルファイヤーが心に残った」「(体験的な学習に対して) 楽しくてわかりやすかった」「普段より、たくさん話げできた」などの声をいただいた。 ○ 保護者からは、「子育てを振り返る機会となった」「1週間という長い期間、親元を離れる機会がなく、不安なこともあったが、友達を思いやること、仲間の大切さなど、自分なりに考え、行動し、成長することができた」などの声をいただいた。 ○ 学校現場で体験活動の時間が取れない。授業実数の確保、未履修の調整により、音楽や家庭科などの実技の実施が難しいと聞く。自然体験活動や宿泊体験の機会が制限されている。可能な限りコロナ対策を取り、少人数での事業を開催した。季節にあわせた様々な自然体験活動をはじめ、食事づくりなどの生活体験、異年齢層での日帰りや宿泊体験などの活動を体験することにより、心身のリフレッシュを図るとともに、基本的な生活習慣の確立や自立する力が身についた。 ○ 長期の宿泊体験には、途中で困難にぶつかるなど「山」がある。その山を越えた後に、子供たちのいいところが見つかる。それが、長期のセカンドスクールのよいところではないか。 ○ 令和3年4月に、大学生ボランティア同士がつながっていけるよう、苦勞したことや、対策としてよかったことを記す「引き継ぎノート」を、学生が提案してくれた。はじめてスタッフを経験した大学生や高校生から、先輩のアドバイスが心に残り、自身の成功体験につながったという意見を聞いた。
活動内容に 関する URL	

(9) 尼崎市立美方高原自然の家

法人種別	公益財団法人
所在地	兵庫県美方郡香美町
運営法人名・施設名称	公益財団法人 日本アウトワード・バウンド協会 尼崎市立美方高原自然の家
ヒアリング実施日	2022年1月14日 13:00～14:30
ヒアリング形式	オンライン会議
ホームページ URL	https://www.obs-mikata.org/

活動の名称	IT 機器（タブレット）を活用した野外活動（AR ネイチャーラリー、AR アドベンチャーラリー）の提供。
開催場所	尼崎市立美方高原自然の家、尼崎市記念公園、尼崎市西武庫公園
開催時期	2021年7月～2021年11月
対象者	尼崎市内の小学5年生
申込方法	兵庫県型自然学校における、尼崎市教育委員会を通じた市内小学校からの指導者派遣要請依頼。
活動・事業の目的・ねらい	<ul style="list-style-type: none"> ○ 体験活動を通じて、自然への感性（4感：聴視嗅触）を育み、自然への理解を深める。活動を通じて、仲間と協力する力を育む。 ○ 大学と連携し、IT 機器を活用した体験活動の提供による影響調査を兼ねている。画像で推察したことを実際の自然で体験することでリアルな体験がより生きるよう設計した。バーチャルとリアルの違いを感じ取る体験から、実体験の大切さを学ぶ。
活動・プログラムの内容	<ul style="list-style-type: none"> ○ コロナ禍以前は、小学校の4泊5日の長期宿泊の受入事業を行っていた。尼崎市教育委員会から宿泊を伴う自然学校を2年続けて行わない決定がなされ、自然学校は日帰り5日間行うこととなった。職員の派遣をともなった自然学校の支援を要望される学校が多く、教育委員会および施設を所管する尼崎市と協議をし、33校2日間の支援を目途に取り組んだ。尼崎市内の小学校が校外学習をする際、指導者を派遣して、野外教育活動の支援をおこなった。 ○ 「AR ネイチャーラリー」と「AR アドベンチャーラリー」は、コロナ禍に長期宿泊事業に変わる事業として、小学校向けの日帰りの体験活動として新たに開発したプログラムである。開発のノウハウは、関西学院大学の甲斐教授を中心として、岐阜県の情報科学芸術大学院大学の藤田教授にご協力いただいた。2020年から関西学院大学と共同研究を開始した。この事業は調査研究段階にあり、参加いただいた学校にも、まだテスト段階であると説明し調査研究にご協力いただいている。 ○ プログラムは2021年7月に美方高原でテスト実施をした。尼崎市の小学校は2021年の11月と12月で3校、300人ほどが体験。尼崎記念公園と西武庫公園を会場にして開催した。 ○ 情報端末を用いた「AR ネイチャーラリー」と「AR アドベンチャーラリー」を提供した。協力系のプログラムは「AR アドベンチャーラリー」、自然の感性を豊かにす

るプログラムは、「AR ネイチャーラリー」という仮称を使っている。小学校低学年はAR ネイチャーラリー、高学年にはAR アドベンチャーラリーを体験した。

- 尼崎記念公園や、西武庫公園など、現実の活動エリア内に設置された生き物のイラストをタブレット機器で読み込むと、イラストがマーカーとして起動するAR(※1)を採り入れている。起動画面では当施設のキャラクター「トチ坊」とともに文字情報と文字を読み上げた音声を提示し、ポイントでの課題実施を促すものとした。各ポイントでは、視覚、触覚、嗅覚、聴覚を利用した体験(ネイチャーラリー)や、グループでの課題解決をねらいとしたASE(※2)の課題(アドベンチャーラリー)を提供した。特定のポイントでは「トチ坊」と記念撮影ができる。

※1: ARは、Augmented Reality(拡張現実)の略。IT端末等を用いて、現実デジタルな情報を追加して表示させることができる。

※2: ASEは、Action Socialization Experienceの略。集団でのコミュニケーションを重視し、社会性を育成するための体験活動。

- 小学校への説明では、先生方から学校の事情やねらい、子供たちから体験活動の中でどのような姿が見られたらよいか等を聞きながら、プログラムを紹介した。紙ベースの資料では理解してもらいにくいので、動画によって直感的に判断してもらうために、新人職員が中心となってARの紹介動画を制作し、学校で見ていただいた。
- ARネイチャーラリーでは、先生と一緒に課題の内容を検討した。ARネイチャーラリーでは、まず事前学習を行う。事前学習では、教室で写真を見もらい、触るとどんな感じがするか、どんな音が聞こえるかなど、触感、匂い、音を想像して、ワークシートに記入する。
- 活動の当日は、写真の現場に行き、想像とリアルのマッチングをしてもらう。実際に体験した感覚をワークシートに記入し、振り返りの中で、想像と実際の感覚が異なることへの気づきや発見などを育む。また、現実の活動エリア内に設置された看板に、キツネやカエル、バッタ等のイラストが貼られており、タブレットを起動してかざすと、仮想現実でキャラクターが飛び出し、課題を説明する音声が流れる。グループで課題を確認して、協力して取り組んでもらう。
- 各ポイントで課題としているのは、学校の先生方にもご協力いただける長縄跳びのような活動と、スパイダーウェブや綱渡りなどの指導に熟練の経験を要するものがある。配置したスタッフは、1クラスあたり1人と、4か所のイニシアティブ系の課題に対応する人を配置している。スパイダーウェブは1人だと心もとないので、先生と協力して行う。先生と合意しながら進めている。
- 事後学習では、学校周辺で聞こえてほしい音や見えてほしい景色、匂いなどを考える機会をつくり、グループやクラスで共有する。
- アドベンチャーラリーについては、2021年段階で事前学習には取り組めていないが、今後開発していく予定。
- 新型コロナウイルス感染対策に関しては、屋内ではなく屋外で活動を提供することによって、新型コロナウイルスの飛沫感染を抑えられる、ということがベースにある。子供たちが密集してしまう点については、最初のオリエンテーション等

	<p>で注意をするが、子供の集中力が高まってくると集まってしまい、先生に声を掛けてもらった。</p> <ul style="list-style-type: none"> ○ 現状で一度に実施可能な人数は、2クラスくらいの学校の場合は、半日で体験を行う。4クラスの学校の場合は、午前と午後に分かれて対応している。AR ネイチャーラリーと、公園の樹木を使ったツリーイングとセットで実施している。2クラスの場合は1クラスがツリーイング、1クラスがAR ネイチャーラリーといった形で実施。 ○ ツリーイングでは、8人～10人の子供に対して1名指導者を置いている。小学5年生なので理解度は高い。自然の家のスタッフで補えない分は、外部講師を臨時雇用してトレーニングしながら入っていただいた。
工夫した点	<ul style="list-style-type: none"> ○ タブレットはGIGA スクール構想で使っているものではなく、専用のiPadを1台3万円ほどで40台購入して使用している。総計130万円ほど費用がかかった。GIGA スクール構想で使っている端末を使用しないのは、子供たちが美方高原まで端末を持ってくると、野外活動の最中に落とすなどのトラブルになる可能性があったためである。iPadに耐衝撃・防水のカバーをかけたうえで配布した。 ○ 3人で1台のタブレット使用、もしくは1台をグループで使用するので、皆が課題に取り組めるよう、音声でもポイントの課題が提示されるように工夫した。当初は、1グループ7人班で1台のタブレットを渡し、音声が出ない形だった。タブレットを持っている子だけが参加している様子だったため、3人に1台渡すことで、全員参加に近づけられた。協力をしてほしい、みんなが満足する空間を作るように工夫をしてみて、ということをお伝えしたところ、タブレットを交代しながら使ったり、写真を撮りあったりする姿を見ることができた。 ○ ネットワーク環境が無くてもタブレットを使えるアプリを作成して、iPadにインストールして使ってもらっている。将来的に、敷地周辺ではなく、登山など通信環境の悪い野外での実施を考えた時に、通信に頼りすぎると使い勝手が悪いのではないかと考えている。 ○ 市内の公園で実施したときには、社会科との関連付けを一部で試みた。尼崎市の子供たちに、「市のマークはどれか」、「尼崎市の花はどれか」、「小学5年生は尼崎市内に何人いるか」といった課題を与えた。体験活動しながら、教科教育のアプローチをどう模索するか、それに対し子供たちや先生がどう反応するかを分析している。学校の先生のニーズを聞くと、自然学校の時は、教科はいいから思い切り活動させてほしいという先生もいるし、教科も交えるべきという先生もいる。タブレットを使うと良いところは、設定した課題を柔軟に変えていける点である。今は10種類の課題があるが、20～30の課題を用意して、ニーズに応じて、地図上の課題を入れ替えることもできる。ネイチャーゲームとASEを混ぜることも可能になる。このような柔軟性は、IT機器を使った良いところで、各先生のニーズに対応することができる。 ○ 学校の先生には、クラス単位で動きたいという希望がある。1クラスあたり6台+提示用ということで7台あればいいと思う。余ったタブレットは引率の方に渡し、動画やカメラで子供たちの様子を撮っていただき、後日データをお渡しする。子

	<p>供も自分たちのタブレットで撮った動画や写真を共有することで、後の振り返りの時に記憶が呼び起こされて、1つ上のランクで事後学習ができるのではと考えている。</p>
活動や取組の成果	<ul style="list-style-type: none"> ○ 自然体験の中で IT 機器を使うことに対して、肯定的に捉えてもらえるかが心配だった。しかし先生や児童にアンケートをとると、ほぼ 100%が肯定的に捉えてくれていた。今後も IT 機器を使った活動をしていきたい、という回答もほぼ 100%であった。ただ、プログラミング授業がありながらも、自分たちでプログラムを制作することへの関心は 2～3 割程度であった。 ○ 2022 年度は、市教育委員会から 5 月～翌年 2 月にかけて 4 泊 5 日の自然学校をするように依頼され、尼崎市内の全校から美方高原に予約をいただいている。美方高原でのリアルな活動が生きるように、事前学習でタブレットを使ってもらい、実際に来た時に、リアルに触れた子供たちがどう反応して、どのような影響があるかを調査する予定。次の段階では、仲間づくりや自然への感性がどうなったか、IT 機器等を使ってどう広がったかという教育効果を探っていきたい。
活動内容に関する URL	<p>https://www.youtube.com/watch?v=FRU4ejmZ1P0</p>



AR ネイチャーラリーの地図



課題の説明画面



AR ネイチャーラリーの様子



タブレットを使って撮影した記念写真。

(10) 黒松内ぶなの森自然学校

法人種別	任意団体
所在地	北海道寿都郡黒松内町
運営法人名・施設名称	黒松内ぶなの森自然学校
ヒアリング実施日	2022年1月17日 13:00-14:30
ヒアリング形式	オンライン会議
ホームページ URL	http://www.buna-cross.org/

活動の名称	黒松内子ども自然体験～ぶなの森の夏休み～
開催場所	黒松内ぶなの森自然学校
開催時期	令和3年8月・日帰り3回、1泊2日2回
対象者	小学1～6年生
申込方法	SNS、メール、電話
活動・事業の目的・ねらい	各地域の感染状況や感染防止対策に十分留意した上で、自然の中での体験活動を充実する取組を全国的に展開することで、子供たちを取り巻く環境に生じている閉塞感を打破するとともに、子供たちの元気を取り戻し健やかな成長を図る。 ※文部科学省委託事業「子供たちの心身の健全な発達のための子供の自然体験活動推進事業」
活動・プログラムの内容	<ul style="list-style-type: none"> ○ 令和3年度の文部科学省委託事業では参加者を道内に限った。道外から問い合わせもあったが、感染状況次第では、札幌・小樽などの1～2時間以内に来られない地域の方はご遠慮いただくなどの制限をかけていた。参加者の年齢層は、小学1年生から中学1年生で、比較的小学3年生、小学4年生が多かった。 ○ 夏のプログラムでは、定員を10名にして、スタッフは常に3～5人つけていた。少人数で開催したため、スタッフ全員で見守る体制で、グループを分けずに活動した。なお、コロナ前は1回30名ほどが参加することもあり、ボランティアの数も多かった。 ○ プログラムの内容は、海あそび、川あそび、動物や農園作業などである。少人数での実施や、屋内でのプログラム活動を行っていないことで感染対策をした。また、スタッフの人数を手厚くし、体験の質を保っている。 ○ 海あそびでは、黒松内町内は海がないため、隣町の寿都町に移動し、日本海に面したところで活動した。漁師の許可を得て、漁港にある3～4メートルほどの堤防から飛び込みをするアクティビティである。写真は小学校低学年の子供が飛ぶ様子で、慣れてくると手を広げたり、思い思いに活動する。 ○ 川あそびでは、朱太川で活動した。ライフジャケットを着て川の流りに身をゆだねてフローティングしたり、網を使って生き物探したり、堤防の下の方から軽くジャンプしたりするアクティビティをしている。 ○ 動物に関する活動では、鶏の世話をした。泊りのキャンプでは、朝食前に朝仕事として鶏の世話をしていた。今回は鶏の世話をメインにプログラムを実施し、鶏好きの子供たちが集まった。写真は、ミミズを団子状にして食べさせている様子で

	<p>ある。</p> <ul style="list-style-type: none"> ○ 海・川で使うウェットスーツなどは、一度使ったら洗うようにしている。シュノーケリングなどは特に、自分のものは自分で使うことを徹底した。シュノーケリングは、持参される方もいるし、貸し出しも行っている。他人が使った道具を共有する状況はなかった。 ○ コロナ禍は昼ごはんを各自持参する形を取った。 ○ マスクは、屋外の活動では外してよいというようにしている。屋外でも気にする方は着用してもよいと、子供たちに任せている。水辺ではマスクが濡れて息ができなくなる可能性もあるため外している。走ったり息が上がるような活動をする場合はマスクを外してもらったりしていた。 	
工夫した点	<ul style="list-style-type: none"> ○ コロナ禍前に大人数で開催していた時は、参加者1～2人がやりたそうなことがある様子に気付いても、全体での動きやすさを優先していたところもあった。コロナ禍に参加者を絞り少人数で開催して、子供たちのやりたいという気持ちを気にかけて、それに応える時間的・人数的な余裕があった。 ○ コロナ禍で町外からのボランティアの受入を基本的には中止したことで、メインのスタッフが子供に接する機会が増えた。メインスタッフと子供たち、子供たち同士の関係性を重視した。ボランティアの場合は参加回ごとに人が変わるが、メインのスタッフは変わらないので参加者にとっても安心感につながったのではと思う。 	
活動や取組の成果	<ul style="list-style-type: none"> ○ 開催して良かった点は、子供たちがコロナ禍で外遊びできないストレスを発散して、日常生活の活力につながったことである。アンケートからも、「友達と久しぶりに外で遊ぶことができ、楽しかった」「どの遊びも新鮮で、活動中ずっと楽しかった」などの参加者からの声が挙がっていた。また、保護者との信頼関係の構築につながり、活動に継続的に参加してくれている。 ○ 文部科学省の委託事業であったため、コロナ禍であっても、参加費を抑えて自然体験活動を提供することができた。参加費が手頃だったから参加してくださった方もいる。リピートされた方もいたので、その面で大変助かった。 	
活動内容に関する URL	公開していない	
		
海あそび	川あそび	鶏の世話

(11) 公益財団法人日本レクリエーション協会

法人種別	公益財団法人
所在地	東京都台東区
運営法人名・施設名称	公益財団法人日本レクリエーション協会
ヒアリング実施日	2022年1月18日 10:00~11:00
ヒアリング形式	オンライン会議
ホームページ URL	https://recreation.or.jp/

活動の名称	おうちで60秒チャレンジ
開催場所	オンライン（動画を撮影し、Twitterに投稿）
開催時期	令和2年4月～ （今後も継続事業として続けていく予定）
対象者	誰でも参加可能 投稿件数 344件
申込方法	「おうちで60秒チャレンジ」公式アカウントをフォローして、共通ハッシュタグをつけて投稿。
活動・事業の目的・ねらい	自宅待機や外出自粛による運動不足やストレス増加などの課題解決として開催した。自宅でご家族などと一緒からだを動かすことで、運動不足解消やコミュニケーション増加の一助となることを目的としている。
活動・プログラムの内容	<p>○ 「おうちで60秒チャレンジ」は、自宅で家族などのできるレクリエーション活動（からだを動かすあそび）にチャレンジし、チャレンジの様子を撮影した動画をTwitterのハッシュタグを使って投稿するというもの。現在11種目あり、動画をTwitterに投稿すると全国ランキングに参加が可能。一人でも多くの方にチャレンジしていただけるよう、期間限定ランキングを競うキャンペーンも開催している。</p> <p>○ 「おうちで60秒チャレンジ」の参加の流れは以下の通り。</p> <ol style="list-style-type: none"> ①webサイトであそび方を確認 ②使用する用具を準備 ③スタート前から終了後までチャレンジの様子を動画撮影 ④「おうちで60秒チャレンジ」Twitter公式アカウントをフォロー ⑤共通ハッシュタグ「#おうちで60」と「#スポーツインライフ」をつけて動画を投稿 ⑥日本レク協会が動画を確認後、記録をつけてリツイート ⑦Webサイトにアカウント名と記録を公開 ⑧期間限定ランキングの上位記録には賞状と副賞（QUOカード）を授与 <p>○ 「おうちで60秒チャレンジ」の種目は、コロナ禍で新たに開発したものである。主にレクリエーション公認指導者からアイデアをもらって考案したものと、平成元年から継続している「チャレンジ・ザ・ゲーム」の種目をアレンジして考案している。秋の「あそびの日」キャンペーン2020では、新しい遊びのアイデア募集もした。ガキ大将チャレンジこと「ガキチャレ」である。大学生が普段の活動を参考にたくさんアイデアを提示してくれ、学生とともに議論して考案した種目もある。</p>

	<ul style="list-style-type: none"> ○ 基本ルールとして、日本レクリエーション協会「おうちで 60 秒チャレンジ」のアカウントをフォローして、共通ハッシュタグを付けることをランキング参加条件としている。ただ、できる限り多くの人に広げたいため、協会側からハッシュタグを検索して、基本ルールを満たしていない投稿者でも内容が合致していれば、記録に反映できるようにしている。 ○ 期間限定キャンペーンのランキング上位記録者に贈呈している賞状と副賞 (QUO カード) は、投稿者の住所に郵送している。住所や、賞状の記名をアカウント名にするかの確認は、投稿者にダイレクトメールを送って把握している。ガキチャレは、キャンペーンのサイトを作成して Web サイト上で上位記録者を公開していた。本来は全国レクリエーション大会の場での授与を想定していたが、コロナ禍にあり実現していない。 ○ 禁止行為や賠償責任、免責事項の規定については、同様の SNS を活用したコンテストやランキングを運営している団体の規定を多く拝見し、最終的に協会としての規定を設定した。 ○ オンラインを活用したレクリエーション活動・動画投稿は、他の団体とも上手く協働できればと思っている。
工夫した点	<ul style="list-style-type: none"> ○ 60 秒チャレンジの種目を開発するうえで工夫したことは、新聞紙など身近な物を使うこと、適度な運動量があること、あそび方がシンプルなこと、夢中になれること、見ていて楽しいことである。 ○ 「全国一斉『あそびの日』キャンペーン」を 2020 年秋に実施した時に、キャンペーン企画として、「おうちで 60 秒チャレンジ」のコンテストを開催した。投稿が少なくなるタイミングで、ランキングのキャンペーンを実施しており、これまで 3 回実施している。
活動や取組の成果	<ul style="list-style-type: none"> ○ 自宅のできる取り組みとしてスタートしているが、高齢者施設や公民館、小学校などでも取組可能だと思っている。また、SNS を活用することで、同日に同じ場所に集まることなくイベントが開催できることは、今後も継続できると考える。体験した人からの評判は良く、「楽しかった」「他の人ともやってみたい」という声をもらっている。 ○ 認知度が低く、当初想定していた家族単位での参加が少ない。全国にいる公認指導者やレクリエーション協会組織の人たちを中心に広げており、現場に出かけた先で高齢者や子供に推進してもらっている状況である。広報不足もあり、まだまだ参加者が少ないことが課題となっている一方で、当初想定していなかった高齢者も参加できるという気づきがあった。 ○ 「レクぼ」(レクリエーション・ポータルサイト) では、対象や活動現場に合わせた様々なレクリエーション活動を公開している。自由に見られるものに加え、今後有料コンテンツも提供していくことを検討している。
活動内容に関する URL	<p>https://www.recreation.jp/challenge</p>

(12) 特定非営利活動法人千葉自然学校

法人種別	NPO 法人
所在地	千葉県千葉市
運営法人名・施設名称	特定非営利活動法人千葉自然学校
ヒアリング実施日	2022年1月19日 10:30~12:00
ヒアリング形式	オンライン会議
ホームページ URL	https://www.chiba-ns.net/

活動の名称	ハウス食品グループ本社株式会社からの受託事業 ハウス「食と農と環境の体験教室」知って、作って、食べて、つながって！							
開催場所	オンライン開催							
開催時期	全2回のオンライン教室と自由参加の特別講座 (第1回 2021年6月5日、7月31日(特別講座)、第2回9月11日)							
対象者	小学生以上の子供のいる家族・11家族							
申込方法	ウェブサイトでの募集。事前申込・抽選。							
活動・事業の目的・ねらい	<p>【活動の目的・ねらい】</p> <p>ハウス食品グループのハウス「食と農と環境の体験教室」は、食育・環境教育活動を展開するNPO法人と、ハウス食品グループ本社CSR部が協働で行う体験型の教室。バケツ稲づくりやカレー調理、食品ロス等の環境問題に関する講座を通じて、食と農と環境のつながりの大切さを学ぶ。</p> <p>【オンライン開催に至る背景】</p> <p>○ オンラインでの実施はハウス食品グループ本社からの意向があった。作物を育てるため開始時期はずらせず、2020年度は対策が間に合わず中止。ハウス食品グループが思いを持って継続している活動であり、中止になった年度から何とか実施できないか話し合いを重ね、リアルな体験を取り入れたオンライン開催に至った。継続してきた取組を途切れさせたくないというハウス食品グループ本社の強い思いがあった。</p>							
活動・プログラムの内容	<p>○ 体験教室の実施内容は、次の通り</p> <table border="1" style="width: 100%;"> <tr> <td style="width: 15%;">第1回</td> <td>○ 「バケツ稲」 田植えの方法 ○ 「食品ロスの現状」と私たちができることを学習 ○ 「冷蔵庫にあまりがちな食材を使ったカレー」の調理デモ見学</td> </tr> <tr> <td>特別講座</td> <td>○ 「バケツ稲」 栽培中のお困りごとやお悩み解決と個別アドバイス</td> </tr> <tr> <td>第2回</td> <td>○ 「バケツ稲」 稲刈り～脱穀の方法 ○ 「わが家のフードロスカレー」発表 ○ 「温暖化の現状」と私たちができることを学習</td> </tr> </table> <p>○ ハウス食品グループ本社株式会社からの受託事業であるハウス「食と農と環境の体験教室」知って、作って、食べて、つながって！は、コロナ禍の中、初めてのオ</p>		第1回	○ 「バケツ稲」 田植えの方法 ○ 「食品ロスの現状」と私たちができることを学習 ○ 「冷蔵庫にあまりがちな食材を使ったカレー」の調理デモ見学	特別講座	○ 「バケツ稲」 栽培中のお困りごとやお悩み解決と個別アドバイス	第2回	○ 「バケツ稲」 稲刈り～脱穀の方法 ○ 「わが家のフードロスカレー」発表 ○ 「温暖化の現状」と私たちができることを学習
第1回	○ 「バケツ稲」 田植えの方法 ○ 「食品ロスの現状」と私たちができることを学習 ○ 「冷蔵庫にあまりがちな食材を使ったカレー」の調理デモ見学							
特別講座	○ 「バケツ稲」 栽培中のお困りごとやお悩み解決と個別アドバイス							
第2回	○ 「バケツ稲」 稲刈り～脱穀の方法 ○ 「わが家のフードロスカレー」発表 ○ 「温暖化の現状」と私たちができることを学習							

	<p>ンラインでの開催となった。</p> <ul style="list-style-type: none"> ○ 様々な地域からご参加いただいた全 11 家族の皆さんと、自宅で稲を育てる体験、「食品ロスをなくす」をテーマで考えたオリジナルカレー調理の体験を通じて、オンラインならではの“食”と“農”と“環境”のつながりを学んでいただいた。
工夫した点	<ul style="list-style-type: none"> ○ 子供たちにいかにメッセージを伝えるかを意識している。ただ話すだけではなく、体験を伴うことが必要である。また、各家庭でのリアルな体験を、オンラインで集まった参加者間でどう共有し、一体感を持ってもらうかは大きなポイントだった。参加者同士が会えない中、一緒に実施する仲間である、みんなでやっているという一体感やつながり、コミュニケーションの場をどう作るか。オンライン開催を検討し始めた時点で、リアルな体験を伴うこと、情報を共有して一体感を持てるようにすることに重点を置いて話し合いをしており、ハウス食品グループのウェブサイトにも共有の場を作っていただけになった。 ○ 工夫の一つとして、参加者限定の日々の成長記録（画像付き）を投稿できるサイトを開設した。「うちのバケツ稲は今これくらい」「花が咲きました！」など生育状況の投稿があり、他の参加家族の生育状況の違いを知ることができた。全国から参加者がおり、気候も違う中で成長具合は異なる。地域での違いなど、思っていた以上に様々な刺激を受けながら活動していただけた。フードロスをキーワードにカレーを作り、レシピを載せた投稿もあった。うちでも作ってみる、という情報共有もあった。参加者からの成長記録の投稿回数は、家族ごとにバラツキがあったが、月に 2 回、事務局からメールで投稿を呼びかけていた。月に 2 回、生育状況を投稿してもらい、3 回イベントの時間以外も、みんなでチャレンジしているという一体感を持てるようにした。 ○ 7 月の特別講座は自由参加で、田植えと稲刈りの間が半年空いてしまうため、その間もバケツ稲にがんばって取り組んでもらうための仕組みを考えた。1 回目にフードアドバイザーの先生にフードロスカレーについて教えてもらった流れで、「夏休みの宿題」として、ハウスバーモントカレーで「我が家のフードロスカレー」を作って、最終回にレシピを発表してもらうことにした。 ○ うまく栽培できなかった、収穫量が少なかったという家族もいた。「どうして育たなかったんだろう？」「次はどうしたらたくさん収穫できると思う？」と前向きなやりとりを心掛け、チャレンジした成果として次につながる形で受け止めてもらった。 ○ また、現地協力団体の佐倉みどりネットの力を借りて「レスキュー苗制度」を作り、暑さで稲が枯れてしまったという 2 家族に、現地で育てている苗を送った。
活動や取組の成果	<p>【参加者の声】</p> <ul style="list-style-type: none"> ○ 参加者の方からは、コロナの心配や時間的な面で、現地に移動せずに体験ができ参加しやすかったという声があった。また、全国から参加者が集まれるのはオンライン開催の大きな特徴でありメリット。 ○ 参加者の皆さんはバケツ稲の生育が初体験だったため、いろいろな相談や質問が

寄せられた。個別に的確なアドバイスができ、参加者にはとても喜んでもらうことができた。

【活動ねらいに関する成果】

- 家庭でのバケツ稲栽培になったことで、田んぼの体験では分からない米作りの苦勞、農家の大変さを体験してもらうことができた。田んぼにただ水を張って米が育っているように思うが、気温が上がるとどうなるか（水がお湯になり苗によくない、農家は水を流して温度調整をしているなど）、雨が降ったらどうなるか等を知ってもらう機会となった。また、保護者から「バケツ稲に虫が寄ってきたりしませんか？」という相談があり、水が張ってある田んぼが多くの生き物の大切な住処になっていることを実感してもらう機会につながった。

【オンライン体験活動の効果・今後の方向性】

- 参加者限定の日々の成長記録（画像付き）を投稿できるサイトで他の参加家族の生育状況の違いを知ることができた。全国から参加者がおり、気候も違う中で成長具合は異なる。地域での違いなど、思っていた以上に様々な刺激を受けながら活動していただけた。地域性は、四国、関東、北陸、東北で異なり、面白かった。普段は絶対に集まらないメンバーと一緒にチャレンジするいい機会だった
- この事業に限らず、オンラインの得意なところ、オンラインだと効果が出にくいところがある。短い講義を動画として撮影しておき、事前に見てもらおうといった、ノウハウ的なものはオンラインが得意とするところである。5分、10分の講義的な動画をストックして、ライブラリ的に事前学習をしてもらうのはすごくいいかと思う。オンラインとリアルを組み合わせることで、事前学習・本番のリアル・復習の3つの構成が組めることを、オンラインに触れてみて感じた。
- オンラインの中で一緒に色々な体験ができるといいが、参加者の学年も様々で、画面を見て集中できる時間は1時間が限度である。来年度に向けた工夫として、オンラインイベントの時間で何をして、各家庭の時間で何をしてもらうのか、時間の使い方や全体の組み立てについて、具体的に議論し、改善していく。

活動内容に関する URL

https://housefoods-group.com/activity/event/taiken/online_report/

4 ヒアリング調査結果のまとめ

(1) 新型コロナウイルス感染対策に関する工夫について

ア 組織体制等の事前の新型コロナウイルス感染対策

- 自主事業の受入可能人数を制限することに伴う工夫として、感染対策の観点から受入可能人数を通常時の半分にして、開催日数を7泊8日から2泊3日に変更し、開催回数を2倍にすることで、経験できる子供を増やす工夫を把握した。
- 参加者が事前に感染対策のガイドラインを確認するよう促す工夫として、ルールやガイドラインへの同意書と参加申込書を一体化したり、申込書類と同時に提出を依頼したりするなど申込のプロセスと一体化する工夫がみられた。
- 事前の検温や体調記録の提出による事前スクリーニングの取組については、参加の3～4日前、1週間前、2週間前と、体調記録を依頼する日数にばらつきがあった。直近の政府や自治体等の新型コロナウイルス感染症に関する待機期間に準じて体調観察日数を設けることが望ましいと考えられる。
- オンラインでの事前打合せの取組では、画像を通して持ち物の確認やその場で質疑応答ができるというメリットがあり、コロナ禍収束後もオンラインと対面を併用する旨の考えを伺った。オンラインでの事前打ち合わせとともに、学校に向いて事前説明や事前学習を実施したという例も把握した。
- 保護者の理解を得ることを目的とした取組では、オンラインで保護者説明会を開催した例、SNSのグループで情報提供や保護者アンケートを実施した例、保護者説明会の動画視聴を案内した例、メール等のやり取りで不安に寄り添った例などを伺った。新型コロナウイルス感染症に関する不安や対策に関する要望に丁寧に寄り添い、安心して参加してもらうために、様々な方法による情報提供や柔軟な対応を実施していた。また、子供が感染疑いとなった場合に、保護者が迎えにくることや、検査結果や経過を施設に報告する必要があることを、予め保護者に伝える取組を行っていた。
- ヒアリングを実施した多くの団体が、地域の保健所等と連絡をして、感染者が発生した場合の対処方法を確認していた。また、保健所と確認した対処方法を、施設を利用する学校や教育委員会と共有する例も把握された。
- 新型コロナウイルス感染者が発生した場合の対処方法を、職員の間で共有する取組として、発生時の対処方法をフローチャートにまとめて職員の間で共通理解を図る工夫を伺った。なお、ヒアリングを実施した団体の多くが、新型コロナウイルス感染対策に関するスタッフトレーニングを実施していた。実施方法として、医師や保健所職員など専門家による職員研修を実施し

た例、通常のトレーニングメニューに感染対策を加えた例、ボランティアに感染対策を共有する取組等を把握した。

イ 自然体験活動の実施に関する新型コロナウイルス感染対策の工夫

- 子供に新型コロナウイルス感染対策の指導や注意喚起をする際の工夫として、子供に感染対策の声掛けや消毒などの役割を与えて活動した例、施設内の壁や床などに人との距離を取りやすくする掲示物を設置した例を伺った。なお、学校の受入事業については、新型コロナウイルス感染対策の具体的な内容を基本的には学校での指導内容や考え方に合わせるという例が多くなっていた。
- マスクを外すような安全指導を行っている場面として、熱中症対策が必要な夏季の屋外活動、水辺での活動、標高が高い場所での活動や体を動かさず活動で息苦しさを感ずる場面が挙げられた。また、スタッフも子供と同様にマスクを着脱して、マスクの着脱の声掛けを具体的にを行う工夫が見られた。
- 感染対策を踏まえて体験活動内容を見直した内容として、プログラム構成やスケジュールにゆとりを持たせて子供の体力の低下に配慮した例、グループ活動で共有していた資料等を個人配布に切り替えた例、活動の内容を非接触型の活動に見直した例、人との距離を取りやすくするようにポータブル拡声器等の機器を導入した例などを伺った。コロナ禍でも実践しやすい具体的な野外活動として、ヒアリング対象団体からは、SD（ソーシャルディスタンス）レクリエーション、ストレートハイク、スコアオリエンテーリング、謎解きフィールドゲーム等が挙げられた。
- 感染リスクを減らすための取組として、グループを分割して活動する工夫では、登山などでグループを分けて時間差でスタートする工夫や、参加できる体験活動を複数用意して分散して活動する工夫を把握した。子供と接点を持つ人員を絞るという観点から、ボランティアではなくスタッフに限定して対応した例があった。また、感染対策からグループの担当者を固定化したことにより、子供たちが担当リーダーに相談しやすい環境ができたことを副次的なメリットとして挙げていた。
- 感染対策をしながらも関係づくりができる活動の工夫として、グループにおける「ふりかえり」の活動を丁寧に支援する、チームミーティングの手法を取り入れた活動を採用する等の具体的な工夫を把握した。

ウ 食事提供等に関する新型コロナウイルス感染対策の内容

- 食事の場面で、他団体との接触や混雑を減らすための対策として、複数団体が一緒にならないように事前に利用時間や利用場所を調整する対策は多くの団体が導入していた。

- 食事の場面で、利用者が社会的距離を自然と確保しやすくする工夫として、座席を色分けして指定した色に着座してもらい、椅子の数を減らして座席を一方向に配列する、手洗い場や料理を受け取るレーンなど混雑しやすいエリアの床等にインフォグラフィック⁶を用いて距離を可視化する目印を貼る等の工夫を伺った。
- 食堂の消毒に関する工夫として、食堂の各テーブル上に消毒状態（消毒済み／使用中）を示すカードを置く工夫が把握された。消毒カードを使って、子供たちに食堂のテーブルや座席を消毒することを促す仕組みとなっている。
- ヒアリングを実施した団体の多くがバイキング方式から、限られたスタッフが配膳する個別配膳方式に変更していた。また、利用者がごはんや汁物をお代わりする場面でセルフサービスの方法を実施している事例では、使い捨てのビニール手袋をつけてもらい接触感染を回避する対策をしていた。食事の提供場面での混雑を回避し、接触感染のリスクを下げる対策として、学校の受入事業の中で、お盆、箸、スプーン、ドレッシング、水の配膳について引率の先生に協力を依頼する工夫を伺った。
- 野外炊事のメニューに関して、防災プログラムと位置付けてレトルト食品を活用する、薪割りと火おこし体験を中心とする等、調理工程を簡素化する工夫がみられた。また、炊事の場面で密を回避するために、各自が自分の食事を調理する方法を導入した例も見られた。乾パンの空き缶を利用したり、一人一人の調理セットを準備したりして、調理器具を共有しない工夫を伺った。

エ 宿泊に関連する新型コロナウイルス感染対策の内容

- ヒアリングを実施した団体の多くが、利用する団体ごとに利用できる場所を事前に調整していた。具体的な工夫として、団体間でのトイレの共用をできるだけ避けるよう事前に宿泊するブロックを割り当てる、混雑を避けるために利用団体の来館時間や出発時間を調整する等の工夫を把握した。
- ドアノブ、手すり、スイッチなど大勢がよく触れる箇所の感染対策として、共用部分の電気のスイッチの上に、ON/OFF を施設職員が行うことを案内するお知らせを貼る工夫を伺った。また、感染対策を簡略化する工夫として、3日以上利用しない場合は消毒を省略することもあるとの対応を伺った。
- 利用期間中の参加者の検温や体調確認の工夫として、係を決めて子供同士で体調管理や消毒の声掛けをすることで、子供が主体的に感染対策に取り組むよう促す取組があった。また、保護者と体調の変化に関する情報共有をしやすくする観点から、参加者のしおりに検温の欄を設け、子供に検温や体調の記入をしてもらい保護者も確認できるようにした等の取組を伺った。

⁶ インフォグラフィックとは、情報やデータを視覚に訴えるように簡潔に表したものの。

- 入浴の場面での感染対策として、利用団体の入浴時間を通常より長く設定して脱衣所や浴場の混雑を回避する、他の団体と入浴時間が重ならないよう事前に調整する、接触感染のリスクを減らすために脱衣所のカゴをなくす等の工夫を伺った。また、冬季の宿泊キャンプで、体が冷えて体調を崩すこともあるため風呂の時間を設定していないという例もあった。
- 寝具に関連する具体的な感染対策として、以前はシーツを2枚用いていたが、コロナ禍では下1枚、上2枚の計3枚用い、枕にビニールシートとタオルを被せることで、他人が触れたところの接触を減らす取組を伺った。また、ベッドの見えやすい位置に色の異なるテープやシールを貼り、利用者に分かりやすく案内し、寝具を連続して使用しない工夫を行う例が複数あった。
- テント泊に関する工夫として、一人用テントの活用や、屋内に一人用テントを自作する実践を伺った。一人用テントで宿泊するが、活動全体としてはグループ活動を行うよう工夫されていた。

オ 移動に関する新型コロナウイルス感染対策の内容

- 移動に関する感染対策として、現地で集合・解散するように変更しプログラムの中での移動をなくすか少なくする工夫や、貸切バスに乗車する定員を少なく設定する対策を複数把握した。貸切バスに乗車する定員を少なく設定した団体の中には、費用を工面するために助成金を活用したり、自治体や社会福祉協議会等が保有するバスを活用したりした例があった。また、バスに乗車する前に、当日の受付で抗原検査キットを配って検査し、陰性の参加者はバスに乗って出発するという取組をした例もあった。

(2) 新型コロナウイルス感染症の流行を機に新たに始めた活動・取組

ア ICTの活用に関する取組について

- 動画を活用した取組として、360°カメラを利用して各研修室をホームページ上に公開し下見に来ることが厳しい利用者へ施設のことが分かるよう工夫した例や、YouTubeチャンネルを作成し施設の案内動画を公開している例を把握した。説明動画の活用で効果があった取組として、退所点検の動画によりコロナ禍前よりも部屋が片付くようになったという効果や、シーツの畳み方の動画により畳み直しや指導の時間が減ったという効果が挙げられた。
- 体験活動に関する動画を公開した取組では、登山コース動画を作成し、動画を使って引率者の誘導ポイントや危険個所を説明したり、下見に来た学校の先生が下見に来ていない他の先生に動画を活用して説明したりするなどの取組を把握した。動画は便利なものとして併用しつつも、危険個所などの安全面の確認は、引率者が現場を下見して確認することが望ましいと強調されていた。

- コロナ禍で事前に現地に来ることが難しい状況があり、オンライン会議を活用して事前打ち合わせや事前相談を実施した例を多く伺った。オンライン会議では一度に大勢との情報共有が可能で、画面の中で見せながら確認ができることをメリットとして挙げられていた。コロナ禍後については、対面とのバランスを考えながら、場面に応じて活用を続けていくという声が多かった。
- オンライン講習や研修の開催については、学生ボランティアの研修や打ち合わせにオンラインを活用した例や、研修の事前学習をオンラインで実施しコミュニケーションが大事な部分は対面にするなど織り交ぜて研修を実施した例などを伺った。研修などでオンラインを活用するメリットとして、時間が限られているため整理して伝えるようになる、移動時間が省略できる、旅費がかからないことが挙げられた。一方、言葉やデータのやり取りが一方通行になったり、意図が伝わらなかったりする難しさがあるという指摘があった。
- オンラインを活用した自然体験活動の開催事例として、オンラインで講座を開催し各家庭でバケツ苗を栽培する活動、木製のロボットを設計・制作する活動や、遠隔地とつないでキャンプをするリモートキャンプなどの活動を実施していた。また、リアルとオンラインを組み合わせた活動として、富士登山の後日にオンラインで集まり、感染症対策の反省や感想を共有する振り返りの活動をオンラインで開催してよかったという意見を伺った。

イ 新たな活動・取組について

- 新型コロナウイルス感染症の流行を機に、新たに始めた活動や取組について伺った。具体的な事例として、タブレット端末を活用した野外活動、近隣地域でのツリーイング体験、全国規模のウォークラリー大会の開催、工作キットの販売、地域との連携によるマイクロツーリズムの企画・運営など多様な取組を把握した。各団体が各様に、コロナ禍の制約の中で新しい試行を行い、活動の幅や可能性を広げていることが伺えた。
- タブレット端末を活用した野外活動「AR ネイチャーラリー」、「AR アドベンチャーラリー」では、大学と連携し、IT 機器を活用した体験活動の提供による影響調査の実証研究を実施している。
- 文部科学省の委託事業を活用した事例として、ツリーイング体験では、令和2年に実施した委託事業の実績により、令和3年度以降の行政との連携や協力をスムーズに得ることができたと伺った。文部科学省の委託事業を活用してコロナ禍に全国規模のウォークラリー大会を開催した事例では、地域の中での活動であったウォークラリーが全国規模での事業になったことで、多くの方に参加いただくことができたという成果を伺った。
- コロナ禍前は予約して現地で体験を提供していたクラフト体験活動を、コロナ禍でも参加しやすいよう説明書を付けてキットにして販売したところ、お土産や家庭用として想定以上の需要

となった事例もあった。

- 地域との連携や助成金を活用して、マイクロツーリズムを企画・運営した事例では、参加者の幅が広がって団体の広報となったり、自主事業に関するプログラム開発にもつながったりしたという成果を伺うことができた。

(3) コロナ禍の制約下で自然体験活動を開催した成果と課題

ア コロナ禍の制約下で自然体験活動を開催した成果

- ヒアリング対象団体に、コロナ禍の制約下で自然体験活動開催をした成果を伺った。子供たちが野外活動を通してストレスを発散し満足をした様子を見て自然体験活動を提供する意義を再確認したという意見や、制約下で工夫しながら体験活動を実施したことで提供する体験活動の幅や参加者の幅が広がったという意見、コロナ禍の制約下で考え工夫する中で職員のスキルアップにつながったという意見等、多面的な成果を伺うことができた。
- コロナ禍の制約の中で、試行錯誤をして体験活動を提供した経験を積極的に意味づけし、今後の活動に活かしていることが伺えた。

イ コロナ禍に開催した自然体験活動に関する課題

- ヒアリング対象団体に、コロナ禍に開催した自然体験活動を振り返って、今後の課題だと思ふことを伺った。ヒアリングを実施した団体からは、子供へのマイナス面の影響が最も多く指摘された。具体的には、集団生活活動や体験活動の経験の減少に伴い、他者との肯定的な関わりが弱くなっていると感じられること、公共マナーの低下が見られること、また、子供たちの体力の低下や生活リズムの乱れを感じることなどが挙げられた。
- その他の課題として、新型コロナウイルス感染対策により開催側やスタッフの負担が大きいこと、新たな感染対策への対応やガイドライン等の更新が必要であること、コロナ禍にあったプログラムやオンラインの特性を生かしたプログラムの開発、学校や保護者に感染対策を理解いただくこと等が挙げられた。

参 考 资 料

参考資料1. アンケート調査項目

I 貴団体・施設の基本情報についてうかがいます。

Q1

【すべての方にうかがいます】

貴団体・施設の名称をご回答ください。(100文字まで)

Q2

【すべての方にうかがいます】

本調査を回答されるご担当者の御所属と御名前のご記入をお願いいたします。
(100文字まで)

※回答内容について追加の確認が必要となった場合に、お問い合わせ先としてご記入いただいたご担当者様にご連絡させていただく場合がございます。

御所属

御名前

Q3_1

【すべての方にうかがいます】

本調査に関する連絡に用いるメールアドレスのご記入をお願いいたします。
(半角で100文字まで)

※回答内容について追加の確認が必要となった場合に、お問い合わせ先としてご記入いただいたメールアドレスにご連絡させていただく場合がございます。

メールアドレス

メールアドレス(確認用)

Q3_2

【すべての方にうかがいます】

ご記入いただいたメールアドレス宛に、本調査の報告書及び取組事例集の公表時に、公開URLをご案内することを希望されますか。(一つだけ)

- 1 希望する
2 希望しない

Q4

【すべての方にうかがいます】

貴団体・施設が所在する都道府県を選択してください。(一つだけ)

※複数の都道府県に拠点がある場合は、主たる拠点・施設についてお答えください。

Q5

【すべての方にうかがいます】

貴団体・施設の法人格として、次のうちあてはまるものを一つ選択してください。(一つだけ)

※国公立施設の場合等で、指定管理制度を導入している場合は、施設を設置している主体についてお答えください。

- 1 国・独立行政法人
- 2 都道府県
- 3 政令指定都市
- 4 市(区)
- 5 町・村
- 6 一般財団・社団法人、公益財団・社団法人
- 7 NPO法人
- 8 民間企業
- 9 任意団体
- 10 個人
- 11 その他

Q6_1

【すべての方にうかがいます】

令和3年10月1日現在の貴団体・施設の常勤職員数をお答えください。(数字を記入)

※常勤職員がいない場合は0とご回答ください。

人

Q6_2

【すべての方にうかがいます】

令和3年10月1日現在の貴団体・施設の非常勤職員数をお答えください。(数字を記入)

※アルバイトや業務委託業者(清掃や給食等)が雇用する職員は含みません。

※非常勤職員がいない場合は0とご回答ください。

人

Q7

【すべての方にうかがいます】

貴団体・施設の令和3年度の予算を次の選択肢の中から一つ選んでください。(一つだけ)

※人件費、一般管理費、事業経費等のすべてを含みます。

- 1 予算はない
- 2 50万円未満
- 3 50～100万円未満
- 4 100～250万円未満
- 5 250～500万円未満
- 6 500～1,000万円未満
- 7 1,000～2,500万円未満
- 8 2,500～5,000万円未満
- 9 5,000万～1億円未満
- 10 1億～1億5,000万円未満
- 11 1億5,000万円以上
- 12 その他

Q8

【すべての方にうかがいます】

貴団体・施設が保有する施設や設備の有無についてうかがいます。

次のうち、保有する施設・設備にあてはまるものを選択してください。(いくつでも)

※国公立施設の場合等で、指定管理者が回答する場合は、指定管理の対象施設についてお答えください。

- 1 宿泊施設
- 2 キャンプ場
- 3 食堂・屋内調理施設
- 4 野外炊事場
- 5 浴室・シャワー室
- 6 売店
- 7 屋内の集会場・研修室・談話室
- 8 体育館・ホール
- 9 グラウンド(運動場全般含む)
- 10 プール
- 11 海・湖・河川などの研修施設(艇庫など)
- 12 上記の施設・設備を保有していない
- 13 その他

Ⅱ コロナ禍における自然体験活動の実施状況についてうかがいます。

Q9

【すべての方にうかがいます】

貴団体・施設が所在する自治体において、令和2年6月1日から現在までの期間、新型コロナウイルス感染症に関する緊急事態宣言またはまん延防止等重点措置が実施されましたか。

(一つだけ)

※全国一斉の緊急事態宣言が解除された令和2年5月25日以降の所在自治体の状況をご回答ください。

※複数の自治体に拠点がある場合は、主たる拠点・施設が所在する自治体についてお答えください。

- 1 緊急事態宣言が実施された
(緊急事態宣言とまん延防止等重点措置の両方が適用された場合を含む)
- 2 まん延防止等重点措置が実施された(緊急事態宣言は対象外)
- 3 上記いずれも適用の対象外だった
- 4 その他

Q10

【すべての方にうかがいます】

新型コロナウイルス感染対策に関する利用者や職員向けのガイドライン、マニュアル、ルール等の運用状況について、貴団体・施設の状況に最も近い選択肢を1つ選択してください。

(一つだけ)

- 1 外部が作成したガイドライン、マニュアル、ルール等を運用している
- 2 自己の活動に合わせて作成、または修正したガイドライン、マニュアル、ルール等を運用している
- 3 ガイドライン、マニュアル、ルール等を運用していない
- 4 その他

Q11

【すべての方にうかがいます】

令和2年度から令和3年度上半期(4～9月)の自然体験活動に関する事業計画の実施状況についてうかがいます。(一つだけ)

- 1 自然体験活動に関するすべての計画事業を実施した
- 2 自然体験活動に関する一部の事業を中止・延期した
- 3 計画していた自然体験活動に関する全ての事業を中止・延期した
- 4 自然体験活動に関する事業を実施する計画がなかった
- 5 その他

Q12_1

【すべての方にうかがいます】

新型コロナウイルス感染症流行前(令和2年1月以前)に、次の自然体験・生活体験活動を実施していましたか。(いくつでも)

- 1 登山、ハイキング、自然観察等の野外活動
- 2 川遊び、沢登り、カヌー、カッター等の水辺活動
- 3 レクリエーション・屋内スポーツ・講座等の屋内活動
- 4 クラフト等の創作活動
- 5 野外炊事
- 6 屋内炊事・食堂での食事提供
- 7 施設での宿泊
- 8 テントでのキャンプ宿泊
- 9 山小屋での宿泊
- 10 上記の自然体験・生活体験活動を実施していない

Q12_2

【すべての方にうかがいます】

令和2年度から令和3年度上半期(4～9月)に、次の自然体験・生活体験活動を実施しましたか。(いくつでも)

- 1 登山、ハイキング、自然観察等の野外活動
- 2 川遊び、沢登り、カヌー、カッター等の水辺活動
- 3 レクリエーション・屋内スポーツ・講座等の屋内活動
- 4 クラフト等の創作活動
- 5 野外炊事
- 6 屋内炊事・食堂での食事提供
- 7 施設での宿泊
- 8 テントでのキャンプ宿泊
- 9 山小屋での宿泊
- 10 上記の自然体験・生活体験活動を実施していない

Q13

【令和2年度から令和3年度上半期(4～9月)に、自然体験活動に関する事業を実施した方に
うかがいます。】

実施した自然体験活動の開催日数について、あてはまるものを選択してください。
複数の体験活動を実施している場合は、該当するすべてを選択してください。(いくつでも)

- 1 日帰り
- 2 1泊2日
- 3 2泊3日
- 4 3泊4日
- 5 4泊5日
- 6 5泊6日以上

Q14

【令和2年度から令和3年度上半期(4～9月)に、自然体験活動に関する事業を実施した方に
うかがいます。】

実施した自然体験活動の対象者の年齢層について、あてはまるものを選択してください。
複数の体験活動を実施している場合は、該当するすべてを選択してください。(いくつでも)

- 1 未就学児
- 2 小学生
- 3 中学生
- 4 高校生
- 5 高校生を除く未成年の若者
- 6 成人
- 7 その他

Q15

【令和2年度から令和3年度上半期(4～9月)に、自然体験活動に関する事業を実施した方に
うかがいます。】

貴団体・施設が直近で実施(受入れ)した自然体験活動の開催年月をご回答ください。

(数字を記入)

※ 令和2年4月～令和3年9月の範囲で回答してください。

令和 年 月

Q16_1

【令和2年度から令和3年度上半期(4～9月)に、自然体験活動に関する事業を実施した方にかがいます。】

自然体験活動の**事前に**、次に挙げるような感染対策を実施していましたか。(いくつでも)
※令和3年9月までの期間で最も近い時期に実施・受け入れた自然体験活動での状況についてお答えください。

- 1 緊急事態宣言やまん延防止等重点措置の対象地域からの参加を受け付けないよう制限した
- 2 受入可能人数や団体数を通常時未滿に制限した
- 3 事前申込制や、利用者名簿の事前提出など、事前に利用者を把握した
- 4 新型コロナウイルス感染対策や施設利用に関するルールやガイドライン等の同意書の提出を求めた
- 5 参加の一定期間前からの検温や体調記録の提出による事前スクリーニングをした
- 6 参加希望者向けにオンラインでの事前打ち合わせや見学等の手段を導入した
- 7 保護者対象の事前説明会の開催など、保護者の理解を得ることを目的とした取組をした
- 8 体調不良者や、新型コロナウイルス感染者が発生した場合の対処方法を予め定めた
- 9 地域の保健所や医療機関等と、感染疑いが発生した場合の対応方法について確認をした
- 10 新型コロナウイルス感染対策に関するスタッフトレーニングを実施した
- 11 新型コロナウイルス感染対策を担当する専門スタッフ・医療スタッフを配置した
- 12 その他

Q16_2

【令和2年度から令和3年度上半期(4～9月)に、自然体験活動に関する事業を実施した方にかがいます。】

自然体験活動の実施に関し、新型コロナウイルス感染対策として、次のうち貴団体・施設が実施した対策や工夫があれば選択してください。(いくつでも)
※令和3年9月までの期間で最も近い時期に実施・受け入れた自然体験活動での状況についてお答えください。

- 1 正しいマスクの着用方法や咳エチケット等、参加者への感染対策の指導
- 2 社会的距離を十分確保できるよう、体験活動内容の見直し
- 3 熱中症のおそれなど状況によっては、社会的距離をとりながら、マスクを外すような安全指導
- 4 活動で使用した後の用具等の消毒
- 5 屋内活動をする場合に、室内の定期的な換気
- 6 活動単位を少人数にしたり、グループを固定する等、グループ活動の内容や方法を工夫
- 7 活動の一部にオンラインを導入し、対面とのハイブリッドになるよう活動方法を工夫
- 8 感染対策をしながら、関係づくりができるような活動の工夫
- 9 その他

Q16_3

【令和2年度から令和3年度上半期(4～9月)に、野外炊事や食事提供を実施した方にうかがいます。】

野外炊事や食事提供を伴う活動の実施時に、新型コロナウイルス感染対策として、次のうち貴団体・施設が実施した対策や工夫があれば選択してください。(いくつでも)
※ 令和3年9月までの期間で最も近い時期に実施・受け入れた自然体験活動での状況についてお答えください。

- 1 利用団体ごとに食堂や野外炊事場の利用時間や場所を分けるなど、他団体との接触や混雑を減らす工夫
- 2 飛沫を飛ばさないような席の配置や、床に目印をつけるなど、社会的距離を確保しやすくする工夫
- 3 アクリル板等の仕切りの設置などの飛沫防止対策
- 4 食事提供や調理する職員の日常的な健康状態の点検、手指の洗浄及び消毒の徹底
- 5 バイキング方式の場合に、使い捨て手袋などを使用する工夫や、個別配膳など、トングなどによる接触感染を回避するための配膳方法の工夫
- 6 その他

Q16_4

【令和2年度から令和3年度上半期(4～9月)に、施設・テント・山小屋等の宿泊を伴う活動を実施した方にうかがいます。】

宿泊を伴う活動の実施時に、新型コロナウイルス感染対策として、次のうち貴団体・施設が実施した対策があれば選択してください。(いくつでも)
※ 令和3年9月までの期間で最も近い時期に実施・受け入れた自然体験活動での状況についてお答えください。

- 1 利用団体ごとに利用できる場所を事前に決めたり割り当てる工夫
- 2 密閉を避けるために、常時換気または通常時以上の定期的な換気の実施
- 3 大勢がよく手を触れる箇所(ドアノブ、手すり、スイッチなど)の定期的な清掃または消毒の実施
- 4 利用期間中の参加者の検温や体調確認に関する定期報告
- 5 利用団体の浴場の利用時間を分ける、一度に入浴する人数を制限する等、混雑を回避するための工夫
- 6 宿泊する部屋毎の利用定員を通常時未満に設定
- 7 使用した寝具の利用を数日間空けたり、使用後の消毒などの対策
- 8 その他

Q17

【令和2年度から令和3年度上半期(4～9月)に、自然体験活動に関する事業を実施しなかった方にうかがいます。】

自然体験活動を実施しなかった理由について、あてはまる選択肢をお答えください。
該当する選択肢がない場合は、その他に具体的な理由をご回答ください。(いくつでも)

- 1 活動予定地や利用者の居住する自治体での、緊急事態宣言またはまん延防止等重点措置の発令
- 2 所在する自治体、保健所、教育委員会等の関連機関からの自粛要請
- 3 団体・施設で感染者や濃厚接触者が出たため
- 4 活動に参加する子供に社会的距離を保たせることが困難
- 5 感染対策等に対応するための職員・スタッフの人員体制の不足
- 6 貸切バスや公共交通機関利用による移動時の感染リスクへの対処が困難
- 7 活動に伴う人との接触や、マスク着用による熱中症のリスクなど活動に関する不安
- 8 野外炊事・調理・食事提供など食事に関する感染リスクへの対処が困難
- 9 シャワー・入浴に関する感染リスクへの対処が困難
- 10 宿泊施設・テント泊など宿泊に関する感染リスクへの対処が困難
- 11 企画し募集したが参加者が集まらなかったため中止した
- 12 その他

Ⅲ ICTの活用や、新たな自然体験活動の取組についてうかがいます。

Q18_1

【すべての方にうかがいます】

貴団体・施設では、SNSを活用した情報提供や、活動への参加募集、活動報告の発信をしていますか。(一つだけ)

- 1 新型コロナウイルス感染症拡大以前から取り組んでいる
- 2 新型コロナウイルス感染症拡大を機に取り組んでいる
- 3 取り組んでいない

Q18_2

【すべての方にうかがいます】

貴団体・施設では、活動に関する動画配信に取り組んでいますか。(一つだけ)

- 1 新型コロナウイルス感染症拡大以前から取り組んでいる
- 2 新型コロナウイルス感染症拡大を機に取り組んでいる
- 3 取り組んでいない

Q18_3

【すべての方にうかがいます】

貴団体・施設では、オンラインイベントの開催に取り組んでいますか。(一つだけ)

- 1 新型コロナウイルス感染症拡大以前から実施している
- 2 新型コロナウイルス感染症拡大を機に実施している
- 3 実施していない

Q19

【すべての方にうかがいます】

新型コロナウイルス感染症の拡大を機に、新たに始めた活動・取組の内容についてうかがいます。

次のような、オンラインを活用した活動・取組を実施していますか。(いくつでも)

- 1 新型コロナウイルス感染対策に関するガイドライン、マニュアル、ルール等をオンラインで公開
- 2 施設の利用方法、クラフトの手順、感染対策等の説明資料や動画を制作しオンラインで公開
- 3 自宅で楽しめる工作、観察、実験手順等の動画を制作しオンラインで公開
- 4 オンラインを活用した双方向の施設見学や事前打ち合わせの開催
- 5 オンラインを活用した双方向の自然体験活動・創作活動のイベント開催
- 6 オンラインを活用した双方向の講習会や研修会の開催
- 7 オンラインを活用した体験活動後の振り返りの実施
- 8 参加者向けに、参加申込書・同意書・事前の健康チェック等の手続きをオンラインで実施
- 9 自宅で楽しめるクラフトセットや農作物等をオンライン販売
- 10 オンラインを活用した広報活動の工夫
- 11 その他のオンラインを活用した取組:
具体的内容
- 12 新型コロナウイルス感染拡大を機に、新たに始めたオンラインの活動・取組はない

Q20

【すべての方にうかがいます】

新型コロナウイルス感染症拡大を機に、貴団体・施設が新たに始めた活動・取組はありますか。(一つだけ)

※ICTの活用の有無にかかわらず、新たに始めた活動・取組みについてご回答ください。

- 1 ある
- 2 特になし

Q20_1

【新たに始めた活動・取組があると回答した方にうかがいます】

新たに始めた活動・取組の内容や、工夫した点について具体的にご記入ください。

(1000文字まで)

※ 新たな取組が多数ある場合は、試行的・実験的な取組、力を入れている取組、他団体が参考になるような取組について優先してご記入ください。

Q20_2

【新たに始めた活動・取組があると回答した方にうかがいます】

活動・取組をウェブ上で公開されている場合は、該当するURLを教えてください。

(半角で400文字まで)

Q21

【すべての方にうかがいます】

新型コロナウイルス感染対策を踏まえた運営の工夫や、ウィズコロナ期における新たな自然体験活動の取組を推進する上で、課題だと感じることや、必要な支援について、ご意見がありましたらお聞かせください。(1000文字まで)

アンケートはこれで終了です。「送信」ボタンを押してください。
ご協力いただき、ありがとうございました。

参考資料2. アンケート調査 単純集計表

I 貴団体・施設の基本情報についてうかがいます。

Q4【すべての方にうかがいます】貴団体・施設が所在する都道府県を選択してください。
 ※複数の都道府県に拠点がある場合は、主たる拠点・施設についてお答えください。

	件数	割合 n=680
北海道	59	8.7
青森県	4	0.6
岩手県	6	0.9
宮城県	5	0.7
秋田県	1	0.1
山形県	5	0.7
福島県	10	1.5
茨城県	15	2.2
栃木県	6	0.9
群馬県	16	2.4
埼玉県	25	3.7
千葉県	45	6.6
東京都	27	4.0
神奈川県	20	2.9
新潟県	4	0.6
富山県	8	1.2
石川県	4	0.6
福井県	11	1.6
山梨県	6	0.9
長野県	21	3.1
岐阜県	16	2.4
静岡県	37	5.4
愛知県	115	16.9
三重県	6	0.9
滋賀県	12	1.8
京都府	18	2.6
大阪府	25	3.7
兵庫県	31	4.6
奈良県	3	0.4
和歌山県	3	0.4
鳥取県	5	0.7
島根県	6	0.9
岡山県	9	1.3
広島県	4	0.6
山口県	13	1.9
徳島県	3	0.4
香川県	7	1.0
愛媛県	4	0.6
高知県	1	0.1
福岡県	15	2.2
佐賀県	0	0.0
長崎県	17	2.5
熊本県	9	1.3
大分県	4	0.6
宮崎県	4	0.6
鹿児島県	8	1.2
沖縄県	7	1.0
その他(国外)	0	0.0
全体	680	100.0

Q5【すべての方にうかがいます】 貴団体・施設の法人格として、次のうちあてはまるものを1つ選択してください。

※国公立施設の場合等で、指定管理制度を導入している場合は、施設を設置している主体についてお答えください。

	件数	割合 n=680
国・独立行政法人	28	4.1
都道府県	89	13.1
政令指定都市	14	2.1
市(区)	113	16.6
町・村	54	7.9
一般財団・社団法人、公益財団・社団法人	92	13.5
NPO法人	16	2.4
民間企業	3	0.4
任意団体	248	36.5
個人	2	0.3
その他	21	3.1
全体	680	100.0

Q6.1【すべての方にうかがいます】 令和3年10月1日現在の貴団体・施設の常勤職員数をお答えください。(数値での回答)

※常勤職員がいない場合は0とご回答ください。

	件数	割合 n=680
0人	340	50.0
1～5人	112	16.5
6～10人	113	16.6
11～15人	72	10.6
16～20人	13	1.9
21人以上	30	4.4
全体	680	100.0

Q6.2【すべての方にうかがいます】 令和3年10月1日現在の貴団体・施設の非常勤職員数をお答えください。(数値での回答)

※アルバイトや業務委託業者(清掃や給食等)が雇用する職員は含みません。

※非常勤職員がいない場合は0とご回答ください。

	件数	割合 n=680
0人	395	58.1
1～5人	165	24.3
6～10人	68	10.0
11～15人	23	3.4
16～20人	7	1.0
21人以上	22	3.2
全体	680	100.0

Q7【すべての方にうかがいます】貴団体・施設の令和3年度の予算を次の選択肢の中から一つ選んでください。

※人件費、一般管理費、事業経費等のすべてを含みます。

	件数	割合 n=680
予算はない	15	2.2
50万円未満	105	15.4
50～100万円未満	89	13.1
100～250万円未満	92	13.5
250～500万円未満	27	4.0
500～1,000万円未満	37	5.4
1,000～2,500万円未満	40	5.9
2,500～5,000万円未満	55	8.1
5,000万～1億円未満	87	12.8
1億～1億5,000万円未満	44	6.5
1億5,000万円以上	76	11.2
その他	13	1.9
全体	680	100.0

Q8【すべての方にうかがいます】貴団体・施設が保有する施設や設備の有無についてうかがいます。次のうち、保有する施設・設備にあてはまるものを選択してください。(複数回答)

※国公立施設の場合等で、指定管理者が回答する場合は、指定管理の対象施設についてお答えください。

	件数	割合 n=680
宿泊施設	247	36.3
キャンプ場	224	32.9
食堂・屋内調理施設	256	37.6
野外炊事場	237	34.9
浴室・シャワー室	257	37.8
売店	63	9.3
屋内の集会場・研修室・談話室	340	50.0
体育館・ホール	260	38.2
グラウンド(運動場全般含む)	167	24.6
プール	39	5.7
海・湖・河川などの研修施設(艇庫など)	53	7.8
上記の施設・設備を保有していない	235	34.6
その他	88	12.9
全体	680	-

II コロナ禍における自然体験活動の実施状況についてうかがいます。

Q9【すべての方にうかがいます】貴団体・施設が所在する自治体において、令和2年6月1日から現在までの期間、新型コロナウイルス感染症に関する緊急事態宣言またはまん延防止等重点措置が実施されましたか。

※全国一斉の緊急事態宣言が解除された令和2年5月25日以降の所在自治体の状況をご回答ください。

※複数の都道府県に拠点がある場合は、主たる拠点・施設についてお答えください。

	件数	割合 n=680
緊急事態宣言が実施された(緊急事態宣言とまん延防止等重点措置の両方が適用された場合を含む)	534	78.5
まん延防止等重点措置が実施された(緊急事態宣言は対象外)	67	9.9
上記いずれも適用の対象外だった	76	11.2
その他	3	0.4
全体	680	100.0

Q10【すべての方にうかがいます】新型コロナウイルス感染対策に関する利用者や職員向けのガイドライン、マニュアル、ルール等の運用状況について、貴団体・施設の状況に最も近い選択肢を1つ選択してください。

	件数	割合 n=680
外部が作成したガイドライン、マニュアル、ルール等を運用している	225	33.1
自己の活動に合わせて作成、または修正したガイドライン、マニュアル、ルール等を運用している	414	60.9
ガイドライン、マニュアル、ルール等を運用していない	8	1.2
その他	33	4.9
全体	680	100.0

Q11【すべての方にうかがいます】令和2年度から令和3年度上半期(4～9月)の自然体験活動に関する事業計画の実施状況についてうかがいます。

	件数	割合 n=680
自然体験活動に関するすべての計画事業を実施した	29	4.3
自然体験活動に関する一部の事業を中止・延期した	519	76.3
計画していた自然体験活動に関する全ての事業を中止・延期した	88	12.9
自然体験活動に関する事業を実施する計画がなかった	38	5.6
その他	6	0.9
全体	680	100.0

Q12.1【すべての方にうかがいます】新型コロナウイルス感染症流行前(令和2年1月以前)に、次の自然体験・生活体験活動を実施していましたか。(複数回答)

	件数	割合 n=680
登山、ハイキング、自然観察等の野外活動	576	84.7
川遊び、沢登り、カヌー、カッター等の水辺活動	392	57.6
レクリエーション・屋内スポーツ・講座等の屋内活動	508	74.7
クラフト等の創作活動	521	76.6
野外炊事	545	80.1
屋内炊事・食堂での食事提供	410	60.3
施設での宿泊	503	74.0
テントでのキャンプ宿泊	456	67.1
山小屋での宿泊	58	8.5
上記の自然体験・生活体験活動を実施していない	35	5.1
全体	680	-

Q12.2【すべての方にうかがいます】令和2年度から令和3年度上半期(4～9月)に、次の自然体験・生活体験活動を実施しましたか。(複数回答)

	件数	割合 n=680
登山、ハイキング、自然観察等の野外活動	483	71.0
川遊び、沢登り、カヌー、カッター等の水辺活動	237	34.9
レクリエーション・屋内スポーツ・講座等の屋内活動	380	55.9
クラフト等の創作活動	431	63.4
野外炊事	378	55.6
屋内炊事・食堂での食事提供	226	33.2
施設での宿泊	270	39.7
テントでのキャンプ宿泊	238	35.0
山小屋での宿泊	16	2.4
上記の自然体験・生活体験活動を実施していない	95	14.0
全体	680	-

Q13【令和2年度から令和3年度上半期(4～9月)に、自然体験活動に関する事業を実施した方にうかがいます。】

実施した自然体験活動の開催日数について、あてはまるものを選択してください。複数の体験活動を実施している場合は、該当するすべてを選択してください。(複数回答)

	件数	割合 n=548
日帰り	503	91.8
1泊2日	294	53.6
2泊3日	161	29.4
3泊4日	62	11.3
4泊5日	26	4.7
5泊6日以上	54	9.9
全体	548	-

Q14【令和2年度から令和3年度上半期(4～9月)に、自然体験活動に関する事業を実施した方にうかがいます。】

実施した自然体験活動の対象者の年齢層について、あてはまるものを選択してください。複数の体験活動を実施している場合は、該当するすべてを選択してください。(複数回答)

	件数	割合 n=548
未就学児	282	51.5
小学生	523	95.4
中学生	408	74.5
高校生	271	49.5
高校生を除く未成年の若者	154	28.1
成人	337	61.5
その他	23	4.2
全体	548	-

q15【令和2年度から令和3年度上半期(4～9月)に、自然体験活動に関する事業を実施した方にうかがいます。】

貴団体・施設が直近で実施(受入れ)した自然体験活動の開催年月をご回答ください。(数値での回答)

※令和2年4月～令和3年9月の範囲で回答してください。

	件数	割合 n=548
令和2年4月	4	0.7
令和2年5月	3	0.5
令和2年6月	0	0.0
令和2年7月	2	0.4
令和2年8月	5	0.9
令和2年9月	5	0.9
令和2年10月	10	1.8
令和2年11月	17	3.1
令和2年12月	11	2.0
令和3年1月	1	0.2
令和3年2月	8	1.5
令和3年3月	15	2.7
令和3年4月	6	1.1
令和3年5月	13	2.4
令和3年6月	18	3.3
令和3年7月	91	16.6
令和3年8月	177	32.3
令和3年9月	162	29.6
全体	548	100.0

Q16.1【令和2年度から令和3年度上半期(4～9月)に、自然体験活動に関する事業を実施した方にうかがいます。】
 自然体験活動の事前に、次に挙げるような感染対策を実施していましたか。(複数回答)
 ※令和3年9月までの期間で最も近い時期に実施・受け入れた自然体験活動での状況についてお答えください。

	件数	割合 n=548
緊急事態宣言やまん延防止等重点措置の対象地域からの参加を受け付けないよう制限した	194	35.4
受入可能人数や団体数を通常時未満に制限した	332	60.6
事前申込制や、利用者名簿の事前提出など、事前に利用者を把握した	451	82.3
新型コロナウイルス感染対策や施設利用に関するルールやガイドライン等の同意書の提出を求めた	168	30.7
参加の一定期間前からの検温や体調記録の提出による事前スクリーニングをした	333	60.8
参加希望者向けにオンラインでの事前打ち合わせや見学等の手段を導入した	89	16.2
保護者対象の事前説明会の開催など、保護者の理解を得ることを目的とした取組をした	187	34.1
体調不良者や、新型コロナウイルス感染者が発生した場合の対処方法を予め定めた	428	78.1
地域の保健所や医療機関等と、感染疑いが発生した場合の対応方法について確認をした	141	25.7
新型コロナウイルス感染対策に関するスタッフトレーニングを実施した	159	29.0
新型コロナウイルス感染対策を担当する専門スタッフ・医療スタッフを配置した	20	3.6
その他	29	5.3
無回答	3	0.5
全体	548	-

Q16.2【令和2年度から令和3年度上半期(4～9月)に、自然体験活動に関する事業を実施した方にうかがいます。】
 自然体験活動の実施に関し、新型コロナウイルス感染対策として、次のうち貴団体・施設が実施した対策や工夫があれば選択してください。(複数回答)
 ※令和3年9月までの期間で最も近い時期に実施・受け入れた自然体験活動での状況についてお答えください。

	件数	割合 n=548
正しいマスクの着用方法や咳エチケット等、参加者への感染対策の指導	444	81.0
社会的距離を十分確保できるよう、体験活動内容の見直し	480	87.6
熱中症のおそれなど状況によっては、社会的距離をとりながら、マスクを外すような安全指導	414	75.5
活動で使用した後の用具等の消毒	424	77.4
屋内活動をする場合に、室内の定期的な換気	435	79.4
活動単位を少人数にしたり、グループを固定する等、グループ活動の内容や方法を工夫	421	76.8
活動の一部にオンラインを導入し、対面とのハイブリッドになるよう活動方法を工夫	162	29.6
感染対策をしながら、関係づくりができるような活動の工夫	346	63.1
その他	13	2.4
無回答	3	0.5
全体	548	-

Q16.3【令和2年度から令和3年度上半期(4～9月)に、野外炊事や食事提供を実施した方にうかがいます。】
 野外炊事や食事提供を伴う活動の実施時に、新型コロナウイルス感染対策として、次のうち貴団体・施設が実施した対策や工夫があれば選択してください。(複数回答)
 ※令和3年9月までの期間で最も近い時期に実施・受け入れた自然体験活動での状況についてお答えください。

	件数	割合 n=411
利用団体ごとに食堂や野外炊事場の利用時間や場所を分けるなど、他団体との接触や混雑を減らす工夫	273	66.4
飛沫を飛ばさないような席の配置や、床に目印をつけるなど、社会的距離を確保しやすくする工夫	311	75.7
アクリル板等の仕切りの設置などの飛沫防止対策	142	34.5
食事提供や調理する職員の日常的な健康状態の点検、手指の洗浄及び消毒の徹底	316	76.9
バイキング方式の場合に、使い捨て手袋などを使用する工夫や、個別配膳など、トンブなどによる接触感染を回避するための配膳方法の工夫	126	30.7
その他	38	9.2
無回答	8	1.9
全体	411	-

Q16.4【令和2年度から令和3年度上半期(4～9月)に、施設・テント・山小屋等の宿泊を伴う活動を実施した方にうかがいます。】
 宿泊を伴う活動の実施時に、新型コロナウイルス感染対策として、次のうち貴団体・施設が実施した対策があれば選択してください。(複数回答)
 ※令和3年9月までの期間で最も近い時期に実施・受け入れた自然体験活動での状況についてお答えください。

	件数	割合 n=351
利用団体ごとに利用できる場所を事前に決めたり割り当てる工夫	209	59.5
密閉を避けるために、常時換気または通常時以上の定期的な換気の実施	278	79.2
大勢がよく手を触れる箇所(ドアノブ、手すり、スイッチなど)の定期的な清掃または消毒の実施	239	68.1
利用期間中の参加者の検温や体調確認に関する定期報告	285	81.2
利用団体の浴場の利用時間を分ける、一度に入浴する人数を制限する等、混雑を回避するための工夫	216	61.5
宿泊する部屋毎の利用定員を通常時未満に設定	247	70.4
使用した寝具の利用を数日間空けたり、使用後の消毒などの対策	138	39.3
その他	39	11.1
無回答	11	3.1
全体	351	-

Q17【令和2年度から令和3年度上半期(4～9月)に、自然体験活動に関する事業を実施しなかった方にうかがいます。】
 自然体験活動を実施しなかった理由について、あてはまる選択肢をお答えください。該当する選択肢がない場合は、その他に具体的な理由をご回答ください。(複数回答)

	件数	割合 n=126
活動予定地や利用者の居住する自治体での、緊急事態宣言またはまん延防止等重点措置の発令	87	69.0
所在する自治体、保健所、教育委員会等の関連機関からの自粛要請	47	37.3
団体・施設で感染者や濃厚接触者が出たため	3	2.4
活動に参加する子供に社会的距離を保たせることが困難	33	26.2
感染対策等に対応するための職員・スタッフの人員体制の不足	15	11.9
貸切バスや公共交通機関利用による移動時の感染リスクへの対処が困難	20	15.9
活動に伴う人との接触や、マスク着用による熱中症のリスクなど活動に関する不安	38	30.2
野外炊事・調理・食事提供など食事に関する感染リスクへの対処が困難	35	27.8
シャワー・入浴に関する感染リスクへの対処が困難	18	14.3
宿泊施設・テント泊など宿泊に関する感染リスクへの対処が困難	34	27.0
企画し募集したが参加者が集まらなかったため中止した	2	1.6
その他	31	24.6
全体	126	-

Ⅲ ICTの活用や、新たな自然体験活動の取組についてうかがいます。

Q18_1【すべての方にうかがいます】 貴団体・施設では、SNSを活用した情報提供や、活動への参加募集、活動報告の発信をしていますか。

	件数	割合 n=680
新型コロナウイルス感染症拡大以前から取り組んでいる	437	64.3
新型コロナウイルス感染症拡大を機に取り組んでいる	60	8.8
取り組んでいない	183	26.9
全体	680	100.0

Q18_2【すべての方にうかがいます】 貴団体・施設では、活動に関する動画配信に取り組んでいますか。

	件数	割合 n=680
新型コロナウイルス感染症拡大以前から取り組んでいる	136	20.0
新型コロナウイルス感染症拡大を機に取り組んでいる	101	14.9
取り組んでいない	443	65.1
全体	680	100.0

Q18_3【すべての方にうかがいます】 貴団体・施設では、オンラインイベントの開催に取り組んでいますか。

	件数	割合 n=680
新型コロナウイルス感染症拡大以前から実施している	14	2.1
新型コロナウイルス感染症拡大を機に実施している	233	34.3
実施していない	433	63.7
全体	680	100.0

Q19【すべての方にうかがいます】 新型コロナウイルス感染症の拡大を機に、新たに始めた活動・取組の内容についてうかがいます。次のような、オンラインを活用した活動・取組を実施していますか。(複数回答)

	件数	割合 n=680
新型コロナウイルス感染対策に関するガイドライン、マニュアル、ルール等をオンラインで公開	191	28.1
施設の利用方法、クラフトの手順、感染対策等の説明資料や動画を制作しオンラインで公開	79	11.6
自宅で楽しめる工作、観察、実験手順等の動画を制作しオンラインで公開	121	17.8
オンラインを活用した双方向の施設見学や事前打ち合わせの開催	127	18.7
オンラインを活用した双方向の自然体験活動・創作活動のイベント開催	81	11.9
オンラインを活用した双方向の講習会や研修会の開催	170	25.0
オンラインを活用した体験活動後の振り返りの実施	83	12.2
参加者向けに、参加申込書・同意書・事前の健康チェック等の手続きをオンラインで実施	75	11.0
自宅で楽しめるクラフトセットや農作物等をオンライン販売	10	1.5
オンラインを活用した広報活動の工夫	139	20.4
その他のオンラインを活用した取組: 具体的内容	69	10.1
新型コロナウイルス感染症拡大を機に、新たに始めたオンラインの活動・取組はない	233	34.3
全体	680	-

Q20【すべての方にうかがいます】 新型コロナウイルス感染症拡大を機に、貴団体・施設が新たに始めた活動・取組はありますか。

※ICTの活用の有無にかかわらず、新たに始めた活動・取組みについてご回答ください。

	件数	割合 n=680
ある	295	43.4
特にない	385	56.6
全体	680	100.0

参考資料3. アンケート調査 予算規模別クロス集計表

I 貴団体・施設の基本情報についてうかがいます。

Q4【すべての方にうかがいます】貴団体・施設が所在する都道府県を選択してください。
※複数の都道府県に拠点がある場合は、主たる拠点・施設についてお答えください。

	件数					割合				
	全体	予算なし～100万円未満	100～1,000万円未満	1,000万円～1億円未満	1億円以上	全体	予算なし～100万円未満	100～1,000万円未満	1,000万円～1億円未満	1億円以上
						n=680	n=209	n=156	n=182	n=120
北海道	59	7	9	25	18	8.7	3.3	5.8	13.7	15.0
青森県	4	0	1	2	1	0.6	0.0	0.6	1.1	0.8
岩手県	6	0	0	4	2	0.9	0.0	0.0	2.2	1.7
宮城県	5	2	2	0	1	0.7	1.0	1.3	0.0	0.8
秋田県	1	0	1	0	0	0.1	0.0	0.6	0.0	0.0
山形県	5	1	0	3	1	0.7	0.5	0.0	1.6	0.8
福島県	10	1	1	3	4	1.5	0.5	0.6	1.6	3.3
茨城県	15	6	5	1	3	2.2	2.9	3.2	0.5	2.5
栃木県	6	0	1	3	1	0.9	0.0	0.6	1.6	0.8
群馬県	16	7	1	6	1	2.4	3.3	0.6	3.3	0.8
埼玉県	25	8	7	7	3	3.7	3.8	4.5	3.8	2.5
千葉県	45	18	10	9	8	6.6	8.6	6.4	4.9	6.7
東京都	27	4	4	5	13	4.0	1.9	2.6	2.7	10.8
神奈川県	20	8	6	1	4	2.9	3.8	3.8	0.5	3.3
新潟県	4	0	0	2	2	0.6	0.0	0.0	1.1	1.7
富山県	8	3	0	3	1	1.2	1.4	0.0	1.6	0.8
石川県	4	2	1	0	1	0.6	1.0	0.6	0.0	0.8
福井県	11	4	1	4	1	1.6	1.9	0.6	2.2	0.8
山梨県	6	3	1	2	0	0.9	1.4	0.6	1.1	0.0
長野県	21	2	5	9	3	3.1	1.0	3.2	4.9	2.5
岐阜県	16	6	3	2	4	2.4	2.9	1.9	1.1	3.3
静岡県	37	20	9	2	5	5.4	9.6	5.8	1.1	4.2
愛知県	115	60	37	10	8	16.9	28.7	23.7	5.5	6.7
三重県	6	2	3	1	0	0.9	1.0	1.9	0.5	0.0
滋賀県	12	3	5	3	1	1.8	1.4	3.2	1.6	0.8
京都府	18	4	7	2	5	2.6	1.9	4.5	1.1	4.2
大阪府	25	7	7	6	4	3.7	3.3	4.5	3.3	3.3
兵庫県	31	6	7	14	4	4.6	2.9	4.5	7.7	3.3
奈良県	3	1	1	1	0	0.4	0.5	0.6	0.5	0.0
和歌山県	3	1	1	1	0	0.4	0.5	0.6	0.5	0.0
鳥取県	5	1	0	3	1	0.7	0.5	0.0	1.6	0.8
島根県	6	2	1	1	2	0.9	1.0	0.6	0.5	1.7
岡山県	9	4	2	2	1	1.3	1.9	1.3	1.1	0.8
広島県	4	0	1	1	2	0.6	0.0	0.6	0.5	1.7
山口県	13	5	3	4	1	1.9	2.4	1.9	2.2	0.8
徳島県	3	0	1	2	0	0.4	0.0	0.6	1.1	0.0
香川県	7	1	3	2	1	1.0	0.5	1.9	1.1	0.8
愛媛県	4	0	1	2	1	0.6	0.0	0.6	1.1	0.8
高知県	1	0	0	1	0	0.1	0.0	0.0	0.5	0.0
福岡県	15	3	2	7	3	2.2	1.4	1.3	3.8	2.5
佐賀県	0	0	0	0	0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0
長崎県	17	4	3	10	0	2.5	1.9	1.9	5.5	0.0
熊本県	9	2	1	4	2	1.3	1.0	0.6	2.2	1.7
大分県	4	0	1	3	0	0.6	0.0	0.6	1.6	0.0
宮崎県	4	0	0	2	1	0.6	0.0	0.0	1.1	0.8
鹿児島県	8	1	0	2	5	1.2	0.5	0.0	1.1	4.2
沖縄県	7	0	1	5	1	1.0	0.0	0.6	2.7	0.8
その他(国外)	0	0	0	0	0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0
全体	680	209	156	182	120	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0

Q5【すべての方にうかがいます】貴団体・施設の法人格として、次のうちあてはまるものを1つ選択してください。
※国公立施設の場合等で、指定管理制度を導入している場合は、施設を設置している主体についてお答えください。

	件数					割合				
	全体	予算なし～100万円未満	100～1,000万円未満	1,000万円～1億円未満	1億円以上	全体	予算なし～100万円未満	100～1,000万円未満	1,000万円～1億円未満	1億円以上
						n=680	n=209	n=156	n=182	n=120
国・独立行政法人	28	0	0	8	19	4.1	0.0	0.0	4.4	15.8
都道府県	89	0	3	55	30	13.1	0.0	1.9	30.2	25.0
政令指定都市	14	0	0	6	8	2.1	0.0	0.0	3.3	6.7
市(区)	113	2	20	70	18	16.6	1.0	12.8	38.5	15.0
町・村	54	5	12	15	21	7.9	2.4	7.7	8.2	17.5
一般財団・社団法人、公益財団・社団法人	92	42	22	9	17	13.5	20.1	14.1	4.9	14.2
NPO法人	16	0	8	6	2	2.4	0.0	5.1	3.3	1.7
民間企業	3	0	0	3	0	0.4	0.0	0.0	1.6	0.0
任意団体	248	155	87	6	0	36.5	74.2	55.8	3.3	0.0
個人	2	1	1	0	0	0.3	0.5	0.6	0.0	0.0
その他	21	4	3	4	5	3.1	1.9	1.9	2.2	4.2
全体	680	209	156	182	120	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0

Q6.1【すべての方にうかがいます】令和3年10月1日現在の貴団体・施設の常勤職員数をお答えください。(数値での回答)
 ※常勤職員がいない場合は0とご回答ください。

	件数					割合				
	全体	予算なし～100万円未満	100～1,000万円未満	1,000万～1億円未満	1億円以上	全体 n=680	予算なし～100万円未満 n=209	100～1,000万円未満 n=156	1,000万～1億円未満 n=182	1億円以上 n=120
0人	340	196	126	15	0	50.0	93.8	80.8	8.2	0.0
1～5人	112	4	25	75	6	16.5	1.9	16.0	41.2	5.0
6～10人	113	4	2	67	40	16.6	1.9	1.3	36.8	33.3
11～15人	72	2	2	23	43	10.6	1.0	1.3	12.6	35.8
16～20人	13	1	0	2	9	1.9	0.5	0.0	1.1	7.5
21人以上	30	2	1	0	22	4.4	1.0	0.6	0.0	18.3
全体	680	209	156	182	120	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0

Q6.2【すべての方にうかがいます】令和3年10月1日現在の貴団体・施設の非常勤職員数をお答えください。(数値での回答)
 ※アルバイトや業務委託業者(清掃や給食等)が雇用する職員は含みません。
 ※非常勤職員がいない場合は0とご回答ください。

	件数					割合				
	全体	予算なし～100万円未満	100～1,000万円未満	1,000万～1億円未満	1億円以上	全体 n=680	予算なし～100万円未満 n=209	100～1,000万円未満 n=156	1,000万～1億円未満 n=182	1億円以上 n=120
0人	395	197	125	52	17	58.1	94.3	80.1	28.6	14.2
1～5人	165	6	25	87	44	24.3	2.9	16.0	47.8	36.7
6～10人	68	1	2	32	32	10.0	0.5	1.3	17.6	26.7
11～15人	23	1	2	9	10	3.4	0.5	1.3	4.9	8.3
16～20人	7	0	0	2	3	1.0	1.0	0.0	1.1	2.5
21人以上	22	2	2	0	14	3.2	1.0	1.3	0.0	11.7
全体	680	209	156	182	120	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0

Q7【すべての方にうかがいます】貴団体・施設の令和3年度の予算を次の選択肢の中から一つ選んでください。
 ※人件費、一般管理費、事業経費等のすべてを含みます。

	件数					割合				
	全体	予算なし～100万円未満	100～1,000万円未満	1,000万～1億円未満	1億円以上	全体 n=680	予算なし～100万円未満 n=209	100～1,000万円未満 n=156	1,000万～1億円未満 n=182	1億円以上 n=120
予算はない	15	15	0	0	0	2.2	7.2	0.0	0.0	0.0
50万円未満	105	105	0	0	0	15.4	50.2	0.0	0.0	0.0
50～100万円未満	89	89	0	0	0	13.1	42.6	0.0	0.0	0.0
100～250万円未満	92	0	92	0	0	13.5	0.0	59.0	0.0	0.0
250～500万円未満	27	0	27	0	0	4.0	0.0	17.3	0.0	0.0
500～1,000万円未満	37	0	37	0	0	5.4	0.0	23.7	0.0	0.0
1,000～2,500万円未満	40	0	0	40	0	5.9	0.0	0.0	22.0	0.0
2,500～5,000万円未満	55	0	0	55	0	8.1	0.0	0.0	30.2	0.0
5,000万～1億円未満	87	0	0	87	0	12.8	0.0	0.0	47.8	0.0
1億～1億5,000万円未満	44	0	0	0	44	6.5	0.0	0.0	0.0	36.7
1億5,000万円以上	76	0	0	0	76	11.2	0.0	0.0	0.0	63.3
その他	13	0	0	0	0	1.9	0.0	0.0	0.0	0.0
全体	680	209	156	182	120	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0

Q8【すべての方にうかがいます】貴団体・施設が保有する施設や設備の有無についてうかがいます。次のうち、保有する施設・設備にあてはまるものを選択してください。(複数回答)
 ※国公立施設の場合等で、指定管理者が回答する場合は、指定管理の対象施設についてお答えください。

	件数					割合				
	全体	予算なし～100万円未満	100～1,000万円未満	1,000万～1億円未満	1億円以上	全体 n=680	予算なし～100万円未満 n=209	100～1,000万円未満 n=156	1,000万～1億円未満 n=182	1億円以上 n=120
宿泊施設	247	2	22	135	83	36.3	1.0	14.1	74.2	69.2
キャンプ場	224	32	26	101	61	32.9	15.3	16.7	55.5	50.8
食堂・屋内調理施設	256	3	21	136	90	37.6	1.4	13.5	74.7	75.0
野外炊事場	237	8	25	125	74	34.9	3.8	16.0	68.7	61.7
浴室・シャワー室	257	2	23	141	83	37.8	1.0	14.7	77.5	69.2
売店	63	0	0	24	36	9.3	0.0	0.0	13.2	30.0
屋内の集会場・研修室・談話室	340	21	43	161	105	50.0	10.0	27.6	88.5	87.5
体育館・ホール	260	2	17	128	104	38.2	1.0	10.9	70.3	86.7
グラウンド(運動場全般含む)	167	4	17	74	67	24.6	1.9	10.9	40.7	55.8
プール	39	2	0	13	22	5.7	1.0	0.0	7.1	18.3
海・湖・河川などの研修施設(艇庫など)	53	0	3	22	28	7.8	0.0	1.9	12.1	23.3
上記の施設・設備を保有していない	235	141	82	5	5	34.6	67.5	52.6	2.7	4.2
その他	88	27	19	22	18	12.9	12.9	12.2	12.1	15.0
全体	680	209	156	182	120	-	-	-	-	-

II コロナ禍における自然体験活動の実施状況についてうかがいます。

Q9【すべての方にうかがいます】 貴団体・施設が所在する自治体において、令和2年6月1日から現在までの期間、新型コロナウイルス感染症に関する緊急事態宣言またはまん延防止等重点措置が実施されましたか。
 ※全国一斉の緊急事態宣言が解除された令和2年5月25日以降の所在自治体の状況をご回答ください。
 ※複数の都道府県に拠点がある場合は、主たる拠点・施設についてお答えください。

	件数					割合				
	全体	予算なし～100万円未満	100～1,000万円未満	1,000万～1億円未満	1億円以上	全体	予算なし～100万円未満	100～1,000万円未満	1,000万～1億円未満	1億円以上
						n=680	n=209	n=156	n=182	n=120
緊急事態宣言が実施された(緊急事態宣言とまん延防止等重点措置の両方が適用された場合を含む)	534	181	131	121	94	78.5	86.6	84.0	66.5	78.3
まん延防止等重点措置が実施された(緊急事態宣言は対象外)	67	17	10	27	11	9.9	8.1	6.4	14.8	9.2
上記いずれも適用の対象外だった	76	11	14	32	15	11.2	5.3	9.0	17.6	12.5
その他	3	0	1	2	0	0.4	0.0	0.6	1.1	0.0
全体	680	209	156	182	120	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0

Q10【すべての方にうかがいます】 新型コロナウイルス感染対策に関する利用者や職員向けのガイドライン、マニュアル、ルール等の運用状況について、貴団体・施設の状況に最も近い選択肢を1つ選択してください。

	件数					割合				
	全体	予算なし～100万円未満	100～1,000万円未満	1,000万～1億円未満	1億円以上	全体	予算なし～100万円未満	100～1,000万円未満	1,000万～1億円未満	1億円以上
						n=680	n=209	n=156	n=182	n=120
外部が作成したガイドライン、マニュアル、ルール等を運用している	225	103	63	39	19	33.1	49.3	40.4	21.4	15.8
自己の活動に合わせて作成、または修正したガイドライン、マニュアル、ルール等を運用している	414	79	83	141	101	60.9	37.8	53.2	77.5	84.2
ガイドライン、マニュアル、ルール等を運用していない	8	5	0	2	0	1.2	2.4	0.0	1.1	0.0
その他	33	22	10	0	0	4.9	10.5	6.4	0.0	0.0
全体	680	209	156	182	120	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0

Q11【すべての方にうかがいます】 令和2年度から令和3年度上半期(4～9月)の自然体験活動に関する事業計画の実施状況についてうかがいます。

	件数					割合				
	全体	予算なし～100万円未満	100～1,000万円未満	1,000万～1億円未満	1億円以上	全体	予算なし～100万円未満	100～1,000万円未満	1,000万～1億円未満	1億円以上
						n=680	n=209	n=156	n=182	n=120
自然体験活動に関するすべての計画事業を実施した	29	17	7	5	0	4.3	8.1	4.5	2.7	0.0
自然体験活動に関する一部の事業を中止・延期した	519	159	110	140	102	76.3	76.1	70.5	76.9	85.0
計画していた自然体験活動に関する全ての事業を中止・延期した	88	26	22	23	13	12.9	12.4	14.1	12.6	10.8
自然体験活動に関する事業を実施する計画がなかった	38	4	16	13	4	5.6	1.9	10.3	7.1	3.3
その他	6	3	1	1	1	0.9	1.4	0.6	0.5	0.8
全体	680	209	156	182	120	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0

Q12.1【すべての方にうかがいます】 新型コロナウイルス感染症流行前(令和2年1月以前)に、次の自然体験・生活体験活動を実施していましたか。(複数回答)

	件数					割合				
	全体	予算なし～100万円未満	100～1,000万円未満	1,000万～1億円未満	1億円以上	全体	予算なし～100万円未満	100～1,000万円未満	1,000万～1億円未満	1億円以上
						n=680	n=209	n=156	n=182	n=120
登山、ハイキング、自然観察等の野外活動	576	187	124	150	106	84.7	89.5	79.5	82.4	88.3
川遊び、沢登り、カヌー、カッター等の水辺活動	392	115	94	95	84	57.6	55.0	60.3	52.2	70.0
レクリエーション・屋内スポーツ・講座等の屋内活動	508	133	110	146	110	74.7	63.6	70.5	80.2	91.7
クラブ等の創作活動	521	156	113	145	99	76.6	74.6	72.4	79.7	82.5
野外炊事	545	170	127	144	94	80.1	81.3	81.4	79.1	78.3
屋内炊事・食堂での食事提供	410	91	92	133	85	60.3	43.5	59.0	73.1	70.8
施設での宿泊	503	136	112	146	100	74.0	65.1	71.8	80.2	83.3
テントでのキャンプ宿泊	456	150	111	112	75	67.1	71.8	71.2	61.5	62.5
山小屋での宿泊	58	9	20	12	14	8.5	4.3	12.8	6.6	11.7
上記の自然体験・生活体験活動を実施していない	35	8	14	9	1	5.1	3.8	9.0	4.9	0.8
全体	680	209	156	182	120	-	-	-	-	-

Q12.2【すべての方にうかがいます】 令和2年度から令和3年度上半期(4～9月)に、次の自然体験・生活体験活動を実施しましたか。(複数回答)

	件数					割合				
	全体	予算なし～100万円未満	100～1,000万円未満	1,000万～1億円未満	1億円以上	全体	予算なし～100万円未満	100～1,000万円未満	1,000万～1億円未満	1億円以上
						n=680	n=209	n=156	n=182	n=120
登山、ハイキング、自然観察等の野外活動	483	150	104	131	91	71.0	71.8	66.7	72.0	75.8
川遊び、沢登り、カヌー、カッター等の水辺活動	237	38	49	81	68	34.9	18.2	31.4	44.5	56.7
レクリエーション・屋内スポーツ・講座等の屋内活動	380	79	75	126	95	55.9	37.8	48.1	69.2	79.2
クラブ等の創作活動	431	112	92	130	89	63.4	53.6	59.0	71.4	74.2
野外炊事	378	101	84	111	76	55.6	48.3	53.8	61.0	63.3
屋内炊事・食堂での食事提供	226	19	31	99	74	33.2	9.1	19.9	54.4	61.7
施設での宿泊	270	31	42	113	80	39.7	14.8	26.9	62.1	66.7
テントでのキャンプ宿泊	238	68	59	61	48	35.0	32.5	37.8	33.5	40.0
山小屋での宿泊	16	0	4	4	7	2.4	0.0	2.6	2.2	5.8
上記の自然体験・生活体験活動を実施していない	95	29	28	20	13	14.0	13.9	17.9	11.0	10.8
全体	680	209	156	182	120	-	-	-	-	-

Q13【令和2年度から令和3年度上半期(4～9月)に、自然体験活動に関する事業を実施した方にうかがいます。】

実施した自然体験活動の開催日数について、あてはまるものを選択してください。複数の体験活動を実施している場合は、該当するすべてを選択してください。(複数回答)

	件数					割合				
	全体	予算なし～100万円未満	100～1,000万円未満	1,000万～1億円未満	1億円以上	全体	予算なし～100万円未満	100～1,000万円未満	1,000万～1億円未満	1億円以上
						n=548	n=176	n=117	n=145	n=102
日帰り	503	154	109	134	98	91.8	87.5	93.2	92.4	96.1
1泊2日	294	54	59	103	76	53.6	30.7	50.4	71.0	74.5
2泊3日	161	27	36	47	49	29.4	15.3	30.8	32.4	48.0
3泊4日	62	11	11	17	22	11.3	6.3	9.4	11.7	21.6
4泊5日	26	3	2	8	12	4.7	1.7	1.7	5.5	11.8
5泊6日以上	54	17	11	13	12	9.9	9.7	9.4	9.0	11.8
全体	548	176	117	145	102	-	-	-	-	-

Q14【令和2年度から令和3年度上半期(4～9月)に、自然体験活動に関する事業を実施した方にうかがいます。】

実施した自然体験活動の対象者の年齢層について、あてはまるものを選択してください。複数の体験活動を実施している場合は、該当するすべてを選択してください。(複数回答)

	件数					割合				
	全体	予算なし～100万円未満	100～1,000万円未満	1,000万～1億円未満	1億円以上	全体	予算なし～100万円未満	100～1,000万円未満	1,000万～1億円未満	1億円以上
						n=548	n=176	n=117	n=145	n=102
未就学児	282	67	50	89	68	51.5	38.1	42.7	61.4	66.7
小学生	523	163	113	140	99	95.4	92.6	96.6	96.6	97.1
中学生	408	121	96	110	74	74.5	68.8	82.1	75.9	72.5
高校生	271	79	72	57	56	49.5	44.9	61.5	39.3	54.9
高校生を除く未成年の若者	154	32	31	40	48	28.1	18.2	26.5	27.6	47.1
成人	337	92	61	101	77	61.5	52.3	52.1	69.7	75.5
その他	23	1	1	14	7	4.2	0.6	0.9	9.7	6.9
全体	548	176	117	145	102	-	-	-	-	-

q15【令和2年度から令和3年度上半期(4～9月)に、自然体験活動に関する事業を実施した方にうかがいます。】

貴団体・施設が直近で実施(受入れ)した自然体験活動の開催年月をご回答ください。(数値での回答)

※令和2年4月～令和3年9月の間で回答してください。

	件数					割合				
	全体	予算なし～100万円未満	100～1,000万円未満	1,000万～1億円未満	1億円以上	全体	予算なし～100万円未満	100～1,000万円未満	1,000万～1億円未満	1億円以上
						n=548	n=176	n=117	n=145	n=102
令和2年4月	4	3	0	1	0	0.7	1.7	0.0	0.7	0.0
令和2年5月	3	3	0	0	0	0.5	1.7	0.0	0.0	0.0
令和2年6月	0	0	0	0	0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0
令和2年7月	2	0	1	1	0	0.4	0.0	0.9	0.7	0.0
令和2年8月	5	3	1	1	0	0.9	1.7	0.9	0.7	0.0
令和2年9月	5	4	0	0	0	0.9	2.3	0.0	0.0	0.0
令和2年10月	10	2	8	0	0	1.8	1.1	6.8	0.0	0.0
令和2年11月	17	8	6	0	2	3.1	4.5	5.1	0.0	2.0
令和2年12月	11	7	3	0	1	2.0	4.0	2.6	0.0	1.0
令和3年1月	1	1	0	0	0	0.2	0.6	0.0	0.0	0.0
令和3年2月	8	4	0	1	2	1.5	2.3	0.0	0.7	2.0
令和3年3月	15	8	4	1	2	2.7	4.5	3.4	0.7	2.0
令和3年4月	6	3	1	2	0	1.1	1.7	0.9	1.4	0.0
令和3年5月	13	5	6	1	1	2.4	2.8	5.1	0.7	1.0
令和3年6月	18	11	3	2	1	3.3	6.3	2.6	1.4	1.0
令和3年7月	91	33	22	23	12	16.6	18.8	18.8	15.9	11.8
令和3年8月	177	51	36	55	34	32.3	29.0	30.8	37.9	33.3
令和3年9月	162	30	26	57	47	29.6	17.0	22.2	39.3	46.1
全体	548	176	117	145	102	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0

Q16.1【令和2年度から令和3年度上半期(4～9月)に、自然体験活動に関する事業を実施した方にうかがいます。】

自然体験活動の事前に、次に挙げるような感染対策を実施していましたか。(複数回答)

※令和3年9月までの期間で最も近い時期に実施・受け入れた自然体験活動での状況についてお答えください。

	件数					割合				
	全体	予算なし～100万円未満	100～1,000万円未満	1,000万～1億円未満	1億円以上	全体	予算なし～100万円未満	100～1,000万円未満	1,000万～1億円未満	1億円以上
						n=548	n=176	n=117	n=145	n=102
緊急事態宣言やまん延防止等重点措置の対象地域からの参加を受け付けないよう制限した	194	50	31	67	44	35.4	28.4	26.5	46.2	43.1
受入可能人数や団体数を通常時未満に制限した	332	66	56	120	85	60.6	37.5	47.9	82.8	83.3
事前申込制や、利用者名簿の事前提出など、事前に利用者を把握した	451	128	94	130	91	82.3	72.7	80.3	89.7	89.2
新型コロナウイルス感染対策や施設利用に関するルールやガイドライン等の同意書の提出を求めた	168	40	36	51	39	30.7	22.7	30.8	35.2	38.2
参加の一定期間前からの検温や体調記録の提出による事前スクリーニングをした	333	106	81	75	65	60.8	60.2	69.2	51.7	63.7
参加希望者向けにオンラインでの事前打ち合わせや見学等の手段を導入した	89	25	25	21	17	16.2	14.2	21.4	14.5	16.7
保護者対象の事前説明会の開催など、保護者の理解を得ることを目的とした取組をした	187	85	54	15	31	34.1	48.3	46.2	10.3	30.4
体調不良者や、新型コロナウイルス感染者が発生した場合の対処方法を予め定めた	428	123	91	118	90	78.1	69.9	77.8	81.4	88.2
地域の保健所や医療機関等と、感染疑いが発生した場合の対応方法について確認をした	141	21	20	48	50	25.7	11.9	17.1	33.1	49.0
新型コロナウイルス感染対策に関するスタッフトレーニングを実施した	159	28	20	53	56	29.0	15.9	17.1	36.6	54.9
新型コロナウイルス感染対策を担当する専門スタッフ・医療スタッフを配置した	20	7	7	2	3	3.6	4.0	6.0	1.4	2.9
その他	29	14	6	3	6	5.3	8.0	5.1	2.1	5.9
無回答	3	3	0	0	0	0.5	1.7	0.0	0.0	0.0
全体	548	176	117	145	102	-	-	-	-	-

Q16.2【令和2年度から令和3年度上半期(4～9月)に、自然体験活動に関する事業を実施した方にうかがいます。】

自然体験活動の実施に関し、新型コロナウイルス感染対策として、次のうち貴団体・施設が実施した対策や工夫があれば選択してください。(複数回答)

※令和3年9月までの期間で最も近い時期に実施・受け入れた自然体験活動での状況についてお答えください。

	件数					割合				
	全体	予算なし～100万円未満	100～1,000万円未満	1,000万～1億円未満	1億円以上	全体	予算なし～100万円未満	100～1,000万円未満	1,000万～1億円未満	1億円以上
						n=548	n=176	n=117	n=145	n=102
正しいマスクの着用方法や咳エチケット等、参加者への感染対策の指導	444	139	94	113	91	81.0	79.0	80.3	77.9	89.2
社会的距離を十分確保できるよう、体験活動内容の見直し	480	151	107	125	89	87.6	85.8	91.5	86.2	87.3
熱中症のおそれなど状況によっては、社会的距離をとりながら、マスクを外すような安全指導	414	119	88	121	80	75.5	67.6	75.2	83.4	78.4
活動で使用した後の用具等の消毒	424	115	79	126	96	77.4	65.3	67.5	86.9	94.1
屋内活動をする場合に、室内の定期的な換気	435	114	88	130	95	79.4	64.8	75.2	89.7	93.1
活動単位を少人数にし、グループを固定する等、グループ活動の内容や方法を工夫	421	119	83	124	87	76.8	67.6	70.9	85.5	85.3
活動の一部にオンラインを導入し、対面とのハイブリッドになるよう活動方法を工夫	162	63	60	19	17	29.6	35.8	51.3	13.1	16.7
感染対策をしながら、関係づくりができるような活動の工夫	346	107	70	87	77	63.1	60.8	59.8	60.0	75.5
その他	13	7	3	1	2	2.4	4.0	2.6	0.7	2.0
無回答	3	2	0	1	0	0.5	1.1	0.0	0.7	0.0
全体	548	176	117	145	102	-	-	-	-	-

Q16.3【令和2年度から令和3年度上半期(4～9月)に、野外炊事や食事提供を実施した方にうかがいます。】

野外炊事や食事提供を伴う活動の実施時に、新型コロナウイルス感染対策として、次のうち貴団体・施設が実施した対策や工夫があれば選択してください。(複数回答)

※令和3年9月までの期間で最も近い時期に実施・受け入れた自然体験活動での状況についてお答えください。

	件数					割合				
	全体	予算なし～100万円未満	100～1,000万円未満	1,000万～1億円未満	1億円以上	全体	予算なし～100万円未満	100～1,000万円未満	1,000万～1億円未満	1億円以上
						n=411	n=105	n=87	n=128	n=85
利用団体ごとに食堂や野外炊事場の利用時間や場所を分けるなど、他団体との接触や混雑を減らす工夫	273	43	42	109	74	66.4	41.0	48.3	85.2	87.1
飛沫を飛ばさないような席の配置や、床に目印をつけるなど、社会的距離を確保しやすくする工夫	311	71	51	110	73	75.7	67.6	58.6	85.9	85.9
アクリル板等の仕切りの設置などの飛沫防止対策	142	4	12	65	58	34.5	3.8	13.8	50.8	68.2
食事提供や調理する職員の日常的な健康状態の点検、手指の洗浄及び消毒の徹底	316	69	48	114	80	76.9	65.7	55.2	89.1	94.1
バイキング方式の場合に、使い捨て手袋などを使用する工夫や、個別配膳など、トンゴなどによる接触感染を回避するための配膳方法の工夫	126	23	24	37	40	30.7	21.9	27.6	28.9	47.1
その他	38	12	14	5	7	9.2	11.4	16.1	3.9	8.2
無回答	8	5	0	2	1	1.9	4.8	0.0	1.6	1.2
全体	411	105	87	128	85	-	-	-	-	-

Q16.4【令和2年度から令和3年度上半期(4～9月)に、施設・テント・山小屋等の宿泊を伴う活動を実施した方にうかがいます。】
 宿泊を伴う活動の実施時に、新型コロナウイルス感染対策として、次のうち貴団体・施設が実施した対策があれば選択してください。(複数回答)
 ※令和3年9月までの期間で最も近い時期に実施・受け入れた自然体験活動での状況についてお答えください。

	件数					割合				
	全体	予算なし～100万円未満	100～1,000万円未満	1,000万～1億円未満	1億円以上	全体	予算なし～100万円未満	100～1,000万円未満	1,000万～1億円未満	1億円以上
利用団体ごとに利用できる場所を事前に決めたり割り当てる工夫	209	24	26	89	66	59.5	30.8	36.1	76.1	82.5
密閉を避けるために、常時換気または通常時以上の定期的な換気の実施	278	49	45	107	73	79.2	62.8	62.5	91.5	91.3
大勢がよく手を触れる箇所(ドアノブ、手すり、スイッチなど)の定期的な清掃または消毒の実施	239	30	29	104	72	68.1	38.5	40.3	88.9	90.0
利用期間中の参加者の検温や体調確認に関する定期報告	285	62	60	93	66	81.2	79.5	83.3	79.5	82.5
利用団体の浴場の利用時間を分ける、一度に入浴する人数を制限する等、混雑を回避するための工夫	216	20	22	98	72	61.5	25.6	30.6	83.8	90.0
宿泊する部屋毎の利用定員を通常時未満に設定	247	35	38	102	68	70.4	44.9	52.8	87.2	85.0
使用した寝具の利用を数日間空けたり、使用後の消毒などの対策	138	5	12	68	50	39.3	6.4	16.7	58.1	62.5
その他	39	18	17	1	3	11.1	23.1	23.6	0.9	3.8
無回答	11	2	2	3	4	3.1	2.6	2.8	2.6	5.0
全体	351	78	72	117	80	-	-	-	-	-

Q17【令和2年度から令和3年度上半期(4～9月)に、自然体験活動に関する事業を実施しなかった方にうかがいます。】
 自然体験活動を実施しなかった理由について、あてはまる選択肢をお答えください。該当する選択肢がない場合は、その他に具体的な理由をご回答ください。(複数回答)

	件数					割合				
	全体	予算なし～100万円未満	100～1,000万円未満	1,000万～1億円未満	1億円以上	全体	予算なし～100万円未満	100～1,000万円未満	1,000万～1億円未満	1億円以上
活動予定地や利用者の居住する自治体での、緊急事態宣言またはまん延防止等重点措置の発令	87	22	25	26	12	69.0	73.3	65.8	72.2	70.6
所在する自治体、保健所、教育委員会等の関連機関からの自粛要請	47	12	12	16	7	37.3	40.0	31.6	44.4	41.2
団体・施設で感染者や濃厚接触者が出たため	3	0	1	1	0	2.4	0.0	2.6	2.8	0.0
活動に参加する子供に社会的距離を保たせることが困難	33	9	7	8	8	26.2	30.0	18.4	22.2	47.1
感染対策等に対応するための職員・スタッフの人員体制の不足	15	5	2	4	4	11.9	16.7	5.3	11.1	23.5
貸切バスや公共交通機関利用による移動時の感染リスクへの対処が困難	20	5	5	3	6	15.9	16.7	13.2	8.3	35.3
活動に伴う人との接触や、マスク着用による熱中症のリスクなど活動に関する不安	38	13	8	10	6	30.2	43.3	21.1	27.8	35.3
野外炊事・調理・食事提供など食事に関する感染リスクへの対処が困難	35	11	8	7	8	27.8	36.7	21.1	19.4	47.1
シャワー・入浴に関する感染リスクへの対処が困難	18	5	2	6	4	14.3	16.7	5.3	16.7	23.5
宿泊施設・テント泊など宿泊に関する感染リスクへの対処が困難	34	10	7	10	6	27.0	33.3	18.4	27.8	35.3
企画し募集したが参加者が集まらなかったため中止した	2	2	0	0	0	1.6	6.7	0.0	0.0	0.0
その他	31	3	14	9	3	24.6	10.0	36.8	25.0	17.6
全体	126	30	38	36	17	-	-	-	-	-

III ICTの活用や、新たな自然体験活動の取組についてうかがいます。

Q18.1【すべての方にうかがいます】貴団体・施設では、SNSを活用した情報提供や、活動への参加募集、活動報告の発信をしていますか。

	件数					割合				
	全体	予算なし～100万円未満	100～1,000万円未満	1,000万～1億円未満	1億円以上	全体	予算なし～100万円未満	100～1,000万円未満	1,000万～1億円未満	1億円以上
新型コロナウイルス感染症拡大以前から取り組んでいる	437	133	100	117	80	64.3	63.6	64.1	64.3	66.7
新型コロナウイルス感染症拡大を機に取り組んでいる	60	24	16	12	8	8.8	11.5	10.3	6.6	6.7
取り組んでいない	183	52	40	53	32	26.9	24.9	25.6	29.1	26.7
全体	680	209	156	182	120	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0

Q18.2【すべての方にうかがいます】貴団体・施設では、活動に関する動画配信に取り組んでいますか。

	件数					割合				
	全体	予算なし～100万円未満	100～1,000万円未満	1,000万～1億円未満	1億円以上	全体	予算なし～100万円未満	100～1,000万円未満	1,000万～1億円未満	1億円以上
新型コロナウイルス感染症拡大以前から取り組んでいる	136	29	37	37	31	20.0	13.9	23.7	20.3	25.8
新型コロナウイルス感染症拡大を機に取り組んでいる	101	18	24	29	28	14.9	8.6	15.4	15.9	23.3
取り組んでいない	443	162	95	116	61	65.1	77.5	60.9	63.7	50.8
全体	680	209	156	182	120	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0

Q18.3【すべての方にうかがいます】 貴団体・施設では、オンラインイベントの開催に取り組んでいますか。

	件数					割合				
	全体	予算なし～100万円未満	100～1,000万円未満	1,000万～1億円未満	1億円以上	全体	予算なし～100万円未満	100～1,000万円未満	1,000万～1億円未満	1億円以上
						n=680	n=209	n=156	n=182	n=120
新型コロナウイルス感染症拡大以前から実施している	14	8	4	0	2	2.1	3.8	2.6	0.0	1.7
新型コロナウイルス感染症拡大を機に実施している	233	82	75	31	39	34.3	39.2	48.1	17.0	32.5
実施していない	433	119	77	151	79	63.7	56.9	49.4	83.0	65.8
全体	680	209	156	182	120	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0

Q19【すべての方にうかがいます】 新型コロナウイルス感染症の拡大を機に、新たに始めた活動・取組の内容についてうかがいます。次のような、オンラインを活用した活動・取組を実施していますか。(複数回答)

	件数					割合				
	全体	予算なし～100万円未満	100～1,000万円未満	1,000万～1億円未満	1億円以上	全体	予算なし～100万円未満	100～1,000万円未満	1,000万～1億円未満	1億円以上
						n=680	n=209	n=156	n=182	n=120
新型コロナウイルス感染対策に関するガイドライン、マニュアル、ルール等をオンラインで公開	191	21	33	71	62	28.1	10.0	21.2	39.0	51.7
施設の利用方法、クラフトの手順、感染対策等の説明資料や動画を制作しオンラインで公開	79	6	10	27	35	11.6	2.9	6.4	14.8	29.2
自宅で楽しめる工作、観察、実験手順等の動画を制作しオンラインで公開	121	41	39	20	18	17.8	19.6	25.0	11.0	15.0
オンラインを活用した双方向の施設見学や事前打ち合わせの開催	127	42	33	21	29	18.7	20.1	21.2	11.5	24.2
オンラインを活用した双方向の自然体験活動・創作活動のイベント開催	81	34	26	10	10	11.9	16.3	16.7	5.5	8.3
オンラインを活用した双方向の講習会や研修会の開催	170	59	55	25	28	25.0	28.2	35.3	13.7	23.3
オンラインを活用した体験活動後の振り返りの実施	83	37	29	7	10	12.2	17.7	18.6	3.8	8.3
参加者向けに、参加申込書・同意書・事前の健康チェック等の手続きをオンラインで実施	75	17	11	21	26	11.0	8.1	7.1	11.5	21.7
自宅で楽しめるクラフトセットや農作物等をオンライン販売	10	2	3	3	2	1.5	1.0	1.9	1.6	1.7
オンラインを活用した広報活動の工夫	139	30	33	31	41	20.4	14.4	21.2	17.0	34.2
その他のオンラインを活用した取組: 具体的内容	69	28	23	9	8	10.1	13.4	14.7	4.9	6.7
新型コロナウイルス感染症拡大を機に、新たに始めたオンラインの活動・取組はない	233	76	44	79	29	34.3	36.4	28.2	43.4	24.2
全体	680	209	156	182	120	-	-	-	-	-

Q20【すべての方にうかがいます】 新型コロナウイルス感染症拡大を機に、貴団体・施設が新たに始めた活動・取組はありますか。
※ICTの活用の有無にかかわらず、新たに始めた活動・取組についてご回答ください。

	件数					割合				
	全体	予算なし～100万円未満	100～1,000万円未満	1,000万～1億円未満	1億円以上	全体	予算なし～100万円未満	100～1,000万円未満	1,000万～1億円未満	1億円以上
						n=680	n=209	n=156	n=182	n=120
ある	295	78	68	74	67	43.4	37.3	43.6	40.7	55.8
特になし	385	131	88	108	53	56.6	62.7	56.4	59.3	44.2
全体	680	209	156	182	120	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0

参考資料4. アンケート調査 施設設備保有状況別クロス集計表

※施設・設備の保有状況別のクロス集計は、Q8の回答状況に基づき、2つの区分に分けて集計を行っている。
 クロス集計表の「該当の施設・設備を保有している」は、Q8で次のいずれかの施設・設備を保有していると回答したサンプルに該当する。該当する施設・設備は、「宿泊施設」「キャンプ場」「食堂・屋内調理施設」「野外炊事場」「浴室・シャワー室」「売店」「屋内の集会場・研修室・談話室」「体育館・ホール」「グラウンド(運動場全般含む)」「プール」「海・湖・河川などの研修施設(艇庫など)」。
 クロス集計表の「該当の施設・設備を保有していない」は、Q8で「上記の施設・設備を保有していない」と回答したサンプルに該当する。

I 貴団体・施設の基本情報についてうかがいます。

Q4【すべての方にうかがいます】 貴団体・施設が所在する都道府県を選択してください。
 ※複数の都道府県に拠点がある場合は、主たる拠点・施設についてお答えください。

	件数			割合		
	全体	該当の施設・設備を保有している	該当の施設・設備を保有していない	全体 n=680	該当の施設・設備を保有している n=405	該当の施設・設備を保有していない n=235
北海道	59	51	7	8.7	12.6	3.0
青森県	4	4	0	0.6	1.0	0.0
岩手県	6	6	0	0.9	1.5	0.0
宮城県	5	3	2	0.7	0.7	0.9
秋田県	1	0	1	0.1	0.0	0.4
山形県	5	4	1	0.7	1.0	0.4
福島県	10	8	1	1.5	2.0	0.4
茨城県	15	8	4	2.2	2.0	1.7
栃木県	6	6	0	0.9	1.5	0.0
群馬県	16	7	9	2.4	1.7	3.8
埼玉県	25	13	10	3.7	3.2	4.3
千葉県	45	26	15	6.6	6.4	6.4
東京都	27	13	13	4.0	3.2	5.5
神奈川県	20	9	9	2.9	2.2	3.8
新潟県	4	4	0	0.6	1.0	0.0
富山県	8	5	3	1.2	1.2	1.3
石川県	4	1	3	0.6	0.2	1.3
福井県	11	7	4	1.6	1.7	1.7
山梨県	6	2	4	0.9	0.5	1.7
長野県	21	17	4	3.1	4.2	1.7
岐阜県	16	7	6	2.4	1.7	2.6
静岡県	37	11	21	5.4	2.7	8.9
愛知県	115	48	58	16.9	11.9	24.7
三重県	6	2	3	0.9	0.5	1.3
滋賀県	12	4	7	1.8	1.0	3.0
京都府	18	11	5	2.6	2.7	2.1
大阪府	25	16	8	3.7	4.0	3.4
兵庫県	31	25	5	4.6	6.2	2.1
奈良県	3	1	2	0.4	0.2	0.9
和歌山県	3	1	1	0.4	0.2	0.4
鳥取県	5	4	1	0.7	1.0	0.4
島根県	6	3	3	0.9	0.7	1.3
岡山県	9	4	5	1.3	1.0	2.1
広島県	4	4	0	0.6	1.0	0.0
山口県	13	8	5	1.9	2.0	2.1
徳島県	3	2	1	0.4	0.5	0.4
香川県	7	6	1	1.0	1.5	0.4
愛媛県	4	3	1	0.6	0.7	0.4
高知県	1	1	0	0.1	0.2	0.0
福岡県	15	10	4	2.2	2.5	1.7
佐賀県	0	0	0	0.0	0.0	0.0
長崎県	17	11	5	2.5	2.7	2.1
熊本県	9	8	1	1.3	2.0	0.4
大分県	4	3	1	0.6	0.7	0.4
宮崎県	4	4	0	0.6	1.0	0.0
鹿児島県	8	7	1	1.2	1.7	0.4
沖縄県	7	7	0	1.0	1.7	0.0
その他(国外)	0	0	0	0.0	0.0	0.0
全体	680	405	235	100.0	100.0	100.0

Q5【すべての方にうかがいます】 貴団体・施設の法人格として、次のうちあてはまるものを1つ選択してください。
 ※国公立施設の場合等で、指定管理制度を導入している場合は、施設を設置している主体についてお答えください。

	件数			割合		
	全体	該当の施設・設備を保有している	該当の施設・設備を保有していない	全体 n=680	該当の施設・設備を保有している n=405	該当の施設・設備を保有していない n=235
国・独立行政法人	28	28	0	4.1	6.9	0.0
都道府県	89	89	0	13.1	22.0	0.0
政令指定都市	14	14	0	2.1	3.5	0.0
市(区)	113	108	2	16.6	26.7	0.9
町・村	54	52	2	7.9	12.8	0.9
一般財団・社団法人、公益財団・社団法人	92	33	52	13.5	8.1	22.1
NPO法人	16	7	8	2.4	1.7	3.4
民間企業	3	2	1	0.4	0.5	0.4
任意団体	248	61	164	36.5	15.1	69.8
個人	2	0	2	0.3	0.0	0.9
その他	21	11	4	3.1	2.7	1.7
全体	680	405	235	100.0	100.0	100.0

Q6.1【すべての方にうかがいます】 令和3年10月1日現在の貴団体・施設の常勤職員数をお答えください。(数値での回答)
 ※常勤職員がいない場合は0とご回答ください。

	件数			割合		
	全体	該当の施設・設備を保有している	該当の施設・設備を保有していない	全体 n=680	該当の施設・設備を保有している n=405	該当の施設・設備を保有していない n=235
0人	340	101	206	50.0	24.9	87.7
1～5人	112	89	18	16.5	22.0	7.7
6～10人	113	107	5	16.6	26.4	2.1
11～15人	72	70	2	10.6	17.3	0.9
16～20人	13	13	0	1.9	3.2	0.0
21人以上	30	25	4	4.4	6.2	1.7
全体	680	405	235	100.0	100.0	100.0

Q6.2【すべての方にうかがいます】 令和3年10月1日現在の貴団体・施設の非常勤職員数をお答えください。(数値での回答)
 ※アルバイトや業務委託業者(清掃や給食等)が雇用する職員は含みません。
 ※非常勤職員がいない場合は0とご回答ください。

	件数			割合		
	全体	該当の施設・設備を保有している	該当の施設・設備を保有していない	全体 n=680	該当の施設・設備を保有している n=405	該当の施設・設備を保有していない n=235
0人	395	153	207	58.1	37.8	88.1
1～5人	165	144	18	24.3	35.6	7.7
6～10人	68	63	4	10.0	15.6	1.7
11～15人	23	22	1	3.4	5.4	0.4
16～20人	7	5	2	1.0	1.2	0.9
21人以上	22	18	3	3.2	4.4	1.3
全体	680	405	235	100.0	100.0	100.0

Q7【すべての方にうかがいます】 貴団体・施設の令和3年度の予算を次の選択肢の中から一つ選んでください。
 ※人件費、一般管理費、事業経費等のすべてを含みます。

	件数			割合		
	全体	該当の施設・設備を保有している	該当の施設・設備を保有していない	全体 n=680	該当の施設・設備を保有している n=405	該当の施設・設備を保有していない n=235
予算はない	15	2	10	2.2	0.5	4.3
50万円未満	105	20	74	15.4	4.9	31.5
50～100万円未満	89	24	57	13.1	5.9	24.3
100～250万円未満	92	33	49	13.5	8.1	20.9
250～500万円未満	27	9	17	4.0	2.2	7.2
500～1,000万円未満	37	19	16	5.4	4.7	6.8
1,000～2,500万円未満	40	36	3	5.9	8.9	1.3
2,500～5,000万円未満	55	52	1	8.1	12.8	0.4
5,000万～1億円未満	87	86	1	12.8	21.2	0.4
1億～1億5,000万円未満	44	43	1	6.5	10.6	0.4
1億5,000万円以上	76	71	4	11.2	17.5	1.7
その他	13	10	2	1.9	2.5	0.9
全体	680	405	235	100.0	100.0	100.0

Q8【すべての方にうかがいます】 貴団体・施設が保有する施設や設備の有無についてうかがいます。次のうち、保有する施設・設備にあてはまるものを選択してください。(複数回答)

※国立施設の場合等で、指定管理者が回答する場合は、指定管理の対象施設についてお答えください。

	件数			割合		
	全体	該当の施設・設備を保有している	該当の施設・設備を保有していない	全体 n=680	該当の施設・設備を保有している n=405	該当の施設・設備を保有していない n=235
宿泊施設	247	247	0	36.3	61.0	0.0
キャンプ場	224	224	0	32.9	55.3	0.0
食堂・屋内調理施設	256	256	0	37.6	63.2	0.0
野外炊事場	237	237	0	34.9	58.5	0.0
浴室・シャワー室	257	257	0	37.8	63.5	0.0
売店	63	63	0	9.3	15.6	0.0
屋内の集会場・研修室・談話室	340	340	0	50.0	84.0	0.0
体育館・ホール	260	260	0	38.2	64.2	0.0
グラウンド(運動場全般含む)	167	167	0	24.6	41.2	0.0
プール	39	39	0	5.7	9.6	0.0
海・湖・河川などの研修施設(艇庫など)	53	53	0	7.8	13.1	0.0
上記の施設・設備を保有していない	235	0	235	34.6	0.0	100.0
その他	88	47	1	12.9	11.6	0.4
全体	680	405	235	-	-	-

II コロナ禍における自然体験活動の実施状況についてうかがいます。

Q9【すべての方にうかがいます】 貴団体・施設が所在する自治体において、令和2年6月1日から現在までの期間、新型コロナウイルス感染症に関する緊急事態宣言またはまん延防止等重点措置が実施されましたか。

※全国一斉の緊急事態宣言が解除された令和2年5月25日以降の所在自治体の状況をご回答ください。

※複数の都道府県に拠点がある場合は、主たる拠点・施設についてお答えください。

	件数			割合		
	全体	該当の施設・設備を保有している	該当の施設・設備を保有していない	全体 n=680	該当の施設・設備を保有している n=405	該当の施設・設備を保有していない n=235
緊急事態宣言が実施された(緊急事態宣言とまん延防止等重点措置の両方が適用された場合を含む)	534	298	200	78.5	73.6	85.1
まん延防止等重点措置が実施された(緊急事態宣言は対象外)	67	47	17	9.9	11.6	7.2
上記いずれも適用の対象外だった	76	57	18	11.2	14.1	7.7
その他	3	3	0	0.4	0.7	0.0
全体	680	405	235	100.0	100.0	100.0

Q10【すべての方にうかがいます】 新型コロナウイルス感染対策に関する利用者や職員向けのガイドライン、マニュアル、ルール等の運用状況について、貴団体・施設の状況に最も近い選択肢を1つ選択してください。

	件数			割合		
	全体	該当の施設・設備を保有している	該当の施設・設備を保有していない	全体 n=680	該当の施設・設備を保有している n=405	該当の施設・設備を保有していない n=235
外部が作成したガイドライン、マニュアル、ルール等を運用している	225	114	95	33.1	28.1	40.4
自己の活動に合わせて作成、または修正したガイドライン、マニュアル、ルール等を運用している	414	284	113	60.9	70.1	48.1
ガイドライン、マニュアル、ルール等を運用していない	8	3	4	1.2	0.7	1.7
その他	33	4	23	4.9	1.0	9.8
全体	680	405	235	100.0	100.0	100.0

Q11【すべての方にうかがいます】 令和2年度から令和3年度上半期(4～9月)の自然体験活動に関する事業計画の実施状況についてうかがいます。

	件数			割合		
	全体	該当の施設・設備を保有している	該当の施設・設備を保有していない	全体 n=680	該当の施設・設備を保有している n=405	該当の施設・設備を保有していない n=235
自然体験活動に関するすべての計画事業を実施した	29	8	20	4.3	2.0	8.5
自然体験活動に関する一部の事業を中止・延期した	519	300	188	76.3	74.1	80.0
計画していた自然体験活動に関する全ての事業を中止・延期した	88	60	22	12.9	14.8	9.4
自然体験活動に関する事業を実施する計画がなかった	38	32	5	5.6	7.9	2.1
その他	6	5	0	0.9	1.2	0.0
全体	680	405	235	100.0	100.0	100.0

Q12.1【すべての方にうかがいます】 新型コロナウイルス感染症流行前(令和2年1月以前)に、次の自然体験・生活体験活動を実施していましたか。(複数回答)

	件数			割合		
	全体	該当の施設・設備を保有している	該当の施設・設備を保有していない	全体 n=680	該当の施設・設備を保有している n=405	該当の施設・設備を保有していない n=235
登山、ハイキング、自然観察等の野外活動	576	330	211	84.7	81.5	89.8
川遊び、沢登り、カヌー、カッター等の水辺活動	392	224	142	57.6	55.3	60.4
レクリエーション・屋内スポーツ・講座等の屋内活動	508	314	168	74.7	77.5	71.5
クラフト等の創作活動	521	313	183	76.6	77.3	77.9
野外炊事	545	322	189	80.1	79.5	80.4
屋内炊事・食堂での食事提供	410	261	129	60.3	64.4	54.9
施設での宿泊	503	305	170	74.0	75.3	72.3
テントでのキャンプ宿泊	456	260	166	67.1	64.2	70.6
山小屋での宿泊	58	35	17	8.5	8.6	7.2
上記の自然体験・生活体験活動を実施していない	35	24	9	5.1	5.9	3.8
全体	680	405	235	-	-	-

Q12.2【すべての方にうかがいます】 令和2年度から令和3年度上半期(4～9月)に、次の自然体験・生活体験活動を実施しましたか。(複数回答)

	件数			割合		
	全体	該当の施設・設備を保有している	該当の施設・設備を保有していない	全体 n=680	該当の施設・設備を保有している n=405	該当の施設・設備を保有していない n=235
登山、ハイキング、自然観察等の野外活動	483	278	174	71.0	68.6	74.0
川遊び、沢登り、カヌー、カッター等の水辺活動	237	167	61	34.9	41.2	26.0
レクリエーション・屋内スポーツ・講座等の屋内活動	380	254	111	55.9	62.7	47.2
クラフト等の創作活動	431	271	139	63.4	66.9	59.1
野外炊事	378	234	118	55.6	57.8	50.2
屋内炊事・食堂での食事提供	226	189	31	33.2	46.7	13.2
施設での宿泊	270	210	54	39.7	51.9	23.0
テントでのキャンプ宿泊	238	144	80	35.0	35.6	34.0
山小屋での宿泊	16	12	3	2.4	3.0	1.3
上記の自然体験・生活体験活動を実施していない	95	66	24	14.0	16.3	10.2
全体	680	405	235	-	-	-

Q13【令和2年度から令和3年度上半期(4～9月)に、自然体験活動に関する事業を実施した方にうかがいます。】

実施した自然体験活動の開催日数について、あてはまるものを選択してください。複数の体験活動を実施している場合は、該当するすべてを選択してください。(複数回答)

	件数			割合		
	全体	該当の施設・設備を保有している	該当の施設・設備を保有していない	全体 n=548	該当の施設・設備を保有している n=308	該当の施設・設備を保有していない n=208
日帰り	503	286	186	91.8	92.9	89.4
1泊2日	294	205	79	53.6	66.6	38.0
2泊3日	161	111	43	29.4	36.0	20.7
3泊4日	62	43	15	11.3	14.0	7.2
4泊5日	26	20	5	4.7	6.5	2.4
5泊6日以上	54	33	17	9.9	10.7	8.2
全体	548	308	208	-	-	-

Q14【令和2年度から令和3年度上半期(4～9月)に、自然体験活動に関する事業を実施した方にうかがいます。】

実施した自然体験活動の対象者の年齢層について、あてはまるものを選択してください。複数の体験活動を実施している場合は、該当するすべてを選択してください。(複数回答)

	件数			割合		
	全体	該当の施設・設備を保有している	該当の施設・設備を保有していない	全体 n=548	該当の施設・設備を保有している n=308	該当の施設・設備を保有していない n=208
未就学児	282	172	94	51.5	55.8	45.2
小学生	523	296	195	95.4	96.1	93.8
中学生	408	229	150	74.5	74.4	72.1
高校生	271	148	106	49.5	48.1	51.0
高校生を除く未成年の若者	154	98	48	28.1	31.8	23.1
成人	337	199	119	61.5	64.6	57.2
その他	23	21	1	4.2	6.8	0.5
全体	548	308	208	-	-	-

q15【令和2年度から令和3年度上半期(4～9月)に、自然体験活動に関する事業を実施した方にうかがいます。】

貴団体・施設が直近で実施(受入れ)した自然体験活動の開催年月をご回答ください。(数値での回答)

※令和2年4月～令和3年9月の範囲で回答してください。

	件数			割合		
	全体	該当の施設・設備を保有している	該当の施設・設備を保有していない	全体 n=548	該当の施設・設備を保有している n=308	該当の施設・設備を保有していない n=208
令和2年4月	4	2	2	0.7	0.6	1.0
令和2年5月	3	0	3	0.5	0.0	1.4
令和2年6月	0	0	0	0.0	0.0	0.0
令和2年7月	2	1	1	0.4	0.3	0.5
令和2年8月	5	2	3	0.9	0.6	1.4
令和2年9月	5	2	3	0.9	0.6	1.4
令和2年10月	10	1	9	1.8	0.3	4.3
令和2年11月	17	1	14	3.1	0.3	6.7
令和2年12月	11	4	6	2.0	1.3	2.9
令和3年1月	1	1	0	0.2	0.3	0.0
令和3年2月	8	3	5	1.5	1.0	2.4
令和3年3月	15	5	10	2.7	1.6	4.8
令和3年4月	6	3	2	1.1	1.0	1.0
令和3年5月	13	5	5	2.4	1.6	2.4
令和3年6月	18	6	10	3.3	1.9	4.8
令和3年7月	91	45	39	16.6	14.6	18.8
令和3年8月	177	111	58	32.3	36.0	27.9
令和3年9月	162	116	38	29.6	37.7	18.3
全体	548	308	208	100.0	100.0	100.0

Q16.1【令和2年度から令和3年度上半期(4～9月)に、自然体験活動に関する事業を実施した方にうかがいます。】

自然体験活動の事前に、次に挙げるような感染対策を実施していましたか。(複数回答)

※令和3年9月までの期間で最も近い時期に実施・受け入れた自然体験活動での状況についてお答えください。

	件数			割合		
	全体	該当の施設・設備を保有している	該当の施設・設備を保有していない	全体 n=548	該当の施設・設備を保有している n=308	該当の施設・設備を保有していない n=208
緊急事態宣言やまん延防止等重点措置の対象地域からの参加を受け付けないよう制限した	194	133	55	35.4	43.2	26.4
受入可能人数や団体数を通常時未満に制限した	332	226	93	60.6	73.4	44.7
事前申込制や、利用者名簿の事前提出など、事前に利用者を把握した	451	268	158	82.3	87.0	76.0
新型コロナウイルス感染対策や施設利用に関するルールやガイドライン等の同意書の提出を求めた	168	101	61	30.7	32.8	29.3
参加の一定期間前からの検温や体調記録の提出による事前スクリーニングをした	333	177	134	60.8	57.5	64.4
参加希望者向けにオンラインでの事前打ち合わせや見学等の手段を導入した	89	49	35	16.2	15.9	16.8
保護者対象の事前説明会の開催など、保護者の理解を得ることを目的とした取組をした	187	76	95	34.1	24.7	45.7
体調不良者や、新型コロナウイルス感染者が発生した場合の対処方法を予め定めた	428	249	155	78.1	80.8	74.5
地域の保健所や医療機関等と、感染疑いが発生した場合の対応方法について確認をした	141	104	33	25.7	33.8	15.9
新型コロナウイルス感染対策に関するスタッフトレーニングを実施した	159	111	41	29.0	36.0	19.7
新型コロナウイルス感染対策を担当する専門スタッフ・医療スタッフを配置した	20	6	13	3.6	1.9	6.3
その他	29	15	9	5.3	4.9	4.3
無回答	3	1	2	0.5	0.3	1.0
全体	548	308	208	-	-	-

Q16.2【令和2年度から令和3年度上半期(4～9月)に、自然体験活動に関する事業を実施した方にうかがいます。】
 自然体験活動の実施に関し、新型コロナウイルス感染対策として、次のうち貴団体・施設が実施した対策や工夫があれば選択してください。(複数回答)
 ※令和3年9月までの期間で最も近い時期に実施・受け入れた自然体験活動での状況についてお答えください。

	件数			割合		
	全体	該当の施設・設備を保有している	該当の施設・設備を保有していない	全体 n=548	該当の施設・設備を保有している n=308	該当の施設・設備を保有していない n=208
正しいマスクの着用方法や咳エチケット等、参加者への感染対策の指導	444	248	170	81.0	80.5	81.7
社会的距離を十分確保できるよう、体験活動内容の見直し	480	273	182	87.6	88.6	87.5
熱中症のおそれなど状況によっては、社会的距離をとりながら、マスクを外すような安全指導	414	245	145	75.5	79.5	69.7
活動で使用した後の用具等の消毒	424	254	148	77.4	82.5	71.2
屋内活動をする場合に、室内の定期的な換気	435	267	143	79.4	86.7	68.8
活動単位を少人数にしたり、グループを固定する等、グループ活動の内容や方法を工夫	421	248	150	76.8	80.5	72.1
活動の一部にオンラインを導入し、対面とのハイブリッドになるよう活動方法を工夫	162	66	79	29.6	21.4	38.0
感染対策をしながら、関係づくりができるような活動の工夫	346	197	132	63.1	64.0	63.5
その他	13	4	6	2.4	1.3	2.9
無回答	3	1	2	0.5	0.3	1.0
全体	548	308	208	-	-	-

Q16.3【令和2年度から令和3年度上半期(4～9月)に、野外炊事や食事提供を実施した方にうかがいます。】
 野外炊事や食事提供を伴う活動の実施時に、新型コロナウイルス感染対策として、次のうち貴団体・施設が実施した対策や工夫があれば選択してください。(複数回答)
 ※令和3年9月までの期間で最も近い時期に実施・受け入れた自然体験活動での状況についてお答えください。

	件数			割合		
	全体	該当の施設・設備を保有している	該当の施設・設備を保有していない	全体 n=411	該当の施設・設備を保有している n=261	該当の施設・設備を保有していない n=124
利用団体ごとに食堂や野外炊事場の利用時間や場所を分けるなど、他団体との接触や混雑を減らす工夫	273	212	50	66.4	81.2	40.3
飛沫を飛ばさないような席の配置や、床に目印をつけるなど、社会的距離を確保しやすくする工夫	311	218	73	75.7	83.5	58.9
アクリル板等の仕切りの設置などの飛沫防止対策	142	128	12	34.5	49.0	9.7
食事提供や調理する職員の日常的な健康状態の点検、手指の洗浄及び消毒の徹底	316	223	80	76.9	85.4	64.5
バイキング方式の場合に、使い捨て手袋などを使用する工夫や、個別配膳など、トングなどによる接触感染を回避するための配膳方法の工夫	126	90	33	30.7	34.5	26.6
その他	38	18	16	9.2	6.9	12.9
無回答	8	3	4	1.9	1.1	3.2
全体	411	261	124	-	-	-

Q16.4【令和2年度から令和3年度上半期(4～9月)に、施設・テント・山小屋等の宿泊を伴う活動を実施した方にうかがいます。】
 宿泊を伴う活動の実施時に、新型コロナウイルス感染対策として、次のうち貴団体・施設が実施した対策があれば選択してください。(複数回答)
 ※令和3年9月までの期間で最も近い時期に実施・受け入れた自然体験活動での状況についてお答えください。

	件数			割合		
	全体	該当の施設・設備を保有している	該当の施設・設備を保有していない	全体 n=351	該当の施設・設備を保有している n=237	該当の施設・設備を保有していない n=100
利用団体ごとに利用できる場所を事前に決めたり割り当てる工夫	209	173	33	59.5	73.0	33.0
密閉を避けるために、常時換気または通常時以上の定期的な換気の実施	278	209	63	79.2	88.2	63.0
大勢がよく手を触れる箇所(ドアノブ、手すり、スイッチなど)の定期的な清掃または消毒の実施	239	195	40	68.1	82.3	40.0
利用期間中の参加者の検温や体調確認に関する定期報告	285	187	88	81.2	78.9	88.0
利用団体の浴場の利用時間を分ける、一度に入浴する人数を制限する等、混雑を回避するための工夫	216	181	32	61.5	76.4	32.0
宿泊する部屋毎の利用定員を通常時未満に設定	247	188	55	70.4	79.3	55.0
使用した寝具の利用を数日間空けたり、使用後の消毒などの対策	138	124	13	39.3	52.3	13.0
その他	39	13	23	11.1	5.5	23.0
無回答	11	8	1	3.1	3.4	1.0
全体	351	237	100	-	-	-

Q17【令和2年度から令和3年度上半期(4～9月)に、自然体験活動に関する事業を実施しなかった方にうかがいます。】

自然体験活動を実施しなかった理由について、あてはまる選択肢をお答えください。該当する選択肢がない場合は、その他に具体的な理由をご回答ください。(複数回答)

	件数			割合		
	全体	該当の施設・設備を保有している	該当の施設・設備を保有していない	全体 n=126	該当の施設・設備を保有している n=92	該当の施設・設備を保有していない n=27
活動予定地や利用者の居住する自治体での、緊急事態宣言またはまん延防止等重点措置の発令	87	61	22	69.0	66.3	81.5
所在する自治体、保健所、教育委員会等の関連機関からの自粛要請	47	35	11	37.3	38.0	40.7
団体・施設で感染者や濃厚接触者が出たため	3	2	1	2.4	2.2	3.7
活動に参加する子供に社会的距離を保たせることが困難	33	22	10	26.2	23.9	37.0
感染対策等に対応するための職員・スタッフの人員体制の不足	15	9	4	11.9	9.8	14.8
貸切バスや公共交通機関利用による移動時の感染リスクへの対処が困難	20	11	9	15.9	12.0	33.3
活動に伴う人との接触や、マスク着用による熱中症のリスクなど活動に関する不安	38	23	14	30.2	25.0	51.9
野外炊事・調理・食事提供など食事に関する感染リスクへの対処が困難	35	21	12	27.8	22.8	44.4
シャワー・入浴に関する感染リスクへの対処が困難	18	12	6	14.3	13.0	22.2
宿泊施設・テント泊など宿泊に関する感染リスクへの対処が困難	34	23	10	27.0	25.0	37.0
企画し募集したが参加者が集まらなかったため中止した	2	0	1	1.6	0.0	3.7
その他	31	27	3	24.6	29.3	11.1
全体	126	92	27	-	-	-

Ⅲ ICTの活用や、新たな自然体験活動の取組についてうかがいます。

Q18.1【すべての方にうかがいます】 貴団体・施設では、SNSを活用した情報提供や、活動への参加募集、活動報告の発信をしていますか。

	件数			割合		
	全体	該当の施設・設備を保有している	該当の施設・設備を保有していない	全体 n=680	該当の施設・設備を保有している n=405	該当の施設・設備を保有していない n=235
新型コロナウイルス感染症拡大以前から取り組んでいる	437	246	164	64.3	60.7	69.8
新型コロナウイルス感染症拡大を機に取り組んでいる	60	32	26	8.8	7.9	11.1
取り組んでいない	183	127	45	26.9	31.4	19.1
全体	680	405	235	100.0	100.0	100.0

Q18.2【すべての方にうかがいます】 貴団体・施設では、活動に関する動画配信に取り組んでいますか。

	件数			割合		
	全体	該当の施設・設備を保有している	該当の施設・設備を保有していない	全体 n=680	該当の施設・設備を保有している n=405	該当の施設・設備を保有していない n=235
新型コロナウイルス感染症拡大以前から取り組んでいる	136	79	48	20.0	19.5	20.4
新型コロナウイルス感染症拡大を機に取り組んでいる	101	67	31	14.9	16.5	13.2
取り組んでいない	443	259	156	65.1	64.0	66.4
全体	680	405	235	100.0	100.0	100.0

Q18.3【すべての方にうかがいます】 貴団体・施設では、オンラインイベントの開催に取り組んでいますか。

	件数			割合		
	全体	該当の施設・設備を保有している	該当の施設・設備を保有していない	全体 n=680	該当の施設・設備を保有している n=405	該当の施設・設備を保有していない n=235
新型コロナウイルス感染症拡大以前から実施している	14	5	8	2.1	1.2	3.4
新型コロナウイルス感染症拡大を機に実施している	233	104	106	34.3	25.7	45.1
実施していない	433	296	121	63.7	73.1	51.5
全体	680	405	235	100.0	100.0	100.0

Q19【すべての方にうかがいます】新型コロナウイルス感染症の拡大を機に、新たに始めた活動・取組の内容についてうかがいます。次のような、オンラインを活用した活動・取組を実施していますか。(複数回答)

	件数			割合		
	全体	該当の施設・設備を保有している	該当の施設・設備を保有していない	全体 n=680	該当の施設・設備を保有している n=405	該当の施設・設備を保有していない n=235
新型コロナウイルス感染対策に関するガイドライン、マニュアル、ルール等をオンラインで公開	191	150	36	28.1	37.0	15.3
施設の利用方法、クラフトの手順、感染対策等の説明資料や動画を制作しオンラインで公開	79	66	11	11.6	16.3	4.7
自宅で楽しめる工作、観察、実験手順等の動画を制作しオンラインで公開	121	61	48	17.8	15.1	20.4
オンラインを活用した双方向の施設見学や事前打ち合わせの開催	127	65	54	18.7	16.0	23.0
オンラインを活用した双方向の自然体験活動・創作活動のイベント開催	81	34	37	11.9	8.4	15.7
オンラインを活用した双方向の講習会や研修会の開催	170	74	83	25.0	18.3	35.3
オンラインを活用した体験活動後の振り返りの実施	83	28	47	12.2	6.9	20.0
参加者向けに、参加申込書・同意書・事前の健康チェック等の手続きをオンラインで実施	75	52	18	11.0	12.8	7.7
自宅で楽しめるクラフトセットや農作物等をオンライン販売	10	6	4	1.5	1.5	1.7
オンラインを活用した広報活動の工夫	139	85	46	20.4	21.0	19.6
その他のオンラインを活用した取組: 具体的内容	69	30	32	10.1	7.4	13.6
新型コロナウイルス感染拡大を機に、新たに始めたオンラインの活動・取組はない	233	151	67	34.3	37.3	28.5
全体	680	405	235	-	-	-

Q20【すべての方にうかがいます】新型コロナウイルス感染症拡大を機に、貴団体・施設が新たに始めた活動・取組はありますか。
※ICTの活用の有無にかかわらず、新たに始めた活動・取組みについてご回答ください。

	件数			割合		
	全体	該当の施設・設備を保有している	該当の施設・設備を保有していない	全体 n=680	該当の施設・設備を保有している n=405	該当の施設・設備を保有していない n=235
ある	295	178	103	43.4	44.0	43.8
特にない	385	227	132	56.6	56.0	56.2
全体	680	405	235	100.0	100.0	100.0

令和3年度文部科学省委託調査
「体験活動等を通じた青少年自立支援プロジェクト」
青少年の体験活動の推進に関する調査研究報告書

自然体験活動における感染症対策に関する調査研究
～新型コロナウイルス感染症対策のノウハウと取組事例を探る～
令和4年3月

発行: 文部科学省 総合教育政策局地域学習推進課
調受託査: 株式会社浜銀総合研究所